詳細な事實をあげるよりも、大局の推移を的確に把握させることを目標とすべきではなからうか。

殊に、名報告の稱に背かず、讀みかへせば讀みかへすほど簡潔な表現のもつ意義と力が感じられて來る文である。單にその日の情景を報ずるに過ぎないやうな簡單な一句が、我が軍の勝算を示して大本營に在つて胸を痛めてゐる人々をして安心させ、或は全國民の血を湧き立たせたのも無理はない。さういふ名報告の名報告たる所以の一端なりとも把握させるには如何にすればよいか。その一は指導者が兩軍の形勢とその由來を熟知してゐて、文中の一語一句を具體的な情勢で註解することであり、他の一は生徒各自が先づあの文體を正しく讀みこなし、更に大局の推移を明確に跡づけるべく讀み考へることでなくてはならぬ。その前者に備へる爲に、本文の註解は事實の經過を明示し、學習指導を力あらしめようと計つてゐる。

二　參考・資料

（一）日本海海戰が如何なる用意の下に開始せられたか、その一端を示すべく秋山眞之會編「提督秋山眞之」中の一節を引用する。

東洋艦隊を全滅せしめた我が聯合艦隊は、殆んど息をつぐ間もなく、新しい大敵バルチック艦隊を迎へねばならなかつた。しかも我が聯合艦隊が最も頭を惱ました問題は、敵が對馬海峽を通過するか、津輕海峽を通過するかといふことであつた。

此の問題は又、日本の全國民の熱血を沸騰させたり、氷のやうにつめたくしたりした。「對馬だ」「津輕だ」さう云つて世間では隨分騷いだ。米國海軍のマハン大佐の如きは、「日本艦隊は澎湖島附近に位置を占むべきだ」と云つた。

だが、我が東郷艦隊は沈著だつた。そして徐ろに敵艦の來るに備へた。敵が新嘉坡あたりへ來るまでは、專ら鎭海灣で訓練に從事しつゝあつたが、同時に、敵が津輕方面に向ふ場合をも豫想して、哨戒の計畫は樹てられた。愈〻敵が支那海に入り、臺灣の南方を通過したといふ情報があると、聯合艦隊は、今後或る時期までは對馬海峽方面に居るが、それから先は臨機、津輕方面に向ふといふ、前の哨戒計畫よりも一歩進んだ計畫が樹てられた。

併しながら敵は津輕海峽には向はず、對馬海峽を通過した。東郷司令長官は明斷を以て麾下艦隊を朝鮮海峽に集中し、之れを迎へ撃つて一擧に撃滅し得たのであるが、さりとて津輕海峽通過の場合を全然考慮に入れなかつたわけではない。若し敵艦隊が津輕に廻るとの情報があつたならば、鎭海灣の艦隊は直ちに猛然として活動を開始し、全速力を以て敵艦隊迎撃に向ふだけの手筈は出來てゐた。

戰務の上に於ても手配は遺漏なく行き渡り、沿海の要所々々には炭水彈藥の準備までして萬全を期してあつた。〔中略〕

バルチック艦隊を迎へ撃つに當り、秋山參謀はかねてからの練りに練つた七段構を以てしたといはれてゐる。七段構とは晝戰、夜戰の正攻、奇襲を交互に活用するもので、濟州島近海から浦鹽沖に至る海上を七段に分ち、それ〴〵の區域に於て、最も有效適切な攻撃法によつて敵を撃滅しようといふのであつた。

時間的にいへば、第一段は主力艦隊が戰ふ前夜に、我が驅逐隊、水雷艇隊の全力を以て敵艦隊を襲撃せしめる。第二段は右襲撃の翌日、我が艦隊の全力を擧げて敵に正攻撃を加へる。第三段と第五段は、引續きその夜間に驅逐隊、水雷艇隊をして再度の奇襲的水雷攻撃を試みさせる。第四段と第六段は、その翌日我が艦隊の大部分を以て、敵の殘存部隊を鬱陵島及び浦鹽港前に追撃する。最後の第七段に至つて、かねて竊かに浦鹽の港口に敷設したる水雷沈設帶に敵を追ひ込む——大體かういふ作戰であつた。

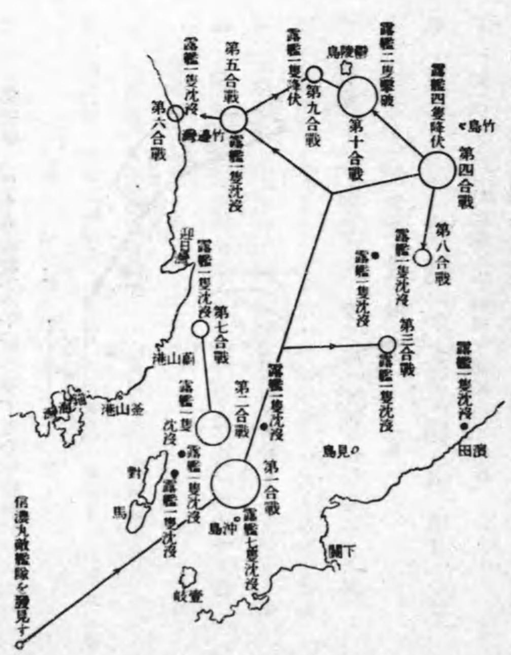
その作戰の規模雄大にして而かも用意周到なことは、古今の海戰を通じて類が無いものであつた。

併し愈〻海戰が始まつてから、實際に用ゐられたのは第二段から第四段までに過ぎなかつた。夜戰を目的にした第一段が省かれたのは戰爭が晝間から始まつた爲めであるが、第五段以下が用ゐられなかつたのは、第四段までで敵艦隊が全滅してしまつた爲めである。

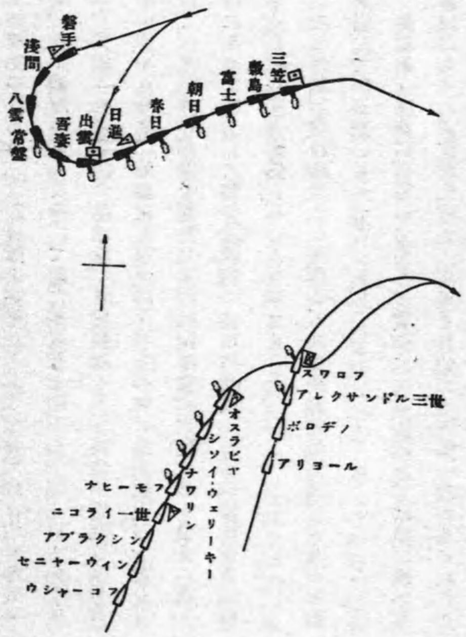
堂々たる七段構の戰法を案出した秋山參謀からいへば、いさゝか張合が無かつたかも知れないが、日本海々戰が豫期以上の大成功であつたことは、これだけでも十分にわかるであらう。

（二）「提督秋山眞之」中の「戰場略圖」に基づいて本海戰の經過を圖示する。

第一圖　日本海海戰戰場略圖



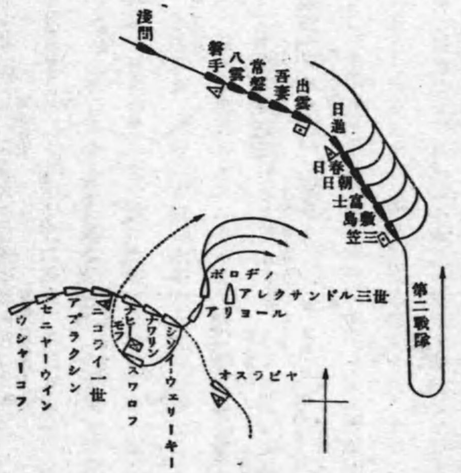
第二圖　日本海海戰（午後二時十二分の對勢）



第二圖は有名な丁字戰法が試みられた時の彼我兩艦隊の對勢で、暫く敵の砲火に堪へつゝ急航してゐた我が艦隊が猛射を開始した直後である。

第三圖は、戰鬪開始から約一時間後に於て、我が艦隊の右折によつて前程を壓迫された敵艦隊が北方に遁走を試みようとするのを、我が第一戰隊が針路を反轉してその前路を扼し、第二戰隊が猛射を浴びせた時の彼我の對勢である。

第三圖　日本海海戰（午後三時十五分の對勢）



(三) 日本海海戰に參加した我が聯合艦隊及び露國太平洋艦隊の陣容を左に揭げる。

日本艦隊

聯合艦隊

司令長官　海軍大將　東郷平八郎

第一艦隊

司令長官（旗艦三笠）　海軍大將　東郷平八郎

司令官（旗艦日進）　海軍中將　三須宗太郎

司令官（旗艦笠置第三戰隊指揮）　海軍中將　出羽重遠

第一戰隊——一等戰艦三笠・敷島・富士・朝日・一等巡洋艦春日・日進・通報艦龍田

第三戰隊——一等巡洋艦笠置・千歳・三等巡洋艦音羽・新高

第一驅逐隊——驅逐艦春雨・吹雪・有明・霰・曉

第二驅逐隊——驅逐艦朧・電・雷・曙

第三驅逐隊——驅逐艦東雲・薄雲・霞・漣

第十四艇隊——水雷艇千鳥・隼・眞鶴・鶴

第二艦隊

司令長官（旗艦出雲）　海軍中將　上村彦之丞

司令官（旗艦磐手）　海軍少將　島村速雄

司令官（旗艦浪速第四戰隊指揮）　海軍中將　瓜生外吉

第二戰隊——一等巡洋艦出雲・吾妻・常盤・八雲・浅間・磐手・通報艦千早

第四戰隊——二等巡洋艦浪速・高千穗・對馬・三等巡洋艦明石

第四驅逐隊——驅逐艦朝霧・村雨・朝潮・白雲

第五驅逐隊——驅逐艦不知火・叢雲・夕霧・陽炎

第九艇隊——水雷艇蒼鷹・雁・燕・鴿

第十九艇隊——水雷艇鵲・鴻・鴫

第三艦隊

司令長官（旗艦嚴島）　海軍中將　片岡七郎

司令官（旗艦橋立）　海軍少將　武富邦鼎

司令官（旗艦須磨第六戰隊指揮）　海軍少將　東郷正路

司令官（旗艦扶桑第七戰隊指揮）　海軍少將　山田彦八

第五戰隊——二等巡洋艦嚴島・松島・橋立・二等戰艦鎮遠・通報艦八重山

第六戰隊——三等巡洋艦須磨・千代田・秋津洲・和泉

第七戰隊——二等戰艦扶桑・一等海防艦高雄・筑紫・二等海防艦鳥海・摩耶・宇治

第十五艇隊——水雷艇雲雀・鷺・鷸・鵜

第十艇隊——水雷艇第四十三・第四十・第四十一・第三十九號

第十一艇隊——水雷艇第七十三・第七十二・第七十四・第七十五號

第二十艇隊——水雷艇第六十五・第六十二・第六十四・第六十三號

第一艇隊——水雷艇第六十九・第七十・第六十七・第六十八號

附屬特務艦隊

司令官（旗艦臺中丸）　海軍少將　小倉鋹一郎

假裝巡洋艦——亞米利加丸・佐渡丸・信濃丸・滿州丸・八幡丸・臺南丸・日光丸・臺中丸

水雷母艦——熊野丸・春日丸

運送船——大仁丸・平壤丸・京城丸・愛媛丸・蛟龍丸・高阪丸・武庫川丸・第五宇和島丸・海城丸・扶桑丸・關東丸・三池丸

病院船——神戸丸・西京丸

露國艦隊

太平洋艦隊

司令長官　海軍中將　ロジェストウェンスキー

第一戰艦隊

司令官（旗艦スウォーロフ）　海軍中將　ロジェストウェンスキー

戰艦——スウォーロフ・アレクサンドル三世・ボロヂノ・アリヨール

第二戰艦隊

司令官（旗艦オスラービヤ）　海軍少將　フォン・フェリケルザム

戰艦——オスラービヤ・ウェリーキー・ナワリン

裝甲巡洋艦——ナヒーモフ

第三戰艦隊

司令官（旗艦ニコライ一世）　海軍少將　ネボガトフ

戰艦——ニコライ一世

裝甲海防艦——アプラクシン・セニヤーウィン・ウシヤーコフ

第一巡洋艦隊

巡洋艦——オレーグ・アウローラ

裝甲巡洋艦——ドンスコイ・モノマーフ

第二巡洋艦隊

巡洋艦——スウェトラーナ・アルマーズ・ジェムチウグ・イズムルード

第一驅逐隊

驅逐艦——ブイヌイ・ベドウイ・ブイスツルイ・ブラートウイ

第二驅逐隊

驅逐艦——ベズウプリヨーチヌイ・グローズヌイ・グロームキー・ボードルイ・ブレスチヤーシチー

特務艦船

假裝巡洋艦——ウラール

工作船——カムチヤーツカ

運送船——イルツイシ・アナヅイリ・ルス・コレーヤ・ウスイーリ

病院船——アリヨール・カストローマ

（四）彼我兩軍の戰績を比較表示する。

我が軍の損失

艦艇の損害　水雷艇三隻

人員の損傷　戰死一一〇人　負傷五八〇人

敵軍の損失

艦艇の損害

イ　我が艦隊に擊沈せられたもの

戰艦六隻　裝甲巡洋艦三隻　裝甲海防艦一隻　巡洋艦一隻　驅逐艦三隻　特務艦三隻

ロ　我が艦隊に擊破せられて自沈したもの

驅逐艦二隻　特務艦一隻

ハ　坐礁自沈したもの

巡洋艦一隻

ニ　我が艦隊に捕獲せられたもの

戰艦二隻　裝甲海防艦二隻　驅逐艦一隻　病院船一隻

ホ　中立國港灣に遁入して抑留處分を受けたもの

巡洋艦一隻　驅逐艦二隻　特務船二隻

人員の損傷　戰死約五、〇〇〇人　俘虜約六、一〇〇人　中立國抑留約二、〇〇〇人

因みに、敵艦の自國港灣に到著若しくは歸航したものは巡洋艦一隻、驅逐艦二隻、特務船二隻に過ぎない。

一二　東郷元帥と乃木大將

安倍能成

一　解題

一　本文

岩波講座「國語教育」(全十二回)第五回中の「小學國語讀本綜合研究」卷六に收められてゐる「東郷元帥と乃木大將」の抄錄に作者の加筆を得たものである。(岩波講座「國語教育」第五回　昭和十二年二月、岩波書店發行)

二　作者

安倍能成(あべよしなり)。明治十六年十二月愛媛縣松山市小唐人町に生まれた。父は安倍義任。第一高等學校を歴て、四十二年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業。爾來、日本濟美學校・女子英學塾・日蓮宗大學・慶應義塾大學・法政大學・第一高等學校等に教鞭を執り、大正十三年歐洲に留學し、十五年歸朝、直ちに京城帝國大學法文學部教授に任じて現在に及んでゐる。

二　教材としての研究

三　採擇の趣旨

前課が日本海海戦に於ける東郷司令長官の詳報であつたのを承け、更に前々數課が我が近世武士道の體現者を敍した文であつたのと關聯し、本課にはその武士道を國民的人道的なものに發展完成した「東郷元帥と乃木大將」の評傳を掲げた。國民的教材である。

夙に夏目漱石の門に出入し、評論・隨筆等の文章にも見るべきものが多い。著書には「改訂西洋古代中世哲學史」「改訂西洋近世哲學史」「カントの實踐哲學」「スピノザ倫理學」(大思想文庫)・「思想と文化」の外、「青丘雜記」「山中雜記」「靜夜集」等の隨筆又は紀行數種があり、譯書には「改譯大思想家の人生觀(オイケン)」「宗教哲學(カント)」「改譯道德哲學原論(カント)」(篠原正と共譯)等がある。

一　註解

【東郷元帥】　トウガウゲンスヰ　元帥海軍大將侯爵東郷平八郎。弘化四年(一八五〇七)十二月鹿兒島藩士東郷吉左衛門の四男として鹿兒島城下(現鹿兒島市加治屋町)に生まれた。初名は仲五郎、元服して平八郎實良と名告つた。文久三年英艦の鹿兒島砲撃に初陣、次いで藩の海軍に入り、維新の際は春日艦に在つて北越警備に從ひ、又宮古灣及び函館の戦に參じた。明治四年命ぜられてイギリスに留學、練習船に乘つて實務を修め、十一年歸朝、海軍中尉に任じ、爾來累進して大佐に進み、日清戦役に當つては、艦頭(二十七年七月)浪速艦長として豐島沖の戦に臨み、更に清兵を搭載せる英船高陞號を撃沈してその勇斷を謳はれた。(この事件は英國の輿論を刺戟して一時物議を騒したが、結局國際法上の正當行爲として認められた。)次いで黄海海戦に參加して少將に進み、常備艦隊司令官に任補、更に澎湖島の占領及び臺灣征討に從ひ、功四級を賜はつた。三十一年中將に昇進、翌年佐世保鎮守府司令長官に補せられ、三十三年の北清事變には常備艦隊司令長官として活躍したが、三十六年日露の風雲急を告げるに及んで、聯合艦隊司令長官の大任を拜命、翌年大將に任じ、戦爭の勃發と共に、露國東洋艦隊を旅順港に封鎖し、又その進出を黄海に挫いて制海權を確保、更に三十八年五月、露國バルチック艦隊の東航を日本海に邀へ撃つて曠古の完勝を博した。戦後、大勳位・功一級を授賜、次いで伯爵を授けられ、軍令部長・軍事參議官に歴補した。四十四年乃木大將等と共に東伏見宮依仁親王殿下に供奉して渡英、大正二年元帥府に列し、翌年東宮御學問所總裁を仰付けられ、十年同御學問所御閉鎖に至るまで七年間、今上天皇陛下に奉侍した。昭和九年五月歿、享年八十八。歿前侯爵を授けられ、特に國葬を賜はつた。

〔元帥〕　軍人最高の名譽の稱號。陸海軍大將の中で、特に閲歴・名望のあるものに賜ひ、軍事上天皇の最高の顧問府たる元帥府に列せしめられる。特殊の裝飾ある元帥刀を賜ひ、服制として金屬製小判型の元帥徽章(上衣右乳下に附する)がある。

【乃木大將】　ノギタイシャウ　陸軍大將伯爵乃木希典(まれすけ)。嘉永二年(一八五〇九)長府藩士乃木希次の長子として、江戸の麻布日ヶ窪(現東京市麻布區西北日ヶ窪・南日ヶ窪南町)の毛利邸に生まれた。幼名無人(なりんど)。後に源三・文藏とも稱した。夙に國事に奔走し、戊辰の役に從軍。明治四年陸軍少佐に任ぜられ西南役にも從軍した。十八年少將に進み、歩兵第十一旅團長に補せられた。翌年ドイツに留學を命ぜられ、滯在二年にして歸朝。二十七年日清戦役には、旅團長として遼東半島に戦ひ、蓋平を陷れて戦功をたてた。翌年中將に陞り、第二師團長となり、男爵を授けられた。同年九月には臺灣平定の事に從ひ、二

十九年臺灣總督に任じ、三十一年十一月第十一師團長に補せられたが、三十四年休職となると共に栃木縣那須郡狩野村石林に退いて農を事とし、石林子と號した。三十七年日露戰役に際しては留守近衞師團長に補せられたが、五月第三軍司令官として出征、六月陸軍大將に任じ、同月下旬以降旅順を攻圍して敵將ステッセルの堅陣を力攻強襲、半歲にして遂に陷れた。曩に南山の役で長子勝興を失つたが、この旅順攻圍戰に於て更に次男保典を失つた。ついで奉天の戰に偉功を立て、戰後功一級に敘せられ、軍事參議官となり、三十九年伯爵に陞せられ、翌年勅を奉じて學習院長となり、華胄の子弟の薫陶に當つた。又四十四年には東伏見宮殿下に隨行して歐米諸國を巡察した。四十五年七月明治天皇御不豫の報傳はるや、日夜御平癒を祈り奉り、天皇崩御の後は毎夜殯殿に參籠したが、九月十三日御大喪儀の當日殉死した。享年六十四。

【日清・日露の兩戰役】

〔日清戰役〕　ニッシンセンエキ　「明治二十七八年戰役」ともいふ。明治二十七年八月から二十八年四月にかけて日本と清國との間に行はれた戰爭。

明治二十七年三月韓國に東學黨の亂が起るや、清國は天津條約を無視してみだりに大兵を上陸せしめた。我が國はこれに抗議したが彼は應ぜず益〻增兵したので、我は韓國新政府の請により斷乎これを掃蕩せんとし、八月一日宣戰を布告した。我は陸軍を二軍に分かち、第一軍は朝鮮半島を縱走して九月平壤を拔き、鴨綠江を越えて十一月鳳凰城に入城した。これより先、我が海軍は黃海に清國北洋艦隊を擊滅して黃海一帶の制海權を占取した。これによつて第二軍は十月容易に遼東半島花園口に上陸し、一舉旅順の堅塞を奪ひ、海軍と協力して二十八年二月敵の海軍根據地威海衞を陷れてその死命を制し、次いで第一軍とともに北進し、三月、田庄臺・營口を陷れ、更に北京に迫らうとした。こゝに於て清國は遂に和を請ひ、四月日清媾和條約成り、清國は、朝鮮獨立を承認すること、遼東半島・臺灣・澎湖島を割讓すること、軍事賠償金（二億兩）を支拂ふこと、沙市・重慶・蘇州・杭州を開港することを約したが、遼東半島はロシヤ・ドイツ・フランス三國の干涉によつて清國に還附した。

〔日露戰役〕　ニチロセンエキ　「明治三十七八年戰役」ともいふ。明治三十七年二月から三十八年九月にかけて日本とロシヤとの間に行はれた戰爭。

ロシヤは明治三十三年の北清事變以來、兵を滿洲に駐めて頻りに經營を行ひ、屢〻撤兵を約しながら履行せず、我が栗野駐露公使の前後數十回に亙る折衝にも拘らず終始協定を拒んだ。ここに於て、我が國は遂に明治三十七年二月十日宣戰を布告した。我が軍はまづ仁川沖に敵艦を破り、敵の太平洋艦隊主力の根據地たる旅順口を攻擊、續いて三回に亙る同港口閉塞事業は黃海海戰を誘發し、この戰によつて敵の海軍勢力を一掃した。一方陸軍は鴨綠江に敵軍を擂破し、三十八年一月旅順を拔き、進んで三月遂に奉天を陷れるに至つた。五月我が海軍はバルチック艦隊を日本海に擊滅して空前の大捷を得、陸軍は更に樺太をも占領した。かくて、米國大統領の斡旋により、九月日露媾和條約成り、爾後日本は韓國に於て政治・軍事・經濟上絕大なる權益を占有すること、ロシヤは滿洲から撤兵し、旅順・大連附近の租借地及び長春・旅順間の鐵道を日本に讓渡し、且北緯五〇度以南の樺太を割讓することとなつた。

【國運を賭した】　國家の運命をかけた。

〔賭す〕　トす　（一）かけものにする。かけごとに用ゐる。（二）或目的のために犧牲に供する。なげ出す。

【黃海及び日本海の海戰】

〔黃海海戰〕　クワウカイカイセン　こゝでは、日露戰役中、明治三十七年八月旅順口を脫出してウラジボストックに向かはんとしたロシヤの太平洋第一艦隊を、我が聯合艦隊が黃海に邀擊した海戰をさす。

日露開戰以來我が艦隊の活躍によつて外海との交通聯絡を斷たれたロシヤの太平洋第一艦隊は、旅順港內に何時までも留つてゐるよりも、むしろ脫出してウラジボストックに赴き、同港に在る味方の艦隊と合せんとし、明治三十七年六月二十三日旅順から脫出しかゝつたが、我が艦隊に制壓せられて止むなく港內に引き返した。ついで同年八月十日の朝に至り再び出港したので、我が艦隊はこれを旅順へ逃歸せしめぬやう、まづ外洋へ誘出する策をとつた。當時我が聯合艦隊は聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎統率の下に、第一戰隊（戰艦三笠・朝日・富士・敷島・裝甲巡洋艦日進・春日）・第三戰隊（裝甲巡洋艦八雲・浪速・千歲・高砂）・第五戰隊（海防艦松島・橋立・嚴島・厳島）・第六戰隊（巡洋艦明石・秋津洲・須磨）及び驅逐隊五隊（十八隻）・水雷艇隊五隊（十八隻）より成り、總排水量約十四萬噸であつた。これに對しロシヤ艦隊は太平洋第一艦隊臨時司令長官海軍少將ウィトゲフト指揮の下に、戰艦ツエザレウイチ・レトウィザン・ポベーダ・ペレスウエート・ポルターワ・セワストーポリの六隻を主力とし、巡洋艦アスコリド・パルラーダ・ヂイヤーナ・ノーウィク及び驅逐艦八隻から成り、總排水量約十二萬噸であつた。戰鬪は十日午後一時十五

分旅順口の南東約三十海里の地點で開始され、交戰二時間餘に亙つたが勝敗決せず、兩軍の距離遠隔したため一時砲火を收めた。かくてロシヤ艦隊は一意東方に脱出せんとし、我が艦隊はこれを急追すること二時間の後、午後五時三十分頃に至り、兩艦隊の距離再び接近して砲火を開き、交戰約一時間、ロシヤの旗艦ツェザレウイチは司令塔を擊破されて舵機に故障を生じ、味方の戰列に突入した。ために陣形混亂し、この機に乘じ我が艦隊はこれを包圍して猛射を浴びせたので、敵は忽ち潰亂して戰鬪不能に陷り各自遁走せんとした。かくて日沒後更に我が驅逐隊・艇隊の猛烈な襲擊を受け、全く四分五裂の狀態となり、戰艦レトウイザン・ペレスウエート・ポベーダ・ポルターワ・セワストーポリ、巡洋艦パルラーダ及び驅逐艦三隻は多大の損害を受けて旅順口に逃歸し、戰艦ツェザレウイチ及び驅逐艦三隻は膠州灣に、巡洋艦アスコリド及び驅逐艦一隻は上海に、巡洋艦ヂイヤーナは西貢に逃れたが、いづれもその主權國官憲の手で武裝を解除され抑留された。又巡洋艦ノーウィクは遠く日本の太平洋岸を迂航してウラジボストックに逃れんとする途中、宗谷海峽に於て我が巡洋艦千歳・對馬のため邀擊せられ坐礁自沈した。この戰鬪に於て我が艦隊も多少の損害を蒙つたが、戰鬪力を失ふに至つたものは一隻もなかつた。この勝利が後の日本海海戰の勝因を成したのはいふまでもない。

〔黃海〕　朝鮮半島、滿洲國奉天省、遼東半島、中華民國山東・江蘇兩省に圍まれた海。西北は直隸海峽を以て渤海に通じ、南は揚子江口の線を以て東支那海に接續してゐる。黃海の稱は黃河の吐水によつて水が黃濁した爲であらう。（黃河はもと江蘇省大運河の北で海に注いでゐた。）その山東省沿岸は屈曲出入があり、良港灣を成してゐる部分が多いが、南部は出入が少い。水深は一帶に淺く、最も深い處でも一〇〇米位で、潮汐干滿の差は大きい。

〔日本海の海戰〕　（一一「日本海海戰」註解參照）

【大勝を博し】　大勝利を得て。

〔博す〕　ハクす　（一）ひろめる。ひろくする。（二）取る。得る。しめる。

【旅順要塞の攻擊】

乃木大將の率ゐる第三軍は三十七年八月中旬敵を要塞線內に壓迫し、右翼（第一師團）・中央（第九師團）・左翼（第十二師團）の攻圍陣を構成して旅順に迫り、八月十七日第一回總攻擊を開始したが、僅かに二三の堡壘を占領したのみで、二十四日强襲を中止するのやむなきに至つた。（參加兵員總數五萬七百人、死傷者一萬五千八百人）　次に十月二十六日第二回の總攻擊を試み、三四の堡壘を占領したが、未だ要塞の死命を制するに至らず、多數の犧牲者を出して三十一日自然中止となつた。（參加兵員總數四萬四千百人、死傷者三千八百三十人）　更に十一月二十六日第七師團を右翼に加へて第三回攻擊を開始し、十二月五日遂に爾靈山を占領した。この結果港內の敵艦を展望するを得、相ついでこれを瞰射擊沈し、又三十一日までに各重要堡壘を占領し、翌三十八年元旦遂に敵將ステッセルは開城を乞うた。（參加兵員總數六萬四千人、死傷者一萬七千人）

〔旅順〕　リョジュン　關東州の主都で、同州の南端に在り、渤海灣の口を扼する要塞地。清國が光緒六年（明治十三年）こゝに要塞を設け、北洋艦隊の軍港としてから東洋無比の堅塞と稱せられたが、日清戰役には脆く陷落、後ロシヤが租借して築城し、日露戰役に於てその眞價を發揮した。戰後我が國はロシヤの權利を繼承した。

【難攻不落】　ナンコウフラク　要害堅固なため攻擊することが困難で、容易に陷落しないこと。

【薩摩藩】　サツマハン　薩摩國（現鹿兒島縣の一部）薩摩藩。「鹿兒島藩」に同じ。德川時代、薩摩國七十七萬八千石（初は七十三萬石）の藩地で、代々島津家の治所であつた。

島津氏は源頼朝の時薩摩・大隅・日向の守護に補せられた忠久を始祖とし、戰國の頃義久が立つて九州に霸を稱へたが、後豐臣秀吉に降つて、義久は薩摩、弟義弘は大隅及び日向の一部を領した。關ヶ原の役に義弘が西軍に與して物議を釀したが、許されて本領を安堵し、爾來西國の雄藩として重きをなし、松平の稱を許されて鹿兒島城に治した。幕末、英主齊彬が出でて當代第一の人物と稱せられ、その後は弟久光の子忠義が襲いで、久光の後見、西鄕・大久保等の輔佐の下に、皇政復古の主動勢力となつた。廢藩後、藩主は華族に列し公爵を授けられた。

【弘化四年】　二五〇七年。孝明天皇の御代。

〔弘化〕　コウクヮ　仁孝・孝明兩天皇の御代の年號。天保十五年（二五〇四）十二月二日改元。弘化五年（二五〇八）二月二十八日嘉永と改元。

【長府藩】　チャウフハン　長門國（現山口縣の一部）長府藩。「府中藩」「豐浦

藩」ともいふ。毛利輝元の養子秀元を藩祖とする毛利氏の末家。秀元は輝元の甥であつたが、はじめ輝元に子がなかつたためその養子となり、本家の領地の内二十萬石を與へられて周防國山口に居た。しかるに輝元が關ヶ原役後領地を削られ、周防長門三十六萬九千石を領するに及び、秀元は豐浦郡の地にゐて五萬石を領した。（宗家は輝元の實子秀就に繼つた。）後、承應二年（一六五三）に至り、秀元の子光廣は弟元知に一萬石を分與した。（これが清末藩の起りである。）享保三年（一七一八）元矩の時除封されたが、匡廣が三萬石を復し、ついで翌々年には宗家より一萬七千石を、更に天明三年（一七八三）には三千石を加增されて五萬石に復した。明治維新の際には宗家と共に皇事に盡くした。廢藩後、藩主は華族に列し子爵を授けられた。

因みに、毛利の宗家（本藩）は萩藩（一名山口藩）と呼ばれ、これと末家の長府・清末兩藩とを併せて長州藩といふ。

【嘉永二年】　二五〇九年。孝明天皇の御代。

〔嘉永〕　カエイ　孝明天皇の御代の年號。弘化五年（二五〇八）二月二十八日改元。嘉永七年（二五一四）十一月二十七日安政と改元。

【戰陣】　センヂン　（一）戰鬪の陣列。陣。（二）たゝかひの方法。兵法。戰法。（三）敵に對して陣を張つた場所。陣營。戰場。こゝは（三）。

【因緣】　インネン（インエンの連聲）　（一）佛語。狹義には、四緣（因緣・無等緣・所緣緣・增上緣）の一で、事物の生成の原因となるもののうち、最も直接の原因（親因）のみをさすが、一般には、廣く事物の生成に與るものの全體、卽ち疎因（間接の原因）と親因との總稱として用ゐられる。（二）由來。由緒。緣故。ゆかり。（三）機會。つて。こゝは（二）。

【第一旅團長として云々】

乃木大將（當時少將）は明治二十五年十二月歩兵第一旅團長に補せられ、二十七年八月日清戰役起るや翌月同旅團を率ゐて東京を出發し、第二軍に加つて宇品を出帆、十月二十四日遼東半島の花園口に上陸した。

〔旅團〕　リョダン　陸軍軍隊編成上の一單位。通常二箇聯隊を以て一旅團を編成する。現在旅團編成をなしてゐるものは歩兵・野戰重砲兵及び騎兵の一部である。旅團長は通常陸軍少將を以て補し、部下軍隊を統率し、その教育進歩の齊一を圖り、軍紀・風紀・內務・經理・衞生その他を統監する。（歩兵一旅團に特科隊を混成したものを混成旅團と稱し、卽團につぐ兵團とする。）

【第二軍】　ダイニグン　日清戰役中に編成せられた軍團。第一・第二・第六師團から成つてゐた。軍司令官陸軍大將大山巖。

第二軍は明治二十七年十月まづ遼東半島の花園口から上陸し、大連灣を占領し金州城を陷れ、更に旅順の堅塞を僅か一日で拔くなどしきりに快勝をつゞけた。翌二十八年一月、海路威海衞に向かひ、これをも遂に陷れ、更に金州へ歸つて第一軍（第三・第五師團より成つてゐた。軍司令官陸軍大將山縣有朋）と合し、北京へ向かつて進擊し、牛莊・田庄臺・營口等を攻略し、破竹の勢を以て將に天津に迫らんとした時媾和となつた。

【先鋒】　センポウ　先陣に進むもの。先頭に立つもの。さきぞなへ。さきて。

【浪速】　ナニハ　巡洋艦。排水量三、七〇九噸。速力十八節。備砲二十六糎砲二門、十五糎砲六門。日清戰役當時第一遊擊隊所屬。我が海軍に於ける最初の巡洋艦で、明治十七年英國アームストロング會社に於て起工、十九年竣工した。日清戰役中は東鄕大佐が艦長として豐島沖の海戰・黃海海戰・威海衞砲擊・旅順口占領等に活躍した。日露戰役に於ては瓜生第二艦隊司令官の旗艦として、蔚山沖海戰・日本海海戰等に參加した。後、明治四十五年北海道近海測量任務に從事中擱坐沈沒した。

一二　東鄕元帥と乃木大將

【その上陸を掩護した】

明治二十七年十二月、伊東聯合艦隊司令長官は大本營より、第二軍の上陸兵を護送し、これと協力して威海衞を占領し、且敵艦隊を擊滅せよ、との命令を受けた。翌年一月に至り、わが陸軍の第一回上陸が始り、浪速はその警護の任に當つた。時に陸上の敵壘から浪速に向かつて盛に砲擊を加へたが一彈も達せず、逆に浪速の掩護砲擊は敵に多大の損害を與へた。

〔掩護〕　エンゴ　（一）おほひ守ること。（二）軍事上、味方の作業又は或目的物を保護させるため、或部隊をして敵に當らせること。こゝは（二）。

【共同して攻圍戰を行つた】

乃木大將の率ゐる第三軍は明治三十七年八月以來、旅順要塞攻擊を行つたが中々拔くことが出來なかつた。當時東鄕大將の率ゐる聯合艦隊は、黃海の一戰により敵艦隊に大打擊を與へて、その大部を旅順口內に退却せしめ、再び同港の封鎖配備に著いたが、港內の敵艦を一日も早く擊沈する必要を認め、同時に第三軍の奮戰に同情と援助を惜しまず、軍艦の備砲を陸揚げして敵を攻擊し、協力して遂に旅順の堅壘を拔いた。

〔攻圍戰〕　コウヰセン　包圍して攻擊する戰。

【ジョージ五世の戴冠式】

西暦一九一一年(明治四十四年)六月二十二日、ロンドンのウェストミンスター寺院に於て行はれた。

〔ジョージ五世〕 George V. (George Frederick Ernest Albert) イギリス皇帝兼インド皇帝。西暦一八六五年六月エドワード七世の第二王子としてロンドンに御誕生。一八九二年ヨーク公となり、ついでテック公の御女ビクトリヤ・メリーと御成婚。兄君の薨去により皇太子となり、一九一〇年御即位、翌年戴冠式を擧げられた。御即位後皇后と共に全英國領土を御巡幸になつた。一九三六年一月崩御、御年七十二。

〔戴冠式〕 タイクワンシキ　歐洲キリスト教國の皇帝・國王が即位の後、始めて公式に傳來の寶冠を戴き、正統に即位したことを儀表する重要な儀式。

もとゲルマン諸民族の間に行はれたギラチオ(新に選ばれた主權者を楯の上に擧せ、有力な酋長等がこれを搖いで、集つてゐる人民の周圍を三回廻り、それから王の手に槍を捧げ、その附近に布の為を考ける儀式)に起原するといはれ、これが舊約聖書のイスラエル王の塗油戴冠の式と混じたものと考へられてゐる。これが儀式的に最も發達したのはイギリスで、八世紀中葉に既にこの種の儀式が行はれてゐたことが知られる。十二世紀頃はヘンリー一世式と稱する儀式が用ゐられ、これが十四世紀頃から極盛に達して最も壯麗な樣式を造り出し、大體十七世紀頃まで續いた。この盛典は大陸にも影響し、フランスを始め大陸諸國の儀式も大體これに類似してゐた。戴冠式の儀式の中心をなすものは、神に忠誠を誓ふこと、灌頂を受けること及び王冠を法皇又は大僧正から受けることである。近世に至つては王自ら加冠する場合も多く、現在戴冠式の行はれてゐるのはイギリス・ノールウェー等の數國に過ぎない。

【御名代】 ゴミャウダイ　御代理。又、その御方。こゝでは、天皇陛下の御代理を勤められる御方、の意。

【東伏見宮依仁親王殿下】 ヒガシフシミノミヤヨリヒトシンノウデンカ　元帥海軍大將。大勳位功三級。慶應三年(一八六七)九月伏見宮邦家親王の第十七王子として京都に御誕生。御初名定麿王。明治二年山階宮晃親王の御養子となり、十年海軍兵學校に御入學、ついで英・佛に御留學になつた。十八年更に御兄君小松宮彰仁親王の御繼嗣となり、翌年明治天皇の御養子となり依仁親王と御改名になつたが、三十六年彰仁親王の御請願によりその繼嗣を止められ、東伏見宮の稱號を允可せられた。これよりさき、日清戰役には浪速分隊長として、又日露戰役には千歳副長として偉功を樹てさせられた。四十四年英國皇帝ジョージ五世の戴冠式には明治天皇の御名代として御渡英、無事御大任を果させられた。大正七年海軍大將に御進級、十一年六月元帥府に列せられ、ついで御薨去あらせられた。御年五十六。御嗣子なきため、大正八年久邇宮邦彦王の第三王子邦英王を永く御預りの御名目で迎へられたが、昭和六年邦英王は御請願により臣籍に降下せられ、特に東伏見の家號を賜はり伯爵を授けられ給うた。

〔親王〕 シンノウ(シンワウの連聲)　大寶令にて天皇の御兄弟及び皇子(廣義には御姉妹及び皇女を含む)の御稱號。現制(皇室典範第三十一條)では、皇子より皇玄孫までの皇男子孫の御稱號。

〔殿下〕 こゝでは、皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・內親王・王・王妃・女王及び李王家(李王の繼嗣にして公となつた方及び其の御配偶を含む)を呼ぶに用ゐる敬稱。

【同妃殿下】 ドウヒデンカ　御名は周子。勳一等。明治九年八月公爵岩倉具定の第一女として御誕生。三十一年二月依仁親王と御結婚遊ばされた。四十四年には英國皇帝の戴冠式に親王と共に御渡英、無事御大任を果させられた。

〔妃〕 (一)男子の配偶。つま。(二)婦人の美稱。ひめ。(三)皇后の次位にある後宮。きさき。(四)我が國の現制では、皇族及び朝鮮王公族の御嫡室。

一二　東郷元帥と乃木大將

【隨員】 ズキキソ　隨行員。ともとなつて隨つて行く人。おとも。當時の隨行員には東郷元帥・乃木大將の外に、式部長官伯爵戸田氏共、海軍中佐谷口尙眞、式部官渡邊直達、陸軍砲兵中佐吉田豐彥、皇族附武官海軍少佐清河純一、東伏見宮御用取扱宮岡慶子其の他宮家附職員等があつた。

【印象】 インシャウ　こゝでは、强く感じて忘れられぬこと。心理學的には、對象が心に與へる直接影響、即ち、外界が心に影響を與へるとき、この影響を外界存在の側からは刺激、意識の側からは印象と稱する。即ち、感覺及び感官知覺、或は直接それに伴なふ感情から、刺激の直接影響として生じた思想・感情等、一切の意識內容をさす。

【明治天皇】 メイヂテンノウ　第百二十二代の天皇。御諱は睦仁。孝明天皇の第二皇子。嘉永五年(一八五一)九月二十二日(陽曆十一月三日)御降誕、祐宮と御命名、萬延元年七月十日立太子、九月二十八日親王宣下、睦仁と宣らせられた。慶應三年正月九日御踐祚、十月十四日將軍德川慶喜の大政奉還を御嘉納あらせられ、翌明治元年八月二十七日御即位、新興日本の大君として萬機を親裁したまふこと四十有六年、我が國をして世界の大强國たる今日あらしめられたのは、ひとへに天皇の御稜威である。明治四十五

年七月三十日崩御、九月十三日東京青山に御大喪儀を取行はせられ、伏見桃山陵に葬り奉つた。實算六十一。不世出の英主として國民は擧つてその御偉德を敬慕し、十一月三日を明治節として永久に御聖德を仰ぎ奉る。

【御聖慮】　ゴセイリョ　天皇の御かんがへ。御叡慮。

【學習院長に任ぜられ云々】　明治四十年一月三十一日大將は山口鋭之助の後を襲つて、軍事參議官のまゝ學習院長に兼任せられ、「華族教育の事總べて卿に一任す」との勅を拜し、併せて和歌をも賜はつた。大將は感激して子弟の教育に盡瘁し、身を以て實踐躬行の模範に任じ、院内の弊風を一新し、淳良・儉素な風紀を作つた。大將は就任以來常に生徒と倶に學舍に起臥し、赤誠を以て經營苦心し、死に至るまでその職に任じた。

〔學習院〕　ガクシフヰン　華族の子女の教育機關として設立された特殊の學校。宮内大臣の監督を受け、院長がこれを總理する。高等科・中等科・初等科に分かれ、高等・中等兩科は現東京市豐島區目白町一丁目に、初等科は四谷區仲町に在る。明治天皇は明治四年華族に講學・研才の勅諭を賜はり、十年十月、その聖旨を奉戴して華族會館の經營による華族學校が神田錦町に開校せられ、天皇・皇后兩陛下の臨御があつて、「學習院」の院號を賜はつた。十七年宮内省直轄の官立學校となり、華族以外の者も一定條件を具備すれば入學を許可することになつた。その學制は初め男子小學・女子小學・中學に分かれ各八箇年であつたが、十八年女子部を廢し、別に華族女學校を設立した。二十一年八月麴町虎の門元工部大學校跡に移轉し、二十三年八月四谷尾張町に校舍を新築して移つた。三十九年四月學習院學制竝規則が公布せられ、華族女學校を合併し學習院女學部と稱し、初等學科・中等學科各六箇年、高等學科三箇年とし、女學部は小學科六箇年、中學科五箇年、專修科三箇年となつた。四十一年八月目白（舊東京府北豐島郡高田町高田、現東京市豐島區目白町一丁目）に校舍を新築して移轉し、女子部・初等科は四谷に留つた。大正七年九月學制規則が改正せられ、女學部を分離して女子學習院となした。十一年三月學習院學制を改正し、初等科六箇年、中等科五箇年、高等科は文科・理科に分かれ三箇年とし、高等科卒業者は帝國大學に入學し得ることとなつた。

【一大刷新】　イチダイサッシン　〔刷新〕　弊害を除いて事態を全く新にすること。舊態を改めて一新すること。改新。革新。

【東宮御學問所總裁】　トウグウゴガクモンジョソウサイ　東宮御學問所の長官。東宮御教育のことを總理し、所員を監督する。親任官を以て待遇せられた。

〔東宮御學問所〕　皇太子殿下御教育のことを掌る役所。大正三年四月一日御開所、十年三月一日御閉鎖・職員には總裁・副總裁・幹事・御用掛・評議員が置かれ、總裁に東郷元帥、副總裁に東宮大夫男爵波多野敬直、幹事に海軍大佐子爵小笠原長生、御用掛に東京帝國大學教授文學博士白鳥庫吉外五名、評議員に陸軍大將子爵大迫尚敏外三名が夫々任命せられた。（副總裁・御用掛・評議員には後に異動があつた。）皇太子殿下には、ここで倫理・歴史・地理・國文・漢文・博物・理化學・數學・佛蘭西語・習字・法制經濟・美術史・武課・體操・馬術・軍事講話等を御修學遊ばされた。

〔東宮〕　トウグウ　「春宮」とも記し奉る。（一）皇太子のまします御殿。合集解「御子宮在二御所東一、故云二東宮一也。伴云、四時氣自レ東來、卽春准レ此故爲二東宮春宮一、其義无レ別也」（二）轉じて、皇太子を申し上げる。はるのみや。みこのみや。ひつぎのみこ。まうけのきみ。こゝは（二）。

【拜命】　ハイメイ　（一）命を承ること。（二）官職に補任せられること。拜官。こゝは（二）。

【東宮殿下】　こゝでは、今上天皇陛下を指し奉る。御名は裕仁。大正天皇第一皇子として明治三十四年四月二十九日に御降誕遊ばされ、御稱號を迪宮と申し上げた。四十一年四月學習院初等科に御入學、大正元年九月陸海軍少尉に御任官、三年四月學習院初等科を御卒業になり、爾來東郷元帥を總裁とする東宮御學問所にて御修學遊ばされた。五年十一月立太子禮、八年五月御成年式を御擧行。十年二月東宮御學問所の御業を終へさせられた。同年三月御外遊の途に上らせられ、九月御歸朝、十一月攝政に御就任遊ばされた。十三年一月、久邇宮邦彦王第一王女良子女王殿下と御成婚、十四年十月陸海軍大佐に御陞任になつた。十五年十二月二十五日御踐祚、第百二十四代の皇位を踐ませられ、昭和と御改元、同年十二月二十八日朝見の御儀を擧げさせられ、三年十一月十日御卽位の大禮を御擧行遊ばされた。

【薨去】　コウキョ　貴人・諸侯の死にいふ語。我が國では、皇族・大臣及び三位以上の人の死去をいふ。

因みに、天皇・皇后には「崩」と申し、五位以上四位以下には「卒」を用ゐ、其の他は多く「歿」といふ。尙、往時は皇后にも「薨」を用ゐた。

【至誠一貫】シセイイックヮン　まごころを以て一筋に貫ぬくこと。誠實を以て徹頭徹尾押通すこと。

【興奮】コウフン　(一)感じて心氣の奮起すること。感じて精神の勢だつこと。(二)刺激に應じて神經のたかぶり立つこと。こゝは(一)。

【崇高】スウカウ　けだかくたふといこと。尊嚴なこと。

【武士道】ブシダウ　主として武士階級に發達した、日本民族固有の大精神に基づく道德。その本義は誠忠・犧牲・信義・清廉・潔白・質素・儉約・勇武・名譽・恩愛等を重んずるにある。

武士道の根本精神は、遠く既に建國の初に儼として存したが、武士階級の勃興と共に漸く顯著となり、鎌倉時代から大いに發達し、室町時代には一時衰へたが、戰國時代以來再び興隆し、織豐時代に至つて高潮に達した。德川時代に入るや、山鹿素行等の武士道に關する學的研究と相俟つて、こゝにその大成を見るに至ると共に、武士階級のみならず廣く一般階級にまで普及滲潤した。明治時代に至り、武士階級は消滅したが、その精神は全國民の血管に流れ、新しく國體の本義に立脚することによつて、益〻その精華を發揮し、殊に、一朝有事の際に於ける軍人精神の上に、最も顯著なる發現を見つゝある。

【本領】ホンリャウ　(一)本來の領地。もとの知行所。本知。(二)領地として賜はること。(三)特色。本質。特質。こゝは(三)。

【明治十年の役に聯隊旗を云々】

明治十年の役の際、二月二十二日熊本縣鹿本部植木町附近の戰に於て、乃木大將(當時少佐)が聯隊長心得として率ゐてゐた熊本鎭臺第十四聯隊の旗手河原林雄太少尉が戰死を遂げ、聯隊旗を敵兵に奪はれた。大將は聯隊長としての責任から死を期して屢〻身を危地にさらして奮戰し、爲に再度重傷を負うたが遂に死處を得なかつた。尙、この事を知るや熊本鎭臺司令長官谷干城少將を經て、參軍山縣有朋へ宛てて進退伺を出したが事情やむを得ずとして間もなく却下された。

〔明治十年の役〕「西南役」ともいふ。同年二月から九月に亙り、九州に於て勃發した西鄕隆盛等の內亂。

明治六年西鄕隆盛等はその征韓論が不成立に終つた爲、官を辭して鹿兒島に歸り、桐野利秋・篠原國幹等と共に私學校を立てて鄕黨の子弟を薰陶してゐた。會〻熊本神風連の亂竝びに前原一誠の萩の亂起るに及んで私學校の反政府的氣勢濃厚になり、遂に十年二月隆盛は鄕黨壯兵に擁せられ、一萬五千の兵を率ゐて鹿兒島を發し、熊本城を攻めるに至つた。朝廷では有栖川宮熾仁親王を征討總督に、陸軍中將山縣有朋・海軍中將河村純義を參軍として熊本に向かはしめ、連戰五十餘日、高瀨・山鹿・田原坂・植木等の地に轉戰して互に勝敗があつたが、三月陸軍中將黑田淸隆・少將山田顯義の別動隊は八代から隆盛の軍の腹背を衝いたので、隆盛軍は熊本城の圍みを解き鹿兒島の城山に退いた。官軍は城山を圍み、九月遂にこれを陷れ、隆盛・利秋以下四十餘人皆自殺し、漸く鎭定を見るに至つた。

〔聯隊旗〕レンタイキ　「軍旗」の通稱。步兵及び騎兵聯隊の表章とする旗。聯隊を表章し、且その精神的團結の中心たる旗章で、聯隊創立の際大元帥陛下より勅語と共に親授せられる。聯隊では聯隊長自らこれを保管し、常に軍旗衞兵を立ててこれを保護し、聯隊長指揮の下に聯隊が正式の行動をなすときこれを捧げる。

明治七年一月、近衞步兵第一・第二聯隊の編成の際、明治天皇より夫々軍旗一旒を親授せられたのを最初とし、其の後十八年に步兵聯隊旗が、二十九年には騎兵聯隊旗が改制せられた。現在の軍旗は竿頭に菊花の御紋章を附し、赤色の旭光十六條が描かれ、紫色の總を三方の緣に縱ひ著けてある。步兵聯隊の軍旗は縱二尺六寸四分、橫三尺三寸、騎兵聯隊のものは縱橫共に二尺で、共に旗竿に接する部分の下部に聯隊名が記されてゐる。

【六十に近い身】

乃木大將は當時(明治三十七年)五十六歲であつた。

【寸毫】スンガウ　極めて僅かなこと。

「毫」―(一)細い毛。(二)すこし。わづか。いさゝか。(三)筆の穗先。筆。(四)極少分量の名。一釐の十分の一。

【勞る】イタハる　(一)あはれむ。ねぎらふ。慰める。(二)大切にする。ねんごろにとり扱ふ。こゝは(一)。

【專心】センシン　心をその物事にのみ注ぐこと。心をその物事に專らにして他に散らさぬこと。

【堅壘】ケンルヰ　守備の堅固なとりで。防備や要害がかたくて攻め落し難いとりで。

【將卒の命を云々】

「燒石に水」の諺によつた。

「燒石に水」は、「燒石に滴水」ともいひ、燒けた石にはいくら水をかけても忽ち消え失せることから、いかに供給したり、勞力を費してみても少しも效果のないことに譬へる。

〔將卒〕シャウソツ　大將と兵卒と。將校と兵卒と。將兵。

【多感の人】タカンのヒト　感受性の强い人。感動しやすい性質を

もつ人。

【悲痛】ヒツウ　かなしみいたむこと。かなしくいたましいこと。

【只管】ヒタスラ　ひとむきに。一途に。せつに。

【鄕國】キャウコク　生まれ故鄕。ふるさと。生國。こゝでは、母國日本をさす。

【父老】フラウ　(一)年老いた男。老翁。老人。(二)老人の尊稱。こゝは(二)。

【自らを責めた詩】

「皇師百萬征ニ强虜一。野戰攻城屍作レ山。愧我何顏看ニ父老一。凱歌今日幾人還」の詩をさす。明治三十九年一月凱旋歸京した將軍が、佐々木行忠侯爵に書き贈つた詩で、「示佐々木行忠君」と添へ書きがある。

【宇品】ウジナ　現廣島市宇品町。廣島市の南端廣島港に臨む同市の外港。

もと廣島市は太田川の運搬する土砂のため海淺く、船舶の繫泊には適しなかつたが、明治十七年築港工事に著手し、市内を流れる京橋川(太田川の分流)河口左岸を埋めたて或は浚渫して、宇品島の東北に良港を造り、六年を費して竣成した。爾來廣島市の外港として瀨戸内海に於ける商船の重要寄港地となり、日清・日露兩戰役の際には軍隊輸送の基點となつた。

【蓑笠】ミノカサ　蓑と笠と。又、蓑を著て、笠をかぶること。

〔蓑〕雨具の一種。古來我が國及び支那の農民・漁民等の間に廣く用ゐられてゐる。普通茅や菅などの莖葉を編んでつくり、地方によつては藁や棕櫚の毛などでもつくる。肩から掛けて胸の部分で合はせ、兩腕を、二重まはしのやうに、覆ふやうになつてゐる。

【歡呼】クヮンコ　よろこんで聲をあげること。

【追懷】ツヰクヮイ　過去のことを思ひおこしてなつかしむこと。追憶。追想。

【みるにつけの歌】

大正元年九月乃木大將が殉死した後、陸軍歩兵大佐塚田清市氏が「乃木大將事蹟」を編み、東鄕元帥に題辭を請うたので、元帥は「乃木大將を懷ふ」と題してこの和歌を詠じた。

【謙讓】ケンジャウ　へりくだりゆづること。身をつゝしんでへりくだること。謙遜。謙退。

【衷心】チュウシン　まごころ。本心。眞情。衷情。

「衷」―(一)まごころ。こゝろ。うち。まんなか。まこと。(二)かなふ。あてはまる。適當する。

【仁慈】ジンジ　いつくしみめぐむこと。なさけ深いこと。いつくしみ。なさけ。めぐみ。慈仁。

【情誼】ジャウギ　情のよしみ。人情上のしたしみ。

「誼」は、したしみ。よしみ。

【傲る】オゴる　たかぶること。人を見下げる。ほこる。驕る。

【身を處する】自分の身を持ちあつかふ。

〔處する〕(一)とゞめる。おく。(二)きめる。定め行ふ。裁斷する。(三)取計ふ。もち扱ふ。處置する。きりもりする。

【閭巷】リョカウ　むらざと。又、その住民。

「閭」―(一)支那周代の制度に於ける里即ち二十五家の門。轉じて、二十五家一郭の稱。(二)むらざと。ゐなか。邑里。

「巷」―(一)ちまた。ろぢ。町や村のこみち。(二)町又は村。むらざと。(三)宮中の廊下。

【老翁】ラウヤ　老年の男。としより。おやぢ。老翁。

【沈鬱】チンウツ　氣分がしづみふさがるさま。氣がしづむさま。

【病氣で休職になつた】

元帥は明治十九年(當時四十歲)七月大佐に進んだが、その頃から二十二年頃までは元帥の一生中最も沈滯した時期で、屢〻病氣にかかり、轉地療養などの爲一再ならず缺勤した。こゝではこの事實をさすのであらう。官歷から摘記すれば次のやうである。

明治二十年一月七日から六週間病氣保養の爲熱海溫泉入浴。
同七月七日病氣引入。翌日から三週間鹽原溫泉入浴。
明治二十一年二月二十七日から二週間病氣の爲引入。
同十月二十八日から二週間氣管支加答兒症の爲引入。
同十一月末から三週間病氣保養の爲湯ヶ原溫泉入浴。
明治二十二年六月十二日から一週間紛瘤摘出後創傷の爲引入。
同十一月十八日から三週間病氣保養の爲湯ヶ原溫泉入浴。

【虛弱】キョジャク　(一)身體の弱いこと。壯健でないこと。(二)勢力や權力の少いこと。こゝは(一)。

【內省的】ナイセイテキ

〔內省〕(一)自ら心の中に自分の言行をかへりみ思ふこと。反省。(二)心理學では、自己の意識過程を觀察すること。「內部知覺」ともいふ。こゝは(一)。

【沈毅】チンキ　おちついてゐて意志がつよい。沈著にして剛毅。

【淵默】エンモク　靜かに默すること。

「淵」―(一)ふち。(二)深い。(三)靜かなさま。深いさま。

【乃木大將の自刃】

乃木大將は大正元年九月十三日(明治天皇御大葬の當日)午後八

時靈轜御發輦の號砲を合圖に、東京市赤坂區新坂町の自邸に於て、夫人靜子と共に自刃、殉死を遂げた。九月十六日の發表書に次のやうにある。

大將の自刃したるは、二階の奥まりたる八疊室（疊敷西洋室）にして、宮城に面したる方に机を置き、先帝陛下の御影を其の上に奉安し、眞榊を供へ、辭世の歌及び遺書を置き、正裝端坐し、軍刀（中身は日本刀）を以て割腹し、更に頸部を右より左に貫ぬきて前方に伏し居れり。

夫人は第一期の喪服を著し、大將にならびて端坐し、白鞘の短刀にて左胸心臟部を刺して前方に伏し居り、毫末も取亂されたる所なかりき。

〔自刃〕ジジン　刃を以て自ら生命を絶つこと。自害。

【驚倒】キャウタウ　甚だおどろくこと。

「倒」は、はげしい動作を表すに用ゐる助字。「傾倒」「絶倒」

【心事】シンジ　心に思ふこと。心中のおもはく。意中。

【自責】ジセキ　自らを責めること。自分で自分の行爲等に關して責めること。

【御恩遇】ゴオングウ　御なさけをかけて待遇されること。御厚遇。御優遇。

【道義的感情】ダウギテキカンジャウ　道德的な氣持。

〔道義〕人の踐み行ふべき正しい道。道德上の條理。

【震災】シンサイ　こゝでは、大正十二年九月一日午前十一時五十八分相模灣附近を震源地として起つた關東大地震による災害。

東京府及び神奈川・靜岡・千葉・埼玉・山梨諸縣に亙つて被害甚だしく、東京・横濱兩市は地震と共に起つた火災の爲に市の大部分を燒失し、全潰家屋九萬餘、燒失家屋三十八萬餘、半潰及び半燒九萬餘に達し、その他、相模灣沿岸・內房沿岸を襲つた津浪、及び伊豆海岸の山津浪等も亦少からぬ被害を與へた結果、この大震火災による死者九萬餘・重輕傷者五萬餘・行方不明者一萬餘に及んだ。

【たしなみ】嗜　(一)すき。このみ。嗜好。(二)心がけ。用意。覺悟。(三)つゝしみ。節制。作法。こゝは(二)。

【公衆】コウシュウ　社會一般の人々。世間の人々。

【沈著】チンチャク　おちついてゐること。輕率でないこと。物事に動じないこと。沈重。

【剛毅】ガウキ　意志が强固で物事に屈せぬこと。氣力が强くて事に耐へる性質。

【風貌】フウバウ　「風采容貌」の義。すがたかたち。風姿。

【體得】タイトク　十分了解會得して自分のものとすること。がてんすること。理會。會得。

【性情】セイジャウ　こゝろ。こゝろだて。きだて。

插圖「東鄕元帥」　元帥正裝。

插圖「乃木大將」　陸軍大將正裝。大正元年九月十三日薨去當日朝の撮影。

二　解釋

1　主題

明治時代の國民的英雄としての東鄕元帥と乃木大將。

2　構想

(1)　明治時代に於ける國民的英雄であつた兩將。（初―七九ノ二）

(2)　兩將の經歷と爲人。（七九ノ三―八七ノ三）

(3)　我が國武士道の完成者であつた兩將。（八七ノ四―終）

3　敍述

〔東鄕元帥と乃木大將とは、共に明治時代に於ける國民的英雄であつた。〕――兩將を「明治時代に於ける國民的英雄」として位置づけ、以て立論の端緒たらしめたのである。「明治時代に於ける」といふ一句は單に兩將の生存した時代をいつてゐるのみではない。その生存の仕方が明治時代的であつたことをも併せ感じさせる。「國民的英雄」といふことも、全國民の敬慕の的であつたといふ事實と共に、國民性のよき體現者であつたことをも併せ感じさせるものがある。

〔日清・日露の兩戰役は、我が國運を賭した戰であつたが、〕――現在の我が國の國際的位置から考へたではわからない事實である。しかし文字通り、我が國運を賭した戰であるといふことは、當時の國民の腦裏に深く刻みつけられてゐた感銘であり覺悟であつた。その覺悟から世界を驚異させるやうなあの戰果が生まれたのであつた。

〔殊に、それを興奮した一時、一日、一月、一年だけでなく、一生に亙つて實行し拔くといふことは、難中の難事である。〕――至誠の實行實現の困難をいつた後にこの一句を措いてある。動もすれば人は一時的興奮を以て至誠の迸りと考へるけれども、一生に亙つて實行し拔くところにこそ、至誠の至誠たる所以がある。

〔崇高以上に神聖な感じをさへ與へるものがある。〕――いふまでもなく、「さへ」に注意しなくては意味が的確に握れない。人間以上の存在であるといふやうな感銘は、さう容易にあり得る筈がない。しかし、誰でも尊敬してゐる、偉れた人物に直接してゐる間

には、時あつて、かういふ感銘をうけることがあり得る。いふまでもなく、これが單なる形容ではなく、當時の人々の實感であつたことを注意すべきであらう。

〔誠ある人の爲す所が如何に地味な、如何に徹底したものであるかに感歎しないものはないであらう。〕――「如何に地味な」といふ一句に心を惹かれる。至誠は非常時に於て、異常な形で表現せられるよりも、平常時に、平常な形で表現せられるのがむしろ眞の姿であらう。が、往々人はそれを見逃しがちだ。そこに著眼してゐるところに筆者の眼の確さがある。

〔將卒の命を水に代へ、敢へてこれを燒石に注ぐといふやうな慘事をも決行しなくてはならなかつた。〕――「燒石に水」といふ諺は昔からある。三萬に餘る死傷者を出した當時の我が軍將卒の困難は、まさにこの諺に近いものであつたにちがひない。大將の苦衷は思ふだに痛ましいものがある。

〔大將が旅順開城の功を思はずして、只管その爲に命を落した將卒の上を悲しみ、鄕國の父老に合はせる顏がないといつて自らを責めた詩は、深く國民の心を打つた。〕――この一事が、そしてそれを詠じたあの「皇師百萬征三强虜一」の詩が、最も深く大將の人となりを表現してゐるものではなからうか。

〔「至誠の人、至誠の人を知る」といふべきである。〕――東鄕元帥と乃木大將との爲に出來たことばであるかのやうに、兩將の人となりとその關係を穿ち得てゐる。しかも、この旅順攻圍の際の事情を敍した後にいはれてあるところ、千鈞の重みがある。「明治時代がこの兩英雄を同時に有し得たことは、單に時代の誇であつたばかりでなく、國民永遠の幸福であるといはなくてはならない。」と文末にいつてゐるのも尤もである。

〔殊に奧床しいのは、兩將共にあれだけの勳功を樹てながら、寸毫もそれに傲る所がなく、身を處するに恰も閭巷の老翁の如くであつたことである。〕――東洋的・日本的なものが、風丰として浮かんで來る。人間もこゝまで徹すれば神に近い。

〔乃木大將の和歌や詩には、そこに動く感情の、人に迫り、人を動かす眞實さがある。東鄕元帥は沈毅・淵默にして底の知れぬやうな趣がある。〕――兩將のこの著しい特質はその寫眞をよく見ることによつても肯かれるものがある。

〔大將にして始めてあの自刃の前に人を默させることが出來る。〕――自刃の可否を抽象的に論ずることは出來る。けれども、乃木大將の自刃には、さういふ抽象論を絕した何ものかがある。そこに理論を超えた人間の力がはつきりと感銘せられる。

〔部分を守ることによつて全體を守り、全體を生かさうとする用意は、恐らく元帥多年の體得によるものであらうが、〕――震災の時、自家の火を防いで他に災禍を擴げなかつた事實をかくいつたものであるが、この理論は理解し得ても非常に臨んでそれを實際に行ふことは容易でない。日常の事實から成る體得があつて始めてその實踐が可能であるといふ指摘は、よくその間の消息を穿つた判斷といつてよい。

〔その自然的な性情に於ては相違してゐたが、その道德的性格に於ては多くの相通ずるものをもつてゐた。〕――「自然的な性情」とは東鄕元帥の意志的沈毅と乃木大將の感情的眞實を指し、「道德的性格」とは兩將の至誠・謙讓・寬大・仁慈であつて、しかも內省に嚴な點などをいふのであらう。

〔眞の「軍人」たることによつて眞の「人」たり得た偉大な存在であつて、最も高い意味に於ける我が國武士道の完成者であるといつてよい。〕――女たる前に先づ人たれとか、軍人たり、教育家たる前に先づ人たれといふやうなことは明治末年頃、ヨーロッパ文化と共に移入せられた思想である。しかし、それは單なる抽象的な考へ方であつて、官吏たり、實業家たり、教育家たり、軍人たることに於て始めて人たり得るといふのが我々の現實的事實に外ならない。この眞理を如實に體現したのが兩將であつた。かくて、一般に鎌倉武士によつて建設せられ、江戸武士によつて完成せられたといはれてゐる武士道は、兩將によつて、更に天皇に對し奉る感恩の眞情に發した忠誠の實行として、國體の本義に立脚し、國民の眞心に一致し來つてゐる點に於て、偉大な發展を示し、その完成を見たものといつてよいであらう。

三　批評

明治時代に於ける國運の進展に貢獻した兩將の功績を確認し、全國民の心からなる敬慕の的となり、世界各國からも名將として尊敬を集めてゐたその爲人を闡明し、やがて我が武士道を國體の本義に立脚させた眞意義を定位したことは、筆者の卓見としなくてはならない。

短篇ではあるけれども、人物評傳として要を得、明治時代の武將として顯れた兩英雄の眞面目を躍如たらしめてゐるものといつてよい。

三　備考

一二　東鄕元帥と乃木大將

一　指導の問題

（一）「日本海海戰」を學習した後を承けてゐることゆゑ、極めて自然に著手することが出來るであらう。「註解」も事實の說明を要するものがある程度で、さして困難はあるまい。單なる傳記でもなく、又逸話でもなく、評傳であることが讀みぶりの上にも現れるまでに熟させたい。

（二）この文は、熟讀反復によつて、比較的容易に構想が見出されるであらう。そして、段落相互の意味關聯が發展的に跡づけられた後、主題をさぐり、敍述に及ぶのが自然の順序かも知れない。何れにしても、註解に伴なつて敍述の吟味をした上でなければ、構想も主題も探ることが出來ないといふ類の文ではないやうに豫想せられる。隨つて、敍上したやうに、構想として見出された各段落の意味を明らかにし、段落相互の關聯をたづね、意味構造を會させることを中心として學習させるのが適當な方法であらうと思はれる。

主題の如き、生徒各自の解釋力に應じて、さま〳〵な把握の仕方とさま〳〵な發表の仕方を示すであらう。即ち素材的にとるもの、作者的にとるもの、輪郭的にとるもの、具體的にとるもの等、容易に一定しがたいにちがひない。それは一定出來ないにしても、その方向づけを指導することによつて、生徒の解釋の力を伸ばす課業になり得るであらう。

（三）兩將を我が國の武士道の完成者として定位したことについては、本卷の「天德寺了伯」「青木新兵衞」「伊達政宗」が本課と比較せられ、又卷二の「國民のまごころ」が參照せられなくてはならないであらう。かくて、始めて武士道の鎌倉期的形質・近世期的形質と、明治期的形質との差が實例によつて指摘せられ、更に明治時代に於て、國民道德としての武士道が眞の完成を得てゐる事實が明らかにせられるであらう。

二　參考資料

（一）東郷・乃木兩將が東伏見宮殿下に供奉して英國皇帝の戴冠式に列席された當時、ロンドンに在つた山本實彥氏の思出を、その著「小閑集」（改造社發行）中の「東郷さんの一斷面」から拔萃する。

東郷さんは、ひどく常識の發達した人で、日常の行動にたいしてもなんの奇もなく、きはめて平々凡々の道程をとられてをつた。だが、東郷さんの口を通してくる言葉は、なにかしら、一つの重味を以て現はれてくるのである。その言葉の裡には、詩もなく、歌もないが、人間の實際がこもつてをつた。勿對面の人びとに、何が一ばん印象づけられたか、と云へば、それは彼の眼であつたらう。いさか人を射るの威――壓迫するの威力が强すぎる眸ではあつたが、それは武將として、國を荷ふ責任ある首腦者として、それだけの强さは、むしろ當り前の眼力と云つておかう。

乃木さんと、東郷さんの風格が全然ちがつてをることを感ぜしめたのは、六月七日東伏見宮殿下に從つて東郷さん乃木さんがお揃ひで倫敦入りをされたとき、乃木さんは五分刈りのイガグリ頭に、カーキ色の軍服姿であつたが、東郷さんは、さして長くもない頭髮をきれいに分けて、フロック姿でセント・パンクラス停車場に下り立たれたことである。そのとき、お出迎へしたわれわれは、乃木さんのさうしたことは、別に不思議とも思はなかつたが、東郷さんが、郷に入りては郷に從ふ――その心もちに一つの考へさせるものを與へてくれたのであつた。

その後も、乃木さんはずつと軍服姿で頑張り通されたが、東郷さんはフロックの國ではフロックをとの信條をかへられなかつたのであつた。

倫敦での東郷さんは、とても豫想のできぬやうな持てかたであつたが、それでも、悠々自適といふ落ちついたところがあつた。自分は、自分の心の處置には困らぬといふ靜かな一つの湛へたところがあつた。乃木さんは、奮鬪そのものの如きであつた。小閑を利しては、片つ端から携へてきた書物をむさぼり讀まれるとか、イイトンとか、ハーローの特殊學校を視察するとか、その他敎育の研究に精を出さるるとか、さるるのであつた。東郷さんは、日本を船出されてから、たつた一册の本を、――英人のかいた或る書物を――朝晩あけたり、閉ぢたり、眠つたり、考へ込んだりしてをられる、さういふふうに――一つの書物を稽古臺にして、まとまつた何かを求めようとしてをる――さういふやうに兩人の性格は違つてをつた。

だが、倫敦でキャプテン・スミスの墓に詣でた東郷さんの姿には、感傷の詩が深くにじみ出てゐた。スミスは、東郷さんが、英國に海軍留學生としてあつた時分、練習艦ウースター艦長であつた人で、情誼のあつい人であつた。東郷さんが、いくたの英國見習士官のなかにまじりこんで、淋しい生活のうちにも孜々として倦まない彼の姿が、ひどく氣に入つて、よく面倒を見てくれた。そして、我東郷が榮達して、さる長官となつたときなどはわがことのごとく喜んださうだ。〔中略〕

墓場は、たいした規模のものではなかつたが、しかし、なかなかまはりが淸楚で氣持がよかつた。墓場の外郭には胡蝶蘭（パンジイ）や、野菊な

どが、もう色あせ、萎みがちに咲いてゐるのがさびしかつた。

スミスの墓は、雪とも見まがふほどの眞つ白の白花崗で、墓の正面には、まだ、この世に生き殘されてある未亡人のふくよかな姿と、虎髯蓬々たるスミス氏の肖像とが並んで彫刻されてをる。そして、西曆一千八百二十六年に生れ、一千九百四年に歿したこともかかれてあつた。臺石の正面には、ウースター船長であつたヂョン・ヘンダーソン・スミスがこの下に埋められてをる旨をしたためてあるのであつた。墓をめぐる鐵柵のうちには、青疊そのままなる芝生がつやつや綠に光り、墓の背後には、常綠の灌木が三つ四つ植ゑられてあつた。また、柵の上や、墓の上やには、白がねの十字架がいとも平和にかがやいてをる。

東郷さんは、白累々たる幾百かの墳墓のなかを通りぬけて、いましもスミスの墓前に突つ立つてをる。そして、しばし、墓面の肖像などをヂッと見つめてをつた。やがて、齋藤君に持たせおいた白蘭と、白百合の大花環を自分の手にとつて、ねんごろに墓前に供へて十分に近い默禱をささげてをられたのであつた。

グリンリーは感激にたへぬもののごとく、東郷さんを見守つたまま、ものも言はなければ、微動もしない。齋藤君はもうハンケチを出してをるのであつた。

東郷さんは、スミスの墓前から默々として動きだした。そして感慨深さうに、この墓地一帶を、あつち、こつちと約三十分ばかり低徊してをらるるのであつた。

(二) 乃木大將を知る一端ともなるべきものを學習院輔仁會編纂「乃木院長紀念錄」中の「乃木院長の薨去」の條から抄錄する。

最終の訓示

大正元年九月六日午前八時職員學生一同を正堂に會せしめ院長一場の訓示を與へらる。これ實に其の最終の訓示なり。此の日院長は通常禮裝を着せられ　先帝陛下崩御以來の哀悼謹慎の爲め頽色憔悴し鬚髯蓬々として殆ど平日の面影なかりき。

今日は豫て定められたる始業式の當日であるから一同の集合を要求したのである。他の學校は既に授業を始めて居る所もあり又將に始めようとする所もある。然しながら學習院は特別の思召によつて成立した學校でもあり職員學生の中には宮中へ奉仕するものも多いことであるから第一期中全く謹慎を表することとし十八日まで始業式を延期するが其の間は善く學業に勉强せねばならぬ。これが則ち最も好い謹慎の方法である。それで勉强するといふことは決して自分一個の爲と思つてはならぬ。常に君の爲、國の爲にすることと心得べきである。此の君の爲國の爲に盡すについては夫々盡し方があらう。我々の樣な老人は何時死ぬかも知れぬ—老少不定といふこともあるが—若い人よりは先に行くのが當然と思はねばならぬ。若い諸子は先の長いことであるからこれから自己の利益の爲でなく君國の爲に十分勉强して君の爲並に國の爲に御役に立たなければならぬ。尙御大葬參列の事については主事より說明する筈である。

右畢つて一旦式場を退出せられ再び入場せられ職員一同に向ひしばらく御目にかからぬから何分よろしく賴む。

と述べられたり。

皇太子殿下並に二皇子殿下へ御暇乞

乃木院長には　先帝崩御以來御機嫌伺として必ず隔日に參殿御帳簿に記名せられしが九月十日明日は是非拜謁を請ひ度き旨申入れあり。依て十一日には其の準備を致し置きしに午前十時過と覺ゆ、參殿ありしを以て自分拜謁の間に案內せしに　皇太子殿下二皇子殿下御列立の前に伺候せられて先づ御機嫌を伺はれたる上　皇太子殿下に對し奉り、

希典も今回コンノート殿下接伴員を仰付けられ同殿下近く御歸國あるに依り御見送等の爲め少しく遠方へ參るべく學習院始業式の頃は不在と存ずるを以て今日拜謁を願ひました次第にて殿下にも今回　皇太子に立たせ給ひたる上は學習院にても是迄は一般の皇族と御同樣の御取扱ひを申上げ來りましたが以後は　皇太子殿下として御取扱ひ申上げるやうに相成るべく就ては一層の御勉學あらせられんことを願ひ奉ります。殊に陸海軍にも御任官遊ばされ他日皇位に卽かせられて大元帥陛下と仰がれ給ふべき所の御學問も最も御必要なれば御身體を御大切に遊ばすと共に是れよりは中御多端なれば御油斷なく幾重にも御勉强の程を願ひ奉ります。之は(中朝事實、中興鑑言の二書を奉呈して)希典が平素愛讀仕ります本にて肝要の處には希典が自ら朱點を施し置きましたが今は未だ御分りは遊ばされざるべきも御爲になる本にて追々御分り遊ばさるべく只今の中は折々御側の者に讀ませて御聽取遊ばさるるやう獻上仕り置きます。

と一禮して二皇子の方に對し奉り

只今希典が兄宮樣へ申上げたる事は宮樣方にも御聽取遊ばされたるべく宮樣方にも御身體を御大切に十分御勉學ありて兄宮樣の御輔佐遊ばす樣御心懸け肝要に存じ奉ります。

と言上して退出せられたり。是れぞ院長が最後の拜謁なりし。

(東宮主事桑野銳氏記)

一三　妹に與ふ

一　解題

一　本文

「吉田松陰全集」（全十卷）第五卷に收められてゐる安政元年十二月三日附の書翰である。當時松陰は野山の獄に、千代は萩在の松本村に在つた。（吉田松陰全集第五卷　昭和十年七月、岩波書店發行）

二　作者

吉田松陰。名は矩方、字は義卿、通稱を初め大次郎、後寅次郎と稱し、松陰又は二十一回猛士と號した。天保元年（二四九〇）八月長州藩士杉百合之助常道の次男として萩在の松本村（現萩市椿東區松本）に生まれた。五年仲父吉田大助（常道の實弟）の養子となり、翌年大助の歿するや家督を嗣ぎ、九年玉木文之進（松陰の父方の叔父）をはじめ林眞人・山田宇右衞門等家學（吉田家の家學山鹿流兵學をさす）高弟の後見の下に、教授見習として藩學明倫館に登り、十一年藩主敬親（「一時藩主」といつた）の前に武教全書戰法第三篇を講じ、爾後屢〻親試ある毎にその偉才を賞せられた。家學の外、他流の兵學・馬術・砲術・劍術・西洋陣法等を兼修し、學・術竝び進んだが、この學習時代を通じて玉木の膝下で受けた薫化が最も大であつた。嘉永元年（十九歳）獨立の師範となり、二年命を奉じて藩内の要所を巡視し、門人を率ゐて城東羽賀臺（はがのだい）に演習を行つた。三年九州を遍歴して諸學者を訪ね（長崎では支那語をも學んだ）、海外の事情を問うて知見を博めた。四年林眞人より家學奥儀の返傳を受け、藩主にこれを皆傳した。次いで藩主に從つて江戸に出で、佐久間象山等に就いて文武の業を磨き、七月より翌年にかけて東北を遊歴して一旦歸國し、六年また諸國を巡り、伊勢大廟を拜して江戸に入り、米艦渡來を聞いて浦賀に馳せ、露艦來ると聞くや渡海の意を決して長崎に赴き、その間梁川星巖・梅田雲濱を始め各地の志士と交つて切磋すると共に、「人事を論ぜんと欲せばまづ地理を觀よ」の持論に從ひ、具に各地を踏査した。安政元年（二十五歳）再び渡海を策したが、失敗して江戸傳馬町の獄に繫がれ、更に藩獄（野山の獄）に送られ、二年の暮獄を許されて杉家に蟄居した。これより先、眞宗の勤皇僧月性及び默霖等相踵いで萩に來るに及び、これと文通して肝膽相照らし、三年秋以降漸次心力を松下村塾に注いで、遂にこれが主となり、四・五年の交、時勢の急轉、塾の隆盛と共に、彼を中心とする同志門下の活動は漸く實踐的となつた。その草する所の時務策は遂に孝明天皇の叡覽に達し、又屢〻藩主の顧みる所となつたが、その急進的態度は藩府の憂ふる所となり、五年末再び藩獄に投ぜられた。しかも氣節愈〻軒昂、「斯身降レ獄未ニ心降ハ」。寤寐猶迷皇帝邦」と詠じ、獄中猶畫策を捨てず、また他面死生觀について明の李卓吾の遺著に啓沃される所少くなかつた。偶〻所謂安政の大獄起り、六年五月幕命飛來して江戸に檻送せられ、幕吏の訊問に對しては間部要擊策・伏見要駕策等を赤裸々に陳じ、且堂々尊攘の眞義を說いて傾聽せしめたが、十月遂に死刑に處せられた。享年三十。明治二十二年特旨を以て正四位を贈られ、四十年村塾の域内に縣社松陰神社が創建せられた。

遺著は年々の文稿數百篇の外、「幽囚錄」「回顧錄」「講孟餘話」「孫子評註」「坐獄日錄」「留魂錄」、その他兵書・詩稿・書簡・日記・意見書・抄錄等多く、收めて「吉田松陰全集」にある。

三　採擇の趣旨

幕末の志士吉田松陰が國事に身命を獻げながら、獄中から妹に贈つた手紙で、武士道的精神の一發露としての家庭教育觀が窺はれると共に、松陰の骨肉に對する至情に觸れることが出來るであらう。國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【妹】名は千代。後、芳と改めた。天保三年（二四九二）十一月萩藩士杉常道の長女として生まれた。（松陰のすぐ下の妹で二歳の年少。）兒玉寛備の長男祐之に嫁し、二男三女をあげた。松陰の妹中の最年長者であつたため、妹等の代表となつてよく兄達の教訓を守り、松陰が逆境に在るや、屢〻物品を贈遺したり文書を寄せたりしてその憂苦を慰めた。又よくその家庭を治め、晩年には兄松陰の精神顯彰に心を用ゐた。大正十三年歿、享年九十三。

【十一月二十七日】安政元年（二五一四）十一月二十七日。

安政元年三月松陰（當時二十五歳）は金子重之助と共に米艦に乘じて海外に赴かうとしたが、拒まれて果さず、自首して縛につき、江戸傳馬町の獄舍に拘致された。同年九月に至り、幕府はその罪を

斷じ、金子と共に藩に幽閉するに決し、兩人は一旦麻布の藩邸に移され、ついで萩に護送、松陰は野山の獄、金子は岩倉の獄に投ぜられた。十一月松陰は「二十一回猛士說」を作り、發憤の由來を述べ、爾後この別號を用ゐる意を明らかにした。當時松陰一家の者の松陰に對する恩愛と理解とは實によく行屆き、種々の方法を以てその苦痛を慰め、讀書研鑽をも助けようとした。松陰はかうした恩愛と庇護をうけて從來幾分尖鋭になつてゐた感情も次第に和らぎ、靜かに家を顧み父母兄妹を思ふ氣持になつてゐたらしい。

【九ねぶ蜜柑】　クねぶミカン　「くねんぼ（九年母）」に同じ。「くねぼ」ともいひ（くねぶの轉訛）、「香橙」「乳柑」等の異稱がある。芸香科、みかん屬の常綠灌木で、「だいだい」の變種と見なされる。高さは三米位、葉は「みかん」に似て稍大きく、初夏の頃枝梢上に香氣の高い白色五瓣花をつける。果實は扁圓形の漿果で、晩秋に黃熟して大きさ六糎許りに達し、越年する。果皮は「みかん」よりも厚く、且果肉から離れ難いが、佳香と甘味とを有して皮つきのまゝ賞味せられ、貯藏に耐へるので珍重される。原產地は明らかでないが、夙く我が國に移入せられ、專ら暖地に栽培される。「九ねぶ」と「蜜柑」の意にも解せられる。

【かこひ】　圍　（一）かこふこと。かこむもの。（二）取圍むための塀・垣の類。（三）周圍。まはり。（四）茶道に於ける數寄屋。（五）蔬菜などを季節外まで貯へて置くこと。こゝは（一）で、牢屋のしきりの內。

【そもじ】　其文字　そなたの「そ」に「もじ」をつけた語。あなた。そなた。おまへ。

「もじ」は、物の名の頭字に接尾語の如くつけて、その物を隱語的に表す語。「すもじ」（鮨）。「かもじ」（髢）。

【まなく】　間無く

（まなし）　（一）絕間が無い。ひまがない。間斷がない。（二）時間の距りが殆どない。程が無い。こゝは（二）。

【わもじ】　我文字・吾文字　一般には、「そもじ」と同じく、おまへ、そなた、の意に用ゐるが、こゝでは、わたくし、自分、の意に用ゐてある。

【父】　杉常道。通稱百合之助。恬齋と號した。萩藩士。文化元年（二四六四）杉常德の長子として萩に生まれた。二十一歲の時家を繼ぎ、百人中間頭兼盜賊改方に補せられた。勤皇の志あつく、常に子女の敎育に意を用ゐ、松陰等もその感化を受けること多大であつた。松陰が亡命の罪により屏居せしめられ、又航海の策に失敗して投獄せられた時も、これを勵まし、安政六年遂に松陰が處刑せられた際にも自若として、君國に報いたと喜んだ。翌年監督不行屆の廉により閉門退隱を命ぜられたが、文久二年に至つて許され、御當職所御內用方兼盜賊改方に補せられた。ついで民治の子小太郎をして松陰のあとを繼がしめた。慶應元年三月致仕し、八月歿した。享年六十二。

【母】　名は瀧。杉常道の妻。文化四年（二四六七）村田右中の女として生まれた。後、家柄の關係から兒玉寬備の女として文政九年常道に嫁し、三男四女をあげた。貧困の中にあつてよく家政を齊へ、子女の養育に意を用ゐた。松陰の刑死、孫小太郎・義弟玉木正韞の職死等に當つても自若として事に處した。晩年名聲益〻顯はれ、朝野の慰問が絕えず、明治十六年に至り畏くも皇太后・皇后兩宮より特に羽二重一匹を賜はり、後又御菓子一折・縮緬一匹を賜はつた。二十二年には松陰に贈位の御沙汰があり、又有栖川宮親王からは松陰神社創建につき御下賜金を賜はつた。二十三年八月歿、享年八十四。歿するや皇后宮より特に追弔料を賜はつた。

【兄】　杉民治。通稱梅太郎。萩藩士。文政十一年（二四八八）正月杉常道の長子として萩の郊外松本村に生まれた。弟松陰と共に幼時から父の指導を受け、又後には叔父玉木正韞（演稱文之進）に學び、その創設にかゝる松下村塾に學んだ。藩に仕へて郡奉行所加勢暫役に任ぜられたが、性來救民の情深く綿密謹直でこの役に適し、自らもこの民政事務を好み、爾來一生この方面の事業にたづさはつた。官務の餘暇には父を助けて家政を齊へ、又松陰が諸方に遊學するや父に代つてその一切の雜務を辨じ、間接にこれを援助した。航海事件の時は一時謹慎したがまもなく許され、松陰が野山の獄に廻されて以來殆ど毎日これを見舞つて勵まし、翌年免されて後は松下村塾の經營等に大いに力を致した。安政五年松陰が再び囚へられて東送せられるや、監督不行屆の故を以て父と共に免職せられた。松陰の歿後はその遺志の達成に力めた。萬延元年許されて家督をつぎ、再び官途についた。文久の頃に至り、時勢益〻勤皇黨に有利に展開するに及び、吉田家も復興の恩命を蒙り、民治はその子小太郎をして吉田家を繼がしめた。（小太郎は松陰崇拜者で又榮物であつたが、明治九年前原一誠の亂に加つて戰死した。年十九。）明治以後は次第に榮進して藩主の侍講となり、廢藩置縣後は山口縣權典事となつたが、九年辭職し、以後松下村塾を再興し、又晩年には女子敎育に力を注ぎ、萩私立修善女學校長たること前後十年に及んだ。これより先、三十三年には國事に盡くした功により、從五位を賜はつた。明治四十三年十一月歿、享年八十三。

【きけ申さず】〔きける〕（自動、下一）弱る。疲れる。

【そもじの御家】兒玉家をさす。

兒玉家と杉家とは代々姻戚關係にある。卽ち、千代の祖父杉常德の妻（岸田春道の女）の弟が兒玉寬備であり、千代の母瀧は村田右中の女であつたが、家柄の關係から寬備の女として常道に嫁し、更に千代が寬備の長子祐之に嫁してゐる。

因みに、千代の夫兒玉祐之は萩藩士で通稱初之進、後兵衞門と改めた。幼時玉木正韞・久保幾之進等に學び、後松陰に學んだらしい。嘉永四年松陰と同じく江戸藩邸に勤務し、特にこれと親しみ、維新後國事に奔走した。明治八年三月歿、享年五十五。

【をばさま】兒玉寬備の妻。祐之の母。安政元年以前に歿したことは本文で知られるが、その他は未詳である。

【をぢさま】兒玉寬備。通稱太兵衞。萩藩士。安政六年（一二五一九）歿、享年六十九。當時六十四歳。

【萬吉】マンキチ　祐之の長子。出生年月未詳。明治十五年十一月歿。その履歴等も未詳である。

松陰から萬吉の祖父寬備に宛てた嘉永四年五月五日附の書簡中に「萬吉樣逐々生長にて可レ有レ之と奉レ察候云々」とあるので、これより以前の出生たることは知られる。（隨つて享年は三十二年以上である。）

【赤穴のばあさま】傳未詳。

〔赤穴〕アカアナ　赤穴家。吉田・兒玉兩家の親戚。松陰の父常道の筆に成る吉田家の略系によれば、同家の祖吉田重矩（享保四年歿。享年七十二）の妻は赤穴次郎右衞門幸正の女であるが、本文の當時兩家が如何なる關係にあつたかは明らかでない。

【まめ】（一）まじめ。まこと。本氣。（二）勞苦を厭はず輕々と働くこと。（三）身體の健全なこと。すこやか。達者。こゝは（三）。

【重寶】ヂュウハウ　大切なたから。大事な寶物。

【大にい】ダイにい　大次郎兄、の意。

松陰は初め通稱を大次郎といつた。

【おとゝさま】お父樣。父上樣。

【梅にいさま】梅太郎兄樣、の意。

【藪入り】ヤブイり　奉公人などが正月及び七月の十六日に暇を許されて、自家に歸ること、又、その頃、又、その人。宿入（やどいり）。宿下（やどさが）り。里下（さとさが）り。

古くは正月十六日のみであつたが、近世以後七月にも行はれるやうになつた。又奉公人だけでなく、他に嫁した女がこの日實家へ歸省する風習もある。

【貝原先生】カヒバラセンセイ　貝原益軒。名は篤信、字は子誠、通稱は久兵衞、益軒・損軒などと號した。寬永七年（一二九〇）十一月筑前國福岡城内に生まれた。世々黑田侯に仕へ、父寬齋は醫を業とした。幼時醫書を讀みほゞ藥方に通じた。また好んで佛書を讀んだが、兄元端に四書の句讀を受けるに及んで佛書を抛ち、儒學を以て世に立たうとした。明曆三年京師に學び、山崎闇齋・松永尺五・木下順庵に從つて學ぶこと三年、業大いに進んだ。初め頗る陸王の學を喜んだが、後その非を悟り、專ら朱子の說を遵奉するに至つた。一時、京師に講筵を開いたが、寬文四年福岡に歸り、藩に仕へて三世に歷仕し、大いに禮遇せられた。元祿十三年致仕して京都に隱居し、終生研究に倦むことを知らなかつた。晩年、朱子の學說に佛老を雜へたるを悟り、歿する年「大疑錄」を著した。書を著して、人を利し物を濟ふを要とし、又好んで奇勝名區を探り、足迹天下に遍く、その行程勝迹を記して以て旅人に便した。正德四年（一三七四）八月歿、享年八十五。著書頗る多く、修身・教育・養生・農藝・地理等に亙り、「愼思錄」「自娛集」「大疑錄」及び「大和俗訓」「養生訓」等の所謂十訓その他和文の書百餘種に及び、又本草學者としては「大和本草」「花譜」「菜譜」「日本釋名」等の著がある。

一三　妹に與ふ

【大和俗訓】ヤマトゾックン　貝原益軒著。益軒十訓の一。寶永五年（七十九歳）の作。「爲學上」「同下」「心術上」「同下」「衣服言語」「躬行上」「同下」「應接」の八卷から成る敎訓書で、「爲學」では程朱學の立場から學問の工夫・讀書法等を、「心術」では「中庸」を本として心を正しくすることを、以下では視聽言動、日常生活上の心得、人に接する心得等を述べてゐる。儒敎に立脚してゐるが、我が國の風習に卽して適切に論じてある。

【家道訓】カダウクン　貝原益軒著。益軒十訓の一。正德元年（八十歳）の作。「總論」「用財」各上中下に分かれ、全六卷から成る敎訓書で、名の如く家を治める心得を說いたもの。儒學の立場に立つと同時に、我が國の家族生活の實情に卽して、仁慈を本とし、各々その分に安んずべきことを述べてある。

【丸き耳】マルきミミ　こゝでは、理窟つぽいことを聞きなれない女子供などの耳、の意であらう。

【淨瑠璃本】ジャウルリボン　所謂淨瑠璃の正本の類をさしたのであらう。

〔淨瑠璃〕詞章・音曲・人形操の三部からなる綜合藝術。詞章・曲節は平曲・謠曲その他を綜合して作られ、謠曲が古典的であるのに比して、人形の所作及び三味線等を取入れて複雜に

なり、演劇的要素が多い。更に完成期の代表的作品に就いてその詞章を文學として見る時は、近古以來の語物やお伽草子等の系統をひいて發達した敍事文學の中へ、謠曲・幸若・舞曲を始めとして、室町から江戸にかけて行はれた種々の歌謠等をも取入れた上に、新たな生命と形式とを與へて成立したもので、國文學中特有の形式と內容とを有する敍事的劇詞である。

尙、淨瑠璃の正本は、その詞章に曲節の譜を記入した版本で、演奏用の基本をなすもので、狹義には大夫の實際使用した原本をいふが、一般には廣義で、稽古用の本の如く一段を拔いた所謂拔本（ぬきぼん）に對し、全段を軟めた所謂丸本（まるぼん）をさす。

【別にしたゝめたる文】

松陰は本文の手紙と同時に、別に教訓的な手紙を書いてゐる。その要旨次の如きものである。（尙、これにつゞいて「與二稚阿眞一」といふ詩と、發句の作り方についての教示とがある。）

子供といふものは親殊に母親の教育によつて善くも惡くもなるものであるから、よく注意すべきである。そこで、心得のため、妻たり母たるものの行ふべき大事な事柄を擧げると、

一、妻たるものは夫を敬ひ、舅姑に仕へるのが第一の務たることはいふまでもないが、又生家及び婚家の先祖を敬はねばならぬ。

二、神明を崇めねばならぬ。しかし、それにはまづ自分の心を正直にして、利慾の念等を拂つて拜まねばならぬ。

三、親族を睦まじくせねばならぬ。婦人の不用意な言葉からして親族不和となるやうな場合が多いから、その點に特に注意せねばならぬ。

この三ケ條が最も肝要な點で、これらを實行することによつて子供の教育といふものは自ら行はれてゆくものである。それについてわが杉家の家法には六つの美點がある。卽ち、

一、先祖を尊ぶこと。
二、神明を崇めること。
三、親族と睦まじくすること。
四、文學を好むこと。
五、佛法に惑はぬこと。
六、親しく田畠の業を行ふこと。

の六箇條で、これらをよく心掛けて實行するのが孝行である。

【頼もしやの歌】　今度のそなたの手紙を見ぬ以前から、私はそなたのことを思つてゐたのであるが、そのまごころが通じて、そのため今そなたから手紙が來たのであらうか、さう思ふと甚だ心强いことである、といふほどの意。

尙、例の別紙の手紙の終りにも次のやうに附記してある。

此書付は阿千代阿壽等へ示し可レ申とて先日より胸中にたくわへ候處所詮讀書之閑なく夫きりにいたし置候昨朝無事故風と思付認懸候又暮程に見候へは餘り拙き故止め可レ申と存候處夜中阿千代が文を見涙を流し所レ謂鬼の目にも涙とやら云ふしにて類になつかしく相成候故拙きなから妹等へ遣申度存候久しく胸中に蓄へたるを昨風と筆を下し其夜千代が文參り候事精誠之感通かとも思はれ候拙きは何んとせう御閑御座候はゝ半枚五行位に讀よきやうに御認め兩妹なとへ御與へ被レ遣間布哉乍レ恐尊大人へ御賴仕可レ然哉萬々宜しく奉レ賴候

三　日　　寅じ

插圖「吉田松陰筆蹟」本文書簡の冒頭。原本は兒玉秀雄氏藏。「吉田松陰全集」第五卷二五四頁所收。

二　解　釋

1　主　題

獄中の吉田松陰が、妹に對する至情と教訓。

2　構　想

(1)　前置―妹の手紙を讀んだ感慨。（初―八八ノ七）

一三　妹に與ふ

(2)　本文―妹に對する期待。（八八ノ八―八九ノ一一）
(3)　結び―返事を認めた氣持。（八九ノ一二―九〇ノ二）
(4)　追て書―別にしたゝめた心得書のこと。（九〇ノ四―終）
　イ　前置―別紙心得書のこと。
　ロ　本文―正月の心得。
　ハ　結び―手紙よりも先に來た妹の心。

3　敍　述

〔十一月二十七日と日づけ御座候御手紙、竝びに丸ねぶ蜜柑・かつをぶし、ともに昨晩相とゞき、〕――その一つ一つをどんなになつかしく、うれしく受取つたことであらう。社會からも家庭からも隔離せられてゐる境遇にゐて、殊にこの筆者のやうな人が、かういふ心のこもつた贈物に接したよろこびは、格別なものがあるであらう。

〔かこひの內はともし暗く候へども、大がい相わかり候まゝ、〕――言葉は簡單であるが、感慨無量な一句である。その境と、その人の心と姿とがしみ〴〵と感じられて來る。

〔そもじの心の中を察しやり、涙が出てやみかね、夜著をかむりてふせり候へども、如何にもたへかね、また起きて御文くりかへし見候て、いよ〳〵涙にむせび、つひにそれなりに寐入り候へども、

まなく目がさめ、よもすがら寐入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候。」――妹から獄中へ送られた一通の手紙が、どれだけ深くこの志士の至情にひゞいたか。それが、「夜著をかむりてふせり……また起きて御文くりかへし見……つひにそれなりに寐入り……まなく目がさめ、よもすがら寐入り申さず」といふ筆者の行動によつてよく描出せられてゐる。

〔わもじは、父母さまや兄さまの御かげにて、著物もあたゝかに食べものもゆたかに、あまつさへ筆・紙・書物まで何一つ不足これなく、寒きにもきけ申さず候間、御安心なさるべく候。」――妹からの手紙には、獄中の兄を氣づかつてあつたに違ひない。先づそれに答へて安心せよといつてゐるのである。無事を喜ぶばかりでなく、その境遇に感謝してゐるらしい氣分が筆致の上から感じられて來る。

〔そもじの御家、……金にも玉にもかへらるゝものにこれなく候。」――まづ、なくなられたをばをあげ、高齢に達したをぢをいつて孝養をすゝめ、次に、一子萬吉の養育に注意し、親族の老人の上に及んでゐる。しかも、その一人一人が、何れも溫かい感情の中に思ひ浮かべられてゐる。萬吉についても、「日々ふとり申すべく」といつて、その愛くるしさを眼前に見ていつてゐる。

〔そもじ事は、いとけなき折より心得よろしきものとおもひ、一しほ親しくおもひ候ひし故、このほど御文拜し、入らざる事までも、申し進じ候なり。」――なぜかういふ手紙を書いたかといふ自分の氣持を内省して結びとしたのである。そして、それを妹の美質に歸したところに、挨拶以上の挨拶がある。

〔おとゝさまか、梅にいさまに讀みよきやうに寫してもらひ候へ。」――妹の幼さ忙しさをいたはつてゐる氣持と、家庭の溫かい空氣とがしみ〴〵と感じられる。

〔どうぞ兄さまの御休日をえらび參り候て、心得になる話ども聞き候へ。わたくしも其の日わかり候はば、昔話なりともしたゝめて遣はし申すべく。」――たつた一日の正月の藪入をどう暮すべきかについてこんな指導を與へてゐる。この氣持は慰安日卽享樂日と考へてゐる現代人の理解には入りにくいかも知れない。けれども、そこに流れてゐる友愛の深さには誰も打たれざるを得ないであらう。

〔正月には、いづくにてもつまらぬ遊び事をするものに候へども、それよりは、何か心得になる本なりとも、讀みてもらひ候へ。」――武士の家庭生活が、獄中に在る志士の家庭觀が窺はれる。

〔定めて誠の心の、文より先に參りたるにやと、いと頼もしくぞんじ云々」――妹の上を思つて筆をとつてゐるところへ妹の手紙が來た時、それをかく解釋して喜んだのである。誠心の人は誠心の生きた力を信じてゐる。特にかういふ境界に立つた至情の人は、かういふ信仰を獲得するであらう。そして又、その信仰を事實たらしめるであらう。

三　批評

眞實な手紙である。抑へがたい至情の溢れた手紙である。そして情理を備へ盡した手紙である。國事に身命を捧げてゐる志士が、獄中から嫁してゐる妹に寄せた友愛の至情であるところに、その溫かい人情の一面が窺はれて追慕の情を深められる。

年齡廿五に達したばかりの青年の筆とも思はれない情理兼備の文であるが、よく讀みかへしてゆくと、若々しい熱情の動きに觸れるものがある。稍〻古風な、そして地方色のある用語・文體であるけれども、誰の心にもしみ〴〵とした眞實感を喚び起さずには措かぬものがある。

三　備考

一　指導の問題

(一)「くねぶ蜜柑」「そもじ」「わもじ」「夜著」「御文」「それなり」「年まし」「くだらぬ事」「どうぞ」「つまらぬ」「丸き耳にも」等、現代青年に縁遠い語又は候文としては碎けすぎたやうな語が用ゐられ、又、一種獨得な文體を成してゐる上に、生徒は候文體そのものにも十分習熟してゐないことであるから、不安なく讀みこなせるやうになるまで讀みかへさせることが肝要と思はれる。

(二) 解釋に於ては、書簡文の型を踏みながら、そこを出た自由さを有する構成であることを知らしめ、自己の無事を報ずることが本文の最初に措かれたのは、返信であるため、受信者が妹である親しみのためであること、及び、返信もその追て書も三段落を成して有機的展開を遂げ、その結びには、何れにあつても、その手紙を書きつゝある自己の心境を敍して、その至情を盡してゐること等を理解させなくてはならない。

文中の各人稱が、赤穴のばあさま・梅にいさま・大にいの如く、日頃の習慣のまゝに親しみ深く書かれてゐることにも注意させたい。

(三) 當然、どこかで松陰略傳が補說せられなくてはならないが、

その松陰の生涯を背景としてこの手紙が理解せられた時、どんな感銘を生徒が受けるか。國事に奔走して身命を捧げた志士は、又家庭の人として懇切至らざるなき兄であつたのだ。

三十年を一期として世を去つたこの先覺者が、いかに人間としても情理を兼ね備へた奥床しい存在であつたかをよく握らせなくてはならないであらう。

二　參考資料

廣瀬敏子氏の「松陰先生にゆかり深き婦人」の中から、千代女に關する部分を抄錄する。

松陰先生の三妹の中で、一番上の千代は、先生とことに睦まじかつた。先生の牢中からの手紙にも、

「そもじ(汝)事はいとけなき折より心得よろしきものと思ひ、一しほ親しく思ひ候ひし……」とある樣に、わけて親しい妹であつた。

年も先生と三つちがひで近い上に、杉家の貧困のさなかに生ひ立つて梅太郎兄と先生と千代は、山宅(杉家の書宅山の中腹にある)で父母の辛苦の樣を朝夕具さに見つゝ、互ひに助け合ひ勵まし合ひして育つて來たせいもあらう。

或時は庭の隅の落葉の中に椎の實を探し、或時は兄弟三人で仲よく松茸狩りに行つて、歸ると母の手料理にきのこの香を樂しんで、心の底から仲よく育つて來た兄と妹であつた。

千代は子供の時から、よく母の手傳をして、臺所のこと洗濯の事何くれと、母の片腕となつて働いたが、天保十四年に藩政の大改革があつて、清廉な百合之助が警察署長の樣なお役人として、拔擢されてからは、重要な勤の都合上、千代と仲間一人を連れてお城の近くの江向(えがひ)(地の名)に移り住んだ。千代は父の身のまはりの世話から家事一切を引き受けて、毎日々々父と仲間の辨當まで拵へてまめやかに働いた。それが十二歳から十三歳にかけての二ヶ年であつた。千代は家事の手がすくと、山宅の母瀧子がどんなに忙はしく骨を折られるであらうと案じ、又玉木の塾に通ふ兄達二人をなつかしく思ふのであつた。先生と千代との友愛は、やはり先生が牢住みで不遇になられるまでは、何の記錄のあらう筈もないので、現在殘つて居る文書では安政元年の十二月三日に先生が野山獄より送られた手紙が初めで、現存の妹宛の手紙は、千代宛が七通、三妹宛が一通しかないが、千代から牢に送つた手紙の端に、先生が返事を認められたり、又は千代が修養工夫のこと、子供の教育のことなどで先生の教を乞うた手紙に、意見を加へて送り返されたりしたものはまだ〳〵澤山あつたさうだが、いつしか散逸して惜しい事をしたと、後年千代が人に話して居る。

先生がこま〴〵と牢中から手紙を送られた安政元年頃は、千代も既に二十三歳となつて、婚家兒玉家の家風にも慣れ、長子萬吉の母ともなつて、漸く女子としての圓熟期に入りかけた頃で何を話しても一通りは理解の出來る張り合ひのある年頃である。

「十一月廿七日と日づけ御座候御手紙、并九ねぶ密柑・かつを節共に昨晩相とゞき、團ひの中は燈くらく候へ共、大がい相分り候まゝ、そもじの心の中を察しやり涙が出てやみかね、夜着をかぶりてふせり候へども、如何にもたへかね、又起て御文くりかへし見候て、いよ〳〵涙にむせび、つひにそれなりに寢入り候へ共、間なく目がさめ、夜もすがら寢入り不申、色々なる事思ひ出し申候……」

と。千代が兄の好物のみかんにかつをぶしをつけて差入れた。それに添へた手紙を、ほのぐらい牢屋の燈火の下に展げて見入る先生の面影が文中に浮び出て居る。さなきだに痩せがちな體質の先生が、牢住みで更に面やつれされたであらうその姿を、一度は滿團に涙の顔を埋め、又起きては繰り返し讀む妹の眞情に、死をさへ懼れぬ先生が落涙とゞめかねた友愛の情が、ひしひしと胸に迫るのを覺える。

又この手紙の後の方に左の文言がある。

「頼もしや誠の心通ふらん
　文見ぬ先に君を思ひて

右に認めたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが、その夜、そもじの文の到來せしは、定めて誠の心の文より先に參りたるにやと、いと頼もしく存じ候まゝかく詠みたり。」

と。千代の心が、淋しい兄に明るい信愛の人生を寫ばせてゐることのいかに深いか、幸な順境の者のはかり知られぬものがある。更に

「そもじの御家おばさま(姑)も御なくなられ候事なれば、そもじ萬端心懸け候はでは相すまぬ事、ことにおじさま(舅)も、年まし御齡高くならせられ候事故、別して御孝養を盡し候へかし……」

と、兒玉家への奉仕を一筋に教へてゐる所に、先生の女子教育の根本が見える。こゝにいふおじさまは千代の舅太兵衛で、親類中でも氣むづかしいので知られて居たといふ。この舅が姑に先立たれて老いて殘つたのに、孝養を盡せよと教へる先生の心もさることながら、千代もこの老舅に仕へて、丁度自分の實家の父母と同じく誠實に奉養した。

先生は常に妹達には夫の家を我家と思ひ、夫の父母を吾父母と思うて孝養を盡せよと教へられたが、その次に必ず先生が諭されたのは子女教育の事である。この時も、

「萬子(萬吉の事)も日々にふとり可レ申候得ば、心を用ひて育て候へ……」

といひ、綿々縷々半紙十枚に亙りて婦人の心得を記してある。これは先生一生の婦女子教訓の全幅と云つてよい。これ程長い手紙は、他の如何なる人にもなかつたと思ふ程の長文で、一、祖先を尊崇すべき事、子女には祖先の功勞を嘶し聞すべき事、一、神明を崇め尊ぶ事、一、親族睦じくする事　以上を母親自身實踐窮行して、自然と子供に感ぜしめるやうにせよといふのが、手紙の骨髓であるが、その末段に

「……お閑御座候はゞ半枚五行位に讀みよき樣に御認め、兩妹(寿子・文子)などへ御與へ遣はされまじくや、恐れながら尊大人(父上)へ御頼仕り可レ然や、萬々宜敷奉頼候」

とある。千代に教へて壽子・文子にも傳へさせようとして居られる先生の眞劍な態度が、又受ける千代にもよく〳〵了解されたであらう。

千代は一生この手紙を大切に保存して、隙きへあれば繰り返して讀み、又何か心に惱みある時などもこれを繙いて、先生の遺教を守つて居つた。千代の娘たちは、いつも同じものを涙ながらにくり展げてよむ母の心を解しかねて、

「お母樣は、それさへ讀めばお泣きになる。それには何が書いてありますの」

とよく尋ね〳〵したと、これも千代の追憶談である。

一四　心の小徑

一　解題

一　本文

「北の人」の卷頭「片言を言ふまで」を改題したものである。(北の人　昭和九年五月、梓書房發行)

「北の人」は著者の「アイヌ語研究をめぐりて」の「餘篇」を獨立させたもので、本篇の外に二十數篇、アイヌ語研究の副產物ともいふべき隨筆を收めてゐる。

二　作者

金田一京助(きんだいちきやうすけ)。言語學者。明治十五年五月盛岡市四ッ家町に生まれ、第二高等學校を歷て、東京帝國大學文科大學(言語學專攻)に入り、同四十年卒業、大正二年同文科大學講師となり、昭和三年助教授に進み、現にその職に在ると共に、國學院大學教授である。昭和十年三月「ユーカラの語法　特にその動詞に就て」の論文によつて、文學博士の學位を得た。

夙にアイヌ研究を以て著れ、著書には上記の外に、「あいぬ物語(付あいぬ語大意及語彙)」「アイヌの研究」「北蝦夷古語遺篇」「アイヌ聖典」「(アイヌ)銀事詩ユーカラの研究」「國語音韻論」「アイヌ文學」「言語研究」「(岩波文庫)ユーカラ」等がある。

三　採擇の趣旨

前課が獄中に在つて死を覺悟してゐる志士が、妹に對する至情を書き送つた言葉であつたのに關聯し、本課には言葉こそ人と人との心を通はせる小徑であることを實感した學者の文を掲げた。尙、卷頭の「大和言葉」と相俟つて、言葉の意義と愛とに目醒めた國語學習の動機を有力ならしめるものがあるであらう。文化的教材であり、國民的教材である。

金田一京助

一　註解

【小徑】　コミチ

「徑」は、「逕」にも作る。車を通ぜず、人馬のみの歩む道。細路。小路。ちかみち。よこみち。

【樺太】　カラフト　我が國最北の地方で、北は北緯五〇度の地點に於て、何等自然的境界なくソヴェート聯邦領サハリン州(所謂、北樺太)と連なり、南は幅員四二粁の宗谷海峽を挾んで北海道本島と對し、西は七・四粁の間宮海峽を隔ててソヴェート聯邦領沿海縣を望む。面積三萬六千方粁、地形は二條の縱走山脈の間に中央低地が横たはり、低地の北部はツンドラ帶である。氣候は我が領土中最も寒冷で氣溫の較差も大きく、長い嚴冬と短い夏とがあり、海は西海岸の一部を除き冬期凍結する。降雨量は甚だしく少い。沿岸は水産業が盛で、鮭・鱒・鰊を饒産し、山地には石炭を産する。又パルプ製紙工業も行はれる。現在は樺太廳が置かれ、敷香・元泊・豐原・大泊・泊居・眞岡・本斗の七支廳に分かれる。(樺太廳は豐原市に在る。)土著民族としては、アイヌの外に、ギリヤーク・オロッコ・キーリン等がある。

樺太はもと「唐太」といひ、「柯太」「柄太」とも記され、また「北蝦夷」「奥蝦夷」とも呼ばれた。樺太は維新後の改稱。

【三十年振り】

明治八年の樺太放棄から同三十八年の南半領有までをいふ。

我が國と樺太との交渉は江戸時代の初期に始る。即ち、寛永中松前公廣は家臣をして同島を調査せしめ、宗谷場所を開いて樺太アイヌとの貿易場と定め、元祿十三年幕府へ提出した文書には「からふと島」として領土に扱つてゐる。降つて寛政二年には樺太場所が開かれて實際の經營が始つたが、當時は既にロシヤの極東進出が大いに進み、得撫(ウルップ)以北の千島を蠶食して樺太に迫り、文化三・四年には千島及び樺太に於ける露兵暴行事件(文化元年ロシヤ全權レザノフが長崎に來つて通商を求めたのを幕府が拒絶したのに對する報復的示威行動とみられる)が起つて、幕府は會津藩に出兵を命ずるに至つた。幸ひこの事件はロシヤ側の陳謝によつて事無きを得たが、幕府は漸く北邊の多事を悟つて文化四年北海道・樺太・千島の蝦夷地を直轄領とし、專ら防備・經營に力めた。然るに文政四年に至り再びこの地を松前藩に還附し、樺太開拓も中絶したまゝ嘉永六年のペリー來航となつた。恰もこの年ロシヤ提督プーチャチンも長崎に來つて通商及び北地の國境劃定を議し、翌安政元年再び下田に入港して交渉を續けた結果、日露和親條約の締結を見、樺太は兩國共有を以て妥協し、千島は擇捉(エトロフ)・得撫兩島間に國境を定めた。しかし我が國ではその後國内問題に追はれて北地を顧みる餘裕に乏しく、一方ロシヤ人の樺太渡航は次第に多きを加へ、殆ど併呑の勢を示すに至り、安政六年の江戸の對ムラヴィヨフ交渉、文久二年の露都に於ける竹内外國奉行の交渉も要領を得ず、漸く慶應三年小出外國奉行の露都交渉で、兩國共有に關する議定書を作製することによつて一時を彌縫した。維新後は明治三年の開拓使設置に際して樺太もその管轄に屬せしめ、五年樺太支廳をクシュンコタン(大泊の舊名)に置き、次いで外務卿副島種臣は樺太買收を唱へてロシヤ公使と交渉を開始したが、途中廟議一變して開拓次官黒田清隆の放棄論が採用せられ、八年駐露公使榎本武揚の手による樺太千島交換條約の締結を見、その九月に樺太、十月に千島の讓渡式が行はれた。爾來三十年、日露戰役の起るに及び、三十七年七月我が陸軍は海軍と協力して樺太を占領し、翌年九月のポーツマス條約によつて北緯五十度以南が我が領土となつた。その後大正九年尼港事件の保證として我が軍は一時北樺太を占領したが、同十四年日露新條約調印と共に兵を撤した。

【ノーウィック】　Novik　露國太平洋艦隊所屬の三等巡洋艦。排水量三、〇八〇噸、速力二二節(ノット)。艦長フォン・ウェスセン中佐。日露戰役當時旅順港内のロシヤ艦隊は、バルチック艦隊の來著に先立つてこれを擊滅せんとする我が軍の水陸よりする猛襲を避け、ウラジボストック遁入の目的を以て明治三十七年十月八日同港を脱出したが、我が海軍はこれを黄海に邀擊して、やがて來るべき日本海海戰に於ける勝因を作つた。この所謂黄海海戰に於て、ノーウィックは水線上に三彈を受けたが、アスコリドと共に辛うじて脱し、暗に乘じて南下、十一日薄暮一旦膠州灣に入つて石炭を搭載し、翌未明、日本太平洋岸を迂廻してウラジボストックに逃れんとする途中、宗谷海峽に於て我が巡洋艦千歳・對馬に邀擊せられて、同月二十一日樺太のコルサコフ灣に坐礁自沈した。(コルサコフは現大泊の舊漢町の舊稱名で、今大泊支廳・官衙・學校等を中心とする住宅區域。)

【大泊】　オホトマリ　大泊郡大泊町。樺太最大の海港都邑で、樺太の南端、北海道と相對する西能登呂(にしのとろ)岬と中知床(なかしれとこ)岬とに抱かれた亞庭(あにわ)灣内の千歳灣東岸に臨み、樺太廳鐵道東海岸線の起點に當り、同島海陸聯絡の最重要地で、物資の呑吐口をなしてゐる。大泊支廳・王子製紙株式會社パルプ工場等がある。

【坐礁】　ザセウ　船が暗礁に乘りあげて進退の自由を失ふこと。のりあげ。

「礁」は、岩石の海洋中に隱見するもの。かくれいは。

【アイヌ語】　アイヌ種族の言語。北海道本島のアイヌ人に用ゐられ

ろ本島方言(北海道アイヌ語)と、樺太南半に住むアイヌ人に用ゐられる樺太方言(樺太アイヌ語)と、千島アイヌの千島方言とから成る。

文字的記載を有しないアイヌ語は單なる口頭の傳承であるが、部落生活の間に自ら文學語・日常語を分化し、種族固有の敍事詩は文學語を以て綴られ、日常語とは大きな開きを見せてゐる。このうち樺太方言は本島方言に於ける文學語の人稱形式を日常語にも敍事詩にも併用し、發音の上では、北海道の何所にも見られない後口蓋の無摩擦音を出す。

アイヌ語研究は、大體に於て三つの時代に分けることが出來る。第一期は、正保三年の「松前舊記」に始り、寛文九年蝦夷地爭亂の爲水戸・津軽兩藩が調査を行つた時代、第二期は、ロシヤの南下に刺激されて幕府が北地防備に著手した天明・寛政度から、維新後我が國人又はロシヤ・オーストリヤ等の學者によつて語彙蒐集・文法研究・地名解釋等が行はれた時代、第三期は、英米人の北海道踏査研究があり、英人バチェラー氏及び本文の作者金田一氏の調査研究が行はれて現在に至る時代である。わけても、バチェラー氏がアイヌ語約二萬を收め、四度改訂增補された「アイヌ文典」に附した "An Ainu-English-Japanese Dictionary" と、金田一氏の「アイヌ敍事詩ユーカラの研究」とは、アイヌ語研究の所產として代表的なものであらう。

〔アイヌ〕 Ainu 「アイノ」とも呼ばれ、アイヌ語で「人間」の意。古く我が國では「エゾ」「エミシ」(蝦夷)と呼んだ。地球上たゞ日本にのみ見る、特殊な文化をもつた極めて古い民族。現在では北海道本島・千島・樺太に分布し、總人口一七、四一五、うち樺太アイヌは一、四七五(昭和七年現在)。その起原や人種系統は今なほ不明で、デーニッツのアジア起原說、デーヴィスのヨーロッパ說、タレネッキーの南洋說、シュレンクの朝鮮經由說、その他アメリカ說など區々であるが、定說はない。

人種的特徵は、髯及び體毛が多量で、頭髮は黑く波狀をなし、皮膚は淡褐色、身長は平均一七〇糎、頭形指數七七・三、鼻形指數六八、頭廣く、眼窩深く、眼大きく一般に水平で所謂歐洲型眼型。男女共に耳輪を用ゐ、女子は露出部に文身を施してゐる。萱葺の小屋に住み、獸皮又は鮭の皮などで作つた靴をはき、衣服は楡の皮の纖維で製した厚司(あつし)、長い毛皮の外套などを著用する。宗教は自然崇拜である。しかし今日では、狩獵生活から農業生活に入ると共に、固有の習俗を捨てて急激に內地人化しつゝある。

【アイヌ特有の敍事詩】

昔噺の好きな、歌ふことの好きなアイヌ種族の間には、何時からともなく歌ひ繼がれて來た無數の長短種々なる歌曲があつて、所謂アイヌ文學を形成してゐる。その中でも、始祖の降誕、神々の起原、祖先の武勇などを歌つてゐる敍事詩の傳承は最も注意すべきものである。

それらの歌謠は單に聞いて樂しむ文學ではなくて、彼等の生活にとつては、聖經であり法典であると共に歷史であり哲學でもある。故に今猶敬虔な信仰を以て臨み、一語をも違へざらんことを努めて部落に傳承し、有事の際にはこの傳によつて裁き、非違ある者はこれを引照して戒める。尙敍事詩に色々ある中で最も廣汎で最も數の多いのは神謠卽ちカムイ・ユーカラ(kamuiyukar)である。その他、人間の始祖アイヌラックルが聖なる出生若しくは天降りから、それが人界に建てた一代の功業、及び今日のアイヌの祭祀の濫觴、生活の淵源等を歌ひ傳へてゐる長大な敍事詩オイナ(Oina—聖傳・古傳・傳承の意)、その聖傳が全く英雄說話として發達した謠物卽ちユーカラ(yukar)がある。總べてアイヌ文學を通じて一貫する事實は、これらが皆謠物であること、及びその全部が悉く第一人稱の敍述で出來上つてゐることで、この事は文學の起原が寧ろ歌であつて、散文は後の發達であること、又その起原は宗敎と結びついた信仰的な詞章であつて、神自ら述べる言葉であることを示唆する。今や古來の信仰が漸く崩れて行くにつれて、その詞章はより多く文學の方向に步み出し、個人の空想によつて次第により長き段物を生じ、民衆詩人の手から個人的・職業的詩人の手に移つて大いに發達しかけたが、生活の一新に出會つて危く衰滅の運命を辿りつゝある。

〔敍事詩〕 ジョジシ epic(英)の譯語。客觀的事件を敍述的形式によつて表現した詩。多くは英雄・偉人の業蹟を傳へ、併せてその時代の繪卷物を開展する。民族的敍事詩と藝術的敍事詩とに分かち、前者は民族的生活の中に成立し傳承せられた說話內容が自然に超個人的形式に於て結成せられたもので、ギリシヤの「イリアッド」「オディッセー」、インドの「マハマバラータ・ラマヤーナ」等の如きはこの例である。後者は個人的作家の藝術意識から生產せられたもので、ミルトンの「失樂園」(The Paradise Lost)の如きはこれに屬する。

【傳承】 デンショウ (一)傳へうけること。人づてにきくこと。(二)社會學上では、社會進化の過程に於て前時代の文化的遺產を

次の時代に讓渡すること。こゝは(一)。

【方言】 ハウゲン　或地方に限つて行はれる言葉。言語學・國語學上の術語としては dialect(英)の譯語として用ゐられる。學術的には次の二義がある。(一)地方的方言(local dialect)。一國語が使用地域が異なる爲、各地に別々な變遷をとげて遂に若干の言語團に分裂した場合、その分團の言語全體を方言といふ。隨つてそれは相對的名稱で、多くは「東京方言」「大阪方言」などの如く地名を冠する。普通、方言といふ時はこれをさす。(二)階級的方言(class dialect)。一般に或原因の爲に一言語團が若干の小言語團に分裂した場合の分團の言語。例へば「學生言葉」「職人言葉」など。こゝは(一)。

【實證する】 事實を以て證明する。

〔實證〕 ジッショウ　(一)たしかな證據。事實の證明。確證。(二)實驗。

【空想】 クウサウ　現實からかけ離れた思想で、事實及び法則等に關係なく、その目的を達する手段も漠然として確でないもの。

【歴史的思出の多いこの新版圖】 (二一六頁「三十年振り」參照)

〔版圖〕 ハント　(一)一國の戸籍と領土の地圖。(二)轉じて、一國の領域。こゝは(二)。

「版」は戸籍。「圖」は地圖。

【踏査】 タウサ　實地を踏んで調査すること。

【小樽】 ヲタル　小樽市。北海道石狩平野に近接する海港で、小樽灣に突出する高島岬の南方に巨大な築港を有し、函館本線の重要驛を兼ねて水陸の交通至便、西北海道の大關門をなす。外國貿易、內地との取引共に盛で、海產物・石炭・農產物等の輸出額が大である。明治初年には人口二、二〇〇の一漁師町に過ぎなかつたが、現在は一五三、五八七(昭和十年十月現在)に達してゐる。

【山櫻】 ヤマザクラ　廣義には「里櫻」に對して山野に自生する櫻(「しろやまざくら」「べにやまざくら」など)を總稱し、狹義には「しろやまざくら」をさすが、こゝは樺太に多い「みやまざくら」(一名「しろざくら」)・「べにやまざくら」(一名「おほやまざくら」)等をさすのであらう。「みやまざくら」も「べにやまざくら」も、薔薇科、さくら屬の落葉喬木で、前者は、葉は長柄・楕圓形で鋸齒緣を有し、花は白色、總狀花序をなして腋出し、花候は五月。樺太・千島・北海道・本州・四國に分布する。後者は、木皮は黑褐色で花は概ね繖形花序をなし、淡紅色で徑約〇・三糎、若葉は赤褐色苞と萼が粘るのが特徴。本州中北部・北海道・千島・樺太、更に黑龍江地方にまで分布してゐる。

【船待】 フナマチ

【濃霧】 ノウム　濃度の高い霧。「ガス」ともいふ。海上の濃霧は航海者の最も恐るべき敵で、その甚だしいものは字義通り咫尺を辨じ得ない。我が國北方海上(金華山沖、北海道の東方洋上、樺太南端の宗谷海峽附近等)はその名所である。「霧」は、地面に接する空氣の層の中に、水蒸氣が凝結して無數の微細な水滴となつて浮游してゐる現象。この水蒸氣凝結は、夜間輻射により地面が冷氣を放射する爲(輻射霧)、又は冷えた地面や冷い海面へ暖い氣流が流れて來て寒・暖兩氣が混合する爲(混合霧)などに生ずる。宗谷海峽のやうに寒・暖兩海流が交るところに濃霧が多いのは、暖流上の空氣が寒流上の空氣に流れ込むからで、又北海道根室附近のそれの如く、夏期暖濕な陸上空氣が寒流上に流れる爲に起る場合もある。尙、霧を形成する水滴の粒の細かいほど遠望が妨げられ、卽ち霧の濃度が高いのである。

【託ち】 カコチ

〔託つ〕 (一)他のことにことよせる。いひたてにする。口實とする。(二)思ひわびてなげきいふ。ぐちをいふ。うらみ思ふ。こゝは(二)。

【しびれを切らして】

〔しびれを切らす〕 (一)長く坐つてゐて足にしびれが生じる。(二)待ちくたびれる。待ちどほに思ふ。こゝは(二)。

「しびれ」は、血液の循環が惡く、肢體の感覺を失ふこと。

【役所】 ヤクショ　役人がその職務を取扱ふ所。官公吏が執務する所。官廳。役場。こゝでは民政署をさす。

【小蒸氣】 コジョウキ　「小蒸氣船」の略。小さい蒸氣船。

「蒸氣船」は蒸氣機關の動力で、螺旋推進器を回轉して水上を航走させる船。汽船。

【オチョボッカ】 富內郡富內村(一郡一村)落帆。富內村は、大泊から中知床岬の南端を迂廻して北上九八浬で達する所にあるが、落帆はその中部に當り、落帆川がオホーツク海に注ぐ河口にある。船は南方の同村富內に著くから、「本船のボートで送られて、云云」とあるのは富內から落帆までのことであらう。

【なまじひに】 慾に・生强に「なまじ」に同じ。(一)心に欲しないのを、自ら强ひて。出來もしないのに强ひて。(二)しなくてもよいのに。なまじつか。なまなか。(三)うつかりして。ふと。こゝは(二)。

【民政署】 ミンセイショ　樺太廳設置前の樺太行政機關。明治三十

八年七月獨立第十三師團の全島占領後設けられ、四十年三月樺太廳設置と共に廢止せられるまで、新版圖の組織的統治に任じた。

尙「民政署」の名稱は、現在では關東州の地方行政機關にのみ殘されてゐる。

【皆目】　カイモク　すつかり。殘らず。全く。

【片言隻語】　ヘンゲンセキゴ　一片の語の意。「言葉の一はし」（九六ノ八）と同意。

「隻」は、「又」卽ち手に、「隹」卽ち一羽の鳥を持つ意で、雙の半分。一つ、又は對なるものの一方、を意味する。

【酋長】　シウチャウ　主として、家長制的の部落集團をなす野蠻民族に於ける部落の首長。

アイヌには信仰的に老を敬ひ血統を重んずる風習があり、家長（チセルコロクル）は一家に絕對權力をもち、本家の家長は各分家の上に立つて、その部落の酋長（コタンコロクル）となり、部落の治安・裁判・葬祭等を司どる。但し酋長は部落員から租稅を徵することなく、自らも亦一部落員として共同作業に從ひ、共同の收穫はすべてこれを公平に分配するのである。

【住家】　スミカ

アイヌの住家は掘立小屋で、通常一室、すべての用をこゝで辨ずる。四圍は壁も板もなく、鬼茅を束ね、屋根も同樣に葺く。入口は南向き、大室の東北隅には家寶が置かれてゐる。

【がらんどう】　伽藍洞　（一）家のなかにものがなくて廣いさま。（二）うつろ。空洞。こゝは（一）。

【髮を垂らした云々】

アイヌの女子は髮を中央で左右に分け、肩に達するところで截つてゐる。

【入墨】　イレズミ　「文身」「刺靑」「黥」とも書く。皮膚に鋭利な小刀や針で瘢痕をつけ、一定の時期に墨・炭の粉末、色繒具等を摺り込んだもの。ほりもの。

その起原は宗敎上の意義からともいひ、單に肉體裝飾の爲ともいはれる。有色未開人中に多く見られ、日本ではアイヌや琉球婦人が有名である。世界中で技巧の最も進步したのは日本の「ほりもの」で、江戸時代には遊人・職人間に盛に行はれたが、明治になつて禁止せられた。アイヌの文身についていふと、男子は左手の親指と人差指の間に×形、或は左肩に　形、女子は口の周圍・手の甲・腕に施し、又眉間にも施す。手の甲には山形・×形・菱・三角、手腕には平行線・電光形・山形・×形を施す。施術は皮膚をマキリ（小刀）で切り、樺の油煙を摺り込

む。男子の文身は弓術上達の爲、婦人のそれは妻たるの表徵とされてゐる。

【眼のあたり】　マのあたり　（一）眼の前に。（二）親しく。うちつけに。直接。（三）さしあたり。當座。こゝは（一）。

【寂寥】　セキレウ　ものさびしいこと。ひそやかなこと。ひつそりとしてゐること。寂寞。

【憂悶】　イウモン　うれへもだえること。

【茫然】　バウゼン　「芒然」「呆然」とも書く。據る所なきさま、又は呆れて思案なきさまなどにいふ。あつけにとられたさま。ぼんやりしたさま。

【喚き】　ワメき

〔喚く〕　大聲にさけぶ。をめく。騷ぐ。のゝしる。

【發音】　ハツオン　（一）音を出すこと。又、その音。（二）言語の音の出し方、ひゞき工合、長短・高低・音色など。こゝは（二）。

【しやつくり】　嗝・吃逆　「さくり」「しやくり」の訛。橫隔膜神經の刺激による痙攣。

【小刀】　セウタウ　こゝでは、アイヌの男子が常に腰に下げてゐる「マキリ」をさす。

【途方に暮れて】　トバウにクれて

一四　心の小徑

〔途方に暮れる〕　手段がつきてあきれ惑ふ。方針が立たない。方向に迷ふ。

「途方」―（一）むき。方向。（二）めあて。あてど。方針。（三）すべ。手段。方法。（四）ことわり。條理。

【耳に下げた環】　アイヌでは、男女ともこれを用ゐ、內地から移入された金屬性のものや、布片の紐で作つたものなどがある。

【言つてやがる】　「言つてゐやがる」の略。

「やがる」は、動詞の下に添へて輕蔑・憎惡の意を表す。「見やがる」「しやがる」

【唐子】　カラコ　（一）支那風をした小童姿。（二）「唐子髷」の略。（三）唐子人形。こゝは（一）。

【滿洲】　マンシウ　今の滿洲國の領域、卽ち、もと中華民國の一部として東三省又は關東と稱せられた地域で、北は黑龍江・南は鴨綠江を境としてシベリヤ・朝鮮と接し、西は興安嶺を隔てて內・外蒙古に對する。內に廣漠な滿洲平野を抱き、その中央は松花江・遼河の分水界となり、これを境として北滿洲・南滿洲と分稱せられた。

滿洲は清朝發祥の地で、その名は清朝皇帝が曼殊師利大皇帝と呼ばれたのに由來するともいはれる。中華民國時代は主として

張作霖父子の勢力範圍として支那本部の外に獨立するの觀を呈してゐたが、滿洲事變（昭和六年九月）を機緣として獨立運動の氣運が醸成せられ、翌年三月を以て滿洲國の建國を見た。日露戰役の戰場として、また南滿租借地の所在を以て、今また滿洲國の出現によつて、我が國とは歴史的・政治的・經濟的に最も密接な關係にある地。

【外來品】　グヮイライヒン　（一）よそから來た品物。（二）外國から來た品物。舶來品。

【怖々】　オヅオヅ　こは〴〵。おそる〳〵。おぢ〳〵。

【年かさ】　トシかさ　（一）としうへ。年長。（二）高齡。老年。こゝは（一）。

【怖へて】　コラへて

〔怖へる〕　堪へる。たへしのぶ。がまんする。

【肢體】　シタイ　（一）身體の四肢、即ち手足。（二）四體と五體、即ち手足と身體。

【拐り取つて】　ムシりトつて

【頸鬚】　アゴヒゲ

「鬚」はあごひげ、「髭」はくちひげ、「髯」はほゝひげ。

【鱒】　マス　等椎目、鮭科、さけ屬の中「さけ」を除いた諸種、即ち「さくります」（秋田にはこの種を多くますといふ）「せっぱります」「べにます」等の總稱。通常、體が稍小さく、鰓が比較的短く且少數で、鱗の細かいのが鮭との異點であるとせられるが、この區別は頗る不明瞭で、動物學的に鮭と鱒を分かつことは出來ない。「べにます」の如きは、その量味では鱒に近く、「べにざけ」とも呼ばれる。何れも北日本特に北海道以北を中心とした北洋方面を漁場とする重要食用魚で、川に生まれた稚魚は秋冬の候海に下つて成長し、春季產卵のため川を溯る。但し例外的に淡水に終始するものもある。肉は紅く脂肪に富んで美味。尙、樺太で獲られるのは專ら「せっぱります」及び「べにます」である。

「せっぱります（背張鱒）」は一名「からふとます」又は「ほんます」。鱗片極めて小さく、尾鰭に多數の黑斑があるのを特色とする。背部は青味を帶び腹面は銀白色。成熟して溯河する雄魚は背部が著しく彎曲するのでその名がある。米國方面に饒產し、我が國では樺太及び北海道北部に見られる。溯河期は夏の終。肉は淡紅色。「べにます」は一名「ひめます」。背部は蒼黑色、腹面は銀白色。カムチャッカ・アラスカ方面に饒產し、我が國では樺太・千島・北海道に產し、溯河期は夏の初であるが、淡水に順化し易く、北海道には湖中に幽閉されて海に下らず純然たる淡水魚となつたものがあり、明治の末期これを十和田湖に移殖して以來、內地各地の湖に產するに至つた。肉は鮮紅色。「さくります（櫻鱒）」は背面淡黑色、腹面銀白色。我が國の特產で、北海道一圓から日本海及び利根河口附近までの太平洋岸で獲られ、北海道では櫻花の候（六月下旬乃至七月上旬）に溯河するのでその名があるが、雄魚には下海せず純淡水性のものがあり、これを北海道では「やまべ」といふ。（內地の「やまめ」はこれと同一種であるといふ。）

【全舞臺】　ゼンブタイ　アイヌの生活し活動する世界全體の意。アイヌ人の生活全體を演劇に譬へ、自分を觀客の位置に置いていつた語。

〔舞臺〕　（一）能樂又は演劇などで正面に一段と高くした演技場。（二）すべて技倆を試みる場所。

【禁園】　キンエン　入ることを禁じられてゐる園。禁制の園。こゝではアイヌの世界をさす。

【城府】　ジャウフ　（一）城下。都城。（二）都市のかこひ。（三）かこひ。へだて。（多く人と打解けない譬に用ゐられる。）晉書、愍帝皇紀論「昔高祖宣帝、性深阻、有レ如二城府一」こゝは（三）。

【渠成つて水到る】　通路が一度開かれると今まで遮られてゐたものが忽ち流通する、の意。

「水が流れ來つて自然に溝が出來る」といふ意から、學問を積めば自ら道の修るに譬へて用ゐられる「水到渠成」といふ成語を逆に應用したのであらう。范成大の詩に「學問根深方蔕固、功名水到自渠成」とある。

〔渠〕　キョ　みぞ。ほり。

【蓑地に】　マッシグラに　勢はげしく直進するさま。いつさんに。眞一文字に。ましぐらに。

【蝗】　イナゴ　「稻子」「蟲螽」とも書く。直翅目、蝗蟲科、いなご屬の昆蟲。「はねながいなご」及び「こばねいなご」は、本邦內地に最も普通な種で、多くは混棲する。六月頃孵化し八—十月の候羽化。稻の害蟲として名高いが、又食用にもなる。

【とんちんかん】　物事の行違ひ又は前後すること。調子はづれ。くひちがひ。

【さしも】　（一）「さも」を強めていふ。その如くも。さうも。（二）さほど。これほど。

「さも」の間に意を強める動詞「し」を加へたもの。

【語彙】　ゴヰ　言語學・國語學上の術語で、或種の單語の總體をいふ。例へば、一國語又は一言語に用ゐる單語の總體（英語の語彙、鹿兒島方言の語彙、近松の語彙等）、或學術に關する單語の總體（動物に關する語彙、天文に關する語彙等）。故に一の語彙の中に

各種の語彙を含むことが可能である。

【北蝦夷古謠遺篇】キタエゾコエウキヘン　樺太地方に遺つてゐるアイヌ族の古い歌謠を蒐集したもの。作者苦心の蒐集に成るもので、大正三年同名の單行本が甲寅叢書第一編として鄕土研究から刊行せられてゐる。

〔北蝦夷〕樺太の古稱。

地名としての蝦夷は、廣義には北海道本島・千島列島・樺太の總稱で、北海道本島を狹義の蝦夷(蝦夷島)、千島列島を蝦夷が千島(蝦の千島・蝦夷千島)、樺太を北蝦夷と稱した。尙、北海道本島は更に東蝦夷・西蝦夷・北蝦夷等と分稱され、又、北海道・千島を併せて蝦夷が千島と稱することもあつた。

【家苞】イヘヅト「家裏」とも書く。わが家に持ちかへる土產。

插圖「樺太アイヌ」敷香郡泊岸村新問部落の老人達。ほゞ典型的な樺太アイヌの風俗。向かつて右より五人目が作者、八人目が酋長モヤンケ。

插圖「酋長の冬期の住家」昭和九年(本文執筆後二十七年)の撮影。中央の一棟は、本文の當時作者が寢起きしてゐた小屋で、今は旅館の一部となつて殘つてゐる。

二　解釋

1　主題

始めて樺太のアイヌ部落を訪ね、樺太アイヌ語を採集した苦心によつて、「言葉こそ固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた」といふことを悟つた、その體驗。

2　構想

(1)　樺太踏査の動機。(初―九三ノ一)

(2)　オチョポッカのアイヌ部落訪問。(九三ノ二―九六ノ一)

(3)　樺太アイヌ語採集の端緒。(九六ノ二―一〇五ノ六)

イ　憂悶の果に子供に話しかけて逃げられた失敗。

ロ　子供の一人を寫生し始めた時、寄つて來た子供がそれを見ていつた目・鼻・口・眉・頭・耳等の言葉。

ハ　「何?」といふ言葉の發見と活用。

ニ　言葉によつて得たアイヌとの親近。

(4)　貴重な收穫。(一〇五ノ七―終)

3　敍述

〔樺太の南半分が三十年振りで日本へ還つた、その喜のまだ新な頃、〕――この節の終に「歷史的思出の多いこの新版圖」といつてゐるのと照應した句で、當時の國家的・國民的發展の元氣がこの敍述上にも漲つてゐる。まだ年若であつた筆者、しかもアイヌ語研究に溢れるやうな熱情を以て挺身しようとしてゐた筆者には、わけても勇躍を禁じ得ぬものがあつたらう。その氣分の出てゐる句である。

〔これまで、むづかしい顏ばかりしてゐた髯面が、もじゃ〳〵の髯の間から白い齒をあらはした。これまでそむけ〳〵してゐた婦女子の顏にも、眞靑な入墨の中から白い齒が見えた。明らかに皆笑つたのである。〕――アイヌの顏を想起し、男はあの髯の間から、婦女子はあの入墨の間から、白い齒を現した瞬間を想像すると、しかもそれが笑つた顏であることを思ふと、いかにしても怪異の感を禁ずることが出來ぬ。その氣味の惡い笑が筆者にとつては、始めて樺太アイヌと顏を合はせたといふ最大の喜であつたに違ひないことを思ひ、これまでの苦心がこの笑顏によつて報いられ、これまでの寂寥がこの笑顏によつて解消せられたであらうことを思ふと、作者の眞劍さの前に頭の下る心持がする。

〔言葉こそ、固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。〕――上に敍して來た事實から歸納された感想である。更めて、言葉のまだ通じなかつた日に於けるアイヌ人の態度と言葉が通じ始めた後の彼等の態度の變化を回想し、それにつれて作者の心情がどう動いて來たかを考へることによつて、この感想が深く肯かれるであらう。これは單に言葉を異にした種族間のことのみではない。同じ言葉を語る人々の間に於ても到る處に同じことが行はれてゐる。

三　批評

樺太アイヌ語採集の經驗によつて、今更のやうに言葉が人と人との間を結ぶ根本的なものであることが感得された、この發見的な喜がこの文を成さしめてゐることはいふまでもないが、作者平生の言語愛の深さが、この體驗を裏づけてゐることをも亦見逃してはならない。筆者がアイヌ語學者としての權威であることはいふまでもないが、この文は作者の單なる學識によつて成された研究ではなくて、言語愛の深さによつて成された記錄であることが理解せられなくてはならぬ。われ〳〵はこれを讀んで、アイヌ語採集そのことに對する興味が喚起せられることも勿論であるが、何よりもまづ、その奧底に流れてゐる作者の熱い言語愛に打たれざるを得ぬ。

隨つてこの文は、言語愛に關する如何なる抽象論よりも、生徒の衷に深い言語愛を喚び覺すであらう。そして言語愛の本義を具體的に理解させるであらう。この文の基調を成してゐる、作者の若々しい、もの柔かな心も亦、靑少年の心に直接訴へるところがあるであ

らう。そして卷四の一八に掲げた杉田玄白等の蘭譯の苦心に比し、これは文字化された言語ではなくて、もつと現實的な言語活動、人間によつて語られてゐる生きた言葉を對象とするものであるだけに、隨つてその言語愛が人間愛に徹したものであるだけに、一層言葉そのものに對する關心を深め、消え難い感銘を與へるであらう。

三　備　考

一　指導の問題

「言葉こそ、固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑」であることを實感させ、體得させる所に本篇の眼目があるわけであるから、文中のこの主題的道破を發見させ、それを全文中に位置づけることが指導の目標でなければならぬ。

先づ一〇四頁のこの一句を「この文の中心になつてゐる作者の感想は？」とでもいふやうな質問で見つけさせ、さういふ感想の動いて來た跡として一〇三頁六―九行を跡づけさせ、更に、一〇一頁一二―一〇二ノ二行へ辿らせることによつて、この文の骨組は握られるであらう。方法としてはこの順序を逆にして、子供との交歡―大人との笑顔―感想といふやうに、時間的次序によつてもよいであらう。何れにしても、この中心の動きを跡づけさせることが肝要である。

次には、さういふ歡喜・感動が如何なる事實によつて生起したかといふ問題が取上げられてよいであらう。それはいふまでもなく、子供の言葉がわかり、やがて彼等の言葉で問答さへ出來るやうになつた事實にもよるものである。わけても「何？」といふ一語を得てからは急に感激的な明るい天地が拓かれて來た。顎鬚と顎との勘違ひ話も亦面白い。感激の嵐の中に、讀者の息をつかせる話でもある。それにしても、この言語を得て話が出來るやうになつた前と後とでのアイヌの人々の態度の違ひには驚くべきものがある。それを文中から指摘・對照させることによつて、構想と敍述とが關聯的に闡明せられるであらう。

たゞ、素材に於ける事實的中心と表現に於ける主題とを混同しないやうに指導することが肝要であらう。若しも生徒が素材たる事實を抽象して事實的關聯の中心を主題と見、事實的關聯を構想と見るやうな抽象的內容觀に陷つたならば、さういふ事實から作者はどんな感動を得、その感動が文中に如何に表現されてゐるかを吟味させ、その文の成立に於て、事實的中心が表現の核心であるか、事實から發した感動がその事實をも含んだ具體的發展の核心であるかを考へさせることによつて、主題なるものの意義と位置とを明らかにさせることが出來るであらう。

そしてこの主題が如何に表現の根幹を形づくり、如何にその枝葉的な展開を成立させてゐるかを跡づける時、始めてこの文に對する眞の理解が成立するであらう。

又一方には本卷の一「大和言葉」・二一「鴉勸請」・二二「學者の苦心」と聯絡をとつて、言語愛・國語愛の概念のみではなく、その眞の自覺と具體的な方法とを啓發することが必要であらう。

二　參考資料

金田一氏が「國語特報」四號（昭和十年十二月號）の誌上に執筆された、本文の後日物語ともいふべき一文を採錄する。

その昔オチョポッカと云つた部落が、今、落帆村となり、夏草の中に、アイヌ小屋の十軒ほど竝んでゐるに過ぎなかつた土地が、百軒餘りの和人の町家がぎつしり詰まつて立ち、旅館・商店・料理屋さへも立つて、白粉を塗つた若い女の姿までも見え隱れして居るのには驚かされる。

私が四十餘日も滯在して朝夕親しんだ、思ひ出の永いあの村の人人を、別れて二十餘年、その間に、幾度も樺太の地を踏みながら、又相見る機會を持たずに過ぎてゐたのは、他でも無い、態々樺太まで行く以上、少しの暇をも惜んで、まだ調べぬ地方を調べる爲めに行くのであるから、情は、蒔知の人々を見たいのであるが、理性は、他の地方へ他の地方へ私の足を向けしめてのみゐたからである。

然るに、昭和四年の夏は、白濱部落の驛遞に暫く滯留して、圖らずも落帆村の誰彼の消息を聞くことが出來、どうも男の子だちは、あれも死んだ、此も死んだで、誰が存命でゐるかわからないが、部落のクウィンであつた淑子は、今、若い總代尾山富治君の家內になつて彌ゝ榮えてゐること、末の妹のソヨは、和人を亭主に持つて好い子供等の好い母さんになつてゐること、たゞ中の妹のヨキちやんだけが、一等の器量好しでゐて、亭主運がないといふものか、二度亭主を持つて、二度共死に別れをして、今乳呑子をかゝへて、姉の家に厄介になつてゐる、など、いふことを聞き、また殊に去年以來自動車道路が東海岸へ直通して二三時間で落帆へ行かれると聞かされては、ホームシックに罹つたやうに、矢も楯も堪らなくなり、到頭思ひ切つて、樺太島の日程を一日延ばすことにして、途中から自動車を飛ばしてしまつた。生憎大雨に見舞はれて、一日いつぱいかかつてしまひ、ざん〳〵ぶりの中を、やつと眞暗になつてから、そ

の和人の町家になつた落帆村の旅籠へ著いたものだつた。

宿で聞くと、この雨で土人部落の途中が、背を沒する程出水して迚も行けないとの事、何の爲めに自動車にゆられて、態〻來たのかと腐つてしまふ。一晩わびしい雨の音をきゝながら寢て、翌日は、夜の明けるのを待ちかねて起き出し、傘を宿から借りて、外へ出て見る。見る物、見る物、變つた、變つた、何から何まで皆變つた中に、濱から、爪先上りの小さな坂が、ありしながらのそれであつて、そのかみ、私が著いたその朝、あつと思ふ間に、數十頭の犬に取圍んで吠えられて度肝を拔かれた古戰場である。そしてそれを上つた所は私の四十日寢起きをした酋長ピシタクの家だつた筈なのに、丁度その見當に旅籠がある。はてなと思つて、足取りで計つて見直して見る、確かに此處なので、横に廻つてよく見ると、果せる哉、宿の玄關から左の方には、ありしながらの丸太組みのロシヤ式の大きな一と間があつて、窓の上の彫刻にも見覺えがある。宿はピシタクの家を買ひ取つて、大きく建て增しをしたものであることが好くわかつてなつかしい。

夜も晝も、瀨の音を立てゝ鱒が上つて來るものであつたオチョポッカ川は、今は木材を流す堂々たる河川に加工されて、その昔、村人が毎日鱒網を曳いた川原は、纍々たる木材の山である。丁度積み取りに來てかゝつてゐるらしい汽船が沖に手をあけて待つてゐるのが見える。何處の木材屋の仕事であらうか、夜來の雨に今朝は木材が少なからず流失する樣である。家々からは、男達が勢揃ひして川緣や海岸へ出かける。川岸には、霜降りのよい洋服に氣のきいた卷ゲートルの姿、白皙長軀の紳士が、二三の事務員らしいのを督勵して往復してゐる。私はぶら〳〵して川端を上の方へ二三十歩して、見るともなく崖の上の事務所風の建物の窓から顏を出してゐる二三の婦人の顏を仰いだ瞬間に、あつと驚いた。その一人は確かに、二十二年前のあの頃、十八ばかり、村の長老チベーカ翁の後妻の長女、幸太郎青年の若妻で本當に部落の光であり、クウインであつた淑子その人の面差しではないか。凡そ變つたものばかりの中に、此こそそつくりそのまゝのものを見た嬉しさ。私は駈けてその家の窓下まで上つて行き、下から、暫くでした、淑子さん！　と聲を投げたのである。向はびつくりして、どなた樣で、といふ故、忘れましたか、そら金田一！　と云つたら、まあ！　といつて出て來ての驚き樣、當時は、制服に毬栗頭の無髯の學生姿だつたものだから、見違へてしまつて目を瞠つたり、段々見馴れたら成程さうだと笑ひ出したり、お婆さんになつて總入齒でと口を抑へたり、朝起きたばかりで寢卷のまゝでと羞しがつたり、やがて晝頃には出水も引くから迎へをあげますから、部落の方へいらして下さいと云はれて、別れて宿へ歸つて待つことにした。

晝少し前、もう減水したからと云つて部落から馬車で迎へられて淑子の家へ招請されると、妹のヨキちゃん、その昔十歳のオカツパだつたのが、三十の姥櫻になつて出迎へられたのにはすつかり面忘れして見當もつかなかつたが、この家の主人の尾山富治君として出て逢はれた人は、今朝、霜降の洋服へ卷ゲートルの姿で人夫を督勵してゐたその人だつた。この人が、今は土人の總代として、木材の拂ひ下げをして、オチョポッカ川へ伐り下し、年々幾十萬圓の事業を、何百人のアイヌと和人を使役して經營し、その爲めにオチョポッカ川の川口に、あの町家も出來てゐるのであつた。そしてアイヌの人々も、今は木材の仕事に出て働いて高い賃銀を貰つて裕富に暮らされる樣になつてゐるのであつた。

暫くすると、尾山君方の次の間や、又その次の間へ、いつぱい村の人々が集つて來た。どれもどれも、見た顏ではあるが、その親父だつたらうと間違ふ程、當時の青少年がみな半白髮、胡麻鹽髯の老爺になつてゐるのに驚くと共に、悲しいことは、何？（マタ）何？（マタ）で、色色の單語を敎へて貰つた少年諸君は大方死んで、達者でゐるものは他の村へ行つて居て一人も今逢ふことが出來なかつたこと。

主人公の尾山君は、率先して舊習を一洗し、一路生活の向上に專念して古いアイヌの風俗からは、すつかり足を洗つて、「好き日本人へ」と目指して來たのであるが、此の日だけは、久し振りに昔に返つて、私の爲に、すべてをアイヌ習慣で行かうよ、と宣言する。わつと皆が笑ひさゞめいて、忽ち立つて舞ふ婆さんだちの群、丁度二十二年前に私のあのピシタクの家へいつぱい押しかけて來て、毎晩やつた樣に、アイヌの歌でアイヌの舞踏をやる。淑子夫人まで、本當に久し振りでと云ひ云ひ、五絃琴を出して來て彈じ、昔ながらの美音ですつかり一座を恍惚させる。

明日はもうお立ちだから、今夜は、徹夜でやらうと、すつかり熊祭りでもするやうな氣ではしやぐ。ヨキちゃんは、先年、全樺太の歌謠競技會で、一等賞を得たさうで、ひとつ追分でもやれよと兄さんの誘ふまゝに、羞らひ羞らひ、到頭、歌ひ出した。あとを、どうするだらうと思はれる程聲を絞つて高く始めたものである。

明日はお別れお名殘り惜しや
　　雨の十日も降ればよい

帛を裂くやうな、玉を轉ばすやうな美音、そしてその半生の薄命をたゝんだやうな哀韻に、私は拭いても拭いても涙が流れて止まらなかつた。

一五　焚火

一　解題

一　本文

「志賀直哉集」所收の「焚火」の抄錄である。（志賀直哉集　昭和二年二月、新潮社發行）

「焚火」は大正九年三月に「山の生活にて」といふ題で發表せられた短篇小說で、大正四年作者が赤城山に夏（五月から九月まで）を過した時の生活に取材したものであらう。その後短篇集「荒絹」に收められ、後更に短篇集「壽々」に「焚火」と改題して收められた。「好文叢」小僧の神樣」にも收錄せられてゐる。

二　作者

志賀直哉。明治十六年二月現宮城縣石卷市に生まれた。十八年兩親に伴なはれて上京、祖父母の家に住み、學習院高等科を歷て三十九年東京帝國大學文科大學英文學科に入學したが、四十一年中途退學、以後專ら創作に從つた。四十三年武者小路實篤・有島武郎・里見弴等とともに雜誌「白樺」を創刊、次第に堅實な地步を占めた。

志賀直哉

大正元年以來尾道・松江・京都・赤城・我孫子・京都粟田口・山科等に居を轉じ、十四年以來奈良に住んで古美術に親しんでゐる。その間、大正の初年には殆ど創作の筆を中絕し、六年頃から再び創作に親しみ始め、所謂新現實主義の作家として盛名を馳せ、大正の末年頃から又制作量が極めて乏しくなつた。

豐な藝術的天分と眞摯な創作態度とを以て聞え、白樺派的な稟質に富む作家で、その作品の底には常に人間的な美はしい親愛が湛へられてをり、殊に前期の作品には正義派的・理想派的な傾向が多く見られるが、武者小路實篤等の場合とは異なつて、その白樺派的なものが露骨に表面に振翳されたといふやうなものは殆ど認められない。寧ろその本領は聰明な鋭いリアリスティックな眼を以て對象を的確に把捉し、些かの感傷性をも交へずに正確なしかも餘情の多い筆致で心情に徹して描き出すといふ點にある。寫眞主義の作家ともいはれ、屢〻新現實主義の作家と目される所以である。又、我が國に於ける短篇小說の樣式的完成者としての功績も見逃すべきでない。作品には長篇「暗夜行路」の外、「或る朝」「網走まで」「荒絹」「剃刀」「濁つた頭」「老人」「襖」「正義派」「大津順吉」「クローディアスの日記」「淸兵衞と瓢簞」「范の犯罪」「佐々木の場合」「好人物の夫婦」「赤西蠣太」「流行感冒」「小僧の神樣」「焚火」「眞鶴」「雨蛙」「轉生」「矢島柳堂」「山科の記憶」「萬曆赤繪」等の短篇、「或る男、其妹の死」「和解」等の中篇がある。

二　教材としての研究

一　註解

【焚火】タキビ　(一)かゞり火。燎火。(二)籠又は爐等で焚く火。(三)暖をとる爲に地上でたく火。こゝは(三)。

【夕映】ユフバエ　夕日に照りかゞやくこと。物の色が夕日の光を受けて一層映えること。

【名殘】ナゴリ　(一)物事の過ぎ去つた後、なほその氣の殘つてゐること。人に別れて後、なほその面影の殘つてゐること。餘韻。餘情。餘勢。(二)漏れ殘ること。もれ。殘り。「名殘なく」(三)別れて後、心の殘つて忘れ得ないこと。(又別れぬ前より想像してもいふ。)(四)別離に臨んで、惜別の情を表す爲にすること。訣別。「名殘の宴」(五)子孫。後裔。こゝは(一)。

【四方の山々】赤城山の諸峯をさす。

本文は、主人公夫妻とKさん・Sさんとの四人が赤城山內の大沼に舟を泛べたところに始るのである。（參考資料三參照）

「赤城山」は、群馬縣勢多郡に在り、海拔一八二八米。那須火山脈に屬する二重式死火山で、北は足尾山塊から日光火山群に連なり、西南は利根川を隔てて榛名山と對し、東は渡良瀨川の溪谷に臨む。外輪山は、黑檜山（一八八二）・駒ケ嶽（一六六八米）・小地藏嶽（宿生火山）・長七郎山（同上。五八〇米）・前淺間（一四八〇米）・桑柄山（一五六二米）・藥師嶽（一四米五二）の諸峯によつて形成せられ、東西三・五粁、南北四・五

粁に亙つてほゞ楕圓形に連なり、その外側には、黒檜の北に小黒檜山（一六六四米）、桑柄の西に鈴ケ嶽（一五六六米）、前淺間の西南に荒山（一五七三米）・鍋割山（一三三三米）などが聳える。これら諸峯の内側には、火原湖として赤城湖（通稱大沼）を湛へ、その南に中央火口丘の地藏嶽（一六七四米）が聳え、これと長七郎山との間に火口湖の小沼がある。大沼は湖面海拔一三二〇米、面積〇・八方粁、周圍四粁弱。その東方湖岸に近く小鳥ケ島があり、湖南の大洞に赤城神社が祀られ、その水は湖西から流出して沼尾川火口瀨となり、外輪山を突破して利根川に注いでゐる。尙、赤城山は古來上毛の三山として榛名・妙義と併稱せられ、關東平野に長く引く裾野、白樺の純林と水楢の鬱林、或は又放牧の牛馬など、獨自の景趣を誇つてゐる。又近時はスキー・スケートの練習場として著れ、前橋口には自動車が通じて登攀が容易となつた。

【蘚類】　廣義には有尾目、蘚類科に屬する兩棲類の總稱、又は、同科、ゐもり屬のものの稱。狹義には、ゐもり屬中の「あかはらゐもり」をさす。こゝは狹義。

「あかはらゐもり」は、我が國固有の種で、本州・四國・九州等に分布。頭部は大きく吻端は圓く短く、眼は側方にわづか突起する。尾は長く兩側に扁平で、背緣は鋭い稜をなし、先端は尖る。前後兩肢はやゝ長く、指趾はよく發達し、蹼はない。體背面は暗橄欖色又は黒褐色で往々黒斑を交へ、且疣が多く、腹面は眞紅又は赤色の地に雲形の黒斑紋がある。卵生で、池・沼・小川等に棲み、生存力が旺盛なので實驗用に供せられる。

【Kさん】　主人公が止宿してゐた赤城祠畔の大洞（大沼東南畔一帶の地の俗稱）の旅宿猪谷の主人。原文の省略した部分に「宿の主のKさん」とある。

【黒檜】　クロビ　黒檜山。赤城火山中の最高峯。海拔一八二八米。山頂の展望開け、その西南方脚下に大沼が横たはる。

【Sさん】　主人公と同じく、Kさんの家に止宿してゐた人であらう。原文の省略した部分に「蠶家のSさん」とある。

【舳】　ヘサキ　船の先首。みよし。（「艫」の對。）

【艫】　トモ　船の後方。船尾。

【櫂】　カイ　和船又はボートを漕ぐのに使用される水掻き式の木製船具。こゝでは、ボート用のオール（oar）である。

【小鳥島】　コトリジマ　「小鳥ケ島」ともいふ。大沼の東岸近くに在る周圍約二〇〇米の小島。鬱蒼たる針葉樹林に覆はれ、今は纔かに陸と續いてゐる。

【蕨取り】　ワラビトリ　蕨を採ること、又、その人。

【蕨】　水龍骨科、わらび屬の多年生草本。高さ三〇糎餘。根莖は長く地中を横走し、葉柄は剛强で無毛。早春、卷曲して拳狀をなし、全面白質・綿樣の毛茸で被はれた新葉を出す。成葉は全形略三角形で羽狀に分裂し、葉緣は裏面に折り反つて子囊群を包む。廣く我が國の山野に自生し、嫩葉は食用となり、根莖からは蕨粉を製する。（「羊齒」參照）

【野宿】　ノジュク　露天に宿ること。屋外に宿泊すること。くさぶし。露宿。露臥。

【炭燒きの竈】　スミヤきのカマ　木を燒いて炭を製する竈。種々の樣式があるが普通粘土を塗つて造り、又は石・煉瓦等で築き、中に炭材を入れ、下邊に設けた多くの穴から點火して炭化させる。

【舟緣】　フナベリ　ふなばた。舷。

【ドナウウェレン】　Donau-Wellen（獨）　譯名「ドナウ河の漣」。ルーマニヤの作曲家イヴァノヴィッチ（Ivanovici）作の圓舞曲の名。彼の作品中最も著名なもので、東洋風の色調があるので我が國にも早くから普及せられてゐる。

「ドナウ河」は「ダニューヴ（Danube）河」に同じ。ヴォルガ河に次ぐヨーロッパ第二の大河で、源を南ドイツのバヴァリヤ高原に發し、ドイツ・オーストリヤ・ハンガリー・ユーゴースラヴィヤ・ルーマニヤの諸國を貫流して黒海に注ぐ。

【口笛】　クチブエ　口をすぼめ、又は指を口中に入れなどして、氣息を強く吹き出して鳴らすこと。

【ござんす】　「ございます」の訛。

【ざり〳〵】　小石・砂等の軋る音などにいふ語。じやり〳〵。ざらざら。

【白樺】　シラカンバ・シラカバ　（二二四頁參照）

【焚木】　タキギ　「薪」とも書く。燃料に供する木。まき。たきもの。

【羊齒】　シダ　「齒朶」とも書く。羊齒門に屬する植物の總稱。「うらぼし」類（各種のしだ・わらび・うらぼしの類）の外、「はなやすり」「こけしのぶ」「ほらしだ」「へご」「うらじろ」「こしだ」「みづわらび」「ぜんまい」等の類がこれに含まれる。（狹義には、裏白科、うらじろ屬の「うらじろ」を「しだ」といふ。）

羊齒類は、所謂隱花植物中の高等なもので、明瞭な世代の交番がある。我々の眼にふれるのは無性世代の植物體であつて、有性世代のそれに比し著しく大形で、且これに頼ることなく獨立の生活を營み、莖・根・葉の分化が著しく、維管束もよく發達して顯花植物に類する。葉は莖よりも大きく發育して多くは羽狀その他複雜に分裂し、その若いものは大抵渦卷狀をなす。葉の裏面に多數の胞子囊を生じ、これから胞子が放出せられ、こ

れが發芽して有性世代の植物體（前葉體或は原葉體）となる。これは體制が簡單で形も小さく、水濕の地に生活し、臓精・臓卵兩器を生じて受精作用をなす。そしてこの授精卵から、再び無性世代の植物體が發生するのである。無性世代は多く陸生の多年草で、乾燥した陽地に生ずるものと、山林中などの陰濕地を好み樹木・岩石等に附著して生ずるものとある。

【山蕗】　ヤマブキ　こゝでは、「たからかう」「をたからかう」「めたからかう」「たうげぶき」「まるばだけぶき」などの類をさすのではないかと思はれる。これ等はいづれも菊科、たからかう屬の多年生草本で、莖高四〇―九〇糎内外。葉は腎臓狀卵形・同狀圓形・心臓狀圓形・同狀卵形・同狀三角形等で緣邊に鋸齒を有し、根葉は長柄を具へて大きく、莖葉は小形で葉柄で莖を抱く。夏日又は秋日、莖梢に短枝を分かつて黄色の頭狀花を開き、冠毛ある瘠果を結ぶ。本州中部以北の山地又は深山に自生し、形態が「ふき」（菊科、ふき屬）に似てゐるので、一般には山の蕗として取扱はれることが多い。

尙、同じく菊科、たからかう屬の「つはぶき」は別名を「やまぶき」といふけれども、これは主として暖國の海邊に自生するもので、こゝには當らない。

【八つ手の葉のやうな草】　恐らく「もみぢがさ」「やぶれがさ」などの類をさしてゐるのであらう。これ等は菊科、やぶれがさ屬の多年生草本で、高さ六〇―九〇糎内外。葉は極めて大形で、掌狀に深裂して「かへで」又は「やつで」のそれに似、裂片に鋸齒がある。夏日葉間に長く花莖を抽き、梢上に分枝して白紫色の頭狀花を開き、冠毛ある瘠果を結ぶ。「もみぢがさ」は北海道・本州・四國・九州等の山地、「やぶれがさ」は本州・九州等の山地の樹陰に自生する。

〔八つ手〕　ヤつデ　（五三頁參照）

【反らして】　ソらして　まがりかへらせて。

【たより】　(一)よるべ。たのみ。(二)ついで。都合のよい時。(三)てだて。便宜。方便。(四)おとづれ。消息。音信。(五)ゆかり。緣。こゝは(三)で、てがかり、の意。

【ぼきん】　木などの脆く折れる音を表す擬聲語。

【カンテラ】　オランダ語 kandelaar 又はポルトガル語 candeia の轉訛といふ。鐵葉・眞鍮又は銅などで油壺をつくり、中に石油を入れ、綿絲を心にし、火を點じて燈火として携へられるやうにしたもの。もと商家・劇場・露店などで多くこれを用ゐた。

【くべて】

〔くべる〕　燒べる　火に入れて燒く。もす。たく。多くは、燃えてゐる火に燃料を加へる意味に用ゐる。

【楢】　ナラ　殼斗科、かし屬の落葉喬木の中、「こなら」「みづなら」等を總稱していふ。狹義には「こなら」を「なら」といふが、赤城山に多いのは「みづなら」であつて、白樺と共に顯著な景觀をなしてゐる。

「みづなら」は一名「おほなら」「まなら」「やまぼそ」等とも呼ばれ、木も葉も「こなら」よりは大きく、樹高約二〇米、樹幹の直徑二米に達する。樹皮は褐黑色で深い割目を有し、若い枝條は無毛。葉は互生ではあるが對生に近く、楕圓狀又は倒卵狀長楕圓形で、緣邊に粗鋸齒を有し、葉柄は殆ど無いにひとしい。五月頃、枝端に帶黄褐色の長い雄花穗若しくは短い雌花穗を出す。成果は十月頃で、一果穗に一乃至三箇を生じ、殼斗は深い皿形で互列した多くの鱗片を有し、堅果は卵狀長楕圓形をなす。樺太・千島・北海道及び本州・九州の山地に自生。

【山犬】　ヤマイヌ　食肉目、犬科、いぬ屬の哺乳類。齒牙の大なる點は犬よりも狼に類似してゐるが、小形で耳も小さく脚も短い。我が國の固有種で、明治初年迄は本州・四國・九州の山野に多數棲息してゐたが、次第に減少して今日では全く跡を絶つに至り、我が國ではわづかに東京教育博物館に福島産の多毛の牡が一頭標本となつてゐるだけである。（明治三十七年に奈良縣下（吉野川の上流）で獲られたのが最後とされてゐる。）前記の標本によれば體は全體灰白色で、上部が濃く下部が淡い。

我が國で昔から狼といはれたのは主として本種であり、朝鮮・滿洲等の狼卽ち「てうせんおほかみ」「しべりあおほかみ」等とは別種である。

【夜中】　ヨナカ　「夜半」に同じ。

【遠吠】　トホボエ　(一)犬などの遠方で吠える聲。(二)犬が聲を長く引いて吠えること。こゝは(一)。

【此の山が牧場になつた年】　明治七年頃であらう。

群馬縣教育會編「群馬縣史」によれば、「明治七年舊前橋藩士の有志數名團結し、地を赤城に卜し、赤城牧社を創設して專ら產牛を經營、次いで赤城山麓各村の有志が赤城產馬會社を起す、これを畜牛・畜馬の濫觴とする」とある。

【地獄谷】　ヂゴクダニ　地藏嶽の西南、荒山との間の一峽谷。三面は山に圍まれ、一面纔かに開け、風景佳絕。その一部に灰色の火山泥層を含み、硫黄泥を混じてゐる。これは中央火口丘・寄生火山の噴出後、赤城火山最後の噴火の後、暫く硫黄を噴出して所謂硫氣洞（噴氣孔）となつてゐた跡であらうと見られてゐる。峽谷に

臨んで地藏の湯(地獄谷鑛泉又は樺の湯ともいふ)がある。

【野獸】　ヤジウ　野生の獸類。山野に成長したけもの。

【鼠類】　ドクロ・サレカウベ　(六五頁參照)

【笹熊】　ササグマ　「あなぐま(穴熊・貉)」の異名。食肉目、鼬鼠科の哺乳類で、我が國の固有種として知られ、本州・四國・九州に產する。冬毛は上面白味勝で下面は黑褐色をなし、黑い過眼帶がある。夏毛は短剛で上面淡黃褐色、過眼帶・四肢・胸は黑褐。一見、狸に似てゐるが、骨骼は全く異なり、毛も粗い。又、肢も短大で爪が長く、前肢のそれは殊に著しい。蹠を全部地につけて歩む。主として山林中に深い穴を穿つて棲み、夜行性・雜食で、草や果實の外、昆蟲をも嗜食する。毛皮は防寒用とされ、毛は毛筆や刷毛に用ゐる。別名「まみ」「まみだぬき」「かげむじな」。又、地方によつてはこれを「むじな」(動物學的には狸の異名)といふ。

【鷲】　ワシ　鷲鷹目、鷲鷹科中の大形なる種類で、主として、「いぬわし」「をじろわし」「ひげわし」「かんむりわし」等の諸屬のものをさす。いづれも雄偉な體軀と獰猛な相貌とを有し、極めて鋭利な鉤爪と鋭曲した嘴とを具へ、飛翔力は大で視力よく發達し、脚も趾も强大。性悍猛で禽獸を捕食し、群棲することなく深山に棲息し、斷崖又は孤聳の喬木等に大規模な巢を營む。翼の羽毛は矢羽用その他工藝用として珍重される。我が國で普通に知られてゐるのは「いぬわし」「をじろわし」「おほわし」である。

「いぬわし」は翼長六〇糎に及ぶ大形種で、殆ど世界的に分布し、我が國では本州及び北海道に產する。「をじろわし」は前種より少しく小形で、アメリカを除き廣く分布し、我が國では樺太から臺灣・朝鮮まで產する。「おほわし」は、その名に反して更に稍小形。東部アジヤの特產で、我が國では樺太から琉球まで分布。

【入道】　ニフダウ　(一)佛道に歸依すること。(二)在家のまゝで剃髮・染衣したもの。(三)往昔、佛道に入つた三位以上の人の稱。(四)坊主頭のものの稱。(五)坊主頭の妖怪。こゝは(五)。

【霧に自分の影が映る】

山頂に於て、太陽が背後にあつて霧が前面を蔽うてゐる時に、自分の影が霧に映つてゐるのを見ることがある。これは大氣中の光象の一で、この映像は視覺上の錯覺の爲に極めて大きく見えることがあり、又頭の周圍には色彩のついた光輪が御光のやうに見えるのが常である。この光輪は、頭の陰影の附近にある無數の霧滴の爲に日光が反射と同時に廻折の現象を起し、その廻折されて色彩を帶びた光が、前方の霧から反射して來て眼に入つて生ずる現象である。

この現象は富士・筑波の如き孤峯では屢〻見うけられ、空中に出現する模糊たる巨人像と頭上の御光の故に、古來靈異的に又怪異的に考へられ、ドイツのブロッケン山で屢〻見られたので「ブロッケンの妖怪」と呼ばれ、一般にはそれがこの現象の呼名となつてゐる。我が國でも光輪を「佛の御光」、映像を「雲中如來」などと稱し、碓氷峠の「善光寺如來の現身佛」の傳說その他、各地に種々な言ひ傳へがある。

【鳥居峠】　トリキタウゲ　赤城火山の外輪山黑檜山・駒ケ嶽・荒山等とともに赤城火口壁をなす大橢圓環に屬し、駒ケ嶽の南裾と小地藏嶽の北麓との會點に在る。海拔一三九三米。前面に大沼を望み、所謂柏山通(足尾線水沼驛より登山路)の咽喉をなしてゐる。上神梅驛より約一一粁。これより覺滿淵を經て大洞まで一・五粁。

【雲海】　ウンカイ　「雲の海」ともいふ。一面に群がつた層雲を山上から見ると恰も海面の波濤のやうに見えるのをいふ。

「層雲」は雲級の第七番目。霧に似た低い雲で、「霧雲」とも呼ばれる。溫度の異なつた二つの氣層が相重なつて動いてゐるとき、その界面の所に寒・暖兩氣の混合が起つて、水蒸氣が凝結し、雲となつたものである。又靜夜地面に接觸した氣層が輻射の爲に冷却し、その氣層の上を比較的溫暖な空氣が流れるときには、やはり兩者の界面の所に空氣の混合が起つて層雲を生ずることがある。(この場合は地上の霧の成因と同樣であるが、層雲は地上五〇〇—一〇〇〇米の高さで起る點が異なる。)　層雲の上面は大體平かな面をなし、これに多少の凹凸があるので、この雲が山々の腰をめぐり谷々を埋め盡くしてゐるのを山上から望むと恰も海の波のやうに見え、山は頂を雲上に現して、海中の島嶼の感がある。尙この雲は、朝日が出て氣溫が高まれば次第に薄らいで消滅し、又は分離して積雲となる。

【前橋】　マヘバシ　前橋市。人口約八七、一八一(昭和十年十月現在)。德川末期に松平氏の築いた前橋城址に群馬縣廳がある。縣の南部に位し、東北に赤城山、西北に榛名山が聳え、利根川は西境を流れ、その分流の廣瀨川は市の中央を貫流してゐる。關東山麓養蠶地帶の繭の賣買の中心地で、又製絲業が盛である。兩毛線及び上越本線の重要驛。赤城登山口の一で、こゝから北方小暮を經て一杯清水まで乘合自動車の便がある。

【小暮】　コグレ　群馬縣勢多郡富士見村小暮。赤城山の西南麓に在る。前橋の北六粁。此所から有名な赤城の松林(赤城興業組合植林地)の中を東北に攀登、一七粁ばかりで大洞赤城神社に達する。

【なんて】物事を輕くあしらつたり、打消したりするに用ゐる。

【夢のお告】神・佛などが夢に現れて、事を告げ、又、さとしなどすること。

【水沼】ミヅヌマ　勢多郡黒保根村水沼。足尾線の一驛。赤城山の東南麓に在り、赤城登山口の一。大洞まで一二・五粁。

【心算】ツモリ　心ぐみ。思ひはかること。胸算用。

【二の鳥居】ニノトリヰ　一つの神社に二基以上の鳥居のある場合、外から二番目のものをいふ。

こゝでは大洞に在る赤城神社の二の鳥居をさす。水沼から登り約三・五粁の鹿角(かづの)に一の鳥居があり、更に緩斜面を進んで二粁の處に二の鳥居がある。こゝから鳥居峠まで約三・五粁。

【深いなりに】深いまゝで。

「なり」は、そのまゝ、の意を表す助詞。

【まゐつて】參つて　負けて。降參して。

【雪も距離を近く見せた】

或距離にある物體を見る時、その物體がはつきり見えるか、ぼんやり見えるかによつてその距離を判斷することが出來る。即ち物體のかすみ工合は距離感を規定するもので、遠い山はかすんで見え、近い林ははつきり見える。故に雨上りなどの空氣の

澄んでゐる場合には遠方の山が常よりも近く思はれるが、反對に霧の深い時には近所のものも遠く見える。これと同じ理で、降雪による空氣の清澄と積雪による所謂雪明り(殊に月夜の)で、遠方のものもはつきり見えるので距離が近く眼に感じられるのである。

【蟻の這ふやうに】ごく僅かづつ進むさま。

【手の屈きさうな】直ぐ近くに見えるさま。

【もうひと息】もう一努力。

【雪で死ぬ】

雪中行軍又は氷雪中の旅行・登山などの際、當初は寒い爲に收縮してゐた皮膚の血管が、酷寒の爲麻痺して收縮しないやうになると、膨脹して血液が皮膚に多量に集り、隨つて腦に貧血を起してねむくなり、遂に雪中に卒倒するに至る。この時眠ると全身が冷え切つて體溫が下り、生命を保つに必要なだけの熱が不足する爲に死に至る。人が堪へ得る最低の體溫は一八度乃至二〇度位であらうといはれてゐるが、凍死から免れた人の實際の例では二四度であつたといふ。

【兎も角】トもカク　「ともかくも」に同じ。その事は如何やうなりとも。何れにせよ。とにもかくにも。

【氣持を張つた】キモチをハつた　氣持を引立てた。心を緊張させた。

【漕ぎつけた】コぎつけた

〔漕ぎつける〕(一)漕いで到著させる。(二)努力して或點まで事を進行させる。こゝは(二)。

【下り】クダり　こゝでは、下り坂、の意。

【提燈】チャウチン　「提灯」とも書く。

【今時分】イマジブン　こゝでは、今頃何だらう、の意。

【擦れ違ひにしろ】擦れ違ひにしたところで。

「しろ」は「する」の命令形で、假容の條件を示す。

【覺滿淵】カクマンブチ　赤城火山の外輪山駒ケ嶽の南麓に當る火口原。南・東・北の三面は山に圍まれ、中央に覺滿川があつて西北の大沼に注いでゐる。この邊一帶の濕地はもと大沼の一部をなしてゐた所で、覺滿湖ともいはれる。

【義理】ギリ　(一)正しい筋道。人のふみ行ふべき道。(二)人が他に對して務めねばならない道。(三)わけ。意味。(四)血族以外の者が血族同樣に結んだ關係。(五)交際。こゝは(四)。

【氷切りの人夫】赤城湖氷の採取に從ふ人夫。

大沼は十一月初旬から結氷して四月下旬に解け始め、氷の厚さ六〇—九〇糎に達する。これを赤城湖氷と稱し、大鋸を使用して採取せられ、水沼に日本凍氷株式會社がある。

〔人夫〕ニンプ　土木建築・運送・衞生事業等に使はれる勞働者。人足。

【そつとした】

〔そつと〕(一)風などが身にしむさま。(二)身の毛のよだつやうに感じるさま。心の底までしみとほるやうに感じるさま。ここは(二)。

【ぐつすり】(一)よくねむつたさま。(二)濡れたさま。ぐつしより。こゝは(一)。

【寐込んだ】ネコんだ

〔寐込む〕熟睡する。ねいる。

【涙ぐんで】ナミダぐんで

〔涙ぐむ〕眼に涙を含む。涙をもよほす。なきさうになる。

【卷脚絆】マキキャハン　「卷ゲートル」に同じ。羅紗・防水布などで作り、旅行・登山・行軍の時などに脛部に卷いて用ゐる。

【二十分やそこら】凡そ二十分位。

「そこら」は程度を推しはかる語。そのくらゐ。

【おむすび】握飯(にぎりめし)。むすび。おにぎり。

【Kさん想ひのお母さんと、云々】

原文には、このすぐ次の所に左のやうな記戰がある。

よくは知らないが、似てゐるので皆がイプセンと呼んでゐたKさんの亡くなつたお父さんは別に悪い人ではないらしかつたが、少くとも良人としては餘りよくなかつた。平常は前橋邊に若い妾と住んでゐて、夏になると其れを連れて山へ來て、山での收入を取上げて行つたさうだ。Kさんはお父さんの左ういふやり方に心から不快を感じて、よく衝突をしたといふ事だ。そしてこんな事がKさんを一層お母さん想ひにし、お母さんを一層Kさん想ひにさせたのだ。

【梟】　フクロフ　廣義には、梟鴟科に屬するものの中、所謂耳と稱せられる羽毛が顯著なものを耳木兎といふのに對して、然らざるものの總稱。（但し、この區別は極めて便宜的なもので、動物學的には全く區別し得ない。）　狹義には、同科、ふくろふ屬のもの、特に本州中部地方に分布するやゝ羽色の濃い普通種をいふ。

梟鴟科のものは、頭大きく頸短く、眼は極めて大で、他の鳥類と異なり上眼瞼によつて開閉し、且瞬膜を有する。眼の周圍にはこれを取卷く特殊の羽毛を生じ、頭上兩側には多く直立した一對の羽毛（俗に耳といふ）がある。嘴は短大で鋭く鉤曲し、翼はかなり長く丸味を帶び、脚は短强で蹠蹠以下は羽毛に蔽はれてゐる。外趾は回轉自由で爪は長く鋭い。肉食で夜間活動性。世界的に分布し、我が國にも多くの屬種を產する。尙、この類は「ホーホー〳〵」「ホイ〳〵〳〵」などと連聲に鳴き、その聲が「ゴロスケホーコー」と聞えるといふので「五郎助」の異名がある。

【下火】　シタビ　（一）火災の勢が衰へて消えようとすること。（二）事物の勢の衰へること。こゝでは、單に火勢の衰へをいつた。

【火の粉】　ヒのコ　飛び散る火。ひばな。火片。

【弧を描いて】　圓い曲線をなして。

〔弧〕　コ　（一）木の弓。（二）圓周の一部。曲線の一部。

【じゆつと】　火が水で消えるときに發する音を表す擬聲語。

【おき火】　熾火　略して「おき」ともいふ。（一）おこつた炭火。（二）薪の燃えきつて炭火のやうになつたもの。こゝは（二）。

【潑ねかして】　ハねかして

〔潑ねかす〕　水をはねかけるやうにする。水を飛ばしちらす。

【神社】　ジンジャ　大沼湖畔大洞に在る赤城神社。南麓三夜澤に在る縣社赤城神社の本宮。三夜澤に在るのを里宮といふ。祭神は大己貴命・豐城入彦命。又一說には沼神と呼び、山靈・水異を仰祭したものであるとし、或は大沼神を祭つたものであるともいふ。

插圖「黑檜山」　猪谷六合雄氏撮影。同氏は旅宿猪谷の若主人で、本文の「Kさん」は氏をモデルとしたものであるといふ。

二　解釋

1　主題

ある夜、赤城山中の大沼に舟を浮かべ、岸に上つて焚火をしながら、心ゆくまで山の神祕に浸つたこと。

2　構想

(1)　宵闇の中を大沼に舟を浮かべて、とある岸邊に漕ぎ著いた。（初―一〇八ノ七）

(2)　皆して燃料を集めて來て砂地で焚火しながら、山のこはい話を始めた。（一〇八ノ八―一一四ノ五）

(3)　Kさんが雪の夜道で困つた時に思ひがけずお母さんから迎への人を立てられたといふ不思議な話。（一一四ノ六―一二〇ノ六）

(4)　焚火も下火になつた。夜も更けた。梟の聲をききながら舟で歸つた。（一二〇ノ七―終）

3　敍述

〔靜かな晩だ。西の空には未だ夕映の名殘が僅かに殘つてゐた。が、四方の山々は蟒蛇の背のやうに黑かつた。〕――山上の湖邊には夜が訪れた。山上で眺める暮山の姿を蟒蛇の背にたとへた所は流石によく實感が出てゐる。

〔晴れた星の多い空を、舟緣から其のまゝ下に見ることが出來た。〕――晴れた空、澄んだ湖、靜かな夜がすうつと胸に入つて來るやうな敍述である。

〔それから、なんといふ事なしに、皆は暫く默つてしまつた。舟は靜かに進んで行つた。〕――かういふ場合、かういふ境に在つてはとかく沈默に引き入れられがちなものである。しかも沈默にかへつて見ると、その沈默は一層深く身に迫つて來ることを感ぜしめられる。

〔皆は別れ〳〵になつたが、KさんやSさんの卷煙草の光が、吸ふ度に赤く見えるので、其の居る處が知れた。〕――夜の暗さが實感せられて來る。

〔時々Kさんの枯枝を折る音が、ぽきん！と靜かな森の中で響いた。〕――森の靜寂をよく具現し得てゐる。

〔白樺の皮へ火をつけると、濡れたまゝ、カンテラの油煙のやうな眞黑な煙を立てて、ぼう〳〵燃えた。Kさんは小枝から段々大きい枝をくべて、忽ち燃しつけてしまつた。其の邊が急に明るくなつた。それが前の小鳥島の森にまで映つた。〕――眼の冴えとい

ふか、觀照の透徹といふか、濃い闇の中の、靜寂な湖のほとりで始めた焚火の色も、それに照らし出された物象もあり〳〵と浮かんで來るやうな簡勁な描寫である。

〔Kさんは、亡くなつたお父さんが夜釣が好きで、或夜山犬に圍まれて、岸傳ひに水の中を歸つて來た話とか、此の山が牧場になつた年、馬の死骸が食はれて半分位になつてゐるのを見た話などをした。〕――淋しい湖畔で白樺の皮をぼう〳〵燃しながら、かういふ山の恐しさを話し合ふ。これによつて寂然たる山湖の夜景がなまなましく讀む者の胸に迫つて來る。

〔さういふ不思議はどうか知らないけれど、夢のお告とかさういふ事はあるやうに思ひますわ。〕――いづれかといへば女の人に多い心理の道破である。この言葉が、次の驚くべきKさんの「お母さんの話」を引き出す緒となつてゐる。この言葉は又、後の、「妻は涙ぐんでゐた」といふ言葉ともひゞき合つてゐる。

〔Kさんは、もうひと息、もうひと息と登つた。別に恐怖も不安も感じなかつた。併し、何だか氣持がぼんやりして來たことは感じた。〕――氣持がぼんやりした時が危險だといふことは自身よく知つてゐながら、恐怖も不安も感じなかつたといふ。後にお母さんが聲を聞きつけて迎へをやつたことと照らし合はせて、深く考へさせられる。

〔不意にUさんを起して、『Kが歸つて來たから迎へに行つて下さい』といつたんださうです。『Kが呼んでゐるから』つていふんださうです。……それがちやうど、私が一番弱つて、氣持が少しぼんやりして來た時なんです。〕――驚くべき偶然である。否、力である。生死の境にある我が子の、聲ならぬ聲をはつきり覺じて、即座に男四人を夜中に雪の山道に出してやるといふ働は、人間以上の力といふ外はない。かういふ力の發揮は古來女性に多いことが注目せられる。

〔「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。「いゝえ。峠の向うぢやあ、いくら呼んだつて聽えませんもの。」「さうね」と妻はいつた。妻は涙ぐんでゐた。〕――Kさんは呼ばなかつた。少くも自分ではさう思つてゐる。しかしKさんは呼んでゐたのだ。最も切實に呼んでゐたのだ。子が危機にあるといふこと以上に――助けの必要の中にあるといふこと以上に、母親にとつて呼ばれてゐる事實はないのだから。まして「Kさん想ひのお母さんと、お母さん想ひのKさん」との間に於て、Kさん一人を生命の力として來たといつてもよいやうなこのお母さんにKさんの呼ぶ聲が聞えたといふことは不思議でないとも考へられる。

〔其の間お母さんは、ちつとも疑はずにおむすびを作つたり、火を焚きつけたりしてゐたんです。〕――この落ちつきと、この信念と、この周到さ、これはたゞのお母さんではない。練りぬかれ、鍛へぬかれた、典型的な古い日本の母親の姿を眼の前に見るやうな敍述だ。同じ作者によつて描かれた、卷一の一二「屋根」の中の母親に比べて、この母親の中には、靜かな中に、一層完成された母性の、智慧と力との表現が見られる。これは、恐らく、すぐ次にあるやうに、特別に「Kさん想ひ」であつたことによるものであらうが、しかし又一面には、原文の省略せられた部分にあるやうな長い忍苦の生涯に耐へて來たことによつて、恐らく無自覺の間に、養はれ鍛へられ涵へられて來た常人以上な力によるものでなくてはならない。

三　備考

一　指導の問題

（一）讀みの問題として、會話語が著しく多いことがいろ〳〵な意味で問題になるであらう。特に若い女性の會話語を含んでゐることが、指導上最も問題になる所ではなからうか。しかし、この文を深く讀めば讀むほど、この文の持味を讀みこなし得れば得るだけ、そんな問題は消滅してしまふであらう。隨つて指導が、指名讀みの生徒を選擇することに於て、またその時機を決定することに於て、適切を得ようとすることが肝要な用意であらう。

（二）解釋に於ても亦、この會話語の取扱は大切である。現代の生きた言語であるだけに、その意味は明白にちがひないけれども、そ

〔Kさんは勢よく燃え殘りの薪を湖水へ遠く拋つた。薪は赤い火の粉を散らしながら飛んで行つた。それが水に映つて、水の中でも赤い火の粉を散らした薪が飛んで行く。上と下と同じ弧を描いて水面で結びつくと同時に、じゆつと消えてしまふ。そしてあたりが暗くなる。〕――作者のいつもの手法ながら、この的確さ、この簡勁さ、そしてこの印象の鮮明さ。

三　批評

作者のリアリスティックな表現法は早くから文壇に定評のある所で、しかもその獨自な手法は他の追隨をゆるさぬものがある。わけても本文の如き、景情融合の妙趣に於て、古今の絶品の一に數へるべき一短篇であらう。山上の湖の夜の靜寂さが一語一句にしみついてゐるやうな表現力・描寫力は敬仰に値するものがある。

れを位置づける上には却つて困難が多いであらう。

敍せられてゐる筋、寫されてゐる光景、描き出されてゐる人物等は比較的容易に生徒に把握せられるであらう。唯、Kさんのお母さんの話――不思議の存在については、生徒の中には或程度の疑問と、それについての解決とを欲する氣持が動くものがあるかもしれない。しかしさういふ疑問を言葉を以て說明し、承認させようとすれば、却つて生徒の心持から離れてしまふのが常である。むしろ作者の表現力に頼つて、よく〳〵讀みぬかせ、唯、要所々々に於て、極めて言葉少く暗示してゆく程度にすれば、生徒はすなほな理解に入り得るであらう。

(三) かういふ教材になると、學習の指導が批評にまで觸れなくてはならなくなるのが一般の傾向であらう。しかし、本文とあまりかけ離れた作家評や文藝論は指導者として聞かせることも、又、生徒に發表させることも適當ではないであらう。それよりも、あくまでこの作品の、この教材に深く食ひ入る方向に於て、批評的操作をも試みるといふ行き方でなくてはならないであらう。

二　參考資料

(一)「焚火」に關する作者の言を「志賀直哉集」の卷末に載せられてゐる「創作餘談」から引用する。

「焚火」前半は赤城山で書き、後半は四五年して我孫子で書いた。赤城山で書いた時には如何にも書き足りない氣がして止めて了つた。然し四五年して讀むと案外書けてゐるやうに思はれ、後半をつけ、雜誌に出した。そして今では自分でも好きなものの一つになつてゐるが、昨年奈良の若い友達が赤城山へ行き、歸つてからの話に「焚火は好きものでいゝと思つてゐましたが、赤城へ行つて讀むと何だか非常に物足りない氣がしました。どうも書足りないやうに思ひました」と云ふ事だつた。此友達は初めて赤城へ行つて大變氣に入つてゐた。私は友達の此感じは屹度本統だらうと思つた。これと同じではないが、十何年か前、松江の方の加賀の潛戸(くけど)といふ所を見に行く途中、船の中でハーンの其所を書いた物を讀みながら行つたが、書き方が如何にも誇張してあるやうで、私は少し滿足しなかつた。所が、實際其場へ行つて見ると、それ程強く書いてあつて、受ける感じから云へば未だ足りない位で、自然そのものはもつと強い力で迫つて來るのを感じた。そして自然から迫られるだけにそれを強く現さうとするのは大變な事だと思つた。そして作品によつては全體の調子に合はし、それを和げる方がいい場合もあると考へた。その場合々々の問題である。

(二) 谷川徹三氏の作者評(「岩波講座日本文學」)を抄出する。

志賀直哉は、何人にとつても模範となるやうなものとして短篇小說の樣式を完成した。彼はこの國の短篇小說のセザンヌとなつたのである。

まさしく彼はセザンヌである。セザンヌ以後の畫家が、すべてセザンヌから出發しなければならなかつたやうに、志賀直哉以後の短篇作家はすべて志賀から出發しなければならなかつたと言つてよい。二人の手法も似てゐる。おそらく人間も。

彼の作品の底には常に人間的な親愛がある、「人間性の美しい眞實が滲み通るやうである」と佐藤春夫は彼について言つてゐるが、彼に於いては、その「白樺派的なもの」が飽迄、底に沈んでゐる。表面に浮き出さない。いはんや天上に飛翔しようとはしない。

彼はその本質に於いて、セザンヌと等しく「眼」の人である。勿論感覺としての眼ではない。精神の尖端としての眼である。しかし精神が精神として一擧に飛び出さないでどこまでも眼として、眼を通して出る。そこに對境の客觀的な生き生きした把捉がある。

このやうな眼は東洋の藝術の傳統の中に深い根をもつてゐる。美術の領域をしばらく措いても(セザンヌの精神がこの東洋の傳統の精神に不思議な親緣を示してゐることは已に一二の人が指摘してゐる)、われわれは芭蕉に、正岡子規や長塚節に、島木赤彥や齋藤茂吉に、それを見る。

志賀直哉は小說の領域に於いて、この東洋の傳統を比類なく生かしてゐる。といふより、彼は、西洋輸入の短篇小說といふ形式に日本的な獨自な方向の完成を與へた、と言つた方がよいか。それについては、彼が何げない身邊を書いた多くの小品が、よい例を示してゐるが、特に「焚火」は、その氣品に於いて、その「冴え」に於いて殆ど芭蕉に肉薄してゐる。一時文壇に於いて「心境小說」や「身邊小說」が小說の本道とせられたのは、自然主義以來のこの國の文學の展開の特殊事情によるものであるが、また志賀直哉に見られるやうな秀れた作品が存在したからでもある。と言つて勿論彼は單なる心境小說家、身邊小說家ではない。私が代表作として擧げた彼の小說の多くは、身邊的でも心境的でもないものである。彼は殆どあらゆる意味に於いてこの國の短篇小說の最高のものを示してゐる。

(三) 原文中本文に省略せられた冒頭の部分を引用する。

其日は朝から雨だつた。午からずつと二階の自分の部屋で妻も一緒に、畫家のSさん、宿の主のKさん達とトランプをして遊んでゐた。部屋の中には煙草の煙が籠つて、皆も少し疲れて來た。トランプにも厭きたし、菓子も食過ぎた。三時頃だ。

一人が起つて窓の障子を開けると、雨は何時かあがつて、新緣の

香を含んだ氣持のいゝ山の冷々した空氣が流れ込んで來た。煙草の煙が立迷つてゐる。皆は生返つたやうに互に顏を見交はした。

浮腰で、ぢぼんのポケットに深く兩手を差し込んでモジ〳〵して居た主のKさんが、

「私、一寸小屋の方をやつて來ます」と云つた。

「僕も描きに行かうかな」と畫家のSさんも云つて、二人で出て行つた。

出窓に腰かけて、段々白い雲の薄れて行く、そして青磁色の空の擴がるのを眺めて居ると、繪具函を肩にかけたSさんと、腰位までの外套を只羽織つたKさんとが何か話しながら小屋の方へ登つて行くのが見えた。二人は小屋の前で少時立話をして、そしてSさんだけ森の中へ入つて行つた。

それから自分は横になつて本を讀んだ。そして本にも厭きた頃、側で針仕事をしてゐた妻が、

「小屋にいらつしやらない？」と云つた。

小屋と云ふのは近々に自分達が移り住む爲めに、若い主のKさんと年を取つた炭燒きの春さんとで作つて呉れる小さい掘立小屋の事である。

Kさんと春さんとは便所を作つて居た。

「割りに氣持のいゝ物になりました」とKさんが云つた。自分も手傳つた。妻も時々手を出した。

半時間程すると、Sさんが前の年の濕つた落葉を踏んで森の中から出て來た。

「これはよくなつた。これだけ出つ張りが附くと家の形がついた」と便所の出來榮を讃めた。Kさんは、

「厄介物にされた便所が大變いゝ物になりましたよ」と嬉しさうな顏をして云つた。小屋の事は一切Kさんに任せてある。Kさんは作る事に興味を持つて、實用の方面ばかりでなく、家全體の形とか、材料の使ひ方にも色々苦心して、出來るだけ居心地のいゝ家にしようとしてゐた。

夜鷹が堅い木を打ち合はすやうな烈しい聲をたてゝ鳴き始めた。暗くなつたので仕事を切上げた。春さんは掌で雁首の煙草をつめ更へながら、

「牛や馬が登つて來たから、早く柵を拵へないといけないね」と云つた。

「左うですね。作りかけを食べられちやあ、氣が利きませんからね」とKさんが答へた。家を食はれると云ふので笑つた。此山には壁土になる泥がないので、宿屋でも壁の所は總て板張りにしてある。此小屋では其處を炭俵と同じ質の大きいものを作らせて、それを二タ重にして其間に藁を入れた。

「牛や馬には此家は御驅走だからね」と春さんは笑ひもせずに云つた。皆は笑つた。

山の上の夕暮れは何時も氣持がよかつた。殊に雨あがりの夕暮れは格別だつた。其上、働いて其日の仕事を眺めながら一服やつて居る時には誰の胸にも淡く喜びが通ひ合つて、皆快活な氣分になつた。

前の日も午後から晴れて、美しい夕暮れになつた。昨日は鳥居峠から黑檜山の方へ大きな虹が出て尙美しかつた。皆は永い事、此處で遊んだ。小屋は樅の林の中にあつたから、皆で其高い樅に木登りをして遊んだ。虹がよく見えるといふと妻までが登りたがるので、Kさんと二人で三間程の所まで引張りあげた。

自分と妻とKさんとは一つ木に登つた。Sさんは其隣りの木に登つて、SさんとKさんとは互に自分の方が高くならうとして五六間の高さまで張り合つて登つて行つた。

「まるで安樂椅子ですよ」Kさんは高い所の工合よく分かれた枝の股に仰向けに寢て、卷煙草をふかしながら大波のやうに其枝を搖すぶつて見せたりした。

Kさんの二番目の兒をおぶつた「市や」と云ふ年の割りに顏の大きい低能な男の兒が夜食の知らせに來て、漸く皆が木を降りた時には妻が木の上から落とした櫛が灯なしでは探せない程、地面の上は暗くなつて居た。

自分は前日の此樂みを想ひながら、

「晩、舟に乘りませんか」と云つた。皆贊成だつた。

食事だけ別れ〳〵にして、四人は又下の大きい圍爐裡に集まつた。Kさんは爐の大きい茶釜の湯で赤坊に飲ますコンデンスミルクをといて居た。

Kさんは氷藏から樅の厚い板を抱へて來た。四人は大きい樅の木に被はれて神社の暗い境内を抜けて行く。神樂堂の前を通る時、Kさんはお札を賣る人に「お湯にお入りなさい」と聲をかけた。樅の太い幹と幹の間に湖水の面が銀色に光つて見えた。

小舟は岸の砂地へ半分曳き上げてあつた。晝の雨で溜まつた水をKさんが掻出す間、三人は黑く濡れた砂の上に立つて居た。

Kさんは抱へて來た厚い板を舟緣のいゝ位置に渡して、「お乘り下さい」と云つた。妻から先へ乘せた。小舟は押し出された。

一六　金華山

一　解題

一　本文

「長塚節全集」(全六卷)第二卷所收の「鉛筆日鈔」中、八月三十一日及び九月一日の記事からの抄錄である。(長塚節全集第二卷、大正十五年十二月、春陽堂發行)

「鉛筆日鈔」は、作者が明治三十九年八月から九月にかけて奥州・北陸地方に旅した時の紀行文で、明治四十年三月雜誌「馬酔木」に發表せられ、後短篇集「炭燒の娘」に收められた。

二　作者

長塚節(ながつかたかし)。明治十二年四月茨城縣結城郡岡田村國生(こくしやう)に生まれ、生來虚弱であつたため水戸中學中途退學、家に在つて農事を監督してゐたが、明治三十三年二十二歲で正岡子規の門に入り、和歌・俳句・寫生文を學んだ。子規の歿後、雜誌「馬酔木」の同人となり、作歌・歌論・寫生文等を發表し、又寫生文に立脚して小說も作つた。大正四年二月九州帝國大學醫學部附屬病院で歿した。享年三十七。

旅行を好み、農事の餘暇には各地を遍歷し、歌もそれによつて成つたものが多い。晚年には東洋古美術に感鳴するところがあり、歌の上にも「氣品」「冴え」といふやうな境地を說くやうになつた。歌風は、蒼古なる萬葉調を以て手堅い寫生をなし、線が細く、澄み入つてゐるのがその特色である。殊に晚年の傑作「鍼の如く」に於て、それを明らかにしてゐる。又、短歌以外の小說や寫生文も、纖細な描寫に終始して、彼一流の觀照を持してゐる。著作には「鉛筆日鈔」の外に、歌集「長塚節歌集」、歌論「萬葉集卷十四」「東歌餘談」「萬葉口舌」「寫生の歌に就いて」「枯桑漫筆」、短篇小說「芋掘り」「開業醫」「おふさ」「教師」「隣室の客」「太十と其犬」「炭燒の娘」、長篇小說「土」、寫生文「佐渡が島」「彌彦山」「才丸行き」「須磨明石」等があり、總べて「長塚節全集」に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

前々課が旅から得た隨筆であり、前課が旅から得た小說であつたとすれば、本課は旅から得た紀行である。しかも、その旅行地が金華山であり、旅行者が寫生歌人であるところから、そこの神祕的風光が如實に描かれて興趣深いものがある。文藝的教材であり、國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【金華山】　キンクワザン　宮城縣牡鹿郡に屬し、牡鹿半島の東南端と幅員一粁弱の金華山瀨戸を隔てて横たはる島山で、全島圓錐形をなし、東西四粁、南北五粁、海拔四四五米。全島神域として銃聲を知らず、猿・鹿等が群がり遊んでゐる。又全山殆ど黑雲母花崗岩から成り、その方狀節理に沿うて發達した海崖は、怒濤狂亂して壯觀を極め、千疊敷等の勝景を現してゐる。山頂には大海祇(おほわたつみ)神社、島の西部に縣社黃金山神社がある。津輕海峽からこの島の沖にかけては海霧が多く、島の東南端鮑荒崎にある燈臺には蒸氣霧笛の設備がある。又この島の沖は捕鯨を以て著名である。

この山は、往昔陸奥山と呼ばれたが、金華山の名は、天平二十一年(一四〇九)始めて陸奥國から貢した金の產出の地であるといふ傳說と、大伴家持の「すめろぎの御代さかえむとあづまなるみちのく山にくがね花さく」の歌とに附會して名づけられたものであらうといふ。延喜年間には黃金山と呼ばれてゐた。また東遊記にも「海砂皆金色に光り、道路の間も金色に見ゆ」などと記してゐるが、これは黑雲母の輝いてゐるのを誤り認めたものであらうとされてゐる。(三五三頁「社務所」參照)

【道者】　ダウシャ　(一)佛道を修行する者。(二)禪林の行者(あんじや)、卽ち佛寺に投じて出家を求め、未だ得度しないもの。(三)神社・佛閣に詣でる爲に旅するもの。だうじや。(四)道教を修めた者。道士。道人。こゝは(三)。

原文では本文の少し前に、作者が山雉(やまどり)の渡(金華山と牡鹿半島の山島瀨との間の渡)で、米澤の道者達と同船したことが記してある。(參考資料參照)

【鹽梅】　アンバイ　(一)食品に加へて調味する鹽と梅酢。(二)轉じて、五味(甘・酸・鹹・苦・辛)を程よく調和して飲食物をつくること。(三)物事を程よく處理すること。(四)物事のぐあひ。ほどあひ。加減。都合。(五)からだのぐあひ。こゝは(四)。

【船ちや我折つたやあ】　船では閉口したよう。船では參つたわい。船暈に苦しんだことをいふのである。(參考資料參照)

〔我折る〕ガヲる「我を折る」意。弱る。閉口する。仙臺・山形地方では今もこの語を用ゐてゐる。

【ばら〳〵】(一)もののこぼれ落ち、又は亂れ散るさま。又、その音。「雨がばら〳〵降る」(二)はなれ〴〵なさま。「ばら〳〵にする」こゝは(一)。

【ひつついたやうに】

〔ひつつく〕「引き著く」の音便。ぴつたりとつく。粘著する。

【絲薄】イトススキ　葉の細い薄。

「薄」は、禾本科、すゝき屬の多年生草本。我が國到る處の山野に叢生し、高さ一・二―二・七米。葉は剛硬で線形をなし、緣邊極めて粗糙。秋日莖頭に穗を抽き、分枝して多數の黃褐色の小花穗を房狀圓錐花序に綴る。總苞毛は白色、穎は長芒を有する。この花を尾花といふ。秋の七草の一。

【鹿】シカ　廣義には、偶蹄目、鹿科に屬する反芻哺乳類の總稱。狹義には、鹿科、しか屬に屬する本邦內地產のものの稱。後者には、「にほんじか」(最も狹義には本種を「しか」といふ)と「えぞしか」とがあるが、金華山の鹿は「えぞしか」である。

「にほんじか」は奈良・宮島等に見る普通種で、本州・四國・九州及び琉球に分布。牡は美麗な骨質の角を有し、角は第二年目より生じて最初は皮膚を被るが、後脫出して漸次に枝を增し、第八年目以後は三枝・四尖となる。(每年一回脫換)。體は夏は栗色に白斑を散在して所謂鹿子斑をなすが、冬には一樣に暗褐色を呈する。牡は晩秋の候よく發聲して牝を呼ぶ。「えぞしか」も前者と大差ないが、それよりも體軀が大きく、角の各枝も長大でよく開き(角頂に冠狀肥厚をなすものがある)、體色はより黃赤である。本州中部以北及び北海道に產する。尙、我が國內地の鹿の棲息地としては、雲ケ畑獵區(京都府)・天城國營獵區(靜岡縣)・日光國營獵區(栃木縣)及び奈良公園・金華山等が知られ、奈良と金華山の鹿は捕獲を禁止されてゐる。

【土產】ミヤゲ　こゝでは、鹿にやる爲にもつて來た煎餅をさしてゐる。(參考資料參照)

【ついと】(一)不意に動作するさま。つと。づいと。づつと。(二)速く通りすぎるさま。こゝは(一)。

【一行】イッカウ　こゝでは、連れ立つた人。連れの人達。同行。

【桐油】トウユ　(一)油桐の實から採つた油。ペンキ・ニス・桐油紙等の製造に用ゐる。(二)「桐油紙」の略。桐油又は荏油(えのあぶら。「えごま」の種子から搾つた油)をひいた紙。(今は專ら荏油を用ゐる。)油紙。耐水用包裝や雨具などに用ゐる。(三)「桐油合羽」の略。桐油紙で製した雨具用の合羽(かつぱ)。こゝは(三)で、恐らく桐油紙を著物の上から引廻して羽織つたのであらう。

【煎餅】センベイ　小麥粉又は糯米粉に砂糖などを加へて水で溶き、種々の燒型に入れて燒いた菓子。糯米粉を蒸して丸型に押切り、鹽や醬油で調味した鹽煎餅などもある。

【けろつと】物に感ぜず、何氣ない體でゐるさま。

【斑點】ハンテン　まだら。ぶち。散らばつてゐる點。

こゝは鹿子斑のことで、この斑點の鮮麗なのが內地產の鹿の一特色である。尙「えぞしか」は、若い時は斑點が著しいが、後にはそれが薄らぐといふ。

【奈良の鹿】ナラのシカ　奈良市奈良公園にゐる鹿。春日神社の神鹿として古來名高い。

【追風に帆を揚げて】順風を利用して船を進ませること。

〔追風〕オヒカゼ　(一)うしろから吹いて來る風。うしろかぜ。(二)船を吹きおくる風。おひて。順風。(三)吹き入る風。(四)著物の動くのによつて起る風。こゝは(二)。

〔帆〕ホ　帆柱に張り上げ、風をはらませて船を進ませる船具で、木綿布・カンヴァス・麻布等でつくる。

【庭木】ニハキ　庭園に植ゑてある樹木。

【深更】シンカウ　よふけ。深夜。

「更」は、夜間の時刻の變りめをいふ。もと、支那で一夜を五つに分けた稱。卽ち、初更(又は一更)(甲夜)は今の午後八時、二更(乙夜)は十時、三更(丙夜)は十二時、四更(丁夜)は午前二時、五更(戊夜)は四時で、これを五夜といふ。

【厠】カハヤ　「側屋(かはや)」の義で、家の傍に設ける意であるといふ。大小便の用所。雪隱。後架。便所。てうづば。はゞかり。

【ひらり】(一)輕くひるがへるさま。(二)敏捷に身をかはすさま。こゝは(一)。

【鼻づら】鼻面　鼻さき。鼻端。

【社務所】シャムショ　神社の事務を取扱ふ所。

こゝは黃金山神社の社務所であらう。この社務所では參拜者の爲に宿泊の便を圖つてゐる。

「黃金山神社」は式內社で、祭神は國常立命・海神・金山彥命・金山姬命。天平年中丸子連等の開くところといふ。中世に至り辨財天を祀る佛寺となり、藤原秀衡は堂塔四十八房を建てて大金寺と號したが、明治二年改めて黃金山神社に復し、同七年縣社に列した。

【白衣】ビャクエ　こゝでは、道者などの著る白地の僧衣。

【先達】　センダツ　(一)自分より先に道に達したもの。先驅。(二)勤行に年を重ねて呪法に通じ、峯入の時などに同行者の先導となる者。(三)修驗者。行者。(四)案内者。こゝは(四)。

【ひや〳〵】　(一)ひやゝかなさま。(二)不安に思ひあやぶむさま。こゝは(一)。

【はら〳〵】　(一)物の散亂又は摩擦する音。(二)雫又は涙などの滴るさま。(三)切に氣遣はしく思ひ又心配するさま。こゝは(二)。

【鬱然】　ウツゼン　(一)草木のこんもりとしげつたさま。(二)物事のさかんなさま。こゝは(一)。

【猿】　サル　廣義には、人類を除く靈長目全部、又はその中擬猴類を除いた類人亞目全部の總稱。又、特にその中の猿科のものの稱。狹義には、猿科、さる屬に屬する本邦内地産の「にほんざる」をさす。こゝは狹義。

「にほんざる」は我が國内地固有の種で、本州・四國・九州に分布し、北は青森から南は屋久島に及ぶ。體は軟らかい長毛に蔽はれ、全體暗褐色で黄斑がある。顏面の裸出部は赤く、臀部にも赤い臀胝を有し、手足は黑くて自在に把握し得る五指趾を有する。尾は極めて短い。食物を一時頰嚢に貯へて食する。林中・斷崖等に群棲して果實を嗜食し、一産一仔を生む。

【畋鳴る】　ドナる　(一)荒々しくよばはる。大聲を發する。(二)聲高く叱る。こゝは(一)。

【喬木】　ケウボク　「灌木」に對する名稱。幹は木質で硬く直立し、灌木と異なり枝は根際から出ることがない。葉は闊葉又は針葉で、落葉するものと常綠のものとがある。松・杉・櫻・樫・楸・欅・榎などの類はその例。

【枝移り】　エダウツり　枝から枝へうつること。

【ゆさ〳〵】　ゆれ動くさま。

【搖るがし】

〔搖るがす〕　ゆすり動かす。ゆらがせる。動搖させる。

【ほのか】　(一)はつきりと見わけのつかぬさま。かすか。(二)ほんのり。うつすり。(三)わづか。ちよつと。こゝは(一)。

【からかつて】

〔からかふ〕　(一)推しつ返しつ爭ふ。あらがふ。(二)なぶりたはむれる。じらして苦しめる。いさかひざれる。こゝは(二)。

【おんつあま】　〔オンツァ゛ま と發音〕　東北地方の方言で、「をぢさん」の意。

同地方では、猿を「山のおんつあま」と呼ぶ風習がある。朝は特に「サル」(去る)の音を憚つて、かう呼ぶといふ。

【剽輕】　ヘウキン　氣輕・明朗で滑稽なこと。おどけ。

【行つてしまつたかして】　行つてしまつたかどうかして。行つてしまつたものか。

【山巓の小さな社】

こゝは大海祇神社をさすのであらう。

〔山巓〕　サンテン　山の頂。

【芝生】　シバフ　一面に芝の生えてゐる地。芝原。

【烏】　カラス　「鴉」とも書く。燕雀目、鴉科、からす屬の鳥類。燕雀類中最も大形な種類を含む。我が國内地に最も普通な種は、「はしぶとがらす」及び「はしぼそがらす」で、一般にはこの兩者(特に前者)を「からす」と呼ぶことが多い。

「はしぶとがらす」は、本州・四國・九州に廣く分布し、全身は青綠光澤を有する黑色で、後頭・後頸及び頸側には光澤を缺き、下面は背面より光澤が少い。嘴も脚も黑色。嘴は强大で鼻孔は剛毛で被はれ、翼は長く尾は普通、脚は强大で歩行に適する。「はしぼそがらす」は前種に似て嘴著しく細く、體も稍小形で、羽色の光澤も一般に紫色を帶びてゐる。

【とある】　「ある」(或)に同じ。

【ひよいと】　不意に。突然。卒然。

一六　金華山

【引返し】　ヒキカヘし　ひつくりかへし。

【人寰】　ジンクヮン　人の住んでゐる所。世の中。人境。

「寰」は、界。場所。天地。天下。

【別天地】　ベッテンチ　普通と異なる世界。俗界を離れた土地。別世界。

【ぼろり】　「ほろり」「ほろゝ」に同じ。(一)こぼれおちるさま。(二)感動の涙が思はず落ちるさま。こゝは(一)。

【さらつて】

〔さらふ〕　掠ふ　横合から奪ふ。うばひさる。

【外洋】　グヮイヤウ　(一)「入海」「内海」などに對して、大洋の方に向かつた海の稱。外海。そとうみ。(二)陸地から遠く隔たつた海の稱。こゝは(一)。

【蓬々】　ホウホウ　(一)風の吹き起るさま。(二)さかんなさま。(三)落ちつかないさま。(四)そゝけみだれるさま。こゝは(一)。

【赤松】　アカマツ　「めまつ」(雌松)ともいふ。松杉科、まつ屬の常綠喬木。高さ三〇米に達し、樹皮は赤褐色を呈する。短枝に二箇づつの針狀葉を束生し、葉質はやゝ柔軟、芽は赤色である。雌雄同株で、雄穗は長楕圓形・黄色、雌穗は卵形・紫色。花候は五月頃で、翌秋、卵狀長楕圓形の毬果を結ぶ。我が國各地の山野に自

生し、「くろまつ(黒松)」一名「をまつ(雄松)」と共に松類中最も普通な種である。材は硬質材で效用が極めて多い。

「くろまつ」は特に海岸地方に多く、高さ四〇米にも達する。樹皮は黒褐、葉は二葉で强剛、芽は帶白色。

【斷面には縱横に切れ目があつて、云々】こゝは金華山の名勝千疊敷あたりの方狀節理の情景をいつてゐるのであらう。節理とは岩塊の内部に發達する規則正しい割れ目をいひ、その割れ目の面が互に直角に交つて幾多の直方體を作つた場合が方狀節理で、花崗岩の如き深成岩に多く見られる現象である。

【問屋】トヒヤ・トンヤ　(一)卸賣をする商賈、即ち、製造人から品物を買ひ集めてこれを小賣商に賣る家。(二)旅客又は荷送人と運送人との間に立つて、運送のことを取次ぐ店。こゝは(二)。

【跟いて行く】「跟」―(一)くびす。かゝと。足の後下部。(二)人の後に從つて行くこと。

【急峻な】キフシュンな　けはしい。

「峻」は、たかい。けはしい。

【山の脚】ヤマのアシ　山のすそ。山の麓。

【物陰】モノカゲ　物のかげ。物にかくれて見えない所。

【大手を開いて】オホデをヒラいて　兩手を左右へ一杯に擴げて。

【奔馬】ホンバ　走る馬。

【ばつたり】(一)物の落ち、倒れ、又は突當るさま。又、その音。(二)門の戸又は蓋などを閉ぢるさま。又、その音。(三)事の俄に止つたさま。こゝは(三)。

【くひ止めたやうに】「くひ止める」抑へて止める。せきとめる。

【中斷】チュウダン　(一)中途から切れること。まんなかから切ること。(二)とだえること。(三)中途で斷絶してこれまで經過した效力を失はせること。こゝは(二)。

【ひよつこり】思ひがけず出會ふさま。又突然に現れるさま。ひよつくり。

【狼狽】ラウバイ　うろたへあわてる。

「酉陽雜俎毛篇」に「或ヒト言フ、狼ト狽トハ是レ兩物、狽ハ前足絶エテ短ク、行ク毎ニ常ニ狼ノ腿上ニ駕ス。狽ハ狼ヲ失ハバ則チ動ク能ハズ、故ニ世ニ事乖ク者ヲ言ヒテ狼狽ト稱ス」とあり、又「連文釋義」には「狼ハ前ノ二足長ク、後ノ二足短シ。狽ハ前ノ二足短ク、後ノ二足長シ。狼ハ狽無ケレバ立タズ、狽〈狼無ケレバ存セズ。若シ相離ルレバ則チ進退得ズ」とある。

「狽」は狼に類する獸である。

【ふは〳〵】(一)おちつかないさま。(二)輕く浮くさま。(三)やはらかいさま。こゝは(三)。

【輕げ】カルげ　輕々としたこと。輕さうなこと。

【大箱の岬】オホハコのサキ　大箱崎・大函崎とも書く。金華山島の東端に在り、斷崖三面に削立して高さ約一〇〇米、廣さ約三〇方米、全島到る處斷崖の壯觀がある中でも、特にその著しい勝地として知られてゐる。

【截斷】セツダン　たちきること。

【懸崖】ケンガイ　(一)きりぎし。がけ。斷岸。絶壁。(二)盆栽の枝が鉢の外に垂れさがるやうに作つたもの。こゝは(一)。

【四つに這うて】ヨつにハうて　よつばひになつて。

【さら〳〵】(一)物の輕く觸れあふ音。(二)物事のはかどりすゝむさま。(三)しめりけや油氣のないさま。(四)いやみのないさま。こゝは(一)。

【纔かに】ワヅかに　(一)すこしばかり。(二)かつ〴〵。やつと。こゝは(二)。

【際涯】サイガイ　(一)きし。きは。(二)はて。かぎり。こゝは(二)。

【一朝】イッテウ　こゝでは、一旦。一度。

【水平線】スヰヘイセン　こゝでは、實視水平線、即ち海と空との接する線。(三八頁「地平線」參照)

【堀り立てて】アフりタてて

(堀る)(一)吹き動かす。ひるがへす。(二)鍬をふんで馬を急がす。(三)おだてる。けしかける。そゝのかす。こゝは(一)。

【吼えたけび】

(吼える)ホえる　(一)犬などが聲を立てて鳴く。又、凄じい聲を立てて鳴く。たけり鳴く。(二)聲をあげて泣く。ほざく。(罵る語。)(三)やかましく述べたてる。どなる。こゝは(一)。

(たけぶ)猛くさけぶ。恐しいさまに吼える。

【しぶき】(一)風が頻りに强く吹くこと。(二)しぶかれて飛び散る水氣。飛沫。こゝは(二)。

【とばしり】(一)とばしる水。しぶき。飛沫。(二)傍にゐて禍にかかること。まきぞへ。そばづゐ。こゝは(一)。

【氷雨】ヒサメ　雹をいふ。又、霰にもいふ。

「雹」は主として雷雨に伴なつて氷塊の降り下るもの。その氷塊は通常、豆乃至鷄卵位の大いさで、多く白色・球狀をなし、中心に雪を固めたやうな心核があり、その上に不透明な氷皮と

透明な氷皮とが、交互に幾層か重なつてゐる。これらの核や氷皮は、旺盛な昇騰氣流中に雲が生じ、それが異常に高く擴張して、雪層・過冷却水滴層・水滴層の三層を發達せしめ、雪層中の氷晶が落下してこの三層を通過する間に、形成せられるのである。

二　解釋

1　主題

金華山登山見聞。

2　構想

(1)　金華山に著くや、まづ絲薄の中に、けろつと立つてゐる鹿。（初―一二四ノ四）

(2)　金華山に登る途中で見た枝移りの猿。（一二四ノ五―一二六ノ二）

(3)　山巓の烏の群。（一二六ノ三―一二七ノ一〇）

(4)　山を下る途中の鹿。（一二七ノ一一―一三〇ノ一）

(5)　大箱の岬。（一三〇ノ二―終）

3　敍述

〔青い芝は地にひつついたやうになつてゐて、絲薄の叢が連なつてゐる。道者が口々に、鹿、鹿と呼んだら、思はぬ絲薄の中から大きな角が動いて、鹿が五六匹あらはれた。〕――雨の中の芝原、そこに連なつてゐる絲薄が鮮かだ。鹿の現れる樣子の描寫が更に躍動してゐる。「大きな角が動いて」などは何でもないやうに見えてゐて凡庸の筆ではない。

〔道者が三四人で手と手をつないで坂の下へ追ひつめようとしたが、鹿は輕く飛び退いて、けろつと立つてゐる。〕〔よく見ると、鹿は絲薄の中に、そこにもこゝにも、けろつとして立つてゐる。〕――鹿の心にくいまで無心な樣子がこの「けろつと」といふ言葉で實によく生かされてゐる。

〔道者はこんなことをしては騒いで、船の中にゐた時とは別人のやうである。〕――旅に在つては大人も小兒のやうな輕快な心になる。米澤の山の中から出て來た道者達の事毎に、物事に無邪氣に興じ騒いでゐる樣が目に見えるやうである。

〔雨はしと〳〵として深更までやまぬ。厠へ立つたら、目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると、鹿である。手を出したら、鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。〕――「ひらりと飛ぶ」は前の「輕く飛び退いて」と共に輕快そのもの、優美そのもののやうな鹿の動作をよくうつし得てゐる。「雨はしと〳〵と……」の句も寫生であるが無駄がない。「厠へ立つたら」も利いてゐる。深夜厠に立つてまで鹿を見るに至つて讀者さへ一種靈氣の身に迫るのを覺える。一旦驚いたが鹿と知つてすぐに手を出した作者の心の冴えには驚くの外はない。

〔猿はゆさ〳〵と枝を搖るがしながら、こちらを見おろしてゐる。〕――昨日見た鹿の無心さとくらべてこの猿の人間臭さ。道者だけでなく、作者までが「からかつて見たいやうな氣もした」のも尤もである。

〔おりた烏は嘴をあげたり首を曲げたりして、握飯を欲しさうに見てゐる。鹿の土産がまだあつたので投げてやつたら、ひよいと一跳ね跳ねてそれをくはへて、元の所へ戻つて、足で押さへて食むのである。さうして又、嘴をあげたり首を曲げたりして見てゐる。〕――烏の振舞が誠によく寫されてゐる。細かくて、素樸・簡明で、しかもつきない味のある敍述である。作者の眼がどんなにしつかりと對象に据ゑられてゐたかが思はれる。

〔あれ〳〵と一人が指してゐる方を見たら、其の時はピオウと鳴いた聲ばかりで鹿は見えなかつた。ピオウと又鳴いた時は聲が遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時はやつと聞き取れる程であつた。〕――作者は自ら眼に見なかつた鹿と鹿の行動を、この三聲の「ピオウ」によつて讀者の眼前に映寫し出してゐる。驚くべき寫生の力である。

〔左を仰いで見ると、鬱蒼たる山の巓は頭に掩ひかぶさつたやうで、其の急峻な山の脚は、恰も物陰から大手を開いて現れた人が、奔馬をばつたりくひ止めたやうに、此の小徑で中斷されてゐる。〕――急峻な地形を描寫しようとした作者の苦心である。後の「急な山の脚が海へ踏みこむ前に、云々」の所も同じ手法である。よく讀みくだいて、その實象を把握させるべきであらう。

〔絲のやうな脚で跳ねるのが、ふは〳〵とした綿の上でも跳ねるかのやうに、如何にも輕げである。驚いて逃げる時にピオウと細い聲で鳴き捨てるのである。〕――作者の鹿に對するつきることを知らぬ興味は、遂に鹿の動作の輕快さと、鳴き聲の可愛らしさとに、かくの如き藝術的完成を與へ了つてゐる。「鳴き捨てる」といふ言ひぶりも甚だ利いてゐる。即ち、「ピオウ」といふ聲はまだ耳にあるのに、その姿はもはや遠く彼方に跳び去つてゐる趣をこの一語で出してゐる。

〔余は、一朝暴風が此の平靜な海を吹き亂して、雲と相接してゐる水平線の先の先から煽り立てて來る激浪が此の大箱の懸崖に吼えたけび、しぶきのとばしりが此の青芝へ氷雨の如く打ちかゝる時に、牡鹿が角を振りたてて此の岬に突立つ所を想像して見た。〕――かういふ光景を想像によつて加へざるを得ない地勢であり、

文勢である。

三　批評

おだやかな光の中に、總べてがなつかしく描き出されてゐる。落著いた、古代のまゝとでもいひたい自然の中に、あらゆるものがのびのびと生きてゐる。そのありのまゝに生きてゐる自然の相を描いて、時に神祕を感じさせるものさへある。觀照の透徹と筆致の洗練とは感歎の外はない。

三　備考

一　指導の問題

（一）作者は旅行が好きであつた。そして骨惜しみせずに一歩々々を自分の足で歩いた。その旅人としての作者の姿は文の上にも現れて、一語一句をゆるがせにしない手堅さ・丹念さを示してゐる。この丹念さが文の質を緊密ならしめ、表現を明確ならしめてゐる。隨つて讀みを重ねるにつれて、さういふ密度が見え、その的確さが把握せられ來る。

特に作者が明確を期してゐるのは、視覺心象である。文中の諸所にその彫刻的完成の姿に接する。かういふ點も見逃さぬ學習を指導したいものである。

（二）寫生文であるが、觀照の透徹が深い爲に寫實の域を超えて、自然の風物がそのまゝに藝術品化せられてゐる。それも初期の寫生文が意識的に自然を理想化し美化したのとは異なつて、深く觀ることによつて到達した境地である所に、寫生文の極致を暗示するものがある。意識的な美化と、觀照の極成立するに至つた美とを區別させることも一つの指導の目標でなくてはならぬ。

二　參考資料

「鉛筆日鈔」の本文の直ぐ前の部分（八月三十一日の條）を載錄する。

鮎川の港からだらだらと上つて勾配の急な坂をおりる。杉の木の間を出ると茶店がある。茶店の前を行き過ぎようとすると女房があとから呼びかけてお山へ渡るなら草鞋を買うて鹿の土產を持つて行けといつた。此れはお山の砂を草鞋へつけて來ることは昔から禁じてあるので島へ渡るものは皆新しい草鞋を穿いて、もどりの船に乘る時にはぬぎ捨てる筈だ相である。鹿の土產といふのは小さな煎餅の括つたのである。港へおりると船頭小屋には四五人で焜火を焚いて居る。客が集らねば船は出さないといつて一向に取り合はぬ。小船が一艘動搖しつゝある。雨が降つて來た。突兀たる岸の巖には波がだんだん强く打ちつけて小船が更に動搖する。雨が大粒になつた。幻の如く見えた金華山は復た雲深く隱れて裾だけが短く表はれた。山の裾はなつかしい程近い。桐油を著た道者がぞろぞろと余の後からおりて來た。各自に背中を高くして小荷物を背負つて居る。一行の饒舌るのを聞いて船頭のうちの老人が一行のものを米澤ぢやないかといつた。米澤の山の中だといつたので言葉でどこのものでも分ると老人は頗る得意である。道者が來ても船はまだ出さうともせぬ。海がだんだん惡くなり相なので何故出さないのだといふと此日の渡しは此れ限りなので金華山から鮎川へ酒買に渡つたものが戻るまで待つて居るのだといふのである。鮎川に二人で酒を飲んでるのがあつたがあれなら迚ても今日のうちには歸り相はないと道者の一人がいつた。遂には船頭も待ちあぐんで一人が南京米の袋をかぶつて出て行つた。所がそれも沙汰がない。屹度あいつも引つ掛つたに違ひない。呑氣なにも程があるといつて道者等が頻りに呟いて居る。幾ら待つても島の酒買は來ないのでやつとのことで船が漕ぎ出された。三人が艪を押して舳の一人が櫂をとる。巉巖に添うて船が進む。鹿渡しの岬に近づくと波は澎湃として船が思ひ切つて搖れる。岬に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。北方に開けた海上には江の島列島が大小相竝んで狹い瀨戸の間から見える。列島は波の穗に隱れては復あらはれる。桐油を頭からかぶつて余と向き合ひになつてた男は目がどろつとしてさつきから下脣が垂れた儘であつたが遂に桐油でぐるつと頭をくるんで轉がつてしまつた。他の道者も顏が眞蒼になつて小緣へしがみついた儘反吐をついて居る。老人の押して居た艪は艪べそが外れた。老人は狼狽して嵌めようとしたが船の動搖が激しいので幾らあせつても嵌らぬ。止めろ止めろいゝやいゝやと兩肩からうんと力を入れた男が聲にも力が籠つて叱りつけるやうにいつた。老人は極りわるげに船の底に蹲つた。雲が一方からだんだんに禿げると三角に握つた握飯のやうな金華山が頭から押へつけるやうに聳えて居る。中腹の神社から下には鍬で梢を刈り込んだやうな木立が靑い芝の間に點梅されて庭園の如く見える。常盤木の繁茂した山上には綿打ち弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれて居る。

一七　雜草

一　解題

一　本文

「念珠集」所收の「小品集」から「雜草記」の殆ど全文を揭出したものである。（念珠集　昭和五年八月、鐵塔書院發行）

「念珠集」は、作者の所謂「日本に關する雜文」の集で、「島木赤彥臨終記」「念珠集」（十篇）及び「小品集」（二十四篇）から成つてゐる。尙、「雜草記」は、大正十五年十月の雜誌「隨筆」に執筆されたものである。

二　作者

齋藤茂吉。本名は茂吉。明治十五年七月山形縣南村山郡堀田村字金瓶に、守谷傳右衞門の三男として生まれた。二十九年小學校卒業後直ちに上京し、精神科醫齋藤紀一に養はれ、開成中學校を歷て第一高等學校に入り、正岡子規の「竹の里歌」を讀んで始めて作歌に志した。三十八年東京帝國大學醫科大學に入學、三十九年伊藤左千夫の門に入り、歌を雜誌「馬酔木」に發表し、四十一年雜誌「アララギ」の發刊と同時に、その同人となつて編輯に從事した。四十三年醫科大學を卒業、同大學精神病學教室助手・東京府巢鴨病院醫員を歷て、大正六年長崎醫學專門學校教授となつた。この間大正二年には第一歌集「赤光」を出版し、萬葉調を基礎として內に近代的情緒を盛り、一躍歌壇的地位を高めた。十年には更に第二歌集「あらたま」を出版して靜かな深みを加へ、その主張である實相觀入の說を實行に示した。同年文部省在外研究員として、主として獨・墺に留學。留學中醫學博士の學位を得、十四年歸朝。翌年島木赤彥の後「アララギ」の編輯者となり、同年青山腦病院を再興し、昭和二年院長の職に就き、今日に至る。

歌風は子規・左千夫等を學んで寫生的萬葉調であるが、單なる萬葉調の爲の萬葉調とは異なり、近代的生活に根ざしてゐる。アララギ派の代表的歌人であり、現代歌壇の巨匠である。著書には「念珠集」の外「赤光」「短歌私鈔」「續短歌私鈔」「童馬漫語」「あらたま」「朝の蟹」「金槐集私鈔」「短歌寫生の說」「柿本人麿」等がある。

三　採擇の趣旨

前數課が旅の收穫であつたのに對して、本課は自家庭前の觀察に成つた文である。作者は、前課の作者と同じく、寫生主義に立脚した歌人であるが、そこに又醫學者らしい觀察をも交へて獨自な趣のある隨筆を成してゐる。文藝的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【雜草】ザッサウ　(一)種々さまざまの草。(二)特に栽培した野菜や草花以外の、さまざまの野生の草。こゝは(二)。

雜草は何等人間の保護を受けることなく、自然のまゝに生ひ育つ結果、激しい生存競爭が行はれて、最も強い、且最もその土地の條件に適したものだけが生き殘り、隨つていづれもすばらしい繁殖力を有してゐる。

【こゝの庭】東京市赤坂區青山南町五丁目八十一番地にある作者居宅の庭をさす。

【昨年】大正十四年。

【思ふ存分に】「存分に」を强めたもの。思ひのまゝに。

【はびこつて】

〔はびこる〕蔓る　(一)のびてひろがる。ひろがりしげる。(二)一杯にひろがる。はだかる。(三)幅を利かす。增長する。(四)惡行を恣にする。こゝは(一)。

【油ぎつた光】生活力の旺盛を示すやうなつやつやしい光澤。

〔油ぎる〕アブラぎる　(一)脂肪分が多くなる。(二)油でぎらぎらする。

【脊丈の沒するまでの高さ】その中に入ると脊丈の隱れてしまふ位の高さ。

〔沒する〕ボッする　こゝでは、かくれる。うづまる。

【燒け跡】ヤけアト

大正十三年作者の居宅と同番地にある青山腦病院の火災で、作者の居宅も半燒した。その燒跡をさすのである。（參考資料參照）

【僕は幾らか落著いた氣持になつて】（參考資料參照）

【藜】「灰藜」とも書く。藜科、あかざ屬の一年生草本。莖は木狀で直立し、よく成長して高さ一・五―二米に及び、徑約三糎に達する。葉は三角狀卵形で綠色・柔軟、長柄を有して互生し、多く波

狀の齒牙緣がある。嫩葉は帶白色或は紅紫色の粉狀物に被はれてゐる。夏秋の候枝上に穗を出して黃綠色の細花を總狀或は房狀に綴り、扁球形の小胞果を結ぶ。我が國各地（樺太・千島・北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣等）の原野に廣く自生し、嫩葉は食用に供し、老大した莖は古來杖に用ゐられる。又漢方ではこの葉を揉んで蟲傷部に塗る。

嫩葉の帶白色或は微かに淡紅色を帶びるものを「しろあかざ」（一名「しろざ」「あをあかざ」「ぎんざ」）と稱し、葉心の紅紫色を呈するものを「あかあかざ」（一名「あかざ」「おほあかざ」「えどあかざ」）といふ。雜草として知られてゐるのは前者で、後者は田圃に栽植せられることが多く、野草となつても永續きしない。（但し杖とされるのは主として後者である。）又、類種「こあかざ」は高さ三〇糎位の小形種で狹長な卵形葉を有し、田野・廢地等に自生する。その外、海濱・河原に生ずる「まるばあかざ」「かはらあかざ」を始め、「うらじろあかざ」「ほそばあかざ」等類種が少くない。

【數でこなして】　質はとにかく數量でまかさうとして、といふほどの意。

〔こなす〕　こゝでは、意の如くに扱ひならす。調節する。

【茹でて】　ユでて

【假令】　タトヒ　「縱令」とも書く。「縱へ」に同じ。假說して說く文句の冒頭に用ゐる語。よしや。よしんば。よし。

【菊科植物】　キククワショクブツ　被子植物、雙子葉門、菊科に屬する植物。通常草本、極めて稀に灌木又は喬木。葉は多く互生、稀に對生又は輪生し、單葉又は複葉で托葉を缺く。花は兩性・單性又は中性で、頭狀花序（花輪の上端に多數の花が密に着生して頭狀をなすもの）をなし、花序全體が多數の苞から成る總苞に抱かれてゐる。萼は若しあれば小鱗狀片又は細硬毛狀（冠毛）をなす。花冠は概ね筒狀又は舌狀で、一花序全部が筒狀花若しくは舌狀花から成る場合もあるが、多くは中央に筒狀の心花があり、周緣に舌狀の邊花がある。（邊花は雌蕊の發達が不良で不實に終ることが多い。）雄蕊は四箇又は五箇で、その一部は花冠に著生し、葯は互に聯著して雌蕊の上方を周つて一體をなしてゐる（聚葯雄蕊）。雌蕊は一箇で、子房は下位・單房・一胚珠。果實は瘦果で一箇の無胚乳種子を含み、冠毛によつて散布せられることが多い。

菊科の植物は熱帶から寒帶まで廣く分布し、最もよく地上に跋扈するものの一つで、種類は一萬三千に及んでゐる。藥用・染料用に供せられるものが多く、又食用にせられるものもあり、觀賞用として栽培せられるものも頗る多い。「きく」「しをん」「ひまはり」「ダリア」「やぐるまぎく」「シネラリア」「ごばう」「ふき」「よめな」「ちしゃ」「べにばな」「よもぎ」「あざみ」等の類は皆これに屬する。

【山白菊】　ヤマシロギク　菊科、しをん屬の多年生草本。全株絮澁、高さは一米内外。莖は「よめな」よりも硬く、葉は短柄・長楕圓狀披針形・鋭尖頭で不齊の缺刻があり、「よめな」のそれに類するが、三行脈で葉面絮澁。秋、梢上に枝を分かつて頭狀花をつけ、その心花は黃色、邊花（舌狀花）は白色、總包片は暗紫色を呈し、果實（瘦果）は褐色で剛毛狀の冠毛を有する。我が國各地（北海道・本州・九州等）の山野に自生。別名「しろよめな」。

「むらさきやましろぎく」は、これの變種で、莖・葉共に殆ど無毛、邊花は黃色を呈する。その外「おほやましろぎく」「つるやましろぎく」等の類種がある。

【犬蓼】　イヌタデ　「馬蓼」とも書く。蓼科、たで屬の一年生草本。高さ三〇—六〇糎位。披針形の葉を互生し、葉柄の基脚には鞘狀の托葉があつて、その上緣に長い剛毛を有する。夏日梢上に花梗を抽き、淡紅色（時に白色）の小五瓣花を密に穗狀に綴り、その狀赤飯を聯想せしめる。三稜形の瘦果を結ぶ。我が國各地（北海道・本州・九州・琉球・臺灣）の原野・路傍に自生し、莖・葉の陰干しにしたものは小兒の蟲下しに效がある。別名「あかのまま」「あかのまんま」。

變種に「まるばいぬたで」（葉は卵形、花色は淡）「うづたで」（葉は披針形）等があり、類種には莖高一米餘に達する「おほいぬたで」等が知られる。

【金線草】　ミヅヒキグサ・ミヅヒキ　「水引草」とも書く。蓼科、たで屬の多年生草本。全株粗毛に被はれ、高さ六〇—九〇糎位。葉は互生し、卵形或は廣卵形で鋭尖頭。葉柄は短く基脚の鞘狀托葉も短形で緣毛がある。夏秋の候、葉腋から長い總狀の花軸を抽き、濃紅色の小四瓣花を疎らに穗狀に綴る。（花の下面は多く白く、花軸は紙撚の如く長く伸びて、水引を想はしめる。）扁卵形の瘦果を結ぶ。我が國各地（北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣等）の山野に自生し、主として陰地を好む。觀賞用として栽培せられることもある。

【蕺草】　「蕺菜」「魚腥菜」「十藥」などとも書く。三白草科、どくだみ屬の多年生草本。白い地下莖を曳いて盛に繁殖し、莖高二〇—九〇糎に達する。心臟形・鋭尖頭で濃綠（裏面淡色）の全緣葉を互生し、莖・葉共に臭氣を有する。初夏の候、莖頂・枝端に有梗の花穗を抽出、花は白色・四片の一見花瓣の如き苞を有し、その中央に穗狀花序をなして多數の淡黃・無花被の兩性花を綴る。稍球形の蒴果を結ぶ。我が國各地（本州・四國・九州・琉球・臺灣）の原野・路傍の陰濕地に自生し、地下莖及び葉は藥用に供せられる。別名「どくだめ」「じふやく」「おごくそば」「しふさい」。

【竹煮草】　タケニグサ　罌粟科、たけにぐさ屬の多年生草本。莖は

直立し、密毛多く、白粉を帯び、大なるものは徑六―八糎、高さ一・五―二米に及ぶ。葉は卵狀心臟形で大きく、鈍く羽狀に淺裂し、下面は粉白で往々粗毛を布き、長い葉柄によつて互生する。九十月頃莖頭に多數の枝を分かち、大なる圓錐花序をなして多數の白色(時に帶紅)小花を綴る。花は二瓣片を有し花瓣を缺く。倒披針形・扁平の蒴果を結ぶ。莖・葉ともに黃褐色の汁液を含んで有毒。我が國各地(本州・四國・九州・琉球・臺灣)に自生し、竹をこれと共に煮れば柔軟になるといふ傳說がある。又驅蟲劑ともなる。別名「ちゃんばぎく」「ささやきぐさ」「おほかみぐさ」「おほかめだふし」。

【株】カブ　(一)切り倒した樹の殘つた幹又は根。くひぜ。きりかぶ。(二)轉じて、草木を根で數へるにいふ語。こゝは(二)。

【立交つて】

「立」は動詞に冠して語勢を添へるに用ゐられる。

【すさまじい】勢がつよい。おそろしい。

【風致】フウチ　おもむき。おもしろみ。風趣。風韻。

【春も更け】ハルもフけ　春も深くなつて。

〔更ける〕(一)深くなる。たけなはになる。たける。(二)夜ふかくなる。深更になる。(三)年たける。年をとる。

【初夏】ショカ　(一)はつなつ。夏のはじめ。首夏。孟夏。(二)陰曆四月の稱。こゝは(一)。

【壓迫】アッパク　はげしくおさへつけること。威壓すること。

【細かい枝がさいて】細かい枝が澤山に分かれ生じて。

〔さく〕咲く　こゝでは、開く、の意。「穗に穗がさく」

【計らずも】ハカらずも　「圖らずも」とも書く。思ひもよらず。ふと。意外に。はからざるに。

【姫昔蓬】「姫飛蓬」とも書く。菊科、ひめぢょをん屬の一年生草本。全株粗毛を布き、莖は竿狀で往々三米に達する。根葉は篦形で羽裂し、莖葉は線形で全緣又は小鋸齒を有し、密に莖に互生する。夏日梢上に多數の枝を分かち、再三分岐して小形の頭狀花を綴る。心花は淡綠色で密生し、これに多數の白色の邊花(舌狀花)をつけ、總苞は鐘形。果實(瘦果)は冠毛を有して遠く撒布する。北米の原產であるが、明治初年貨物と共に種子が我が國に移入せられ、その驚くべき繁殖力によつて全國的に蔓延、今では到る處の原野・路傍にこれを見るに至つた。(參考資料參照)

【舶來】ハクライ　(一)外國から舶で渡つて來ること。外來。(二)外國から渡來した品物。舶來品。こゝは(一)。

【鐵道草】テツダウグサ・テツダウサウ　「ひめむかしよもぎ」の異名。明治初年北米からの輸入貨物が當時新設された鐵道によつて運ばれるに當り、その貨物に附著したこの草の種子が、鐵道沿線に落ちて盛に繁殖したところから出た名であるといふ。

【御一新草】ゴイッシングサ・ゴイッシンサウ　「ひめむかしよもぎ」の異名。御一新以來繁殖した草の意で名づけられたもの。

〔御一新〕明治維新のこと。即ち、明治元年を中心として我が國の政治上・社會上に行はれた大變革をさしていふ。

【明治草】メイヂサウ　「ひめむかしよもぎ」の異名。御一新草と同樣な意味で名づけられたもの。

【傳來】デンライ　(一)外國から傳はり來つたこと。渡來。(二)祖先又は師家から受繼ぎ來つたこと。相傳。こゝは(二)。

【異境】イキャウ　他國。他鄕。外國。

【根をおろさう】

〔根をおろす〕(一)植物が根を地中にのばし入れること。又、根がつくこと。(二)その場所に定著又は定住すること。こゝは(一)ではあるが、(二)の意も含まれてゐる。

【要約】エウヤク　こゝでは、物事の成立上重要な條件。

【根强さ】ネヅヨさ　基礎が固くてしんから强いこと。

【流行病】リウカウビャウ　比較的短時日の間に多衆の間に發生し、又は傳播蔓延する疾病をいふ。疫病。

この種の疾病は主として急性の傳染病(コレラ・ペスト・チフス・赤痢・流行性感冒・ヂフテリヤ・猩紅熱等)であるから、一般に流行病といへばこれ等をさすことが多い。

【黴菌】バイキン　「細菌」(bacteria)に同じ。即ち、顯微鏡的に微細な單細胞の下等植物で、各種傳染病の病原となり、又醱酵作用・腐敗作用等を惹起するものをいひ、極めて多數の種類がある。但し一般には、病原菌のみをさしていふことが多い。

【度】こゝでは、程度、ほどあひ、の意。

【異國草】イコクサウ　異國の草。外國の草。

【下くさの形】見たところ下草らしいこと。

〔下くさ〕シタくさ　木の下の草。木蔭に生えてゐる草。

【牽制】ケンセイ　(一)ひきつけて自由にさせないこと。(二)自由行動のさまたげをすること。(三)敵を我が欲する方向に誘致し又は抑留して、他方面の我が行動を容易にさせ、又は敵の行動の妨害をなすこと。こゝは(二)。

【悉】ホシイママ　きまゝにすること。自分の思ふやうにすること。思ふ所を憚りなく勝手に行ふこと。

【馬追】ウマオヒ　「うまおひむし」に同じ。直翅目、螽蟖科の昆蟲。「きりぎりす」に似て小形。全身淡綠色で頭頂及び前胸背に

褐色部があり、頭頂の前端は角狀に尖つて紅色を呈する。觸角は鞭毛狀で體長の二倍、前翅は腹部の二倍に達し、雌の產卵管は長く劒狀をなす。前・中兩脛節の兩側には長針が數本づつ列生する。成蟲は八月上旬出現、草叢に潛み又は屋內に入り來り、覆翅（前翅）の基部にある發音器を利用して、スイーチョン、スイーチョンと朗鳴する。その聲が馬子の馬を追ふのに似てゐるので馬追の名を得たといはれる。我が國各地に產する。別名「すいっちょ」「すいっちょん」「すいと」。

【風趣】フウシュ　「風致」に同じ。（二六六頁參照）

【色調】シキテウ　色彩の調子。色彩の强弱・濃淡の調子。いろあひ。

二　解釋

1　主題

燒け跡の雜草。――外來の雜草と傳來の雜草。

2　構想

(1)　延びられるだけ延びた庭の雜草。（初―一三二ノ一）

(2)　繁殖力の强い藜・山白菊・蕺草・竹煮草と弱々しい犬蓼・金線草。（一三二ノ二―一三三ノ二）

(3)　さういふ雜草中にあつて他を壓して延びて行く姬昔蓬。（一三三ノ三―一三五ノ六）

(4)　眞夏過ぎると一樣に變る雜草の風趣。（一三五ノ七―終）

3　敍述

〔花を持つ前の油ぎつた光を見せ、〕――盛夏に於ける雜草の旺盛な生活力を把握した言ひぶりである。雜草には雜草の見所のあるのが面白い。

〔いろ〳〵の草の生える有樣を見てゐると、暇の無い僕のやうな者の心をも惹く點が一つ二つはあつた。〕――この文が雜草の單なる寫實ではなく、それが作者の主觀を動かした所から成立した寫實である所以を示してゐる語である。

〔藜は、假令他の雜草のなかにあつても、減びない草だと僕は思つた。〕――何でもないやうな一句であるが、その雜草の性格や生命力を握つた確實な言ひ方であることに注意すべきであらう。

〔この草もいつの間にか僕の脊丈を追ひ越し、小さい白い花が澤山咲いてゐるのを見ると、如何にも繁殖力の强いことを思はせた。それらの間に生えてゐる犬蓼だの、金線草だのは、極めて弱々しい幽かな花のやうに見える。〕――雜草の一つ〳〵の生命力の敍述の間に、かうして插入した弱々しい幽かな花の點綴は雜草の庭を全體的に想起させる效果が大きい。

〔さういふ草の中に立交つて、數も多く、丈もどん〳〵延びて行く草があつた。〕――それ〴〵の繁殖力を持つて旺盛に見える中に、殊更たくましい繁殖力を示す草がある。作者の眼がこれを見のがすわけがない。子細に時間的經過につれてその樣を見てゐるといよいよ珍しい花である。まづそれが目につき、次第にそれについての知識を得て來る經過がありのまゝに寫されてゐる點に興趣が深い。

〔遙々と海を渡つて來て異境に根をおろさうといふものには、何か猛烈な强いところがある筈である。〕――珍しい草のすばらしい繁殖力に驚き、名前を調べると、それが外來の草で非常な勢で殖える草だといふことが分かつた。「僕は、この草が外國から渡つて來て、傳來の雜草を壓迫してゐる有樣を見てゐたのである」といふ感激は平坦な觀察の間に含まれた一つの波瀾である。そしてこれは單なる一雜草のみの問題ではない。そこに作者の感興を深める要因が潛んでゐるのである。

〔また異境といふ一つの要約が既にこの根强さをつよめさせることもあり得るのである。〕――科學者たる作者らしい精しい考へ方である。それと共に、何となく、世界史の上にしば〳〵繰返される、種族又は文化の異境侵入の事實を思はせるものがある。

〔そして、傳來の雜草が、今は異國草の下くさの形になつてゐても、追々は、二たびその異國草を牽制して、その繁殖をさう恣にはさせないかも知れぬなどといふ空想も浮かんで來て、五分や十分の時は經つてしまふ。〕――黴菌の繁殖力から類推して、外來の異國草の盛衰を判じ、更に傳來の雜草の根强さを信じようとする所に、科學者らしい觀察と歌人らしい思索との融合を示してゐる。更に愛國者たる作者の風丰も浮かんで來るとまで考へさせられるのは思ひすぎであらうか。作者の想像は果てしがない。忽ち五分・十分は經つてしまふのである。五分・十分といふ具體的な數字は、作者のじつと深く見つめて思ひふけつてゐる樣子をしのばせる。

三　批評

作者は萬葉集に基礎を置く、子規系統の寫生主義の歌人である。寫生といふ主張を深く究明し透徹せしめ、尙作歌にその主張を實行してゐる點で現歌壇の最高峯をなす歌人である。本文は輕い氣持で見たまゝを敍してゐるのであるが、やはりこの作者らしさの窺はれる文である。作歌と併せて作者の境地を示唆するに足る寫生文として、味はふべき一篇である。

三　備考

一　指導の問題

（一）何の見所もないやうな雜草を、しかも見たまゝに、感じたままに書いた文であるから、學習を指導する手がかりを得るのが容易でない。やはり素直に讀ませ、素直に解釋させることによつて、眞の學習が成立するであらう。かくすることによつて、科學者であり、歌人である作者の風丰が自ら浮かび來るであらう。そして又、この寫生の基底をなす感傷が直觀せられ來るであらう。

又雜草の生育觀察に於て、作者は「はびこる」「延びる」の二動詞を最も多く用ゐ、「油ぎつた」「滅びない」「強い」などいふ形容詞を使ひ、他を「侵す」「壓迫する」といふ如き見方を示してゐることによつて、生徒に作者の心にある雜草の性格が明確に把握せられ來るに違ひない。

（二）本文は寫生に立脚した文ではあるが、所謂寫生文ではない。俳人の專有ともいふべき所謂寫生文とは違つてゐる。又單なる科學者の科學的隨筆でもない。更にいへば、作者の自然科學者らしい觀察や推理は隨所に窺はれるが、全文を一貫するもの、その基底となるものは、やはり雜草に對する歌人らしい眼である。この點が直觀せられることによつて、作者の言はんと欲した所が全體的に理解せられるであらう。

尙、讀後感として、誰しも日本の固有文化の根强さが、結局は外來文化を壓倒するに至るであらうことを暗示せられるであらう。しかしその爲に本文を寓意的な教材として扱ふことは妥當でない。どこまでらそれは暗示である。さういふ感懷を起させることは肝要であるが、それ以上それを意識的に取扱ふことは戒心を要する。作者は忙しい身で、長い時間に亙つての觀察を怠らず、時には風呂歸りの和やかな暫くの間をしみ〴〵と眺めてゐる。その作者の心境に映つた雜草が理解せられるならば、國民性に對する感動・自覺は自然に涌き來るであらう。そして寓意的な文から受けるものよりもその感動・自覺は底深いものであらう。

結びの三行は、平坦だけれども一篇の完結として利いてゐる。時の經過とそれにつれての雜草の衰へとがしつくりと觀察せられてゐる。

二　參考資料

同じ「念珠集」中の「晩秋小筆」を引用する。

宵闇の空にもう雁のこゑが聞えるやうになつた。飛行機などが時時空中を轟かすので、雁の飛ぶのも少くなつたやうにもおもふが、それでも渡り鳥はもう空を渡つて來るやうになつたのである。

さういふ時節が來た。この夏は避暑にもゆけず忙しく働いて居り、輕井澤へんに避暑してゐる友などから繪葉書などを貰ふと、ひとり寂しくおもふこともあつたが、雨がしきりに降り續いて盛夏も盛夏らしくなく、書物にも著物にも黴が吹き、つゆ時の再現らしき日が續いたかとおもふと、いつのまにか立秋になつてしまつた。

そのうち蟋蟀などが鳴いて、秋の彼岸になつた。夏の休みぢゆう元氣を盛り返した人々も勤勉に立働き出したが、夏の休みぢゆう休む暇のなかつた人々も何か新鮮な爲事にありついたやうな氣持になつて立働いてゐる。蠶の出來も惡し、不作だらうといふ心配が、一時人々の心を領してゐたが、美しい天氣が幾日も續いて二たび愁眉をひらくやうになつた。栗の實も金に色づいて笑んで落ちた。

雁の聲にものあはれである。それであるから古人もこの聲に心をひそめて詠歎した。それらの詠歎は詩として今に殘つてゐるから、僕らは現今その詠歎に接することが出來る。芭蕉の、病雁の夜寒におちてゆく句の如きは、今もなほ僕らの身に沁み徹るのをおぼえる。

舶來の近代主義は、西洋流であつたから、花鳥風月を除去しようとし、風流は一顧の價もないものとせられたことがある。これは陳腐を動搖せしめるのに利目があつたと僕もおもふ。近時、唯物說の舶載と共に、生產、生產力、生產關係、階級爭鬪といふやうなことが威勢よく叫ばれるやうになつて、そこで勢ひ、花鳥風月の道はひどく輕蔑されるやうになつた。しかしこれもすべての沈滯の氣を破るのに利目があつたと僕はおもふ。

ただ、雁のこゑの感味は、これを直接の感覺にうつたへ、現實のものであると飽くまで理解することによつて、はじめて古人の感情と竝行して行くことが出來るのであらうか。

一日の勞働を終へ、少くも一ときのゆとりを得た時に、それであるから僕等は、雁の一聯を小手をかざして見てゐるミレエの畫境にも參入することが出來るのであつて、これは必ずしももはや一通りの陳腐ではない。況して此處は佛蘭西ではなく、汀の葦に霜のはげしく結ぶ國柄であることを、僕は今思ふのである。

大正十四年の春に、家の燒あとに、鐵道草といふ草が一めんに生え、秋に至るまで感を逞しうしたことがある。鐵道草は舶來の雜草であるから、さういふ名が附いてゐる。一名明治草などといふのもさういふ關係に基づいてゐる。此の草は、春先には細かく柔い愛すべき形をして萌えるが、夏分に五六尺にもなり、花が咲くやうにな

ると極めて風情のないものになつてしまふ。

この草が盛に萌えると、從來の日本にあつた雜草が壓倒されてしまひ、あかざのやうな繁殖力の强い草でも、鐵道草の生えてゐる範圍に及ぶことが出來ない。そのほかの日本從來の草などは、秋ぐちになり、鐵道草の下かげになつて幽かな花をつけてゐるやうな工合である。

ひめむかしよもぎの群落

僕はその頃家財全部を燒いてしまひ、心にひどく苦しんでゐた頃なのでかういふ植物界の繁殖爭鬪のありさまにも心を留めて觀るやうになつた。そこで、その觀察した記事をば或る雜誌に書いた。そのとき僕は、今は鐵道草は、このやうに威を逞しうしてゐるが、ひよつとしたら二たび從來の日本の雜草の方が根づよい力を見せるかも知れない。といふやうな一種の感傷的な言葉を附加しておいたのであつた。

然るに、大正十四年が過ぎ、大正十五年が冬になる頃までは鐵道草は依然として繁茂し、その冬枯れたものを刈取つて、風呂の焚付にしたくらゐであるのに、昨年、つまり昭和二年ごろから何となし鐵道草の繁殖力が減少して來、そこには細かい日本の從來の草が一めんに生えるやうになつた。そこに從來の平凡な、名も無いやうな草も雜つて生えるので、鐵道草の勢はひどく減り、今年卽ち昭和三年のこの冬には、風呂の焚付にするやうなものはつひに見つからなくなつてしまつたのである。

この現象は、若かつたころの幸田露伴翁の趣味であるが、僕といへども是等について趣味のないことはない。よつて一筆書きとゞめておくのである。

一八　風

一　解題

一　本文

「水墨集」中の詩篇で、「岩波文庫白秋詩抄」にも收められてゐる。（水墨集　大正十二年六月、アルス發行）

「水墨集」は、作者の口語體の詩集で、卷頭には序文の代りに新詩論「藝術の圓光」を揭げてゐる。作者の歌集「雀の卵」とともに、感覺的・異國情趣的な絢爛なものから、心境的・東洋的な澄徹したものへの新生の詩集として記念すべきものである。

二　作者

北原白秋。本名は隆吉。明治十八年一月福岡縣山門郡沖端村に生まれた。福岡縣立中學傳習館を中途退學して、三十六年上京、早稻田大學英文科に學び、中途退學した。中學時代から詩歌に親しみ、三十七年始めて詩を雜誌「文庫」に發表し、三十九年新詩社に入り、「明星」誌上に詩歌を發表して同派の新進として認められ、四十二年雜誌「スバル」の同人となり、更に木下杢太郎等と雜誌「屋上庭園」を創刊した。同年處女詩集「邪宗門」を刊行して、頽唐的な異國趣味の象徵的作品を以て詩壇の耳目を聳動し、四十四年幼時の追憶の中に異國的・享樂的な情調を盛つた抒情小曲集「思ひ出」を刊行して全詩壇の推賞を受け、更に雜誌「朱欒」を創刊した。短歌も當時盛に作り、大正二年處女歌集「桐の花」を刊行し、感覺的な抒情歌を以て歌壇的位置を獲得した。三年「地上巡禮」、四年雜誌「アルス」を創刊した。七年童話雜誌「赤い鳥」に始めて童謠を發表し、「とんぼの眼玉」以後幾多の童謠集を續刊して兒童自由詩の新興に力を致し、又、民謠集・小唄集も盛に出版して昭和期に於ける民謠勃興の機運を釀成する等、新天地に力を傾ける一方、詩歌にも依然たる精進を續け、十年刊行の歌集「雀の卵」、十二年刊行の詩集「水墨集」等に於ては、枯淡な東洋的境地をすら示し、「詩と音樂」「日光」「近代風景」等の雜誌を主宰して盛に活躍した。昭和に入つてからは稍沈默の形であつたが、七年に詩の季刊誌「新詩論」及び短歌

北原白秋

の季刊誌「短歌民族」を發刊し、十年六月以後短歌雜誌「多磨」を主宰してゐる。

その作風は語彙の豐富、詩藻の華麗を以て聞え、青年期に於ては浪漫的情感・官能的香氣・異國的情調を盛つて絢爛多彩、中年以後次第に境涯的・寫實的になり、簡古素樸な水墨風に傾いた。著書には、「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」「白金の獨樂」「水墨集」「海豹と雲」等の詩集、「桐の花」「雲母集」「雀の卵」「篁」「白南風」等の歌集、その他童謠集・民謠集・隨筆集等すべて八十數種を數へる。全集十八册も出版され、その後の作品年纂「全貌」も既に第四輯を出した。

二　教材としての研究

一　註解

【目に搖れて】メにユれて　搖れが目に映つて。

【搖られ搖られつ】「搖られつ搖られつ」の略。搖られに搖られてゐる。盛に搖られてゐる。

〔搖られつ〕「搖る」の未然形に受身の助動詞「る」の連用形がつき、更に完了の助動詞「つ」のついたもの。

【そよぐ】戰ぐ　そよ〳〵と音をたてる。そよ〳〵と動く。

【翔る】カケる　空高く飛び行く。

【弧を描けば】（三四二頁「弧を描いて」參照）

【驚きやまぬ】驚のとまらない。

【暗みて】暗くなつて。

【をりふし】折節　(一)差當る時々。その場合々々。(二)丁度その時。折柄。(三)時節。期節。(四)時々。折々。たまさか。たまに。こゝは(四)。

【尾花】ヲバナ　(一)「すすき」の花。秋日、莖頂に多くの長い花莖を抽いて房狀圓錐花序の花穗をなし、各花莖の各節に披針形・黃褐色の小穗を總狀花序に綴り、白色・絹絲狀の總苞毛を多數著生する。護穎は透明質で先端は二裂し、長芒を擔ふ。全體の形が獸の尾に似てゐる所から尾花といつたものである。「花薄」ともいふ。(二)「すすき」の異名。こゝは(一)。（二五二頁「絲薄」參照）

二　解釋

1　主題

どこからともなく吹き來り、どこへともなく吹き去る秋風。

2　構想

(1)　搖れ來る風。

(2)　我を搖り、我を去る風。

(3)　吹く風に搖れそよぐ空翔る鳥。

(4)　吹く風の道に光りまた暗むもの。

(5)　遠く輝く尾花。

3　敍述

〔遠きものまづ搖れて、つぎつぎに、目に搖れて、〕――眼路のはてに何やら搖れる、つぎ〳〵に何やかや搖れて來る。「目に」の二文字が肝要である。

〔搖れ來るもの、風なりと思ふ間もなし、〕――いかにも奇矯な言ひ方のやうであるが、作者の目にはたゞ動くものが動くものとして感じられてゐたのである。それが「風なり」と認識せられた時は、既に自分が搖られはじめてゐる時であつたのである。廣い野に立つて縹渺と心を放つてゐる作者の姿が想起せられる。

〔風吹けば風吹くがまま、我はただ搖られ搖られつ。〕――廣い野に立ち心を放つてゐる作者は、いつの間にか風に搖られてゐる。風に身を任かせてゐる。「我はただ搖られ搖られつ」には風に身を任かせ、風と一體になりきつてゐる作者であることがよく現れてゐる。

〔搖られつつ、その風をまた、わがうしろ遙かにおくる。〕――自然の大きな力の中に身を置いて、しかも我が自然になりきつた氣持が出てゐる。そして吹きゆく風を歌つてゐる。

〔吹く風に搖れそよぐもの、目に滿ちて、……〕――天地間の萬物が一齊に搖れ動いてゐる中に鳥が一羽、吹く風に飛びなづんでゐる。飛んでも〳〵吹かれ〳〵て一直線に飛ぶことが出來ない。下り立たうにも野は野で何處も搖れに搖れてゐる。

〔搖れ搖れて、まだ、空の中。〕――實によく把へてゐる。否、作者自ら飛びなづむ鳥になつて吹かれ〳〵てゐるのである。

〔吹く風の道に、驚きやまぬものあり、〕――「吹く風の道」といへば、いよ〳〵遠く去つた風を見やつてゐるのである。「驚きやまぬもの」は風に動く尾花を未だそれと定めずに寫生してゐるのである。風に特に敏感な尾花をよく把へてゐる。しかも、それをそれといはず、「光り、また暗む」といつてゐる所に、秋の薄暮の光景が具象化せられてゐる。

〔輝けど、そは遠し、尾花吹く風。〕――風の勢につれて鋭く光り輝く。しかしその光は幽遠である。尾花を波打たせながら通り過ぎて行く風に、ゆく秋の夕暮がいかにもよく描寫せられてゐる。

三　批評

連作的な詩で、一つ〳〵がそれ〴〵一篇の詩であると共に、相互に融合と發展を示すものである。寫生ではあるが、象徴のいみじさを極め、主題感動の融合・發展は固より、それ〴〵の格調の變化と統一が完成の域に達してゐる。作者の詩人的價値を最もよく現したものの一つといつてよいであらう。

三　備考

一　指導の問題

(一) 讀みの樂しさは、諧調美によつて、一讀毎に加り來るであらう。五五を主とし、これに五七を交へた音數律は、よく變化と統一とを保つて、親しみと共に新しさをも感銘させる。音數律を的確に生かして讀むことが出來るまで、十分に反復讀誦させることが肝要であらう。

(二) 解釋は、この詩に描かれてゐる景を想像に浮かばせることがその第一段の指導で、その時間的推移に伴ふ發展を辿つて全詩の構想を明らかにすることが第二段の指導、更に、その景が作者のどんな感動の發露であり、象徴であるかを究めることが第三段の指導であらう。換言すれば、敍述から構想・主題といふ方向を取つて學習させることが、適切な順序であると思はれる。

唯、搖れ動くものによつて風そのものを描き出し、風の描出によつて、作者の衷なるものを表現し、象徴してゐる活手段を窺ふことは、この學年の生徒にはまだ困難であらう。さういふ點は他日の自得に任かせる外はないと思ふ。

(三) 批評に當る學習の指導は殆ど不可能で、また不必要であると思はれる。例へば、この作者が詩人として辿つた經路に於て、この詩がどんな位置を占めるかといふ如き問題、日本の詩史に於てこの作者がどんな位置を占めるかといふ如き問題は、日本詩史に關し、詩人としての作者について、精確な把握と認識とを基礎としなくてはならないが、それはこの學年の生徒一般には期待出來ないところである。又、文藝美の體系上に於ける定位の如きも困難であり、まだその要もないであらう。むしろ、さういふものを確立させるときの準備として、この詩から受取られる直接的なるものを、十分に遺漏なく把握させることを以て、指導の眼目とすべきである。それには、何よりも、景律を生かした讀みが學習指導の根幹でなくてはならない。

二　參考資料

(一) 白秋の詩歌に對する態度を「詩歌一家言」中の「詩歌の道」から左に引用する。

わたくしは徒に道を說かうとは思はない。然しながら、詩歌には詩歌の道、文章には文章の道といふものが、おのづからにして無ければならぬことを深く考へる。この道を道として意識する以上に、おのづからにしてまた、この道を樂しむ者のみが眞にこの道を步むものといつていゝ。

身を入れるといふ言葉がある。魂をうちこむといふ言葉がある。詩歌の上にも、文章の上にも我を忘れて樂しみほれるところにこそ無上のよろこびが搖れ動いてくるのである。彫心鏤骨の苦しみといふことも、わたくしたち藝術の徒にとつては、畢竟は藝術の三昧道の樂しみでなければならぬ。あの日も夜も知らぬ胸つまるやうな苦しみの中に却つてわたくしたちの眞の樂しみがあるのではないか。心から樂しみほれて書かれた作品にはその本質から放つところの香氣が直に觀る人の心を撲つ、生采が輝き、氣韻がかをり、品位が兼ね備はつてゐる。言葉そのものの美德が內に深くこもつて外ににほふ。

この道の上の樂しみ無くして書かれた、あまりに無雜な、あまりに焦燥した、あまりに功利的な、またあまりに衒耀された詩歌文章を觀る時に、少くともわたくしたちはよそごとながら何の恥なくしては目を覆はれぬのである。文章の要義はもと〳〵意を達するにあるといふ。然しながら、藝術の道においては、ことに詩歌本來の律格の上に於ては達意以上のより微妙な、より悠容とした、より忘我的なより純粹な、しかもよく省略され、均整され、照應され、統一された朗々たり切々たり淙々たる物でなければ眞のよき作品としては肯はれぬのである。

當代において、眞の道の上の樂しみとして、その作るところの詩歌文章について、眞に樂しみ恍れつつある人が凡そ幾人あるであらう。かの走り書きの雜文、飜譯等のごときは末の末ではあるが、詩人としての感覺はそれ等の跳梁をも拒否するにやぶさかであつてはなるまい。

藝道の樂しみは眞の高い遊びを遊びとしよう。然しながらかうした境涯の上の遊びを樂しむに至るまでには、恐らく多年のこの道の

錬を要しよう。ともするとまた誤られ易いのもこの道である。淫しては趣向に墮ち、技巧偏重の弊はこの樂しみを玩び過ぎる。遊びと玩びとはちがふ。

遊びにもまた階段がある。わたくしたちはわたくしたちの詩魂を最も高い心境の上にあそばせることの樂しみを、最も高いこの道の樂しみとしなくてはならない。

(二) 川路柳虹氏の「詩學」から白秋に就いての評論を拔いて見る。

北原白秋氏はもし明治の詩壇に前期と後期の二期を劃し得るものとすれば後者を代表する最初の人であらうと思ふ。而して有明氏に始まり泡鳴氏を經てきた象徴主義は白秋氏に至つて或る開花期に際した感がある。白秋氏の詩はその傾向から言へばむしろ浪漫的のものである。「邪宗門」に收めた詩は作者の强烈な情緒を畫家が色彩に訴へるやうに文字の上に訴へたものである。たゞその表現が感情的といふより以上に感覺的であることが嚮の有明氏の「春鳥集」以上に或る特殊な印象を與へた。殊に氏の豐富な語彙は今迄の詩に見ない光彩を加へた。白秋氏の特長はその表現に當つて巧みな比喩を多く用ひたことにあるがその比喩が直接官能から官能に訴へる態度——官能交錯の表現に成功したことである。視聽嗅觸の詩官能の聯關作用を以て部分的象徴から全體の情調を想起せしむる手法は北原氏の象徴主義が尠くともその表現の上に有明氏よりも更に複雜な地歩を確立したものと考へられる。

一九　昆蟲の本能

一　解　題

一　本　文

「昆蟲記」(Souvenirs entomologiques)第一卷の中から、第十九章「巣への戻り」(Retour au nid)の大部分を、岩波文庫本(林達夫・山田吉彦共譯)によつて抄出した。

「昆蟲記」(十卷)は、フランスの博物學者ジャン・アンリ・ファーブルがその六十年に近い昆蟲の生態觀察の記錄を、多年に亙つて集大成したもので、第一卷は西曆一八七九年、第十卷は一八八九年に出版せられ、ファーブルの歿後一九二四年にその最後の決定版が完成すると同時に、友人ルグロの執筆した「ファーブルの生涯」が第十一卷として添加された。

「昆蟲の爲に建てられた記念碑」と稱せられるこの書は、箇々の昆蟲の生の祕密に關する驚くべき精細な科學的觀察が、魅力にみちた詩人の筆を以て文學的に敍せられてあると同時に、本能に關する新しい見解、進化論に對する辛辣な批評、生存の調和の法則等が、興趣深く論述されてある。著者が所謂「正規の昆蟲學者」でないといふ批評、科學の觀察と詩人の感傷とが區別されてゐないといふ非難は、屢〻この書の上に加へられるが、今日の昆蟲學乃至は動物心理學・動物生態學等がこの書に負ふ所の甚大であることは何人も認めざるを得ないと共に、あらゆる一般の讀者が內容の興味と行文の流麗とに魅了されつゝ、知らず識らず科學の殿堂に參じ得る意味で、偉大なる科學文學である。現在英・獨等の各國語に譯され、我が國でもアルス版・叢文閣版・岩波文庫版等數種の譯書がある。

二　作　者

ジャン・アンリ・ファーブル(Jean Henri Fabre)。西曆一八二三年(文政六年)十二月南フランスのサン・レオン村(現アヴェロン縣に屬し、ミロー市に近い)の貧しい農家に生まれ、十二歲の時一家と共にロデ市に移住、同地の中學校に入つて苦學した。後各地に轉住、家運衰傾の爲學業を廢し、勞働によつて自活したが、一八三九年プロヴァンスのアヴィニョン

市師範學校給費生の試驗に合格、學課の傍ら好める昆蟲や植物の觀察に耽り、又ヴィルジルの詩に親しんだ。一八四二年卒業、隣町カルペントラスの公立中學校附屬小學校の教師を拜命、餘暇獨學を以て理化學及び數學を修め、モン・ペリエ大學の學士試驗に合格して理科の教員免狀を得、一八四九年コルシカ島のアジャッシオ中學校に物理・化學の教員として赴任した。この間博物學に對する研究欲は年と共に進み、コルシカ滯在中は植物學者ルキャン・博物學者モカン・タンドン等の指導を受けた。一八五二年アヴィニョン公立中學校に轉任、大學教授を志して新に博物學の學士號を得たが、一八五四年昆蟲學者レオン・デュフールの著作（たまむしつちすがりの習性に關する冊子）を見るに及んで、昆蟲の生態研究を以て自己の天職となすに至つた。一八五五年「つちすがり」の習性に關してデュフールの研究を補修せる最初の論文を自然科學雜誌に發表、次いで野生密蜂及び地膽（つちはんみょう）類に關する研究を公にして學士院の賞を受けた。が、地位及び收入は依然として一家の生活を脅したので、化學工業の研究に從事し、紅蔓よりオリザニンを採ることを發明して文部大臣デュルイに知られ、ナポレオン三世にも拜謁したが、人造オリザニンの出現等によつて事業的には失敗、次いでデュルイの贊助の下にサン・マルシャル僧院内に歸人及び一般市民の爲の科學自由講座を開いたが、周圍の蔑視や保守主義者の迫害によつて中絶のやむなきに至つた。よつて一八七〇年多年の教職を拋つて程近いオランジュの町に退隱、青少年の爲の通俗科學教科書の執筆に從事し、幾多の良著を公にした。

かくして、始めて若干の閑暇と財政的餘裕とを得た彼は、多年の昆蟲研究を整理して一八七九年「昆蟲記」の第一卷を世に送り、次いで、オランジュに近いセリニャンの田舍に引退した。爾來三十餘年、絶えざる窮乏と老年の重みと闘ひながら、又、民間學者・反進化論者たる故を以て不當の默殺を蒙りながら、孜々として獨自の研究を積み、一八八九年遂に「昆蟲記」全十卷を完成した。しかも當時の一般讀書界からは何等の注目を受けなかつたが、一九一〇年頃に至つて漸く彼の眞價とその不遇とが世に認められ、全歐洲の同情と讃美がこの「昆蟲の詩人」の上に注がれるに至り、一九一三年には大統領ポアンカレは共和國の讃辭を贈して親しくその居を訪れた。一九一五年（大正十四年）十月歿、享年九十三（満九十）。

三　採擇の趣旨

前二課が夫々歌人・詩人の眼に映じた自然の藝術美の表現であつたのを承け、本課には、科學者の眼によつて觀察せられた自然の科學美の敍說を掲げた。自然觀察の態度やその表現法につき教へられるところが少くないであらう。文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【昆蟲】　コンチュウ　節足動物門、昆蟲綱（Insecta）を形成し、全動物界の四分の三を占める一大動物群。氣管を以て空氣呼吸をなし、普通には陸棲であるが轉じて水棲となつたものもある。體は明瞭に頭・胸・腹の三部に區分せられ、頭部には一對の觸角、三對の口器（大顎・小顎・下顎）、及び通常一對の複眼を有し、胸部は前胸・中胸・後胸の三節に分かれて各節一對づつ合計三對の脚肢（前肢・中肢・後肢）を具へ、又通常中胸に一對の前翅、後胸に一對の後翅があり、腹部は本來は十一節より成る。筋系は飛行に携はる胸部の筋（間接筋）の顯著なるを特徴とし、神經系としては本來十二對の神經節が縱横に聯結した所謂梯狀神經系を有し、消化系は前腸（口部・喉頭・食道・嗉囊・前胃・砂嚢）・中腸（胃）・後腸（幽門囊・結腸・直腸・肛門）の各部に分かれ、中・後兩腸の間にマルピギー氏管なる排泄系が開口してゐる。呼吸系としては一對の氣管が體側を縱走する外、水棲昆蟲では鰓を有するものも多く、生殖系は雄器（睾丸・輸精管・射精管・貯精嚢・附屬腺・陰莖）・雌器（卵巣・輸卵管・受精嚢・附屬腺・産卵管）共に概ね整備してゐる。生育に當つては種々の變態を經るのを通常とし、その完全なるものは幼蟲―蛹―成蟲の順序による。

昆蟲綱の分類は極めて複雜で、種々の分類法があるが、「岩波動物學辭典」に據つて主なる目を列擧すれば、總尾目（しみの類）・粘管目（とびむしの類）・蜉蝣目（かげろふの類）・蜻蛉目（とんぼ・やんまの類）・積翅目（かはげらの類）・直翅目（きりぎりす・ばつた・こほろぎ・けらの類）・革翅目（はさみむしの類）・蜚蠊目（ごきぶりの類）・蟷螂目（かまきりの類）・總翅目（あざみうまの類）・等翅目（しろありの類）・噛蟲目（ちやたてむしの類）・食毛目（はじらみ・けじらみの類）・蝨目（しらみの類）・半翅目（ぼ・ありまき・かめむし・みづむし・まつもむし等の類）・鞘翅目（かぶとむし・かみきりむし・こがねむし・ほたる・こめつきむしその他の甲蟲類）・膜翅目（蜂・蟻の類）・脈翅目（ひめかげろふ・うすばかげろふの類）・毛翅目（とびけらの類）・鱗翅目（蝶・蛾の類）・雙翅目（蠅・蚊・あぶの類）・隱翅目（のみの類）等である。

【本能】　ホンノウ　動物が、その心身の先天的機制により、個體及び種族の保存の爲に、外圏の變化に對して反射的に行ふ合目的性行動。同一の種に屬する總べての個體にはゞ共通であるのを常とし、遺傳的・先天的にその動物に既存するもので、經驗・學習などによつて後天的に獲得せられるものではない。（新しい動物學的解釋によれば、遺傳的に神經の徑路にそなはる總べての能力及び行爲が本能であるとせられる。）個體保存の爲の食欲本能（捕食）・防禦本能（恐怖・憤怒等）の如き、種族保存の爲の交配本能・

哺育本能の如きは、その代表的なものであり、その外高級なる動物には群棲本能（社會形成本能）等が知られてゐる。昆蟲にあつては特に蜂の類に於て本能の複雜さを見ることが出來る。

本能は先天的であるといふ點で智能と區別せられ、又、多少とも意識的作用であり、且、統一的・全體的機能である點で反射運動（同じく先天的ではあるが局部的・無意識的反應）と區別せられる。しかしこれ等の區別を徹底せしめることは困難で、本能の定義に關しては學者間に異見が多い。最も廣い意味では、その動物のあらゆる心身の活動を總括して本能となすことが出來る。（廣し動物の學習の如きも若し局はその先天的機能から發するからである。）

【井戸掘り】　キドホリ　「じがばち」類の雌がその仔の爲に巣穴を掘る作業をさす。

この巣穴は井戸のやうな垂直なもので、「じがばち」は麻痺させた青蟲をその底に納め、その上に卵を産みつけて穴を埋める。卵から孵つた幼蟲はこの青蟲を食餌として成長し、蛹となり成蟲となつて巣立つのである。（參考資料參照）

【じがばち】　似我蜂・細腰蜂　膜翅目、似我蜂科、じがばち屬（Ammophila）に屬する昆蟲の總稱。（俗語には本邦産普通種を「しがばち」といふが、ここでは、しがばち屬一般についていふ。）體形細長く、腹部の第一節及び第二節が極めて細い腹柄をなしてゐるのを特徴とする。體色は概ね黑色。我が國にはこの屬のものとして「じがばち」（*Ammophila infesta*）「たいわんじがばち」（*A. clavus*）「ひなじがばち」（*A. campestris*）等がある。ファーブルの觀察したのは *A. sabulosa*, *A. hirsuta*, *A. argentata* 等である。

似我蜂科の通性として他蟲を捕へて麻醉せしめ、これを巣穴に運んで卵を産附し、孵化後の幼蟲の食餌にあてるが、この屬に於けるその食餌は蝶・蛾の幼蟲即ち青蟲に限られ、昔時この青蟲が蜂に變化するものと誤つて似我蜂の名が附せられたといふ。（即ち、蜂が青蟲を巣に納めて「我に似よ」と祝じて蜂に化せしめるといふ說話を生じた始末である。）（參考資料參照）

【戸締り】　トジマリ　「じがばち」が巣穴を掘り終つて青蟲を狩る爲に出て行く時、假りに石粒で巣穴の口をふさぐことをさす。

但し「じがばち」の中には、この戸締りを行はないものもある。（參考資料參照）

【工事場】　コウジバ　「じがばち」が巣穴を作る工事をしてゐる場所をさす。

ファーブルによれば、この蜂の工事場は、砂が僅かの粘土と石灰とでセメントづけされたやうな、堅固でしかも掘り易い地盤のところにあるといふ。（參考資料參照）

〔工事〕　工作の事業。普請の作業。しごと。

【花から花を追ひながら】　「じがばち」が花蜜を求めて花から花へうつつて行くことをいふ。

「じがばち」「はなだかばち」「つちすがり」等は、その仔には蟲の生餌をあてがふが、自分は主として蜜を吸つて生活するのである。

【青蟲】　アヲムシ　鱗翅類に屬する昆蟲即ち蝶・蛾の類の幼蟲の俗稱。その中體毛の顯著なるものを特に「毛蟲」といつて區別することもあり、又、その特に肥大なものを「芋蟲」と稱することもあるが、これらは外形上の區別にすぎず、廣義にはすべて青蟲の中に含まれる。尙、膜翅類即ち蜂・蟻の類の幼蟲は多く蛆狀を呈するが、その中葉蜂（はばち）科のものだけは形態が青蟲狀なので、一般にはこれをも青蟲と呼ぶことが多い。

ファーブルの觀察した「じがばち」類は多く肥大した青蟲を仔の餌とし、一種だけが小柄のもの（主として「くとりむし」）を選んだといふ。毛蟲を選ぶことは殆どないといつてよい。

「幼蟲」とは、昆蟲の變態の一時期に於ける名稱で、不完全な變態をなす類（蛹期が無く幼蟲から直ちに成蟲となるもの。蚜蝨類・直翅類・半翅類その他）にあつては孵化してから成蟲になるまでをいひ、完全な變態をなす類（幼蟲―蛹―成蟲の順序を經るもの。鱗翅類・鞘翅類・脈翅類・膜翅類等）にあつては孵化してから蛹になるまでをいふ。尙前者を幼蟲、後者を仔蟲といつて區別することもある。

【はなだかばち】　鼻高蜂　膜翅目、鼻高蜂科、はなだかばち屬（Bembex）に屬する昆蟲の總稱。（俗語には本邦産普通種を「はなだかばち」といふが、ここでは、はなだかばち屬一般についていふ。）體形太く、腰部は柄狀をなさず、上脣が三角形に突出してゐるのを特徴とする。（これを鼻と見立てて鼻高蜂の名が附せられたのである。）體は概ね黑く、腹部に淡黃色の縞を有する。我が國にはこの屬のものとして「はなだかばち」（*Bembex niponica*）「たいわんはなだかばち」（*B. formosana*）その他があり、ファーブルの觀察したのは *B. rostrata*, *B. bidentata*, *B. julii* 等である。

鼻高蜂科のものは土中に巣を營み、雙翅類を狩獵して自己の幼蟲を哺育する。（參考資料參照）

【獲物】　エモノ　漁獵で捕り獲たもの。

こゝでは、仔の食餌として狩り取つた「獲物」で、「はなだかばち」の場合は雙翅類である。（二九〇頁「雙翅類」參照）

【擔いで】　カツいで

〔擔ぐ〕　普通重い物を肩の力で運ぶにいふが、こゝでは、蟲が重い荷を運ぶのを、上に獲物とあるのに應じて擬人化していつたもので、實際には、「はなだかばち」は獲物を腹の下、肢の間に抱へ込んで運ぶのである。

【砂で塞がれて云々】

「はなだかばち」は「じがばち」と違つて、さら〳〵した砂地、掘るあとから緣の砂が崩れ込むやうな所に巣穴を作る。隨つて石の蓋などは必要としない。（參考資料參照）

【玄關口】ゲンクヮンゲチ　巣穴の入口に當る部分をさす。

【びたりと】こゝでは、間違なくちやうどそこへ、の意。〔びたり〕「ぴつたり」（一四五ノ五）に同じ。（一）遽に止るさまにいふ。（二）物の密著するさま、又はよく適合するさまにいふ。（三）ちやうど出逢ふさまにいふ。

【一瞥】イチベツ　ひと目見ること。ちらと見ること。「瞥」は、ちらりと見る。ちよつと見る。

【記憶】キオク　或經驗が銘記せられ、或時間の間把住せられ、何等かの原因の下に再生せられる作用をいふ。

【方位感】ハウキカン　方位に關する感覺。

こゝでは、昆蟲が直觀的に土地の方角を知る感覺をいふ。これは特に蜂と蟻とに發達してをり、最近の研究に據れば、視覺及び嗅覺に基づく記憶であるとせられてゐる。

尙「じがばち」は、巣穴を掘り終つてから、その入口の上を螺旋形に飛び始めるが、これは「方位決定の飛行」と呼ばれ、これによつて入口附近の地形を判然と記憶するのであらうと、現在ではいはれてゐる。

〔方位〕（一）方角。（二）陰陽及び五行相剋の理に基づき、方角の吉凶を判じ人事の禍福を鑑定すること。

【能力】ノウリヨク　（一）仕事をなし得る力。はたらき。（二）精神が一定の作用をなし得る性能。こゝは（二）。

【昆蟲心理學】コンチユウシンリガク　昆蟲の心理的生活に關する學、の意。動物心理學の中に含まるべきもので、昆蟲心理學といふ獨立した分科があるのではない。

ファーブルはこの種のユーモラスな新造語を好んで用ゐる癖があつた。

「動物心理學」は、特に實驗的方法を用ゐて、人以外の諸動物に於ける心理的事實を研究し、且動物界を通じて反射作用の階梯から漸次意識作用・理解能力に至るまでの發達行程を追究する學。

【この點に幾らかでも光明を投じようと】この點を幾らかでも明らかにしようと。

〔投ずる〕こゝでは、與へる、の意。

【一わたり】一通り。一應。

【こぶつちすがり】瘤土棲蜂　膜翅目、土棲蜂科、つちすがり屬の一種（*Cerceris tuberculata*）。歐洲產の象鼻蟲類を狩獵する大形の「つちすがり」である。

つちすがり屬（*Cerceris*）のものは小形の蜂で、頭部は四角形を呈し、腹部の節間がくびれてゐるのを特徵とする。土中に巣穴を營み、蜜蜂類又は甲蟲類（たまむし・さうむしその他）を狩獵して幼蟲の食餌とする。我が國にはこの屬のものとして、「つちすがり」（*Cerceris harmandi*）（「ひめはなばち」類を狩獵）「あかあしつちすがり」（*C. navitatus*）（「ひめかはむし」類を狩獵）「まるもんつちすがり」（*C. japonica*）（「ひめはなばち」類を狩獵）「きすぢつちすがり」（*C. quinqueeincta*）（「くちたんさうむし」類を狩獵）などが知られ、ファーブルの觀察したのは、「こぶつちすがり」の外、*C. buprestioida*, *C. quadricincta* その他である。（參考資料參照）

【同じ傾斜地の上、同じ部落で】

ファーブルはこれに就いて「このつちすがりの間には共同生活らしいものは少しもないのであるが、彼等は好んで小部落を作る。私がその巣を見た時にも、いつも十ばかりが一群をなしてゐた。そしてその巣の入口も、多くの場合にはかなり離れてゐるが、時には一つになる位に接近してゐた」と記してゐる。後に「共同敷地」（一四一ノ五）とあるのも、この巣の群落をさすのである。

〔部落〕ブラク　未開民族などの集團。民家のあつまり。むら。村落。

「落」は、人のあつまり。むら。

【巣穴】スアナ　穴をなした巣。穴狀の巣。こゝでは、蜂が仔を育てる爲に地中にうがつた穴をいふ。

巣穴の場所や形式は蜂の種類によつて異なるが、ファーブルの觀察した「こぶつちすがり」の巣穴は、垂直な場所、即ち崖になつた道路の斜面や凹地の横腹などの雨に掘られた砂岩の窪みを選んで（砂岩の突起などがあればそれを玄關の庇として）作られ、坑道は初め水平に、後急に曲つて右か左へ多少なゝめ下へ掘り込まれ、深部は種々に曲折して、全長半米にも達する。

【庫入れ】クライれ　庫の中にをさめること。こゝでは、「こぶつちすがり」がその仔の食餌である甲蟲（さうむし）を、巣穴の坑道の奥に貯藏することをいふ。

坑道の奥にはさのみ廣くない部屋がいくつかあつて、各部屋に五六匹の麻痺させられた甲蟲が貯へられ、その一匹に卵が產みつけられるのである。（參考資料參照）

【いそしんで】せつせと働いて。つとめはげんで。

【敷地】シキチ　或用途にあてた土地。使用に供する一區域の土

地。こゝでは、巣穴の營まれる箇所。

【不變色の繪具】フヘンショクのエノグ　色の變らない、若しくは色の褪せない繪具、の意。

ファーブルが如何なる繪具を用ゐたかは明らかでないが、現在普通この種の實驗にはエナメルなどが用ゐられてゐる。

【眩しい】マブしい　光が烈しく眼を刺激して、正視し難いさま。目映い。

【前附】ゼンプ　前肢の附節。（二九一頁「附節」參照）

前肢を用ゐて目をこするやうな所作をするのは蜂類の習癖の一つで、清潔動作などと呼ばれてゐる。

【共同敷地】キョウドウシキチ　（前頁「同じ傾斜地の上、云々」參照）

【つちすがり】こゝでは、「こぶつちすがり」の略。（尚、「すがり」は蜂の一種の古名であるといふ。）

【ざうむし】象鼻蟲　鞘翅目、象鼻蟲科（*Curculionidae*）の昆蟲の總稱。種類頗る多く二十萬種以上と推算されてゐるが、すべて小形乃至中形の甲蟲で、大體橢圓形をなし、體表面が頗る硬い。口吻は著しく突出してその先端に嚙咬式口器があり、觸角は十乃至十一節位で、その第一節は甚だ長くて膝狀に曲つてゐる。完全に草食性で花・實等の害蟲が多く、こくざう類の如きは穀物に大害を與へる。幼蟲は土中に在つて草木の根を食害し、時に室中に蝕入する。「まつざうむし」「こくざう」「はすぢざうむし」「りんごはなざうむし」「おとしぶみ」「ちょっきりざうむし」等は本邦產普通種である。

ファーブルの觀察した「こぶつちすがり」が仔の餌として狩獵した「ざうむし」は、一二の例外を除いて、全部 *Cleonus alternans* といふ一種であつたといふ。

【やりおほせた】

〔やりおほせる〕なし遂げる。

「おほせる」は、果す。遂げる。終へる。

【とつくに】既に。とうに。早く。前に。

【多かれ少かれ】多いにせよ少いにせよ。多少にかゝはらず。

「かれ」は「かり」（「くあり」の約）の命令形で、事實を讓步的に認めて、それに拘束されない意を表す。「晩かれ早かれ」

【材料】ザイレウ　こゝでは、實驗材料、の意で、「つちすがり」をさす。

【隣町】トナリマチ　當時ファーブルが住んでゐたアヴィニョンの東北二四粁の所に在るカルペントラスの町。

「アヴィニョン」は南フランスの所謂プロヴァンス地方のローヌ河に臨む名邑で、ヴォークリューズ縣に屬し、往昔ローマ法王の居住した地として著れ、十八世紀末までは法王領となつてゐた。ファーブルにとつては第二の故郷ともいふべき地で、前後二十年の間居住し、これを中心にカルペントラス・オランジュその他の隣接町村に於て野外觀察を行つた。尙、ファーブルが始めて教師として赴任したのはカルペントラスの町であつた。

【家並】ヤナミ　（一）家の並び方。又、その並んだ家。（二）家ごと。毎戸。こゝは（一）。

【地平線】チヘイセン　こゝでは「實視地平線」の意で、我々が日常經驗する景色の涯、卽ち天と地又は天と海との接する境界線をいふ。（三八頁參照）

【辿つて】タドつて

〔辿る〕（一）知らない路をたづねながら行く。（二）すぢみちを追つて行く。こゝは（二）。

【目標點】モクヘウテン　目あてとするところ。

【行手を標識づけてくれる】前途の道しるべをしてくれる。

〔標識〕ヘウシ・ヘウシキ（「ヘウシ」が正しいが一般には「ヘウシキ」とよむ）しるし。めじるし。

〔づける〕「つける」（他動、下二）の連濁。こゝでは、名詞と複合して、添へる、與へる、の意を表す。「力づける」「基礎づける」

【味い】こゝでは、知性の働きのない見當外れな、の意。

【幼蟲】エウチュウ　（二八三頁「青蟲」參照）

「はなだかばち」の幼蟲をさす。

蜂類の幼蟲は、葉蜂の如き原始的のものを除き、概ね蛆狀をなし、頭部はやゝ退化し、外肢は全く失はれてゐる。蓋し、食物中に埋れて生活するに適した體制である。尙、蜂類の幼蟲は、原始的のものは草食、「じがばち」「つちすがり」「はなだかばち」の如く中間的のものは肉食、蜜蜂類の如き高級のものは蜜食であつて、體制もこれに伴なつて青蟲狀から次第に蛆狀となり、蜜蜂類に至つては頭部も著しく退化してゐる。

【食料補給】ショクレウホキフ

「じがばち」「つちすがり」などは、仔の食料となるべき青蟲や甲蟲を十分多量に巣穴に納め、その中の一つに卵を產みつけてそのまゝ穴をふさいでしまふが、「はなだかばち」は、小さな雙翅類一匹に卵を產んで穴に納め、卵が孵つてその一匹を食ひ終る頃、更に新しい雙翅類を運び、かくして、仔が成長し終るまで、この食料補給が繼續されるのである。（參考資料參照）

〔補給〕不足をおぎなつて與へること。

【獲】レフ　こゝでは、「はなだかばち」が雙翅類を襲つてこれを捕

殺するのをいふ。（參考資料參照）

【後退りに掃いて】

「はなだかばち」の巣の入口は、自然に砂にふさがれるやうに出來てゐる（二八三頁「砂で塞がれて云々」參照）が、それだけでは他蟲に發見される虞があるので、巣を離れる際には用意周到に後肢で砂を掃きならしておく習性がある。

〔後退り〕　アトシザリ・アトジサリ　後方に退くこと。

【勘】　カン　直覺又は第六感と同義で、經驗や理由による間接的・概念的認識に對する直接的・具體的認識をいふ。又、往々骨（こつ）の意にも用ゐられ、意志動作の反復練習による機械化・自動化の體驗的事實をもいふ。

勘は、それが直接的作用であり、先天的能力の發現たる趣を呈する點に於て、本能的性質を具有する。

尙、佛原文ではこゝに tact といふ語が用ゐてあるが、これは一般には「觸覺」「機才」「氣轉」などと譯される語である。

【魂膽を凝らして】　コンタンをこらして　いろ〳〵と策略をめぐらして。

〔魂膽〕　(一)たましひ。きもだま。(二)ことわけ。わけがら。入りくんだ事情。(三)たくらみ。策略。計畫。

〔凝らす〕　(一)凝るやうにする。固める。(二)密せあつめる。集注する。

【掌】　タナゴコロ・テノヒラ

【平石】　ヒライシ　表面のたひらな石。

【潛り込んで】　モグりコんで

【層】　ソウ　(一)たかどの。高樓。(二)かさなり。(三)だん。こゝは(二)。

【色合】　イロアヒ　色の工合。色の程度。いろざし。色調。

【看て取りはしまい】

〔看て取る〕　見る。みとめる。見定める。見とゞける。看ぬく。看破する。

【廻廊】　クワイラウ　長く折れ曲つた廊道。（二九〇頁「廊道」參照）

「はなだかばち」の巣穴を隱蔽してゐる砂を除くと直に入口の支關が認められ、それから二〇—三〇糎位の間、眞直の又は迂曲した廊道があつて、その奥に仔と食餌を置く房室がある。廊道の大部分は崩れ込んだ砂でふさがつてゐるが、奥の房室の天井は土崩れのしないやうに漆喰のやうなもので塗り上げられてゐる。母蟲はこの廊道の砂中を自由に潛りぬけて出入するのである。

【エーテル】　Äther（獨）　英語では「イーサー」(ether)。二箇の炭水素基が酸素一原子と結合したものの稱であるが、一般にはエチル・エーテル（$C_2H_5OC_2H_5$）をさす。こゝは後者。

「エチル・エーテル」は、比重〇・七三一の無色で流動し易く蒸發し易い液體で、蒸氣は麻醉性を有する。水に（又水を）少しく溶解し、アルコールとは任意の割合で混和する。重要な溶劑として用ゐられ、又アルコールと共にホフマン氏液を作つて麻醉藥に供せられる。蒸發し易い爲にその蒸氣が強く鼻をついて匂が高い。

【苔の褥】　コケのシトネ　苔の敷物。

〔苔〕　蘚苔類の植物の總稱。水濕の地に群生する小形の隱花植物で、組織も多く簡單。獨得の世代交番をなし、有性世代（配偶植物體）は大形、無性世代（造胞植物體）は小形で、後者が一生前者に寄著して離れることのないのを特徴とする。蘚類（「すぎごけ」「みづごけ」「しの」「ぜにごけ」「つのごけ」「むかでごけ」等の類）と苔類（「ぜにごけ」「つのごけ」「むかでごけ」等の類）とに分かたれる。尙、廣義には「うめのきごけ」「はなごけ」等の地衣類や羊齒類中の「ほらごけ」等も苔と稱せられる。

〔褥〕　すわり又は寢る時に下に敷く物。しきもの。

【蒸氣】　ジョウキ　液體又は固體から蒸發（氣體化が表面に於てのみ行はれる現象で、固體の場合は特に昇華と呼ばれる）によつて生じ、その液體又は固體と平衡を保つて存在し、若しくはこれと同時に考察に入れられる氣體をいふ。例へば水蒸氣・硫黃蒸氣等。

【障碍物】　シャウガイブツ　障碍となるもの。じやまもの。

「碍」は、「礙」の俗字。さまたげ。じやま。妨害。

【感覺の座】　カンカクのザ　感覺の本據。感覺器の在る場所。

〔感覺〕　生物學的には、すべて外界よりの刺激を感じてこれに應ずることで、植物には稀に、動物に於て著しい現象。これを感ずるのは感覺器で、それより知覺神經を通じて知覺中樞に傳はり、これに應ずる反應が現れるのである。光に對する視覺、音に對する聽覺、臭に對する嗅覺、味に對する味覺、溫度に對する溫覺又は冷覺、壓力に對する壓覺（觸覺）、重力に對する重力覺等は、その主なるものである。

〔座〕　こゝでは siège（佛）の譯語で、中樞、本據、所在、といふほどの意。

【觸角】　ショクカク　多くの節足動物卽ち甲殼類（蝦・蟹・ふなむし・みぢんこ等の類）・多足類（むかで・げぢげぢ・やすでの類）・昆蟲類等に存する有節の外肢で、體の最前端に生じ、嗅官器・觸官器等の感覺器を有する。その形態は極めて多種多樣で、膝狀・棍棒狀・櫛齒狀・絲狀・數珠狀・剛毛狀等

をなす。

昆蟲類では觸角は頭部に必ず一對ある。蜂類(膜翅目)のそれは膝狀を呈し、數多くの節から成り、その表面には無數の感覺孔が散在して末端に感覺器を具へ、これに神經が來通してゐる。最近の研究によれば、この蜂類の感覺器群は專ら嗅覺のみを司どるものの如くである。

【たつぷり】(一)滿ち溢れる程。十分。澤山。(二)餘裕の十分あるさま。こゝは(一)。

【見地】ケンチ　見るところ。考へるところ。觀察若しくは論斷の立脚地。

【裸出】ラシュツ　物に蔽はれず、外部にあらはれ出ること。むきだし。露出。

【溝】ミゾ

もと地下にあつた廊道が露出して細長い溝狀の窪みとなつたのである。(二八八頁「廊道」參照)

【行き止り】ユきドマり　ゆく手の塞がつてゐること。行きぬけの出來ないこと。又、その所。ゆきづまり。

【幼蟲は食物の眞中に云々】

卵から孵つた蜂の幼蟲が、次々に補給される雙翅類の食餌の食

ひさしや殘骸と同居してゐることをさす。

【母蟲】ボチュウ　「はなだかばち」の雌をさす。

【裸蟲】ハダカムシ　蛆狀をなしてゐる「はなだかばち」の幼蟲を形容していふ。(二八七頁「幼蟲」參照)

【廊道】ラウダウ　廊下のやうになつてゐる道。廊下道。

【空虛】クウキョ　內部のむなしいこと。何もないこと。から。うつろ。

【懸命】ケンメイ　「一所懸命」の略。一心不亂。いのちがけ。力いつぱい。

【地殼】チカク　(一)地の上層面。(二)地殼。こゝは(一)。

【出くはす】「出食ひ合はす」の約轉。ふと出會ふ。はたと逢ふ。

【確乎】カクコ　たしかなさま。固くて動かないさま。

【半暗渠】ハンアンキョ　こゝでは demi-canal (佛) の譯語で、管になつてゐる暗渠の上半を取去つたもの、といふほどの意。

〔暗渠〕地下を通る溝。地下溝。

【强情】ガウジャウ　我意を張ること。固く執つて動かないこと。かたくな。

【探索】タンサク　さぐりもとめること。さがしたづねること。

【雙翅類】サウシルキ　昆蟲綱、雙翅目(Diptera)を形成する群。

蠅・虻・蚊等の類で翅は腹質の前翅一對のみを有し、後翅は變形して棍棒狀の突起(平均瓣と稱し、飛翔の際(翅の平均を保つに役立つ)となつてゐるのを特徵とする。口器は多く吸口式で、虻・蚊・蚋の如く雌の吸血するものが少くない。又、家蠅の如く人家に入つて食品を舐食するもの、食蟲虻の如く好んで他蟲を捕食するもの、動物に寄生し(寄生蠅)又は植物を害するもの(瘤蠅)等を含み、人生に重要なる關係を有する。變態は完全變態で、幼蟲は所謂蛆である。

「はなだかばち」類が幼蟲の食餌に供する雙翅類は、各種の蠅又は虻の類である。

【手に取るやう】極めて近く又は明瞭に見え又は聞えるさまにいふ。手に取るばかり。

【苦悶狀態にある】

地中の暗所に生活すべき蜂の仔が急に光と熱とに曝されてもがき苦しんでゐることをさす。

【さしあたり】差當り　今この場合。まのあたり。現に。さしむき。さしあたつて。

【土塊】ドクワイ　土のかたまり。つちくれ。

【搖籃】エウラン　幼兒を入れ、搖り動かして慰め又は寢つかせるかご。ゆりかご。

こゝでは、幼蟲の置かれてある房室をさす。

【死力】シリョク　ありたけの力。必死の努力。死物狂ひの力。

【愚昧な母性愛】グマイなボセイアイ　智慧の働きのない母性愛。

〔愚昧〕物の理に昧いこと。おろか。

〔母性愛〕母親としての愛情。母親らしい愛情。

【揚句】アゲク　「擧句」「上句」とも書く。(一)連歌の下の七七の二句。(「發句」に對する。)(二)轉じて、をはりに。するに。しまひに。とゞのつまり。結句。こゝは(二)。

【容赦なく】ヨウシャなく　手加減せずに。遠慮なく。假借なく。

【開鑿】カイサク　きりひらくこと。掘り穿つこと。

「鑿」は、うがつ。掘る。開く。

【無慙】ムザン　(一)佛語。惡をなして自ら心に慙ぢないこと。轉じて、亂暴なこと。殘酷なこと。むざう。(二)いたはしいこと。ふびんなこと。こゝは(一)。

「慙」は「慚」にも作る。はぢる。面目なく思ふ。

【節節】フセツ　昆蟲類の肢の節のうち、根元から數へて第五番目即ち最後の節に當るもの。普通三乃至五節の小節に分かれ、末端に爪がある。歩む時他物に接する部分である。

【翅鳴】シメイ　翅の鳴る音。昆蟲が飛ぶ時、その翅の震動が甚だ

速い爲に一種の音が聞えて來るのをいふ。

蜂の類ではどの種でもこの音が聞かれるが、「はなだかばち」類はそれが特に大きいので有名である。

【本能の諸行爲のつながり】本能にもとづいて行はれる相聯結した行動の系列。即ち、個々の行動が切り離し得ない一定の聯鎖を以て本能的になされることをいふ。

「行爲」は、人間の目的活動をいひ、本質的に意志を伴なふ。隨つて單なる本能的行動や反射的運動は行爲とはいひ難いが、ここでは、廣義に、ほゞ「行動」と同意義に用ゐたものと見做すことが出來る。

【第一の行爲】諸行爲のつながりのうちの最初のもの。こゝでは、戸口を搜し出すといふ行爲。

原文ではこの直ぐ前に次のやうな省略がある。

結局に於て、「はなだかばち」は何を求めてゐるのか。云ふまでもなく幼蟲だ。だが、この幼蟲のところへ行くには巢穴にはいらねばならぬ。この巢穴に入るためには、先づ戸口を搜さねばならぬ。そして明け擴げられた廊道を前にし、その食料を前にし、幼蟲そのものを前にして、母蟲はこの戸口の搜索に掛り切つてゐるのだ。云々

【智力】チリョク　智慧のはたらき。智能。知能。

智能は、一般には認識及び理解の能力、又は思考及び判斷の能力をいふが、又本能に對して用ゐられ、本能が一定の境遇に對して一定の反應をなすに止る行動形式であるのに反し、普通と異なる境遇に對して新しい反應形式を創始する能力をいふ。

【深淵】シンエン　ふかいふち。大きな距たり。

【佇みつくして】何時までも〳〵たちどまつて。

「つくす」は、終まで達する、の意。

挿圖「こぶつちすがり」「昆蟲記」原本(Souvenirs Entomologiques, Edition definitive illustrée)第四章の挿畫より複寫。

挿圖「はなだかばち」同書第十八章の挿畫より複寫。

二　解釋

1　主題

實驗によつて明らかにせられる昆蟲の方位感の確さと、その限界。

2　構想

(1)「じがばち」や「はなだかばち」の有する方位感の觀察。(初―一四〇ノ二)

(2)「こぶつちすがり」の方位感についての實驗。(一四〇ノ三―一四四ノ三)

(3)「はなだかばち」の方位感についての實驗。(一四四ノ四―終)

イ　その能力の鋭さ、正確さ。

ロ　常の條件から離れた時の昧さ。

3　敍述

〔……ちやんと戻つて來る。〕――「じがばち」の記憶の確さに驚いてゐる語である。

〔……いつもぴたりと降り立つ。〕――「はなだかばち」の記憶の確さに感歎してゐる語である。「ちやんと」といひ、「ぴたりと」といふ語が、彼等の有する機械的正確さをよく言表し得てゐる。それと共に、それに魅せられたやうな作者の驚異を言表してゐる言葉である。

〔いはば昆蟲には、我々にはそれに似寄つたものもない一種の方位感、私が假りに記憶と呼んでおく一つの能力があるともいへよう。〕――敍上の如き觀察は作者にかくの如き昆蟲の能力を發見させた。作者はこの發見を實驗的に立證し、且その眞相を究めようとする。

〔この蜂は、いろんな方向に向かつて一寸飛び立ち、草の葉の上に足を留め、太陽が眩しいのか、暫く前脚で眼をこすつてゐる。それから、少しも迷はずに、南の方彼等の住居の方向を指して急ぐのだつた。〕――觀察が具體的である。觀察者が「こぶつちすがり」になつてゐるかのやうな觀入の深さが自然に出てゐる。

〔明くる日私が巢穴を訪問すると、胸に二重の白點をつけた「つちすがり」が五匹、何の變事も起らなかつたかのやうに、工事場で元氣よく働いてゐた。〕――作者の觀察の深さは、自然に擬人化的傾向を伴なひ、「つちすがり」が今にも挨拶でもしさうな恰好に描かれてゐる所に、異常な親しみを覺えさせる。

〔裸蟲に戸口、それがこの問題に於ては別々に考察されなくてはならないと思はれる二つの點だ。〕――さすがに科學者の觀察である。かくの如き目的的な用意がなければ實驗といふことは行はれないのであらう。目的が明確にせられ、用意が周到に行はれて始めて結果に於ける曖昧が除かれるのである。

〔地面といつても、それはいつも出入り口がある筈の場所の極く近くだけだ。「戸口はそこにあるのだ、餘所にはない」といふ彼の確信は、それ程確乎たるものだ。〕――戸口問題の觀察である。いかにそれが方位的正確さであるかを示す觀察である。これにつづく「そこで又强情に探索を續ける」もそれを痛々しいまでに印

象させる。

〔幼兒の搖籃に行くために死力を盡くしてゐる母親にとつて、今必要なのはたゞ單なる出入り口だけだ。息子は眼の前で太陽に燒かれてゐるのに、母蟲は今は存在してゐない通路を探すことしか考へてゐない。〕――「はなだかばち」の生活を人間生活で照らして見ると恐るべき不合理がある。そこに深刻な悲劇的事實が見出される。

〔この愚昧な母性愛を前にして、私はたゞ驚くの外はなかつた。〕――作者は人間生活に照らして痛歎してゐる。彼等には目的とか手段とかいふものがないのだ。たゞ機械的――それほど固定しきつた動きにすぎないのだ。つまりわれ〳〵人間に見る如き意味に於ての母性愛といふものがないのだ。今までの驚異すべき正確な能力に感歎した作者は、その故にまた痛歎すべきこの事實を認めざるを得なかつたのである。

〔これが本能の諸行爲のつながりである。〕――「はなだかばち」の行爲を全體的に關聯して考察すると敍上のやうな結論が出て來るといふのである。

〔本能と智力との間には、何といふ深淵が橫たはつてゐることであらう。〕――本能はその確實さに於て驚異に値する。それだけに適應の自由さがない。その點に於て智力と對照せられる。そして益〻本能の本能らしさが闡明せられる。

三　備考

一　指導の問題

三　批評

科學者であり藝術家である作者の面目はこれだけの文の上にも躍如として示現せられてゐる。作者は昆蟲の本能に驚異し、感歎してゐる。けれどもそれを讃美しようとして觀察してゐるのではない。又これを輕蔑しようとして實驗してゐるのでもない。本能の眞相を明らかにし、その限界を明確にすること、それが作者の目標である。しかもさういふ科學的研究を藝術家の歡と驚とをもつて行つてゐる所に、この文の特殊な意義と價値がある。

雌草の觀察に科學的考察が加ることによつて文藝的意義の閃を示した前課についで、昆蟲の觀察・實驗によつて科學的研究を遂げることに卽して、文藝的個性を發揮した本課を學習させることは、自

然でもあり、興味も深いことと思はれる。

問題はあくまで科學的である。方法も亦科學的である。が、表現が著しく文藝的である。しかも科學的性格に卽して發揮せられてゐる文藝的である。

隨つて問題の提出と、それの追求の仕方はあくまで科學的である。觀察に於て、方位感を本能として把握すると、それの眞相を闡明する爲に、さま〳〵な實驗が試みられる。しかもその一つ〳〵が獨創的で新鮮だ。そして又、實驗の結果についての說明が的確で、明快で、且深い。讀者は「はなだかばち」の事を讀みつゝ、いつか人間の事を考へさせられてゐる。

これがファーブルの表現の性格である。しかしこの次序を顚倒してはならない。例へば昆蟲の本能の確さを明らかにすることによつて、それが確であればあるほどそれには昧い一面が伴なふことを示してゐる。それはやがて智力の明るさといふものを讃美し、感謝したい氣持に導きはする。しかしそれはあくまで、本能の意義と限界とが究められることによつて暗示せられる意義に過ぎない。隨つて、逆にファーブルその人が人間の智力を讃美しようとした爲に昆蟲の本能の愚昧さを描いたと解したならば、誤つた理解に陷る外はない。そこに指導の肝要な問題が潛んでゐる。

國語學習の指導は科學と文藝とを妥協させることではないと共に、科學を道德の手段に利用することでもない。科學を科學として理解することが眞の學習であることを明らかにすべく指導すること、が眞實な任務でなければならぬ。そしてそこに潛む科學的な美に觸れさせることが出來れば、その任務は完了する。かういふ科學的な文の指導は、科學的に徹しさせることによつてのみ國語學習の目的が達せられるであらう。

その他、前課・本課・後課を通じて、作者の態度に科學的・文藝的の差こそあれ、自然・人生に對する觀照の誠實さに於て一貫したものが存することが學習せられなくてはならぬであらう。

二　參考資料

「つちすがり」「じがばち」「はなだかばち」の習性については、昆蟲記第一卷の第三章「たまむしつちすがり」(Le Cerceris bupresticide)・第四章「こがねつちすがり」(Le Cerceris tuberculé)・第五章「殺しの達人」(Un savant tueur)・第十五章「じがばち類」(Les Ammophiles)・第十六章「はなだかばち類」(Les Bembex)・第十七章「雙翅類狩り」(La chasse aux Diptères)・第十八章「寄生者―繭」(Un parasite.―Le cocon)に於て、それ〴〵詳細な觀察記錄があり、本文はその次(第十九章)に記述されてある。隨つて、本文

を正しく理解する爲にはそれ等各章の知識が必要であるから、左にその要點を摘錄する。（引用符『』で包んだ箇所は昆蟲記巢文の譯出）

「たまむしっちすがり」の章は、ファーブルに志向上の一轉機を與へたレオン・デュフールの論文を紹介したもので、*Cerceris bupresticida* といふ學名をもつたっちすがりの一種の習性が記錄されてある。このっちすがりの雌は、各種の美しい玉蟲を、樫や松の林から無造作に探し出して來て、これを豫め作っておいた巢穴に運ぶ。巢穴は日當りのよい緻密な固い地盤を選んで掘られ、その坑道は入口から遠くない所で肘形に曲り、その奥に各自獨立した五つの房室が半圓形に並んで作られる。各室には玉蟲三匹が藏められ、母蜂はこの中の一匹に卵一つを產みつけてから、巢穴の口を土で塞いで立去つてしまふ。やがて卵は孵化して幼蟲となり、順次三匹の玉蟲を食餌として成長した後、房室内で蛹に化し、更に成蟲（蜂）となつて巢立つのである。

デュフールは、この蜂の埋めた玉蟲が實に綺麗で新鮮であるのに驚き、又『花の蜜だけで生きてゐるこの蜂が自分では決して見ることのない肉食の子供達の爲に』幹の深部に所要の玉蟲を藏する樹木を識別する能力を歎稱した後、『地中にいけてある玉蟲は（中略）全く生命のしるしがない。一言でいへば確に死んでゐるのだ。然るに驚いたことには、それをいつ掘り出して見ても、極めて鮮な色艶を保存してゐる。ばかりでなく、その手足も觸角も、觸鬚も、又體の各部を繋ぐ膜も、すべてしなやかでよく屈曲する。缺け損じもなければ傷の痕もない。（中略）私はこの採集の時に掘り出した多くの玉蟲を、別々に紙漏斗へ入れたまゝ三十六時間もほっておいてから、針で刺したことも度々あつた。しかも、七月の乾燥した空氣と燦くやうな暑さにも拘らず、常に關節はしなやかであつた。ばかりではない、これほどの時間が經つた後でその幾匹かを解剖して見たが、その内臟は、まだ生きてゐる體へメスを刺し込んだかのやうに、完全に保存されてゐた。私の長い經驗では、これと同じ位な大きさの昆蟲でも、夏だと、死後十二時間經てば内臟諸器官は乾燥又は腐敗して、形も構造も解らなくなつてしまふ。故にっちすがりの殺した玉蟲には、一週間も又は恐らく二週間も乾燥や腐敗を免れ得る何か特別な事情があるのだ。が、事情とは一體何であらう』と疑問を提出し、一種の防腐液が注射されるのではないかと推測してゐる。

ファーブルはこの論文を見て非常の興味を感じ、『自分も亦っちすがりの仕事に出會ふ機會を窺つてゐた』が、當時彼の居住してゐたアヴィニョン地方には「たまむしっちすがり」は稀であつたので、『この蜂と同屬ではあるが、もつと粗末な餌食で滿足してゐる巨大な誘拐者、っちすがり類の中では最も大きくて丈夫』な「こぶっちすがり」（*Cerceris tuberculata*）が研究の對象とされた。

このっちすがりは、九月の中旬から下旬にかけて、好んで垂直な崖のやうな所を巢穴の敷地に選び（地盤はあまり間隙にせず、乾燥して日當りがよければよい）、秋期の雨に備へる爲『堅い砂岩の板が軒蛇腹の恰好に突き出てゐたり、拳の入る位の穴が砂中に自然に掘られてゐたりすると、それを住家の自らなる玄關として』その庇の下や穴の奥に坑道を掘る。即ち、交配を終へた雌蜂達（雄蜂は全く孵化しない）は、『穴の奥の方から根氣よく砂利粒を噛み取つて來てその重い塊を外へ押し出し』たり、『踏節の鋭い熊手で廊下の壁を引掻きながら除土（けつち）の堆（にほ）を拵へて、それを後退りに外へ掃き出し、長い埃の流れのやうに斜面の上へ流し』たりして、營巢作業に從ふ。「こぶっちすがり」は共同生活は營まないが好んで同じ場所に巢を作る。又他のっちすがりと異なり、去年の蜂の古巢を利用する。坑道は拇指ほどの太さで、最初一〇―二〇糎位までは水平（巢の斜面には垂直）、それから急に肘のやうに曲つて、右又は左へ多少なゝめ下に掘り込まれ、地質次第で種々に迂餘曲折してをり、一番奥にあまり廣くない部屋が幾つか作られてゐる。穴の全長は約半米。

さて今度は狩獵であるが、このっちすがりが子供の食餌として狩るのは、同じく鞘翅目の昆蟲（甲蟲）ではあるが、玉蟲類ではなく象鼻蟲（ざうびむし）類で、それもファーブルの觀察したものでは殆ど全部が Cleonus alternans であつた。（貴、ファーブルの觀察した甲蟲狩りのっちすがり八種の中、七種は各種の象鼻蟲を狩り、一種は玉蟲の類即であいつたと。）ファーブルが二日間探索を重ねて不具の老蟲を三匹しか捕へ得なかつたこの象鼻蟲を、「こぶっちすがり」は十分も掛らない中に幾匹でも見つけ出して來る。そしてこの自分の二倍からの重みを有つた蟲を『腹と腹とを合はせ頭と頭とを合はせるやうにして』肢で抱へて飛び、穴の近くに降り立つと今度は口でこれを銜へながら、急斜面の崖道を大骨折つて巢穴まで引き上げ、例の穴奥の房室に、各室五六匹づつの割合で納め入れる。（その後は「たまむしっちすがり」の場合と同樣。）

この象鼻蟲が、いづれも例の生けるが如き屍として運ばれて來ることはいふまでもない。この屍の謎――レオン・デュフールが解き得なかつた謎を、遂に解いたのがファーブルであつて、彼の最初の論文（「っちすがりの習性と、この蜂が幼蟲に與へる甲蟲が長期に亘つて腐敗しない理由とに關する考察」）はこれであつた。

彼は「こぶっちすがり」の巢穴から、或はその手から、多數の象鼻蟲を奪取して取調べ、『眼前に見るこの動かぬ體は本當の死體であらうか』と疑つた。そして種々の實驗を行つた結果、果然『そこにはまだ生命がある。潛在的な受動的な生命――植物のやうな生命がある』のを知り得た。（九日目までのものは揮發油によつて手足を動かし十日目以後十四日目までのものは電流によつて運動を起した。）防腐液を注射された死體であらうといふデュフールの見立は誤つてゐた。それは、『死んだやうに動かぬことと、その内臟が生きてゐるやうに

新鮮であること』といふ幼蟲用食餌の條件を充たす爲に、驚くべき本能の叡智によつて、突然運動中樞を麻痺せしめられ、幼蟲が成長し終るまでの一定期間、生命だけを保つ生贄であつた。

ファーブルは、つちすがりが巣穴に運びつゝある象鼻蟲を取りあげて代りに生きた象鼻蟲を與へるといふ極めて困難な實驗によつて、麻痺手術の現場に立會つた。卽ちこの蜂は、强い兩顎で象鼻蟲の吻を銜へて抑へつけ、その腹の下に自分の腹端を曲げ込んで、相手の第一對と第二對の脚の間(前胸と中胸との間)へ、二三度尻の毒劒を突き刺す。この『ほんの一瞬間の中に成し遂げられる』手術によつて、象鼻蟲は『雷に撃たれたやうに』永遠に動かなくなつてしまふ。これは、運動神經の中樞にぢかに劒が下されたからであるが、ファーブルは、昆蟲の神經系を吟味することによつて、更に隱された祕密を見た。

成蟲となつた昆蟲に於ては、この中樞をなすのは胸部にある三つの神經球(胸神經球)である。この三つは多少離れてゐるのが普通であるが、甲蟲の中にはそれが極めて接近して殆ど一箇所に集つてゐるものがあり、麻痺手術の簡易さを要望するつちすがりの獲物としては『さういふのがもつてこいなのだ。』ファーブルはまづ金龜子科・圓魔蟲科・木蠹蟲科のものにこの種の例を見出したが、いづれも大き過ぎたり小さ過ぎたり、或は生活が不潔だつたりして、『綺麗好き』のつちすがりには落第であつた。すると最後に玉蟲と象鼻蟲とが來る。卽ち彼等は、腐肉や汚物にも近づかず、各種のつちすがりの體に相應した各種の大きさを有ち、且あらゆる他の甲蟲以上に胸神經球の集中が著しい。――甲蟲狩りのつちすがり(つちすがりの中には青蠅類を狩るものもある)が何故玉蟲と象鼻蟲とを生贄として選ぶかといふ謎も、これで解かれたわけである。(以上、第三章・第四章・第五章に據る)

つちすがり類の觀察を終へたファーブルは、次に、ばつた・こほろぎ・きりぎりすもどき等の直翅類を狩獵するあなばち類の習性を紹介し、『本能のもの知り』と『本能のもの知らず』とを驚き且歎じた後、青蟲(蛾類の幼蟲)の獵師じがばち類(*Ammophila*)にうつる。

『ほつそりした體つき、すんなりした身料、附け根の所でぐつとくびれて絲で胸部につけられたやうな胴、帶代りに黃色の紋をつけた黑づくめの裝束、これがこの穴掘り蜂の人相書の概略だ。』彼等は『砂が僅かの粘土と石灰でセメントづけにされた掘り易い輕い土』を選び、『小徑のほとり、芝草のない日のよく當る傾斜地』などに、早いもの(例へば「あも」「めじがばち」)は四月頃、晩いもの(例へば「こじがばち」「じがばち」「けぶかじがばち」)は九、十月頃、巣穴を掘る。巣穴はいづれも『鉛垂の探り穴、いはば井戸穴みたやうな恰好のもので、口徑は太い鵝ペン以上を出でず、深さは半デシメートル位だ。底には房室、これはいつも一つきりで、入口の井戸の底をたゞ擴げただけの代物だ。』

じがばち

じがばちはこの井戸掘り作業を、前跗節を熊手代り、大腮を鑿井具として『一人ぼつちで急ぐこともなければ喜び勵むこともなく、淡々として』行ひ、砂粒の除土を銜へ上げては巣穴の口からやゝ遠い所に置くが、その中に井戸の蓋になりさうな石粒があると、それだけは別に穴の近くに置く。太陽が沈んで日が當らなくなると(その時には大抵井戸掘りが終つてゐる)、別にしておいた石粒の中から手頃な平石を選び(いゝのがなければ近所から探し出して來て)、それで巣穴の口を塞いだまゝ『多分近くの花の上で、その日の名殘の光を浴びて花の盃の底で甘露の滴を舐めるのであらう』どこかへ行つてしまふ。そして翌朝日のさすのを待つて、どこからともなく、例によつて不思議にも麻痺された青蟲を、口でその頸を銜へて肢の間に引摺りながら戻つて來る。そして驚くべき記憶によつて直ちに昨夕の石の蓋を見出してこれを開け、青蟲を底の部屋に格納して卵を產みつけると、今度は昨日掘り出した除土の砂粒を井戸の中へ掻き込んで、全く巣穴を閉鎖してしまふ。これで萬事が終つたのである。

以上はファーブルが「こじがばち」(*Ammophila sabulosa*)及び「じがばち」(*A. argentata*)に於て觀察した所で、「あらめじがばち」(*A. hirsuta*)は、まづ狩獵をやつてから巣穴を掘るが故に石の戸締りを必要とせず、又「けぶかじがばち」(*A. holosericea*)は、他の三種が太つた青蟲(時には自分の十五倍もある)を一匹だけ格納する代りに、小柄の青蟲(主として尺蠖蟲)を數匹、順々に庫入れする爲であらう、やはり戸締りの面倒を省略する。

尙、青蟲は鱗翅類の幼蟲であつて、成蟲となつた昆蟲ではないから、體節が十三、肢が八對もあつて、その神經中樞は實に十二を數へる。この厄介な相手を麻痺せしめるのに、じがばちはどんな本能の叡智を働かせるかといふと、小さい弱い奴ならば、第五・第六の體節(その前の三節に三對、後の四節に四對この肢があつて、この兩節には肢がない)の何れか一つを一刺ししてその部分に卵を產みつけ、大きい强い奴の場合は、順々にすべての體節に劒を刺し込むのである。(以上、第十五章に據る)

次ははなだかばち類(*Bembex*)。ファーブルは、眞夏の日盛りに『細かな乾いたさら〳〵した砂で出來た』砂丘の傾斜面で、この蜂

の一種(*B. rosrata*)が、『箒・刷毛・熊手を一所くたに思ひ出させるやうな』前跗節を使つて、『彈條仕掛で跗節の風車を廻してもこれ以上にはゆくまい』と思はれる程の正確さ・迅速さで、砂を腹の下から『水のそれのやうに切れ目のない條線をなして』後方へ逃らせながら、地下住宅を作る樣を巧みに報告してゐる。地盤が動き易いので、掘り進むにつれて近くの砂が崩れ込むが、蜂はそれに頓著せず(たゞ木屑だの葉片だの大きな石粒だのが落ち込むとそれを銜へて運び出すだけで)作業を續ける。やがて作業が終つたと見えて、砂を滑り拔けて外へ現れると、實に丹念に穴の上を掃きならしてから、狩獵の爲に立去つてゆく。

その留守に地下住宅を調査して見ると、砂で塞がつた廊道が見つかる。『この廊道は指位の口徑で、土質や狀況に隨つて直線だったり、うね〳〵してゐたり、長かつたり短かつたりする。』これが二〇—三〇糎續いて、最後に胡桃(くるみ)が二三箇入る位の大きさの部屋に通ずる。『その壁は砂崩れを豫防する爲に漆喰やうのもので上塗りされ』てゐる。この唯一の部屋で、はなだかばちの幼蟲は、金庫のやうな繭を作つて蛹となるまでの、十五日間を送るのである。（この蜂はその巣が水を通し易い砂地に營まれる關係上、獨得の實に堅牢な繭を作る。）

程なく蜂は、腹の下、肢の間に獲の獲物(雙翅類)を抱へて戻つて來る。が、すぐには降りない。この蜂特有の『訴へるやうな』鋭い翅鳴を立てて舞ひながら、幾度も地上を檢分した後、實に用心深くゆつくりと垂直に降りて來る。そして『他の砂地とちつとも見分けのつかない一點』に迷はず著陸したかと思ふと、今度は躊躇なくその地點を引掻いて頰で押し、獲物を抱へたまゝ砂を分けて入つて行つてしまふ。この、他の蜂には見られない上空からの檢分と用心深い降下とは、決して巣穴を發見する爲ではない。地上に待機してゐる恐しい敵への警戒である。その敵といふのは小さな貧弱な雙翅類——寄生蠅(やどりばへ)の一種であつて、この蠅は執念深くはなだかばちの巣につき纏ひ、蜂が獲物を抱いて巣に入りかける刹那を覘つて、幾つかの卵をその獲物に產みつける。この卵から孵つた居候の幼蟲共は、蜂の幼蟲と食卓を共にしてその食事を食ひ荒し、家主の幼蟲を飢ゑさせて自分達だけが育つばかりか、時には家主それ自身さへもその腹中に納めてしまふ。では、はなだかばち、我が偉大なる雙翅類の獲師は、なぜまづこの貧弱な雙翅類をやつつけてしまはないのか。又、こんな居候が我が子の食卓に列なつてゐるのを、なぜ默つて見逃しておくのか。（はなだかばちは次に述べるやうに幼蟲へ食餌の補充をするから、その現場を目擊する筈である。）そこに『動物の間のわけのわからなさ』——言ひ換へれば『生物の調和』がある。

さて、はなだかばちが巣に運び入れてその上に卵を產みつける獲物、それは極つて、雙翅類の中でも貧弱で小柄な蠅又は虻に限られてゐる。しかもその唯一匹を格納して立去つてしまふ。こんなものが『大食ひの幼蟲』の十五日間の食餌なのだらうか。こゝにこの蜂獨得の習性がある。今までの母親達(つちすがりあな・ばち・じばち)は、その仔が成育し終るまでに必要なだけの食餌を格納し、それに卵を產みつけて巣穴を閉ぢ、二度と戻つて來ないのであるが、はなだかばちの母親は、孵つた仔が小さな食物を食べ終る頃、再びその部屋を訪れて新しいもつと大きい食物を提供し、かくして『幼蟲の發育が續く二週間ばかりの間、必要につれて次から次へ、そして子供が丈夫になるにつれて矢繼早に』、且次第に嵩を大きくして、食物の仕送りが行はれる。（その總數は六十匹位に達する。）これ等の食物は雙翅類でありさへすればよい。はなだかばち類は『狩の運次第に見つかる雙翅類をなんでも攻擊する』のであつて、この蜂の巣穴には、にくばへ・いへばへ・はなあぶ・ひらたあぶ等、種々雜多の蠅や虻の殘骸が、差入れ順に食ひ散らされて幼蟲のまはりに殘つてゐる。

ところでこれ等の雙翅類はやはり麻痺された「生ける屍」であらうか。否、これもこの蜂に限つて、いづれも「本當の死體」なのである。しかもファーブルはこゝに、智慧のあるこの蜂の『仕事の論理』の正しさを見た。蠅や虻のやうに『逃足の早い翅を具へた』相手をいきなり傷つけずに捕へて、その小さい體の神經中樞に麻痺の毒劍を刺すことは事實上至難の業である。又苦心してこれを行つたところで、その體質上遠からざる中に干からびてしまふ。だから蜂はこれを殺す。（ファーブルはこの蜂が如何に急激な攻擊、劇しい格鬪を行つてこれを捕殺するかを報告してゐる。）殺した食餌は二三日で干からびる。隨つて否應なしに日々の食料補給が必要となる。生まれ立ての仔には小さいもの、それから順に大きいものと獲物を代へる必要も生ずる。そして又、この煩繁な(しかも寄生蠅の目を忍ぶ)訪問は『一寸力を入れゝば押退けられ、崩れてはひとりでに戸口を閉ざしてくれる』砂の住居を必要とする。——以上が『人の理性で推論される行爲の順序で、はなだかばちの智慧が實行してゐるところのもの』なのである。（以上、第十六章・第十七章・第十八章に據る）

二〇　石をきざむ

一　解題

一　本文

石川啄木の歌四首は、「石川啄木全集」(全五卷)第三卷所收の「一握の砂」から抄出した。(石川啄木全集第三卷　昭和三年十一月、改造社發行)

「一握の砂」は、明治四十一年の夏以後の作一千餘首のうちから五百五十一首を選んだもので、全篇を「我を愛する歌」「煙」「秋風のこゝろよさに」「忘れがたき人々」「手套を脱ぐ時」の五部に分かち、總べて一首を三行に誌してある。明治四十三年東雲堂から刊行せられ、「啄木全集」(新潮社版)第二卷にも收められてゐる。

窪田空穗の歌三首は、自選歌集「槻の木」から抄出した。初の二首はもと歌集「土を眺めて」に、終の一首は同「泉のほとり」に收められたものである。(改造文庫)槻の木　昭和四年五月、改造社發行)

「槻の木」は既刊「泉のほとり」「土を眺めて」「朴の葉」「青水沫」の四歌集と歌稿とから選んだものである。

木下利玄の歌五首は、「木下利玄全歌集」から抄出した。(木下利玄全歌集　大正十五年七月、岩波書店發行)

「木下利玄全歌集」は明治三十一年以降の歌千四百十七首を收めたものである。

二　作者

石川啄木。本名は一。明治十八年十月(戸籍上では十九年二月)岩手縣岩手郡玉山村の常光寺に、住職石川一禎の長男として生まれ、間もなく同郡澁民村の寶德寺に移り、こゝで成長した。二十八年小學校を卒へ、直ちに盛岡に出て母方の伯父の家に寄寓し、高等小學校を歴て、三十一年盛岡中學校に入つた。二年の時、與謝野鐵幹の詩歌集「天地玄黄」「東西南北」等を讀んでその歌風に親炙し、直ちに新詩社に入り、一方同好の友と回覽雜誌を作つてその牛耳を執つた。三十五年中學五年を半途に退學して上京したが、間もなく病を得て澁民村に歸り、長詩の創作に沒頭し、三十八年處女詩集「あこがれ」を出版した。同年盛岡に居を求めて結婚し、兩親及び妹と一家五人の家庭を作つたが、物質的生活の苦難に堪へず、翌年澁民村に歸つて同村小學校の代用教員となつた。四十年生徒の同盟休校に坐して教職を免ぜられ、北海道に渡つて函館・札幌・小樽・釧路等に新聞記者生活を送り、四十一年上京、小說家たらんとして志を得ず、生活の脅威の中にあつて歌作に精進した。四十二年雜誌「スバル」の創刊に參加し、東京朝日新聞社に入社したが、生活の苦しみはなほ止まず、この頃から思想上に新な動きを抱き、社會主義の研究に耽つた。四十三年歌集「一握の砂」を刊行したが、翌年病を得、四十五年四月東京市小石川區久堅町の寓居に不遇な短生涯を終つた。享年二十七。

啄木の文學の主體をなしてゐるものは短歌で、その一生涯に作られた總數は約千五百八十首に及び、小說その他の作品と共に「石川啄木全集」に收められてゐる。

窪田空穗。本名は通治。明治十年六月長野縣東筑摩郡和田村に生まれた。二十八年縣立松本尋常中學を卒業し、東京專門學校(早稻田大學の前身)に入學したが、一年で退學、鄕里で代用教員を勤めた。三十三年上京して再び東京專門學校に入り、三十七年卒業。新聞記者・雜誌記者・女學校教員等を歴、大正九年早稻田大學の講師となり、現在同大學教授である。明治三十年始めて和歌に志し、三十三年新詩社に入つて「明星」に作品を發表したが、幾何もなく去り、獨自の道を拓いて今日に至つた。その間多くの子弟を養成して、三十九年十月、十日會を結び、それを基礎として大正三年五月、短歌雜誌「國民文學」を創刊した。

著書には、歌集「まひる野」以下十種、その他文集や、作歌に關するもの、古典の註釋書等がある。

木下利玄。明治十九年一月岡山縣賀陽郡(現吉備郡)足守町に木下利永の二男として生まれ、二十三年伯父子爵木下利恭の養嗣子となつて上京した。家は木下家定(豐臣秀吉正室の兄)に出で、家定の子長嘯子は歌を以て世に聞えた。三十一年(十三歳)佐佐木信綱に就いて作歌を始め、三十四年二月發行の「竹柏園集」第一篇に始めて「折に觸れて」といふ題の五首が載せられた。學習院を歴て、三十九年東京帝國大學文科大學に入り、四十三年雜誌「白樺」の同人となり、翌年大學卒業。大正元年目白中學校の講師となり、三年第一歌集「銀」を刊行。五

年教職を辭し、山陰・山陽・九州等を旅すること約半歳、六年末兵庫縣住吉町に假寓し、八年第二歌集「紅玉」を出版し、神奈川縣鎌倉町大町に移住、九年更に鎌倉町名越の新邸に移轉したが、十一年肺結核を病み、爾來病臥をつゞけた。十三年雜誌「日光」の創刊と同時に同人となり、更に第三歌集「一路」を出版した。十四年二月歿、享年四十。

著書には上記の外、自選歌集「立春」、總歌集「木下利玄全歌集」、及び歌文集「李青集」があり、いづれも歿後の出版である。

二　教材としての研究

一　註解

【こつこつとの歌】「我を愛する歌」の部の中。

〔こつこつ〕　固い物が觸れ合つて發する音を表す擬聲語。こゝでは、石工が石をきざむ音。

〔空地〕　アキチ（クウチ）　「明地」とも書く。建築物・作物などのない土地。

〔きざむ〕　刻む　(一)切つてこまかくする。こまかく切つてゆく。(二)彫刻する。ほりつける。(三)刻み目をつける。(四)分割する。こまかくする。こゝは(三)。

〔耳につく〕　(一)聞いた音が耳に殘つてゐるやうで忘れることが出來ない。(二)聞きあきてもう澤山だ。こゝは(一)。

【こころよきの歌】「我を愛する歌」の部の中。

〔息もつかず〕　息もつかないで。一息に。たてつゞけに。

【ふるさとのの歌】「煙」の部の中。

〔ふるさと〕　故郷　自分の生まれ育つた土地をさしていふ。こゝでは、作者の故郷である岩手縣岩手郡地方をさす。

〔訛〕　ナマリ　標準語に對してこれに合致しない地方的の發音、又は言語。なまり言葉。方言と大體同じであるが、一般には訛は方言よりも狹く限定される。（三二〇頁「方言」參照）東北地方の訛は「い」と「え」を混同し、「し」と「す」、「ち」と「つ」の區別がない等著しい特徵がある。

〔人ごみ〕　人込・人混　人のこみあふこと。又、その場所。

〔そをききにゆく〕　そのなまり言葉を聞きにゆく。「そ」は「それ」に同じ。

【港町の歌】「手套を脫ぐ時」の部の中。

〔港町〕　ミナトマチ　港を中心に發達した町。

〔とろろ〕　鳶の鳴き聲を表す擬聲語。

〔鳶〕　トビ　「鴟」「鳶」とも書き、「とんび」ともいふ。鷲鷹目、鷲鷹科の猛禽。所謂鷹の類に屬するが、習性は大いに異なり、主として海濱又は市街地附近に棲み、好んで斃死した鳥獸や魚類を食する。體上面は褐色で紫色光澤を帶び、體下面は黃褐色、尾は叉狀をなし、先端黃白。雌は雄よりも稍大形で赤味が多い。中部アジヤ・東部アジヤ及び印度に分布し、我が國では千島以南琉球まで廣く棲息するが、現時は頗に減少した。鳶は漁場や都市の上空を翼を靜止したまゝ圓を描いて飛び、空中より獲物を發見してこれを攫み去るのを常とする。その鳴き聲は一般には「ピーヒョロヒョロ」と聞きなされ、又「とんびとろろ」などといつて「トロロ」とも形容されてゐる。

〔壓せる〕　アッせる　こゝでは、潮曇が重くのしかゝつて鳶をおさへつけてゐるやうなさまをいふ。

〔潮曇〕　シホグモリ　海上の水氣によつて天や海の曇つて見えること。

【提燈のの歌】「妻が生家にて」九首の中。大正六年の作。

〔灯〕　ヒ　(一)はげしい火。烈火。(二)俗に「燈」と同義に用ゐる。こゝは(二)。

〔なべに〕　「竝」に同じ。助詞のやうに、動詞・形容詞に添へて、につれて、と共に、の意を表す。

〔ぬばたまの〕　射干玉の　枕詞。ぬばたま（檜扇の實）の黑いのから「黑」にかけ、轉じて「夜」「闇」「夕」にかけ、更に轉じて「夢」「月」「寢」「妹」などにもかゝる。訛つて「うばたまの」「むばたまの」ともいふ。

「檜扇」は、「射干」とも書き、鳶尾科、ひあふぎ屬の多年生草本。高さ六〇—九〇糎。葉は廣劍狀で、二縱列に配列して扁平となり、檜扇を開いた如き觀を呈する。夏日葉間に花莖を抽き黃赤・淡紅等の地に濃紫色の斑點ある六花被花を著け、長さ約三糎の楕圓形の蒴果を結び、黑色の種子を藏する。この種子が「ぬばたま」又は「うばたま」である。本州中南部以南の暖地

に自生し、又庭園に栽培される。別名「からすあふぎ」。

〔青みて〕 青くなつて。

【穂薄のの歌】「妻が生家にて」九首の中。大正六年の作。

〔穂薄〕 ホススキ　「穂芒」とも書く。穂の出たすゝき。尾花。薄の花。（二七四頁「尾花」參照）

〔そよぎ〕 戦ぎ　そよ〳〵と音をたてること。そよ〳〵と動くこと。

〔見やる〕 見遣る　遠方を見る。眺め見る。見渡す。

〔山脈〕 ヤマナミ　「山並」とも書く。帶狀に長く連續する山嶽。山脈。連山。

【霜ばしらの歌】「冬の朝」二首の中。大正五年の作。

〔霜ばしら〕 霜柱　含水性土壤の表面が零度以下に冷却し、内部の水分が凍結して柱狀となり土壤の表層をあげ起した現象。成因は未詳の點が多いが、粗い赤土に多く、粘土等には少く、砂土には生じない。

〔踏むに〕 踏むことによつて。踏むにつれて。

〔行く行く〕 行きながら、行く道すがら、の意であるが、こゝではその一歩々々を意識してゐる趣である。

〔も〕 感動の助詞。

〔さやけし〕 目にはつきりしてゐる、色や形が分明である、といふ意もあるが、こゝでは、音の冴えてゐるさま、響の澄んでゐるさまをいふ。

〔かも〕 感動の助詞「か」と「も」の重なつたもの。「かな」と同じであるが、奈良朝以前に多く用ゐられ、平安朝に至つては專ら「かな」が用ゐられた。

【向山のの歌】「新緑」六首の中。大正十二年の作。

〔向山〕 向うにある山の意で、「向丘」から來た語であらう。一般的には用ゐられないが、歌に於ては、現代の他の歌人にもこの用例がある。

〔いちじるし〕 明らかに知れわたる。かくれない。著明である。現在は多く「しく」活用であるが、古くは「く」活用が多い。

〔夏さりにけり〕 夏がきたわい。夏になつたわい。

「さる」は、來る、到る、の意で、熟語に用ゐられて、「夜さり來れば」「夕されば」の如く「になりゆく」の意を表す。

「にけり」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形に詠歎の助動詞「けり」の重なつたもの。

【牡丹花はの歌】「牡丹と芥子」十一首の中。大正十年の作。

〔牡丹花〕 ボタンクヮ　牡丹の花。

「牡丹」は、毛茛科、ぼたん屬の落葉灌木。支那の原產で、培養後數千年を經、我が國にも古く移入されて種々の品種が作られてゐる。葉は概ね二回羽狀複葉で、小葉は卵形又は披針形をなし二三裂する。五月頃五瓣乃至十瓣の大形の美花を頂生、瓣片は廣倒卵形を呈し、花色は紅・白・紫等種々。果實は所謂蓇葖（開裂する乾果）である。觀賞用として栽培せられる外、その根を藥用に供する。和名「はつかぐさ」「ふかみぐさ」等。

〔咲き定まりて〕 咲ききつて重々しく安定して、の意。

【ふり出でての歌】「峽の道」三首の中。大正十一年の作。

〔笹〕 ササ　禾本科に屬し、木質稈を有する常綠多年生竹類のうち、一般に丈の低いものの總稱。卽ち、「まうそう」「まだけ」「はちく」等に對して、「くまざさ」「ねざさ」「ちまきざさ」等をいふ。

〔幽けきに〕 カソけきに　かすかな音に、の意。

【雨やみての歌】「初秋」二首の中。大正十二年の作。

〔とみに〕 頓に　急に。俄に。早速に。

〔秋づけり〕 秋らしくなつた。「秋づく」（自動、四）に完了の助動詞「り」の添はつたもの。

「づく」は、名詞に添へてこれを動詞化し、「その樣になる」意を表す接尾語。

〔澄み透りたる〕 連體形で止めたのは餘韻・餘情をもたせたのであつて、この種の連體形止は歴史的には新古今集に多い。

【多山はの歌】「多日」七首の中。大正九年の作。

〔多山〕 フユヤマ　多枯の山。

〔ぬくとくもあるか〕 ぬく〳〵とあたゝかいことであるよ。

〔か〕 こゝでは「かな」「かも」に同じ。感動の意を表す助詞で、體言及び用言の連體形に添へて用ゐる。

〔裸木〕 ハダカギ　すつかり落葉した木。

〔しじに〕 （一）繁く。草木などの生ひ繁つてゐるさま。（二）度數多く。屢〻。こゝは（一）。

〔日だまり〕 日溜り　日光の最もよくさして容易にその溫りの放散せぬやうなところ。

二　評釋

〔こつこつとの歌〕――原作の初行三句「こつこつと空地に石をきざむ音」は單調な強い音調を寫し、第二行「耳につき來ぬ」及び第三行「家に入るまで」では押迫つた實感を出してゐる。これは何よりも作者の重苦しい生活感情の直截的表現に外ならぬ。こつ

こつと石をきざむ音が作者のいら〳〵した神經に強く響く。しかもそれは耳底にまで突き通つて、我が家に入るまで聞えて來る。何だか家に入つても耳から離れない。實感の濃厚な歌である。

「耳につき來ぬ」の實感は、一音が絶えず反覆せられる爲に、最初の音の印象が益〻鮮明を加へるやうに感じて、異常にその音に集中する趣である。

〔こころよきの歌〕――作者は自分の仕事に心魂を打込んでやつた後の、烈しくはあるが快い疲に身を任かせてゐる。烈しければ烈しい程、その疲は快いのである。原作初行二句、「こころよきつかれなるかな」はこの作者のこの場合、決して輕快な享樂として謳かない所を味はふべきである。第二行「息もつかず」及び第三行「仕事をしたるのちのこのつかれ」の切實な生活表現に裏づけられて靜動一如、深刻にして情感豐な一首を結晶せしめてゐる。人生に對して徹底的に緊張した心を最後まで失はなかつた作者、隨つて物事に對して烈しい熱情と執著とを持つてゐた作者の姿が目に見えるやうな作である。

〔ふるさとのの歌〕――作者は生活苦に壓倒されて都の旅寓に喘いでゐるといふ身の上になつてしまつた。理想と眞理を求めて彷徨した果は遂に煩悶と失望とのどん底へ落ちて行かねばならなかつた。しかし絶望はしても諦めに落著くことの出來ない作者であつた。そして思ひ出されるものは故山の姿である、幼き日の夢である。ゐても立つてもゐられぬ、いらだたしい氣持に襲はれて、心は故郷へ故郷へと動く。足は知らず識らず、停車場に向かふ。そして懷しい訛言葉を聞いて果敢ない慰めを得ようとする。外にも「ふるさと」を詠んだ歌が非常に多い。

〔港町の歌〕――鳶の鳴いてゐる港町といへばいかにも長閑な町が想起せられる。そしてそれを觀入つてゐる作者の心境も平和な生活感情に浸つてゐるらしく思はれる。所が、この作者はさういふ題材を捉へても、そののどけさの底に押迫つてゐる潮曇を見逃すことが出來ない。何よりも潮曇の重壓を感じて始めて歌心がわくといつた趣である。原作第一行に、「港町」と大きく据ゑ、第二行に、「とろろと鳴きて輪をゑがく鳶を壓せる」と耳目に入る實景を寫し、第三行に「潮曇かな」と全景觀を置いてゐるまで、些かの不安定を感ぜしめない。殊に「壓せる」と力のこもつた語をうけて「潮曇かな」とためらはず言ひのけた坐り・大きさ・力强さを味はふべきである。

〔提燈のの歌〕――向ふから提燈がやつて來る。提燈が近づくにつれて闇の中から桑の青い葉が見えて來るといふ時間的な繼續を詠んだ歌である。一首の中心は「闇の青みて」にあらう。闇の一角がだん〳〵青い色に見えて來て、桑の葉といふ形になつた。暫くではあるが移り變りをよく表してゐる。「なべに」といふ語の語感のせゐで、形よりも色が先に現れる所が實感のまゝによく出てゐる。この歌の場合「ぬばたまの」といふ枕詞の利いてゐることに注意すべきである。

〔穗薄のの歌〕――穩な自然觀照の態度、眼に入るものを、そのまゝ受入れて、さて徐ろに詠み出でたやうな作歌態度である。歌に於ては、近景に對する遠景を點出し、これを統一に置くことはむづかしいことであるが、それをなし得たのは、作者の心が澄んで「穗薄のそよぎ」と共に動き、自らに「日に光りたる山脈」が見出された爲である。「見やる眼に續き」が說明に墮しなかつた重要な意義はこゝにある。

〔霜ばしらの歌〕――第三句までの重々しい運びは第四・五句に反照せられて、張り切つた快調を得てゐる。しかし感動がよく最後に於て統一せられ、そして初句以下を生動させる。「踏むにくづれて」行く霜柱、それにつれて一歩々々にも「さやけき音を立」てる霜柱、作者の實感した朝の情景が刻みつけられてゐる。

〔向山（むかやま）のの歌〕――雜木の若葉の一枚々々が風にそよいで輝いてゐる。作者はそこに夏の來たことを眼に感じたのである。第四句までは少々混み合つてゐるやうで、直接に胸に來るものがないが、第五句を待つて、それが救はれると共に、全體がまとまつて來る。作者の新鮮な季節感が妥當性を具へてゐるからであらう。「風とほり」とか「搖れいちじるく」とかいふやうな言葉に盛られた丹念な克明な描寫は及び難いものがある。

〔牡丹花はの歌〕――作者代表作の首位に數へられる作である。

岡山巖氏は改造社の短歌講座で「古今を通じて牡丹を歌つたもの澁くはないだらうが、牡丹といふものの性根を摑んでゐる點ではこの作の右に出るものはあるまい。最も本來の意味での寫生といふのはかういふものをいふのではあるまいか。丹念に牡丹を描きながら、その中に執念く自我の主觀をにじませてゐる。謂ふところの主客合流の境である。單に眼球の網膜に映じただけの平面的の像でなく、もつと深く腦髓の中核に觸れたものである。自我の中樞の洗禮を經たものである。など云へば六ケしくなるが、ともかく平面的に牡丹の外輪丈を辿つて描いたデッサン風のものでなく、一線一畫に魂をこめた內面的の深みのあるものである。

『咲き定まりて靜かなり』、『花の占めたる位置のたしかさ』等の句も外形の寫生でありながら、充分主觀を打込んでゐる。牡丹の花が重々しく靜かに咲きすましてゐる態を心にくきまであり〳〵と寫し得てゐるのみならず、牡丹といふものが心なき一片の花木としてゞなく、何か靈のあるものゝ如く我等に呼びかけてゐる。そこに牡丹が生きて居り且つ作者が呼吸してゐる」と評してゐる。尙、連作歌をあげて參考とする。

花びらの匂ひ映りあひくれなゐの牡丹の奥のかがよひの濃さ

この室のしづもりみだるものもなく床の牡丹のほしいまゝに紅き

牡丹花の大き花びら寄はなれ低木の下の地に移りたる

低き木の大き牡丹花なくなりてその根の土に花びらぞある

〔ふり出でての歌〕――ひつそりとした山路の樣子、物音もない所に降り出した雨のかすかな音の爲に愈〻靜まり返つた山のけはひが一首に溢れてゐる。作者の感動は靜かではあるが深い。それを悠揚と歌ひ上げ、しかも時間的な經過を詠み込んだ所は敬服させられる。第二句の字餘り、「歩みわが行く」を二句に分離せしめた所は、たゞ〳〵しいやうに見えるが、それが却つて、雨の音にひたすら耳かたむけて歩む意と、「歩みわが行く山路」即ち「山路」をなつかしむ心とを兼ね表してゐる效果的手法になつてゐる。體言でとめたことも餘韻をもたせて味はひが深い。

〔雨やみての歌〕――こゝにも作者の鋭敏な季節感が鮮明に浮かび出てゐる。流れの澄み透つた所に秋を感ずることは全く自然の感覺であらう。それを上二句を以て力强く言ひ切り、最後を連體形で結んだ坐りのよさはこの感覺をして精彩あらしめてゐるし、「村ゆくに」「物あらふ」といふ觀念的な言ひ方の力弱さをもくるめて、全體的に隙のない歌を成し得てゐる。

〔多山はの歌〕――これも二句切の句法の成功した歌である。上二句は古歌の格調を思はせるやうな快適な調子をもつてゐる。それをうけて「しじに枝くむ」「日だまり」といふ作者獨得の表現法を以て、遺憾なく多山の日あたりの一角を描出してゐる。客觀把握の的確なことが長所であらうが、寫生と感覺との交錯・融化は寸毫の間隙もない。

三　批評

本課に擧げた三人の歌人は何れも明治・大正時代に出て後世に殘る歌を詠んだ人々である。三人共それ〴〵に個性の强い、隨つて詠歌にも特色の際立つ所のある人々である。

啄木は新詩社の出で、初は浪漫的な歌を作つたが、自然主義の影響をうけて明治四十一・二年頃から生活を背景とした現實的・寫實的な歌を作つた。彼は自ら自分の歌を「悲しき玩具」と呼んでゐたが、この玩具に全生命を投げかけてゐた人である。短い一生の間切實に世の辛酸を嘗めた彼の歌は卒讀に堪へぬ程痛々しい作が多い。人生に對する火のやうな執著を持ち續けた彼の歌は、眞劍味に富んでゐる點でいつまでも讀まれ味ははれるであらう。

空穗も新詩社の出身であるが、その歌風は最初から明星派と異なり、現實的な傾向を有し、その質實味は年と共に成長し、「土を眺めて」に於て確然と獨自の境地を拓き、「鏡葉」に於て靜觀的なものを示し、現在では圓熟した老境に落ちついてゐる。多く日常生活の茶飯事を素材として平明・率直に表現し、清穩な情趣豐な氣品、素樸な現實感等を特色とする。地味な學者であると同時に、詩心豐な歌人である。

利玄は「竹柏園」の出身で、最初溫雅・流麗の歌を作つたが、三十歳の夏箱根に遊び「壹山」の十七首を得て獨自の境地を示して以後傳統的短歌に慊らず、自ら新生面を拓き、古語・新語を自由自在に用ゐて破格の格を創め、手堅い手法を以てする的確な描寫に成功し、素樸・直截な表現に徹した人である。

こゝに揭げた作はいづれも三歌人のかくの如き特色の現れたものである。

三　備考

一　指導の問題

三人三樣ではあるが、何れも最近の歷史的歌人であり、現代の短歌はその影響を少からず蒙つてゐるのであるから、年少の生徒にも疎遠なものとは感じられぬであらう。又三人三樣の歌風を味はつて見て、歌の廣さ・深さを知り、又實人生と近接してゐる藝術としての眞價を感得するであらう。それには各自の歌風に出來るだけ深く參入することが必要である。

啄木の歌は形の上ではその言辭が平明である。しかし啄木以後、彼を仰慕するの餘り、所謂啄木まがひの歌つくりが多く世に出たが、彼の歌風はどこまでも彼のみの歌風であつたといふことを短い

歴史が既に明瞭に證明してゐることを以てしても分明であるやうに、一見平明・容易の句法もその深い根柢によつて始めて歌として生かされてゐるのであるから、生徒をして啄木與し易しと感ぜしめることのないやうに、彼の人生生活――精神的煩悶と物質的苦惱――に根柢した作歌精神に眼を開かせなくてはならぬ。青年啄木の眞摯さは必ずや生徒の心に強く訴へるものがあるであらう。歌は決して遊戯でも趣味でもない實の生活である。この事を生徒は嚴肅に感じ得るに相違ない。

空穗の歌は日常生活を詠む所に特色があり、その表現法には老成・練達の冴がある。本課にとつたのは自然描寫の歌であるが、作者の特色はやはり現れてゐる。奇異な情景を詠むことなく、誰しも同感出來る日常平凡の事を詠む人の歌である。たゞ表現を通じて作歌態度を窺へば、そこには非凡な巨匠の眼が据わつてゐる。平凡な言葉で日常の事を詠んでゐるのであるが、觀照の眼が深く冴えてゐる爲に、歌が清新な趣を呈してゐる所に注意させたい。

利玄は外物に對して精神を傾けつくして碎心・削肉、練磨・彫琢する所に特色がある。傳統的な歌調・歌境に滿足せずして新機軸を出すには、出さざるを得ないだけの内からの要求と、常人を超えた苦慄とが要せられることを朧氣にでも感得させたい。

卷二に於て主觀的・抒情的・象徴的な歌に接した生徒等に、生活に卽した歌、どこまでも實感を重んじながら寫實的・客觀的に詠むといふ風の歌に接せしめるのが本課の主眼である。又卷四の寫生主義の歌をも豫想して指導することが必要であらう。

二　參考資料

（一）石川啄木の作歌についての省察を「歌のいろ〳〵」（石川啄木全集、第四卷）の中から引用する。

机の上に片肘をついて煙草を吹かしながら、私は書き物に疲れた眼を置時計の針に遊ばせてゐた。さうしてこんな事を考へてゐた。――凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるが可い。またさう爲るのが本當だ。我々は他の爲に生きてゐるのではない、我々は自身の爲に生きてゐるのだ。たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それ〴〵の調子に依つて、或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子そのものを破ると言はれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどし〳〵字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないといふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那刹那の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれに依つて、その刹那々々の生命を愛惜する心を滿足させることが出來る。

こんな事を考へて、恰度秒針が一回轉する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。――私の不便を感じてゐるのは、歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や、硯箱や、インキ壺の位置とそれから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろ〳〵の事に對しては、一指をも加へることが出來ないではないか。否、それに忍從し、それに屈服して、惟ましき二重の生活を續けて行く外に此の世に生きる方法をもたないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るものゝ、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識賣買制度の犠牲である。目を移して、死んだものゝやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。（四十三年十二月）

（二）窪田空穗の「歌をよむ時の心もち」を「短歌隨見」の中から抄出しよう。

作家の要諦は、何時も周圍の爲に捉はれてゐる自分を、暫く周圍から離して我れ一人となり、我と我が心に打込んだ緊張した狀態となつて、しみ〴〵と我が生活内容を味はつて見て、それを言葉とする事である。

我々の胸の底には絶えず打明けたい、言ひ現はしたい何等かの思ひが蟠つて居る。話相手を欲しいのも、言ふと共に消えて行く言葉によつてなりとも、この思を他人に向つて言ひ現はしたいと願ふからである。劇を看、讀書をするのも、他人の生活の中に自身を見出して興味を感じるからである。歌はそれらよりも一層深刻に、たとへ獨語ではあらうとも文字によつて心ゆくまで自身をそこに描き出すものであるから、その歓びはそれらのものよりも遙かに深いのは云ふまでもない。更にいふと、これは我々の本能として持つてゐる一つの要求を、最も適當な方法で滿足させて行く歓びである。

さてこの歡びを味はふことによつて如何なる利益が得られるかと言ふに、さうした緊張した狀態を通して我々は自身にも心附かずに居る自分の心の姿をはつきりと見ることが出來る。平生は對他的になり、何物にか捉はれ通しになつてゐる自分といふものは、自身にはよく分つてゐる積りでゐるが、それは少なからず蔽はれがちになつてゐる者であり、無意識に隱されがちとなつてゐるもので、悲しむべきをも悲しまず、歡ぶべきをも歡ばずにゐる自分であつたといふ事を發見して驚くやうな事がある。これはその事だけでも既に尊い事といはなくてはならない。

新たに自身を見出すといふことは、自身を生まれたまゝの幼い純粹の心に立ち歸らせる事である。幼い純粹な心に立ち歸れば、そこに自身に對して新たなる愛惜の情を感じて來る。この自身に對する愛惜の情こそ、他に對しての愛情の土臺となり、その愛情を遂げて行く爲の土臺ともなつて行くものである。

(三) 木下利玄の作歌に關する意見を、「李青集」のうち、「習明漫筆」の「短歌管見」から引用する。

短歌の形式を不便とする人があるかも知れません。然し此形式は束縛でゐながら、却て作家の機緣となるにいゝ事を經驗します。岸田劉生兄は、西洋畫から入つて、東洋藝術の精神に味到し、和歌、俳句に就ても、次のやうなことを云つてゐます。

「切角自由な言を、狹まい字數や句調のきまりに當て嵌める處に藝術の反自然主義的一境がある。つまり自然の「生」を藝術の鍋で味をつけて煮るのである。これが藝術的美化であつて、藝術は自然を美に化してしまふ處に生命が生じるのだ。

表出の制限や規矩はその美化への一つの道である。つまり十七字や三十一字の五七五七七などの調子の束縛はそれ自身が一つの美を出す用材になる。手段になる。こゝでは縛られる事が生かされる事になるのだ。

この境地では、技巧と、內容とが實にぴつたり融合してゐる。技巧そのものの味と、技巧以上の味とが實に有機的にぴつたり生き合つてゐる。」

是は此間の消息を、よく云つてあると思ひます。〔中略〕かういふ考へから、私は和歌の形式律格を無視する口語歌とか破調とかいふ、新らしい企てには與しません。矢張り今迄の傳統を尊んで、その律格を破らずに、其中に自らなる新し味が欲しいと思ひます。

然し傳統を尊ぶと云つても、徹頭徹尾、古來の手法に倣ふといふのではありません。例へば口語にしても、それを自分で消化して、歌の他の部分と不調和でなく納め得る場合、卽ち古來の律格に當てはめ得るならば、取り入れて少しも差支へないと思ふ。之でこそ自ら溢れる新味だと思ひます。それは畢竟自分の內のリズムが其の口語を生かし得るならば、いゝのだと思ひます。

私はかういふ自信のある時はよく口語を使ひます。その他句法・字數などでも同じだと思ふのです。

短歌は僅三十一字の短い形式のものですから、多くを含蓄して、少しを云ふといふやうにあり度いと思ひます。優秀の歌を見ると皆さうなつてゐます。〔中略〕

一體東洋の藝術には、かくの如き大事な一端を表現し、餘情を深くする傾向があるやうに見える。殊に同じ日本の詩であり乍ら、古來日本に傳つてゐる短歌と、西洋文藝の影響を受けて近く出來た詩とを比較して見ると、其點がはつきりします。

解り易くする爲、今短歌を能樂にたとへて言つて見る。能樂は謠曲も役者の型もちやんと約束なり、律格なりがあつて、それをぢりぢりと演じ進めるうちに、多くの情趣を含ませようとしてをり、哀樂の情を表はすにも、其情をぢつと內に堪へて、其最高潮に達した時に、其情の深さを暗示する、少しの動作をする樣に見えます。是は短歌の行き方と同じ脈のものではありますまいか。〔中略〕

勿論それ〴〵の境地に、其特色なり味はひなりがあるのですが、短歌の如き東洋のものには、西洋のものと異つた特殊の深い美を藏し得る事を悟つて、此日本古來の傳統たる和歌に新らしい深い味を盛り度いものと思ひます。

二一　鴉勸請

柳田國男

一　解題

一　本文

「烏勸請の事」と題して、昭和九年五月十三日から十六日まで、四回に亙つて東京朝日新聞に連載せられた文中最初の一回の採錄である。

「烏勸請の事」は烏食の神事又は御烏食の神事など種々に呼ばれてゐる鴉祭についての報告及び考察である。

二　作者

柳田國男。明治八年七月兵庫縣神崎郡田原村に松岡操の四男として生まれた。第一高等中學校を歷て、三十三年東京帝國大學法科大學政治科を卒業した。翌年判事柳田直平の養子となり、法制局參事官・宮內書記官・內閣書記官等に歷任して、大正三年貴族院書記官長に進んだが、八年これを辭して東京朝日新聞社に入り、後退いて專ら民間傳承の研究に從事し、所謂民間傳承研究家として今日に及んでゐる。

夙く鷗外・花袋等と相知り、作品を「抒情詩」誌上に發表、溫藉なる詩風に詩人としての將來を期待されたが、四十一年頃から漸く民間傳承に興味をもち、爾來、親しく全國を巡遊してこれが報告と研究に身を委ね、我が國に於けるこの方面の開拓者として、造詣頗る廣く且深いものがある。著書には「後狩詞記」「遠野物語」「石神問答」「海南小記」「雪國の春」「山の人生」「桃太郎の誕生」「女性と民間傳承」「退讓書歷」「一ッ目小僧その他」「民間傳承論」「鄕土生活研究法」「地名の研究」等二十有餘種がある。

三　採擇の趣旨

鴉がゴルフの球をくはへるといふ話を聞いて、「鴉勸請」の意義を實證的に明らかにしようとした考說であつて、民間傳承研究・言語研究の出發點とその方法とを知らしめ、且、具體的な國語愛に觸れさせることが出來るであらう。文化的敎材であり、國民的敎材である。

二　敎材としての研究

一　註解

【鴉勸請】　カラスクヮンジャウ　烏食の古式（熱田神宮）・御烏食神事（山口縣柱野村彩雲大明神）・おみさきまつり（岩手縣氣仙地方）等種々に呼ばれる鴉祭の風習を作者が總稱して名づけたもので、その共通の特徵としては、（一）鴉を山神・山靈等の使者・代表者と見做し、（二）一定の日を期して（多くは正月中）、（三）それ〴〵特殊の方法で一定の供物（多くは鯛の幷物）を捧げ、（四）鴉がこれを食ふことを喜び、又その食べ方によつてその年の吉凶・豐凶をトふ、等の諸點が數へられる。

他の鳥獸に關しても類似の風習があるが、鴉祭のかくも我が國に於て一般的であることは、鴉の分布が全國的である上に、鴉特有の積著らしさ、貪食、いたづらさ等が人々の鴉に對する關心を大ならしめたものであらう。（參考資料一參照）

〔鴉〕　「烏」に同じ。（二五五頁「烏」參照）

〔勸請〕　（一）佛語。道場へ諸佛・菩薩の來臨を請ふこと。最勝王經三「勸二請諸佛一轉二大法輪一」（二）轉じて、神託を請ひ率ること。（三）佛・菩薩又は神の分靈を移し祀ること。こゝは（二）。

【三好さん】　ミヨシさん　三好軍道氏。初名は未郎。明治四年二月後の大審院長三好退藏の二男に生まれ、二十八年慶應義塾を卒業し、九州鐵道會社に入社、運輸事務研究の爲歐米を視察後、帝國鐵道廳參事となり、四十一年三菱合資會社に入つた。現在三菱系諸會社の重役であると共に、敎育審議會委員に列してゐる。

【雲仙の國立公園】　ウンゼンのコクリツコウエン　雲仙國立公園。明治四十四年以來長崎縣立雲仙公園として開發され、夙に日本八景の一に數へられたが、昭和九年三月瀨戶內海・霧島と共に我が國最初の國立公園に指定された。東西約一二粁、南北約二〇粁、面積一三〇方粁弱、五箇町・十七箇村に亙り、冬の霧氷、春の躑躅、秋の紅葉と四季の美觀を縱にする雲仙岳（溫泉岳）を中心に、噴氣・噴泉轟々たる雲仙地獄、その噴泉による雲仙溫泉があり、又ゴルフ場等の設備も具つてゐる。

「雲仙岳」は、廣義には、長崎縣島原半島を構成する複成火山をさし、中央火口丘九千部岳（海拔一〇六二米）、外輪山絹笠山・矢岳・野岳・雲仙岳・鳥甲山・吾妻岳・鉢卷山、寄生火山高岩山・眉山等から成る。狹義には、その外輪山の東壁の一部

を構成する雲仙岳をさし、最高峯普賢岳（一三六〇米）を中央火口丘とし、國見岳・妙見岳等を外輪山としてゐる。

〔國立公園〕　自然の大風景を保護・開發し、國民の保健・休養・教化に供用する爲に國家の設定する公園。昭和六年制定の國立公園法に基づき、內務大臣がこれを指定する。昭和十二年十二月迄に指定された國立公園は、阿寒・大雪山（以上北海道）・日光（東京）・中部山嶽（中部）・瀨戸內海（山陽・四國）・阿蘇・雲仙・霧島（以上九州）・十和田（北東）・富士箱根（海東）・吉野熊野（內畿）・大山（山陰）・新高阿里山・大屯・次高タロコ（以上臺灣）の十二箇所である。

【ゴルフ場】　ゴルフ競技場のことで、ゴルフ・リンクス又はゴルフ・コースといふ。こゝでは、雲仙ゴルフ・リンクスをさす。

雲仙ゴルフ・リンクスは明治四十四年に創設、雲仙溫泉の東北一粁、普賢岳への途中に在り、面積〇・一九八方粁、九ホールス。紺碧をたゝへた池沼や、深綠滴るが如き松林丘の間を縫つて全長三、二〇〇碼に及び、高原氣分の橫溢する絕好のスロープ・コースで、一般に公開されてゐる。

〔ゴルフ〕　golf（英）　近代的スポーツの一。（その名稱はオランダ語 ｋｏｌｆ（〔棒〕の意）から出てゐる。）山林・丘陵・谷・川などの自然物をとり入れたゴルフ場に、種種の障碍物をしつらへた競技路を設け、コース中に一定の間隔をおいた穴（ホール）をつくり、匙形の頭（ヘッド）のある打棒（クラブ）でゴム絲製の球（ボール）を打ち、最少打數（ストローク）で全部のホール（正規のコースでは十八）にボールを入れ終つた者を勝とする競技で、オランダに發祥し、スコットランドを經て各國に傳はり、今では世界的に流行してゐる。

我が國では明治三十八年邦人間に東京ゴルフ倶樂部の創立せられたのを嚆矢とし、最初は有閑階級の贅戲とされたが、昭和四五年頃から急激に普及して次第に一般化し、現在全國に數十のゴルフ場がある。

【橫合】　ヨコアヒ　橫の方。橫手。かたはら。

【球】　タマ　こゝでは、ゴルフ・ボール。昔は鳥の羽毛を皮で包んだものを用ゐてゐたが、現在はゴム絲製の球を壓縮したものが使用され、規則上重量一・六二オンス以下、直徑一・六二インチ以上のものと定められてゐる。

【キャディー】　caddie, caddy（英）　ゴルファー（ゴルフ競技者）に附添ひ、クラブを持ち、ボールを拾つて歩く者。多くは少年で、各競技者に一人づつ附添ひ、ゴルファーに助言することを許されてゐる。

【わめき立て】　〔わめく〕　大聲にさけぶ。をめく。騷ぐ。

【皆して】　ミンナして　皆で。

【動物にも國史がある】

人類は或一國の國民としてそれ〴〵特有の歷史をもつてゐるが、動物にも亦その棲息する土地々々によつて特殊の發達と變遷があることをいつたのである。（參考資料一參照）

作者はこの說を「日本犬」第二號所載「狼史雜話」中に稍積極的に主張し、（一）こゝにいふ「歷史」とは廣義の生活史の意味で、卽ち狹義の環境に限らずあらゆる條件によつて生活の形態又は內容に變遷があれば卽ち歷史があるので、かゝる意味の歷史は動物にもあると斷じ、（二）かゝる歷史の研究については、單なる知的興味よりするもの、學術上又は實際上の必要からするもの（例へば日本犬保存の立場から狼の滅亡史を研究する如き）、更に廣汎なる視野からこれらの歷史的事實に隱れたる法則を發見し、以て明日の人類の爲に備へようとするもの等があるが、その最後のものこそフォークロリストの立場であるとし、（三）最後に、かゝる研究の可能性については、動物には人類の如きそれ自身の記錄がないから、資料は常に外部記錄・隣人記錄でしかも斷片的であり、多くは遠方觀察である爲に誤解・想像・誇張が多い、しかしそれを多數蒐集してゆくとそこに非計畫的重複や偶然の合致があつて、比較によつて或程度の確さを見出し得る、可能性はむしろ研究者の忍耐强い努力と熱心にある、とフォークロリストの研究態度を明らかにしてゐる。

【緒】　イトグチ　（一）絲の端。（二）はじまり。てがかり。發端。端緒。こゝは（二）。

【一應】　イチオウ　ひととほり。大略。

【寄合の席】　ヨリアヒのセキ　集會の席。

【榊木君】　サカキクン　榊木敏氏。本名は關敬吾。明治三十二年長崎縣南高來郡小濱町富津に生まれた。現在東京帝國大學圖書館司書。夙に民間傳承の研究に興味をもち、雜誌「昔話研究」を編輯してゐる。

【小濱】　南高來郡小濱町。島原半島雲仙岳の西麓千々石灘に面し、遙かに野母半島を望み、山光・水色の美に富んでゐる。雲仙鐵道の終點雲仙小濱驛があり、雲仙へは自動車の便がある。また驛から南約一粁に小濱溫泉がある。

【島原】　シマバラ　こゝでは、島原半島をさす。南高來郡一圓の地で、中央山嶽地帶は雲仙國立公園となつてゐる。有明海・島原灣・千々石灣（橘灣）に圍まれ、東海岸の島原町にある島原城址を始め、それより南部一帶にかけて切支丹史蹟が少くない。

【所作】ショサ　(一)しわざ。ふるまひ。おこなひ。(二)身體のこなし。(三)をどり。まひ。(四)所作事。こゝは(一)。

【饗應】キャウオウ　酒食をまうけてもてなすこと。もてなし。ちそう。

【口拍子】クチビャウシ　口で拍子をとること。又、その拍子。

【關東】クワントウ　こゝでは、主として現在の關東地方、即ち東京・神奈川・千葉・埼玉・群馬・栃木・茨城一府・六縣の地を漠然とさしてゐるのであらう。(一〇八頁「東路」參照)

【鴉はかあ〳〵勸三郎云々】

作者の所謂童言葉の一種で、聯想・思ひ附・語呂等により口拍子の面白づくで口誦するのであるから一貫した意味はなく、又他の言葉が混入することも多い。

「童言葉」は、兒童が、主たる聽手を人間の仲間以外の者(花・鳥・夕燒等)に豫期して口すさぶ言葉。口癖のやうになつてゐるもの、群に集つて昂奮すると唱へるもの等がある。

〔勸三郎〕カンザブラウ　鴉を人名に擬し、「からすは、かあ、かあ、かんざぶらう」と頭韻を踏んだのである。「勸左衞門」と呼ぶ場合も少くない。

〔とんびは熊野のかねたゝき〕この原型と思はれるものに「鳶はとう〳〵藤三郎」「鴉、鴉、勸三郎、ちゝは熊野へ鉦叩き」等がある。鴉ならば熊野の神のお使として古くから知られてゐるが、鳶では熊野との關係がよく分からない。

「かねたゝき」(鉦叩)は、鉦を叩き經文などを唱へて錢を乞ひ歩く乞食。

〔百日たゝいて麥一升〕この原型と思はれるものに「一日叩いて米三合」といふのがある。一日叩いて乞食をした報酬が辛うじて米三合にしかならぬといふ、侮蔑的の意味をこめたものであらう。(參考資料二參照)

【囃す】ハヤす　(一)聲をあげて歌曲の調子をとる。(二)囃子を行ふ。(三)聲を立てて嘲る。こゝは(三)。

【面白づく】オモシロづく　面白さに乘じてすること。面白さにまかせてすること。

〔づく〕(一)名詞に添へて、ある限りを盡くす意を表す。「力づく」「修行づく」(二)名詞に添へて、それ次第の意を表す。「相談づく」「金づく」こゝは(二)。

【東京近郊のゴルフ場】

その主なるものは我孫子・藤ケ谷・鷹の臺(以上千葉縣)、朝霞・霞ケ關(以上埼玉縣)、根岸・程ケ谷(以上横濱市)、藤澤・相模(以上神奈川縣)等である。

〔近郊〕キンカウ　都市又は都邑の近傍に在る村里又は原野。こゝでは、普通よりも廣い意味に用ゐられてゐる。

【惡戲】イタヅラ

【習性】シフセイ　(一)習慣と性質。(二)習慣の性質となつたもの。環境に應じて作られた性質。こゝは(二)。

【逼迫】ヒッパク　(一)さし迫ること。せまり促すこと。(二)苦痛の身に迫ること。なやみ苦しむこと。(三)さしつまつて餘裕がなくなること。資財の窮乏すること。困窮。こゝは(三)。

【鴉祭】カラスマツリ　(參考資料一參照)

【契約】ケイヤク　ちぎり。約束。約定。

二　解釋

1　主題

島原半島の鴉がゴルフの球をくはへてゆく習性と鴉勸請。

2　構想

(1)　ゴルフの球をくはへて行く島原半島の鴉。(初―一五九ノ七)

(2)　子供の投げる圓い平たい小石をくはへようとする島原半島の鴉と鴉勸請。附、關東の「鴉はかあ〳〵勸三郎」。(一五九ノ八―一六二ノ一一)

(3)　かくの如き鴉の習性と鴉祭。(一六二ノ一二―終)

3　敍述

〔自分はこの話を聽いて、思はず「本當ですか」と言はずには居られぬほど驚いた。しかもさういふ心當りは正にあるのである。」――「動物にも國史がある」といふことを色々の例から歸納してゐる作者である。この話を聽いて思ひあたる所があつたのである。實證的な事例を得て喜んだのである。不斷の用意が充實してゐると、思ひがけぬ所で發見の緒を握る。そこに研究の喜があるのだ。

〔これは、動物にも國史があるといふ非常に大切な問題の緒であるから、纔かにわかつて居るだけでも、一應は記述して置く方がよい。」――學者らしい周到さと誠實さとの披瀝せられてゐる一句である。些細な事が重大な事の端緒であり得る用意から、どんなに微尤に過ぎない知識も粗末にしない。しかも興奮せず、誇張せずに、これを位置づけてゐる所にその道の大家らしい態度が示されてゐる。

〔それでまづ試みに、四五人の仲間の寄合の席でどんな印象を與へるかと思つてこの話をしてみたところが、早速にまた、新な知識を一つ添へることが出來た。」――同じ事に關心をもつ仲間の寄

合に、半ば實驗的にこれを發表したのである。そしてそれが新しい資料を得る端緒になつた。材料採集に於ける作者の不斷の熱意がこゝに至らしめるのであらう。

〔今までの子供の遊戯は、大抵は成人の所作の摸倣であつた。これも多分は古い時代に餅を鴉に投げ與へた際の唱へ言で、「鴉勸請」は即ち鴉を迎へて饗應をするといふ意味であつたのを、云々〕——この解釋が本文の核心を成すものである。一語の解釋が遠い祖先の生活と古い國民の習俗を闡明する鍵であることに深く心を惹かれるものがある。

〔これには、今一つ以前の久しい期間、投げて食はされるのが御馳走の餅であつた時代が續いて、その結果、云々〕——子供の惡戯に先立つて、多分宗教的行事の一として、鴉に餅を馳走した時代があつたらうとするのである。誠に興味の深い想像である。

〔人間が今のやうに逼迫するよりも以前に、もう九州ではこの鴉祭は絶えてゐる。〕——作者の鋭い、皮肉な人生觀察の一端が閃いてゐる。

〔たゞ子供と鴉だけが、その古い契約を、僅か片端だけでも憶えてゐるのではあるまいか。〕——大人がとうの昔に忘れ去つたことを子供だけが忘れないでやつてゐる。しかも鴉はその餅が石に變つても、同じやうにそれを追つてやまぬ。否、更にそれがゴルフの球に化してもそれをくはへ去らうとしてゐるのだといふのが、この作者の想像であり、解釋である。

三　批評

作者の敍說ぶりは「これは三好さんの話である」と冒頭に言つてくつろぎ、昔話でもしてゐるかのやうだ。しかしその底には民間傳承學者としての鋭敏な勘と、獨斷を避け、結論を急ぐまいとする愼重な態度とが一文の筋骨を成してゐることは見逃し難い。

三　備考

一　指導の問題

國土・鄕土を離れた人間生活を考へることは出來ない。民族的な縱と橫とのつながりを離れた人間生活はない。國土と民族とは我々の生を規定してゐる最も基礎的な地盤である。本課はさういふ國土や民族とのつながりが思はざる所にも存することに氣づかしめ、土地に殘り、民間に傳承せられてゐるものの有する意義の深さを知らしめるべき教材である。

殊に何でもないやうな古い童謠などに、思ひもよらぬ祖先の生活が傳へられ、民族精神の由來を明らかにするやうな事が少くない。本課に於て、「鴉かんじよう」といふ土俗語に對して、深い關心を拂ひ、不斷の探究を試みてゐる所に、生きた國語愛が感銘せられる。この點を學習させることを、指導の眼目とすべきであらう。

唯、考察の結論は假定的であつて、確說的でないことは十分に知らしめなくてはならないが、定說的なもののみを學習して、定說成立の出發點や過程を學習する機會の少い生徒には、却つてそれによつて國語學習の興味や方法が一層豐に暗示せられるであらう。

二　參考資料

（一）昭和九年五月十四日・十五日・十六日の、本文に引續き東京朝日新聞に揭載された部分から、鴉祭の實例及び作者の主張を窺ふべき部分を抄出する。

烏に食物を與へる神社は、府縣にはまだ幾らでもありさうに思はれる。〔中略〕近頃目についたたつた一つの例は防長史學といふ雜誌（二卷一號）に、玖珂郡柱野村杉森大明神の、御鳥喰神事（おとくらのしんじ）といふのを報じて居る。舊曆九月十三日の朝、餅を二重ねと米の粉を餅の形にしたもの一重ね、それにその朝の飯しる菜を添へて、社の前なる御供石の上に置くと、即時に烏二羽來つてこれを食ふ。たゞしけがれがある時は烏來らずして石の上に腐り、又他の鳥獸も食はぬといふが、無論さういふ場合はめつたに無いのであらう。〔中略〕

福島縣平付近の例をいふと、正月十一日の農立ての日の朝、今年苗代にしようと思ふ田に行つて初鍬をいれ、三所に餅と神酒洗米（ふきんとう）とを供へて、これを早稻（わせ）、中稻（なかて）、晩稻（おくて）の三通りに見立てゝ置く、さうして大きな聲でオミサギ、オミサギと喚ぶと、直ぐに烏が飛んで來てその餅をくはへて行く。どの餅を先に持つて行くかを見て、三種何れの稻が本年は當り作であるかを決するのださうである（民族一卷二號）。常には憎んで追ひ散らす烏でも、斯ういふ改まつた式の日だけはオミサキであつた。〔中略〕

正月に烏に餅を食はせる風習は方々にあるが、同じ東北でも土地によつてその式は少しづゝ變つて居る。青森縣の東の部分では、これを初山掛（ういやまがけ）といひ、正月八日の早朝に行ふ村が多いけれども、その初山も四日にする所、十一日にする所などが他にはある。

普通に行はれて居るのは餅を一種のわらづとにいれて、屋敷または一定の樹の枝に引かけ置き、それから大きな聲で烏を喚ぶのである。その言葉が村により又家によつて、色々變つてゐるのが私には面白い。〔中略〕

餅を引かけて置く樹々も、以前は定つた約束があつたかと思はれる。今でも里はづれの一本の老木、もしくは山の口元の或樹まで持つて行つてかけ、歸りにその樹の片枝を伐つて來て、わざ〳〵それを燃して御茶をわかして飲む土地もある。初山卽ち若木採りの儀式と結びついて居るので、此の木を山の神樣、鳥を山の神の御使と思つて居る者の多いのも、相應にいはれ因緣のあることである。〔中略〕

現在の烏祭では、投げて遣らずにたゞぶら下げて置いて、自由にくはへて行かせる例の方が多いが以前は烏の擧動を見る爲に、空中に向つてはふり投げるのが普通であつたのではないかと思ふ。秋田縣北部などの、烏をボーボーと喚んで居る地方では、そのわら製の飾り物をボッポカラといつて居る。これには三つの乳を付けて、大小三個の丸餅をその穴に插み、之を振回して餅を投げ飛ばすのである。さうして後にそのわら飾りを樹に引掛け、その枝を少しばかり折つて歸つて來るといふ（民俗學四卷二號）。關東の田舍の子供たちは、石投げの遊びにもこれとよく似た裝置のものを用ゐてゐた。餅を烏に遣るために發明された技術でもあるまいが、石を投げるよりも正月に餅を斯うして投げる方が、心理學的にも何倍か愉快であり、また大人もこの日ばかりは少年の心持にかへつて、昔の腕前を示さうとしたことであらう。置いて取らせるやうになつたのは、烏の警戒心の增加だけで無く、或はこの石投げ武藝の衰微のためだらうかと私は思ふ。

斯ういふ風に解しなければ、かの雲仙ゴルフ場などの、奇現象は說明することが出來ない。正月に烏を祭る風は九州にはもう絕えてしまつたらしく、神社の儀式としても有名なものは無いやうだが、尙烏だけは何十代か前の親々が、かつて空中の餅をついばんだ經驗を相續して、今でも白い小さな圓いものの飛ぶのを見ると、大急ぎに出て來てくはへ去らうとする特殊の習性を現すのである。人がミサキを信じてこれを饗せんとし、烏の本能的なる貪食を以て、神が祭を享け給ふしるしとする思想が、もしも中頃から發達して來たものならば、烏の環境はこれに伴つて改まり、その生活は變化したのである。卽ち烏にもまた一國限りの、種族の歷史といふものがあつたのである。

日本の烏の風習に大きな特徵のあることは、つとにエドワード・モールス翁なども深い注意を拂つて居る。どこの田舍へ行つても彼等は人に興味をもち、殊に我々の手許や擧動を、いつでも橫目で見守り、時には近よつて立聽きでもしようとするかと思ふことがある。これをモールス翁は日本人の德が、無心の鳥獸までをなつけて居るやうに、一人で合點して敬服してをられるが、他にもまだ一つの證れたる理由はあつたので、それだから又雲仙の球拾ひの子供などが難儀をするのである。この頃大分流行つて來た動物心理の研究なども、面白い仕事であるだけにこのモールス翁の眞似はさせたくないと思ふ。

烏が橫著だつたり惡賢かつたりするのにも、西洋には西洋だけの理由があり、日本には又日本限りの、隱れたる原因があるのかも知れない。個々の動物が出現以來、たつた一つの道しか生きなかつたやうにきめてかゝるのが出發點であるとしたら、この研究も實は心細い。烏にだつてやはり土地每の歷史はあり、それがまた後々の生存條件をきめて居る。成程彼等の間には歷史家無く、無論また記錄も無い。それが人類とちがふといへばちがふのだが、その人類の內にだつて、九割以上は記錄などは持つて居やしない。それを歷史が無かつたものの如く、考へることはもう許されないのである。

雲仙の烏がゴルフの球を盜むには、この國限りの永い由緖があり、又新らしい誤解があつた。一旦の遺傳はその原因が消えると、再び又薄れてもよかつたのだが、子供たちがいつまでも烏勸請の遊戲を覺えて居て、それを今日のゴルフの時代まで持越して來たのである。子供の所業は烏どもの歷史の上には、太閤やナポレオンほどの力があつた。

二一　鴉勸請

（一）柳田國男氏の推薦された童謠研究會編「日本民謠大全」（明治四十二年、春陽堂發行）より本文の歌に類似するもののみを二三抄出する。

雀は忠々忠三郎、鴉はかあ〳〵勸三郎、鳶は富田の鰯賣。（伊勢）

鴉はかあ勸三郎、鳶はとう〳〵藤三郎、なかよく遊んだら蛙十匹とらそ。（同）

鴉かあ〳〵彼の物かくせ、鳶とう〳〵とのものとらしよ。（同）

雀チウ〳〵忠三郎、鴉カアカア勸三郎、鳶トウ〳〵藤三郎。（志摩）

鴉、鴉、勸三郎、ちゝは熊野へ鉦叩き、一日叩いて米三合。（上總）

鳶はチー、烏はカー、鳶は熊野に鉦叩き、一日叩いて米三合、三合ばかりは食ひ足んない。（常陸鹿島地方）

尙「日本民謠大全」によると、動植物歌中では鴉に關するものが壓倒的に多數であり、且、鴉だけを單獨に歌つたものは少くないが、他の鳶や雀だけを歌つたものは極めて僅かである。

二三　學者の苦心

一　解題

一　本文

「大日本國語辭典」（全四冊、外に索引一冊）卷一の序文を採つたものである。（大日本國語辭典卷一　大正四年十月、冨山房發行）

「大日本國語辭典」は上田萬年・松井簡治兩博士の十五年間の努力の結果になつた國語辭書で、大正四年十月から大正八年十二月までの間に本文四册が刊行せられ、一般的國語辭書としては一時期を劃したものである。所收の語彙は上古から現代に至る一般日本語、普通の學術語、國語化した外來語、東京附近に於ける方言等に亙り、又熟語・俚諺・格言等をも收め、その語數二十餘萬に及んでゐる。

二　作者

芳賀矢一（はがやいち）。慶應三年五月、福井藩士芳賀眞咲の子として現福井市に生まれた。第一高等中學校（第一高等學校の前身）を歷て明治二十五年帝國大學文科大學國文學科を卒業、大學院に於て國文學を專攻し、二十八年第一高等學校教授兼高等師範學校教授、三十一年東京帝國大學文科大學助教授となり、三十三年文學史攻究の爲ドイツに留學を命ぜられ、三十五年歸朝、東京帝國大學教授となり、國語學・國文學の講座を擔任し、三十六年文學博士の學位を授けられた。大正四年帝國學士院會員となり、五年歐米各國へ出張を命ぜられ、六年歸朝、七年國學院大學長に就任、十年東宮職御用掛仰付けられ、十一年帝國大學名譽教授となり、昭和元年宮內省御用掛を命ぜられた。二年二月、大正天皇の奉悼歌を謹作、ついで歿した。享年六十一。

學者中の能文家を以て聞え、晩年眼を病み、一時失明に近かつた時もなほ文筆を絕たなかつた。著書には「國文學史十講」「國民性十論」「攷證今昔物語集」「國文學歷代選」等があり、また下田次郎博士と「日本家庭百科事彙」を共編した。その他、國語辭書・人名辭書・文學者年表・國語讀本等の編著十數種を數へる。

三　採擇の趣旨

一「大和言葉」一四「心の小徑」二一「鴉勸請」等と相俟つて、

國語の價値を知らしめ、國語の愛護を目ざした學習に導く文である。國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【十年一昔】　ジフネンヒトムカシ　十年前を今日と比べると、變遷甚だしく、ちやうど昔のやうな感がある、といふ意。

〔一昔〕　十年又は二十一年などの經過したこと。今は普通十年をいふ。元服曾我には「昔は六十六年を一昔とし、中頃は三十三箇年、當代は二十一箇年を一昔とす」とある。

【上田・松井の二君】　上田萬年と松井簡治の二君。

〔上田萬年〕　ウヘダマンネン　慶應三年一月現名古屋市に生まれた。明治二十一年帝國大學和文學科を卒業し、更に大學院に於て國語學を專攻した。三十三年獨・佛に留學、約三年半にして歸朝、帝國大學文科大學教授兼高等師範學校教授となつた。三十一年文部省專門學務局長に轉じ、三十三年文學博士の學位を得、三十五年再び東京帝國大學教授に任命、ついで同文學部長となり、傍ら國語調査會の爲に盡力した。大正十五年辭し、神宮皇學館長・國學院大學長となり、更に東京帝國大學名譽教授・帝國學士院會員等に推された。昭和十二年十月歿、享年七十一。「國語のため」「國語學叢話」「國語學十講」「興國の偉人新井白石」その他四十餘種の著書がある。

〔松井簡治〕　マツキカンヂ　文久三年五月現千葉縣海上郡本銚子町に生まれた。幼時から家庭で國語・漢文を修め、明治二十三年帝國大學教育科卒業。二十五年學習院教授となり、三十五年東京高等師範學校教授に轉じ、昭和四年東京文理科大學教授に任じ、現に同大學名譽教授である。大正九年文學博士の學位を授けられた。

【國語辭書の編纂】　「大日本國語辭典」の編纂をさす。

「大日本國語辭典」は全五册の中、本文四册は大正四年十月―八年十二月に亙つて出版され、昭和三年十月―四年四月にその修正版を、昭和三年十月索引一册が出版された。（參考資料參照）

〔編纂〕　ヘンサン　主として他人の執筆にかゝる文書を、一定の意圖・計畫の下に整理・輯錄して一部の書籍とすること。

【とくに】　疾くに　既に。とうに。とつくに。はやく。さきに。

【心祝】　ココロイハヒ　心ばかりの祝。こと〴〵しい設けなどしな

いで、關係の密接なものだけでする祝。

【晩餐會】バンサンクヮイ　客を招待して晩餐を供する會。又は晩餐を共にする會。

「餐」―(一)のむ。のみくらふ。(二)のみもの。くひもの。(三)ゆふめし。

【うち興じた】興に入つた。

「うち」は「打つ」の連用形で、動詞に冠して、その意を強め又は語調をとゝのへる。

【其の頃始めて小學校に入つた余が娘】長女田鶴子(明治二十八年生)か、次女敏子(明治二十九年生)であらう。

【初孫】ハツマゴ・ウヒマゴ　初めての孫。

【年の流れ】トシのナガれ　年月の過ぎ去つてゆくのを水の流れに譬へた語。

【日露戰役】ニチロセンエキ　(一八〇頁參照)

【工業】コウゲフ　天然から採取したものを材料として、又は栽培・飼養した動植物を材料として、我々の欲求を滿足させるやうな財貨を生産する事業。

本文の書かれた大正四年と十年前の明治三十七年に於ける工業の狀勢を比較すれば左の如くである。

	(明治三十七年)	(大正四年)
工場總數	九、二三四	一六、八〇九
原動機使用工場數	四、〇〇〇	一〇、六八八
職工數	五二六、二一五	九一〇、七九九

參考の爲、最近(昭和十年)の數字をあげれば左の如くである。

工場總數	八五、一七四
原動機使用工場數	七三、三〇二
職工數	二、三六九、〇〇〇

【貿易】ボウエキ　國際間の財物の交換。國際間の商業。

本文の書かれた大正四年と十年前の明治三十七年に於ける貿易額を比較すれば左の如くである。(單位千圓)

	(明治三十七年)	(大正四年)
輸出額	三二九、六八七	七二九、四三九
輸入額	三七一、八〇一	五四五、二七六

參考の爲、最近(昭和十年)の數字をあげれば左の如くである。

輸出額	二、六九八、九七五
輸入額	二、七六三、六八一

【工程】コウテイ　こゝでは、工作過程。しごとの運び。

【鑛山】クヮウザン　有用鑛物を鑛石として採掘する場所。廣義には炭山(又は炭礦)・石油山をも含むが、普通にはこれ等を除外した非金屬鑛山(硫黃山・鹽山等)及び金屬鑛山(金山・銀山・銅山・鐵山・鉛山等)の總稱。

【鑄分けられて】

鑛山から掘り出し(採鑛)選り分け(選鑛)られた鑛石が、熔鑛爐で熔解されて所要の金屬だけを析出されること、即ち鎔錬の操作をいふ。かくして精錬された金屬(粗金屬)は更に製錬されて純度の高い金屬が得られるのである。

【鑛石】クヮウセキ　有用な金屬を含む鑛物、又はその集合體。主として金屬鑛物の場合に用ゐられる。

廣義にはすべての自然金屬及び金屬化合物をいひ、又硫黃・燐その他の非金屬鑛をも含む。

【古語】コゴ　古く行はれた語で、今は一般の談話・文章等には用ゐられてゐないもの。

【典籍】テンセキ　かきもの。ふみ。ほん。書物。書籍。

「典」は、五帝の書。ふみ。

「籍」は、ふみ。かきもの。

【摘出】テキシュツ　多くの中から或ものを拾ひ取ること。えり取ること。

【編輯室】ヘンシフシツ　編輯の事務を掌る室。

【編輯】(一)「編纂」に同じ。(三二七頁參照)(二)すべて原稿又は文書を、印刷に附して書籍又は雜誌に仕上げるまでの一切の事務をいふ。

【山を成したカード】山のやうになつたカード。

原稿を積み上げると、卷一から卷三までは各〻約一丈三尺、卷四は一丈五尺、四卷合はせると丁度奈良の大佛と同じ位になるわけであつたといふ。

〔カード〕card(英)　こゝでは、厚紙を小形に切り、物を記して控とするもの。

カードを使用して事務を整理する方法をカード・システムといふ。事項をカードに記入してABC順・五十音順・いろは順・數字順等に排列する方法で、使用に當つて順序の混亂を來さずに整理し得、又檢出が容易である等の點で便利が多い。

【逝いて】ユいて

〔逝く〕(一)過ぎさる。(二)去る。にげる。(三)行く。進む。(四)死ぬ。こゝは(一)。

【暦も幾度か改る】年も幾度か變る、何年もたつ、の意。

一年を境として暦が新しくなるからである。

〔暦〕コヨミ　主として天體の運行をもととして定められた、

【文物】ブンブツ　文化の産物。人文の發達に關する事物。即ち學問・藝術・宗教、竝びに制度・法律など。
【武器】ブキ　こゝでは、必要な道具、要具、の意。
【强み】こゝでは、頼んで力とするもの。たより。よすが。
【堅忍不拔】ケンニンフバツ　かたく堪へ忍んで、心の動かないこと。がまんづよくて、ぐらつかぬこと。
【所以】ユエン「ゆゑ」の音便。いはれ。わけ。
【沒交渉】ボツカウセフ　かゝりあひのないこと。無關係。
【紛糾】フンキウ　物事の亂れもつれること。紛亂。紛淆。
【相往來してゐる】アヒワウライしてゐる　互に交渉をもつてゐる。互につながり合つてゐる。
【一大白を浮かべよう】大いに祝杯を擧げよう。
〔大白〕タイハク　大きなさかづき。大杯。又、さかづき。
「白」は、酒の色をいふ。

二　解釋

1　主題

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、偉大な國家的事業を成し遂げた二君の勞苦と功績。

2　構想

(1)　著手後十年を經て聞く國語辭書第一卷出版の音づれ。（初―一六五ノ五）
(2)　この十年間に於ける國家的大事件と何等社會の注目を惹かなかつた二君の辭書編纂の苦心。（一六五ノ六―一六七ノ一）
(3)　國語界の一大戰艦であり、國家的大事業である國語辭書を成就した二君の功績。（一六七ノ一二―一六九ノ八）
(4)　成業の喜と祝意。（一六九ノ九―終）

3　敍述

〔初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。〕――作者が最近に經驗した衷心からの喜悅は初孫の誕生であつた。作者は今二友の成業をその喜悅に比し、更にそれよりも大きいといつてゐる。友に對する眞實と學術に對する熱意の示された言葉である。
〔二君の編纂事業は、かういふ中に、徐々に其の工程を進めて行つたのである。〕――日露戰爭を中心とした大事件を背景として、かくれた努力が積まれた經過を回想したのである。
〔一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。〕――何時になつたら出來上るか、果の分からぬやうな大事業が根氣よくつゞけられてゆくのだ。篤く任じ、深く信ずる學者の努力には驚歎される。急がず怠らず堅忍・持久の仕事振が窺はれると共に、それを傍から絶えず溫かい目で見守つてゐる作者の心が、芽立に降る春雨のやうに注がれてゐるのである。
〔學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。〕――學者が學者の苦心を語る言葉である。默々として國家的大事業を果してゆく所に「學者の生命があり、學術の意義がある」ことを確信してゐる作者の胸底から涌き出た言葉である。
〔國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査・整理が、緊急な事業であることはいふまでもない。〕――この大問題に覺醒した國民のみが眞の發展を示す國民であることは世界史上の事實である。
〔こゝに一大戰艦にも譬へるべき本書を有するに至つたことを驚歎し、云々〕――當時にあつては譬喩を大にしたつもりであつたであらうが、今にして思へば猶過小を免れない觀がある。少くも一大艦隊に比すべきであつたともいへる。
〔學者の事業は、いつも世間と沒交渉のものではない。〕――學者の事業を世間と沒交渉な閑事業であるとしてゐる一般の觀念を是正するに恰好の事實である。しかもそれは單にその成果が社會を裨益するといふ一面のみではない。その材料に於て、經過に於て、實社會と常に交流してゐるものであることを指摘してゐる點は注意すべきであらう。
〔余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待ち暮した同友とともに、まづ二君　成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。〕――何といふ溫かい友誼の言葉であらうか。又いかに作者の眞面目の發露してゐる眞心の聲であらうか。讀んでこの結語に至る毎に、作者の面目の眼前に髣髴するを覺えしめられる。

三　批評

學者の苦心は學者にのみわかる。作者は二友の功績を讚へ、勞苦を慰めるに當つて、美辭・麗句をつらねようとはしない。率直に實感をのべてゐる。友としての溫かい眞情と、同學としての深い理解がこの一文を成した原動力である。その點に於て、我々の有するに至つた明治・大正年代を通じての麗しい序文の一例であらう。

人世の社會生活を規定する時間上の方式。

【傍】ハタ

【捗の行かぬ】はかどらない。進捗しない。

〔捗〕ハカ　仕事のしあがりぐあひ。はかどり。進度。

【齒痒い】ハガユい　他人のなすところを傍から見て、物足らなく感じ、心がいら立つ。もどかしい。じれつたい。

【かたのつく】片の附く　處理がをはる。かたづく。まとまる。

【松井君の邸】東京市小石川區關口駒井町二番地に在る。

【半鐘】ハンショウ　釣鐘の小形のもの。寺院又は陣中の合圖に用ゐた。今は多く火災等の警鐘に用ゐる。

【餘所ながら】ヨソながら　(一)餘所にゐながら。遠く離れてゐながら。(二)それとなく。間接に。こゝは(二)。

【粒々積み上げた砂子も遂には山を成す】積み上げ〳〵してゆけばこまかな一粒々々の砂もしまひには山になる。刻苦・忍耐してものごとを成就させる譬。

〔粒々〕リフリフ　一つぶ一つぶ。李紳の憫レ農詩に「鋤レ禾日當レ午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、粒々皆辛苦」とある。

〔砂子〕イサゴ　細かい石。砂。

【緒に就いた】ショにツいた　完成のいとぐちが開けた。まとまりかゝつた。

〔緒〕(三一九頁參照)

【落成】ラクセイ　宮室の出來あがること。轉じて、工事の出來あがること。

「落」は、出來上る。「落慶」

【何萬噸といふ軍艦】

軍艦の噸數はその排水量(水面下の船體容積に相當する水の容量)を英噸で表す。

〔噸〕トン　ton(英)　(一)重量の單位。英噸は二、二四〇封度(約二七一貫)、米噸は二、〇〇〇封度、佛噸は一、〇〇〇瓩。(二)容積の單位。船舶の容積は毎一〇〇立方呎を、船載貨物の積量は毎四〇立方呎をそれ〳〵一噸とする。

【進水式】シンスキシキ　新造の艦船を水上に浮かばせるときに行ふ儀式。

【ぢみ】地味　(「はで」の對)　(一)はなやかでないこと。くすんでゐること。(二)みえをはらぬこと。質樸なこと。こゝは(一)。

【拮据】キツキョ・ケツキョ　忙しく働くこと。仕事に骨折ること。つとめ働くこと。

【根氣】コンキ　「氣根」「根」ともいふ。物事をなすに當りよく久しきに耐へ得る精神力。精力。氣力。精根。

【閑事業】カンジゲフ　實用に適しない暇つぶしの仕事。

【國民精神】コクミンセイシン　こゝでは、國民としての意氣、思想、信念、などの總括。

【國家教育】コクカケウイク　(一)國家が施行するすべての教育。(二)國家主義によつて施す教育。(三)國民教育即ち國民精神の涵養を目的とする教育。こゝは(一)。

【根柢】コンテイ　(一)植物の根。(二)事物のもと。こゝは(二)。「根」は、横にさす根。「柢」は、竪の根。

【國語の調査・整理】コクゴのテウサ・セイリ

國語は時代により、地方により種々の變遷をなし、音韻・語彙・文字・語法・文體等にわたつて混雜・不統一の狀態にあるから、これ等を調査・研究し、粗雜・無駄なものを去り、國語の本質に立脚し、しかも時代に即して、純正な標準語・標準文體を制定し、國字を改良し、假名遣を改定し、文法を整理することは、國民生活上喫緊事である。

【緊急】キンキフ　(一)絃をきびしく張ること。(二)事件が重大で且急を要すること。こゝは(二)。

【一等國】イットウコク　國力が強大で國際上最も優勢な地位を占める國家。

二二　學者の苦心

現在世界の一等國は、日・米・英・佛・伊・獨・露等である。

【普及】フキフ　あまねくおよぶこと。一般にゆきわたること。

【學者の生命】ガクシャのセイメイ　學者の本領。學者の學者たる所以。

【學術の意義】ガクジュツのイギ　學問のねうち。學問の存在理由。

【十年以前に比べて、鐵道の哩數や軍艦の噸數云々】

本文の書かれた大正四年と明治三十七年に於けるそれ〳〵の數を比較すれば左の如くである。

	(明治三十七年)	(大正四年)
鐵道	四、六九四哩(七、五五四粁)	七、四三六哩(一一、九〇七粁)
軍艦	三六六、九八六噸	六五九、三一九噸

參考の爲、最近(鐵道は昭和十一年、軍艦は同十二年)に於ける數字をあげれば左の如くである。

鐵道	二四、四〇三粁
軍艦	七一六、六四五噸

〔哩〕マイル　Mile(英)　イギリスの距離の單位。「英里」ともいふ。八〇鎖(チェイン)で、我が國の十四町四十五間八寸三分五厘餘に當る。尚、我が國の鐵道の哩程が粁程に改正されたのは昭和五年四月からである。

【文物】ブンブツ　文化の産物。人文の發達に關する事物。即ち學問・藝術・宗教、竝びに制度・法律など。
【武器】ブキ　こゝでは、必要な道具、要具、の意。
【强み】こゝでは、頼んで力とするもの。たより。よすが。
【堅忍不拔】ケンニンフバツ　かたく堪へ忍んで、心の動かないこと。がまんづよくて、ぐらつかぬこと。
【所以】ユエン「ゆゑ」の音便。いはれ。わけ。
【沒交渉】ボッカウセフ　かゝりあひのないこと。無關係。
【紛糾】フンキウ　物事の亂れもつれること。紛亂。紛淆。
【相往來してゐる】アヒワウライしてゐる　互に交渉をもつてゐる。互につながり合つてゐる。
【一大白を浮かべよう】大いに祝杯を擧げよう。
〔大白〕タイハク　大きなさかづき。大杯。又、さかづき。「白」は、酒の色をいふ。

二　解釋

1　主題

幾多の困難に打克つて、國民の覺知せぬ間に、偉大な國家的事業を成し遂げた二君の勞苦と功績。

2　構想

(1) 著手後十年を經て聞く國語辭書第一卷出版の音づれ。（初―一六五ノ五）
(2) この十年間に於ける國家的大事件と何等社會の注目を惹かなかつた二君の辭書編纂の苦心。（一六五ノ六―一六七ノ一）
(3) 國語界の一大職艦であり、國家的大事業である國語辭書を成就した二君の功績。（一六七ノ一二―一六九ノ八）
(4) 成業の喜と祝意。（一六九ノ九―終）

3　敍述

〔初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。〕――作者が最近に經驗した衷心からの喜悅は初孫の誕生であつた。作者は今二友の成業をその喜悅に比し、更にそれよりも大きいといつてゐる。友に對する眞實と學術に對する熱意の示された言葉である。
〔二君の纒纂事業は、かういふ中に、徐々に其の工程を進めて行つたのである。〕――日露戰爭を中心とした大事件を背景として、かくれた努力が積まれた經過を回想したのである。
〔一月、二月、三月、四月、秋も暮れ、春も逝いて、曆も幾度か改る。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。〕――何時になつたら出來上るか、果の分からぬやうな大事業が根氣よくつゞけられてゆくのだ。篤く任じ、深く信ずる學者の努力には驚歎される。急がず怠らず堅忍・持久の仕事振が窺はれると共に、それを傍から絶えず溫かい目で見守つてゐる作者の心が、芽立に降る春雨のやうに注がれてゐるのである。
〔學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。〕――學者が學者の苦心を語る言葉である。默々として國家的大事業を果してゆく所に「學者の生命があり、學術の意義がある」ことを確信してゐる作者の胸底から涌き出た言葉である。
〔國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査・整理が、緊急な事業であることはいふまでもない。〕――この大問題に覺醒した國民のみが眞の發展を示す國民であることは世界史上の事實である。
〔こゝに一大戰艦にも譬へるべき本書を有するに至つたことを驚歎し、云々〕――當時にあつては譬喩を大にしたつもりであつたであらうが、今にして思へば猶過小を免れない觀がある。少くも一大艦隊に比すべきであつたともいへる。
〔學者の事業は、いつも世間と沒交渉のものではない。〕――學者の事業を世間と沒交渉な閑事業であるとしてゐる一般の觀念を是正するに恰好の事實である。しかもそれは單にその成果が社會を裨益するといふ一面のみではない。その材料に於て、經過に於て、實社會と常に交流してゐるものであることを指摘してゐる點は注意すべきであらう。
〔余は二君の滿足と喜悅を察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待ち暮した同友とともに、まづ二君　成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。〕――何といふ溫かい友誼の言葉であらうか。又いかに作者の眞面目の發露してゐる眞心の聲であらうか。讀んでこの結語に至る毎に、作者の面目の眼前に髣髴するを覺えしめられる。

三　備考

二　學者の苦心

三　批評

學者の苦心は學者にのみわかる。作者は二友の功績を讚へ、勞苦を慰めるに當つて、美辭・麗句をつらねようとはしない。率直に實感をのべてゐる。友としての溫かい眞情と、同學としての深い理解がこの一文を成した原動力である。その點に於て、我々の有するに至つた明治・大正年代を通じての麗しい序文の一例であらう。

一　指導の問題

國語辭典の編纂事業を通して、國語の意義・使命を會得せしめることの出來る教材である。民族生活の發展を劃し、國家生活の向上を期する上に、重要な契機を成してゐる國語の價値を自覺させることは、國民教育の重要な根柢を成すものである。

次に作者の態度を見るに、作者は、親友しかも學を同じうする親友の十年一日の如き不屈の努力を絶えず溫かい眼を以て見守つてゐる。眞夜中、半鐘の音を聞いては、若しやと肝を冷やしたことも何度かであつたといふ。その友情がふつくりと全文に漲つてゐる。それが成業を見ては一大白を浮かべようといふ悦の發露となるのである。第一卷の成就を初孫に譬へ、學者の事業を鐵道・軍艦にたとへたのは、作者の境遇と時代とを反映するもので、誠に適切を極めてゐる。これとて作者の眞情を外にして考へることの出來ない譬喩である。何よりも序文としての、この條件を讀みとらせたい。

本課の指導に際しては辭書の實物を生徒に見せることが必要であらう。實際に使用させることは更に望ましい。前課が國語の土俗學的研究の興味を感じさせる文であつたのに對して、本課は國語の整理・分類を主とした辭典の價値を理解させる文といふべきであらう。しかし單なる說明文ではないことはいふまでもない。尙その爲

にも、明治・大正の國語學界の功勞者たる上田・芳賀・松井三博士の略傳と關係とを簡單に補說することは適切な指導であらう。

二　參考資料

明治以後に於ける國語辭書の發達に關する橋本進吉氏の考察を、「日本文學大辭典」から採掲する。

維新後間もなく、文部省は木村正辭及び横山由清の兩人總裁の下に岡本保孝・小中村清矩・榊原芳野・黑川眞頼・間宮永好・塙忠韶の六人をして「語彙」を編纂せしめ、明治四年に阿之部を、同十四年に伊之部・宇之部を刊行したが、以後中絶した。文部省では更に大槪文彥に命じて一の國語辭書を編纂せしめた。同十九年稿成つて「言海」と名付けられ、同二十四年に印行された。この書は英語辭書に倣つて作つたもので、語毎に發音、品詞別、解釋、引例、語源を擧げ、近代的な辭書としての體例を備へた最初のものであり、普通の和漢語の外に外來語を加へて約三萬九千餘語を收錄してゐる。「言海」が印行される前、既に二三の辭書が現れてゐる。近藤眞琴の「詞の園」は明治十八年に刊行されたが、主として平家物語頃までの言葉を集めたもので、全文假名書である。物集高見博士は、曩に「日本小辭典」を著はし、主として用言を集めたが、同二十一年に「詞のはやし」を刊行した。主として古書の解讀に便したものであつた。これに反して、高橋五郎の「和漢雅俗いろは辭典」(明治二十二年刊)は、通俗語・漢語を主として擧げてゐる。同二十五年には、山田武太郎の「日本大辭書」が出た。編者は辭書として備へるべき條項として音調が缺くべからざるものであることを主張し、當時の東京語のアクセントによつて一々音調を記入した。同二十七年には物集高見博士の「日本大辭林」(「ことばの林」を增補したもの)が出た。同三十一年に刊行された落合直文の「ことばのいづみ」になると、固有名詞や日淸戰爭當時の新語をも收めてその語數が多くなつてゐる。後、明治四十一年にその增補版が出た。同四十四年には金澤庄三郎博士の「辭林」が出て、普通語を多く含む簡便な辭書として世に行はれた。大正元年に至つて芳賀矢一博士の「新式辭典」が出た。假名引であるが、漢字の音調を知らなくとも檢出し得るやうに、漢字畫引索引を附したのが新しい點である。同四年には「ローマ字で引く國語辭典」(上田萬年博士)、「ローマ字索引國漢辭典」(榮田猛緒・近藤久吉)の如くABC順に排列したものが刊行され、同六年にも「ABCびき日本辭典」(井上哲次郎博士等)が出た。大正四年から八年にかけて(索引一册は昭和四年刊行)、上田萬年博士・松井簡治博士共著の「大日本國語辭典」が刊行された。體例・語數等に於て、從來のものよりは遙に優れたものである。大正十年から昭和四年にかけて、芳賀矢一博士改修の「日本大辭典言泉」が刊行されたが、この書は「言泉」の最初の態度を踏襲したもので、收錄した語は各方面に亙り、語數も亦最も多いが、學術的と云ふ點では寧ろ「大日本國語辭典」の方が優れてゐる。金澤庄三郎博士は「辭林」を增補して「廣辭林」を大正十四年に刊行した。特殊的な辭書としては、外來語を集めた「日本外來語辭典」(上田萬年・高楠順次郎・白鳥庫吉・村上直次郎・金澤庄三郎、大正四年刊)等があり、隱語を集めた「日本隱語語集」(稻山小長男、明治二十五年刊)、難讀の語を彙集した「難訓辭典」(井上頼圀、明治四十年刊)、類義語を集めた「日本類語大辭典」(志田義秀・佐伯常麿、明治四十二年刊)、諺を集めた「諺語大辭典」(藤井乙男、明治四十三年刊)、漢語の故事熟語辭典である「故事成語大辭典」(簡野道明、明治四十年刊)、「故事熟語大辭典」(池田四郎次郎、大正二年刊)等がある。また或る古典又は或る時代に現はれた單語を集めた辭書も現はれた。「萬葉集辭典」(折口信夫、大正八年刊)、「元祿文學辭典」(佐藤鶴吉、昭和三年刊)、「近松語彙」(樋口慶千代、昭和五年刊)、「日本古語大辭典」(松岡靜雄、昭和四年刊)等である。

二三　天下第一人

一　解題

一　本文

「崋山全集」(卷余二)第一卷に收められてゐる「退役願書稿」を抄錄したものである。(崋山全集第一卷　明治四十三年十二月、崋山會發行)

「退役願書稿」は、天保九年(二四九八)作者四十歳の時、同藩家老へ差出したもので、開港の實際運動に臨まうとするに當り、萬一の場合藩主に迷惑を及してはならないとの深慮から綴られたものであらう。梗概は、まづ四十年來一日の如く忠勤を勵んで來たが近來頓に病弱を加へて退役の已むべからざるに至つた事情から說き起し、幼年時代からの公私に涉る生活を回顧しつゝ、大志は懷きながら種種の事情から「何ひとつ御政治の御稗益可二相勤一道筋」も知らず、たゞ「繪事の內職」にのみ終始した所以を述べ、最後に繪事の大要を說いて治道に比し、老母令終の心願を披瀝して結んでゐる。作者の自敍傳とも見らるべく、その人となりを覗ふべき好箇の資料である。

二　作者

渡邊崋山(わたなべくわざん)。名は定靜、字は子安又は伯登、通稱は登。崋山の外に隨安・昨非・觀海等と號した。寬政五年(二四五三)九月、三河國田原藩(三宅侯)の家臣渡邊定通の長子として、江戸半藏門外の田原藩邸內に生まれた。貧窮の間に育つて幼時から大志を懷き、初め儒者を志して爽鳩鷹見星皐に學んだが、生計の資を得る爲に畫家を志し、平山文鏡・白川芝山・金子金陵・谷文晁等の諸家に從遊、傍ら經史を佐藤一齋に學び、又武藝をも嗜んだ。一方藩務に精勵し、八歳の時君側に侍したのを初として次第に累進、天保三年(四十歳)には年寄役の末席に列し、海防事務官に補せられ、又自ら佐藤信淵の門に出入して農政・經濟を究め、或は信淵を田原に聘して農政講習會を開き或は報民倉を起すなど、殖產興業に力を致すところが多かつた。又夙に西洋の事情に著眼し、蘭學を鷹見泉石に學び、高野長英・小關三英・鈴木春山等の蘭學者と時事を論じ、天保八年英船モリソン號事件に關し、「戇舌或問」「戇舌小說」「愼機論」等を草して攘夷の不可を論ずるに及び、幕府の怒を買つた。たま〳〵崋山等同志の蘭學者が無人島(小笠原島)を開拓して西洋に通じようと計畫してゐるとの誣告をなすものあり、十年遂に幕府に捕へられ、翌年田原に蟄居を命ぜられた。蟄居中同志と贈答するの廉を以て藩規の弛緩を譴責せられるに及び、累の藩侯に及ばんこと恐れ、十二年十月自盡した。享年四十九。明治二十四年正四位を追贈せられた。

人と爲り容貌魁偉、資性至孝にして豪邁不羈、才は文武を兼ね、書畫・詩文・和歌・俳句等に達し、殊に畫は宋・元・明の諸家を範として洋畫の描法をも取り入れ、當代南畫壇の泰斗として花鳥・山水往くとして可ならざるはなく、就中肖像畫に於ては近世畫人の第一人者を以て目せられる。「千山萬水」「月下鳴機」「于公高門」「溪間野雉」「目黑詣」「一掃百態」「鷹見泉石像」等の名作多く、「邯鄲一炊」は絕筆の作と傳へられる。

三　採擇の趣旨

具體的な國語愛と、武士道的な國民精神の發展とを中心として組織せられた本卷の最後に、國民的一偉人である渡邊崋山の覺悟を揭げて一卷を完結せしめようとした。國民的敎材である。

二　敎材としての研究

一　註解

【十二歳の時】　文化元年(二四六四)。

崋山は當時、三河國田原の藩主、三宅備前守康友の世子龜吉のお伽役を勤めてゐた。

【日本橋】　ニホンバシ　現東京市日本橋區室町一丁目と同區通一丁目とを通じ、外濠から隅田川に流れ入る日本橋川に架せられてある。慶長八年創設せられ、翌年この橋詰が國內里程の原標となつた。木橋の爲に數十回燒失したが、現在は明治四十四年架設の花崗岩、歐風アーチ型のもので、橋面中央に東京市道路元標がある。これを起點として市內を通ずる國道に、東海道・中山道・奧羽街道・千葉街道・甲州街道の五線がある。

【御先供】　オサキドモ

〔先供〕　行列などに、眞先に立つて行く供人。後に立つ供人に對していふ。

【打擲】チャウチャク　打ちたゝくこと。なぐること。毆打。

「擲」―(一)物を投げる。(二)侮り打つ。毆打する。

【大息】タイソク　ためいき。又、ためいきをついて歎くこと。

【天分】テンブン　(一)その人の天からうけたもちまへ。天性。(二)天からうけた身のほど。自然にその身に備はつた分限。(三)天から命ぜられた職分。こゝは(二)。

【發憤】ハッブン　「發奮」とも書く。(一)いきどほりを發すること。(二)心をふるひおこすこと。こゝは(二)。

【高橋文平】タカハシブンペイ　田原藩士。傳未詳。

【御祐筆】ゴイウヒツ

〔祐筆〕「右筆」とも書く。こゝでは、諸侯に仕へて書記の役をしたもの。書役。

もと、すべて貴人に侍して書記の役をしたものをいひ、その名は古く鎌倉時代から見え、室町時代を經て戰國時代に及んでゐるが、それが正式の職名となつたのは江戸時代からである。卽ち、江戸幕府では、老中・若年寄に屬して、各種の文書を掌り、諸願書を調査する職を右筆といひ、これを奥右筆・表右筆の二種に分かつた。（奥右筆はその任が特に重く職務の權勢があつた。）又、各藩でも、これに倣つてそれ〴〵右筆を設けたが、これ等は概して書記役で、幕府のそれの如く權要な職ではなかつたやうである。

【合口】アヒクチ　(一)話の互によく合ふこと。(二)睦まじい友達。(三)物と物と合ふところ。こゝは(一)。

【爽鳩先生】サウキウセンセイ　鷹見星皐。儒者。田原藩士。名は允、字は子允、通稱市郎左衞門。星皐・爽鳩（鳥の名。少皞氏の子孫たちのつかさどる官職）・翠竹園等と號した。祖父子方の學統を繼ぎ、田原侯に仕へた。文化八年（一八四七）十月歿。享年六十三。著書には「月泉吟社稿」「四庫簡明目錄」「春秋五論」「掌中詩礎」「掌中詩語」「翠竹園吟稿」「有明館經史說」等がある。

【父】渡邊定通。字は叔澤、通稱市郎兵衞。巴洲と號した。田原藩士平山鄕右衞門直儀の第三子。安永八年同藩士渡邊定延（後に定通）の養子となり、家督を繼いだ。後百石四人扶持を賜はり、數世に仕へて年寄役に進み、文政七年八月歿した。

【母】名は未詳。攝津國高槻の城主永井大和守の臣、河村彦左衞門の女。よく姑に仕へて孝養を盡くし、貧に耐へて家事に勤めた。

【兄弟】

渡邊家年譜に「巴洲五男三女あり、太郎は伯登なり、二郎は僧となる、定意と云ふ、蚤く死す、三郎は某喜平次と稱す、出て水野伯耆守君の臣堀田氏の家を繼ぐ、蚤く死す、四郎は某助右衞門と稱す、出でゝ本多中務太輔君の臣中山氏の家を繼ぐ、五郎は定固字は季保如山と號す、蚤く死す、季保書をよくし畫をよくしぬ。月俸を給りて中小姓を命ぜらる。長女は上毛桐生の岩本氏に適き、岩本氏の歸孝順を以て聞え、其地頭より褒賞を給はりしとかや。次は某氏に嫁し早く死して季女は夭す」とある。本文に七人とあるのは、當時末子の五郎が未だ出生してゐなかつたからであらう。

【弟共は寺へ奉公に遣はし云々】

喜平次（幼名宙之助）は七歲の時、芝の青松寺へ奉公に遣られ（後、水野伯耆守の家臣堀田氏の夢子となる。文政十二年歿）、定意は十三歲の時、上州館林の善道寺に薙髮、僧となつた。

【御旗本】オンハタモト

〔旗本〕「旗下」とも書く。こゝでは、江戸時代、德川幕府直參の士の中、一萬石以下の所領を有し、將軍に拜謁を許された者の稱。「御目見以上」又は單に「以上」ともいつた。所領一萬石以上の者を大名といひ、一萬石以下で將軍に拜謁し得ぬものを「御家人」といふに對する。

もと「幕下」といひ、軍陣で主將の居る所、卽ち「本營」を稱したが、轉じて本營で主將に直屬する士をさすやうになり、再轉して一般の家臣及び主將其の人の命令に服從せる他家の士をも稱し、江戸時代に至つては專ら前記階級の武士の專稱となつた。旗本には上は九千九百石から下は二十俵二人扶持程度に至るまで種々あり、そのうち大祿の旗本は家老・給人・中小姓・側用人・納戸役・近習役・勘定方・地方役人・藏元締其の他多くの家臣を擁し、その領地には陣屋・侍屋敷・穀倉・牢獄等を設け、地方には庄屋・大庄屋を置いて民刑の庶政を行ふこと略諸侯と同樣であつた。旗本の中、三千石以上で非役の者を「寄合」、三千石以下で非役の者を「小普請」と稱し、又その家格は武役の階級によつてこれを分かち、小姓組・書院番の兩番席を最上とし、大番席・小十人がこれに次いだ。なほ、世俗に旗本八萬騎と稱したが、これは家康が三河に在つた時直衞の士と譜代の家臣を併せて隷屬する部下大凡八萬に及んだための稱で、實際の旗本の數は文化十四年には四千八百名、嘉永年間には五千二百八十餘名位であつた。

【幼少の弟】定意をさす。文化十三年（一八四七六）七月、武州熊谷驛釜屋晉次郎方で客死した。享年二十八。

【板橋】イタバシ　武藏國豐島郡板橋。現東京市板橋區板橋町。（四頁參照）

【夜著】ヨギ　(一)夜寢る時に著る衾。よるのもの。(二)形は普通の衣類と同樣で大形に仕立て、厚く綿を入れた夜具。こゝは(二)。

【ごろ寢】轉寢　「轉轉寢る」意。平常着のまゝで臥して寢ること。

【藥種】ヤクシュ　「藥劑」に同じ。藥の品々。又、醫療上に用ゐられる物質の總稱。藥品。藥物。藥料。

【日食】ニッショク　毎日食べること。又、その食料。

【麵類】メンルヰ　「麪類」とも書く。小麥・蕎麥等の禾穀類の粉を水で捏ねて伸したものを、細長く切つた食料品の總稱。「饂飩」「索麪」「干饂飩」の類。

【建具】タテグ　建築物の開口部と外界、又は建物相互間を區劃する爲に設けられるものの總稱。窓や出入口の戸、襖・障子の類。

【質物に置き盡くし】悉く質入れしてしまつて。

〔質物〕シチモツ　金を借りるのに、質として渡す物。質草。「質」―(一)違約すればその物を償ひとする爲に約束の相手に渡しておくもの。擔保。抵當。かた。(二)物を擔保にして、金錢を貸借すること。

【南鐐】ナンレウ　(一)上銀即ち良質の銀。轉じて銀の異名。(二)「二朱銀」に同じ。當初は「南鐐二朱銀」といつたが、いつしか「南鐐」又は「南鐐銀」といふに至つた。江戸時代の銀貨幣。形は縱長の長方形で、上銀を以て鑄造せられ、八箇を以て小判一枚に替へた。即ち一兩の八分の一に當る。こゝは(二)。二朱銀は明和九年(安永元年)始めて鑄造せられ、品位は千分中銀九七八・一、大きさは縱八分餘・横五分、量目は二・七匁であつた。これを安永南鐐(明和南鐐・大南鐐・古南鐐・安永二朱・明和二朱・古二朱ともいふ)といひ、天明八年一時鑄造を停止したが、寛政十二年再び鑄造が始められた。文政中廣く金銀の改鑄が行はれるに及び、同七年これに改鑄を加へ、大きさを縱七分五厘・横四分五厘に縮小して量目も二匁に減ずると共に、少しく品位を高めて銀九七九・六とした。これを文政南鐐(小南鐐・新南鐐・文政二朱ともいふ)といひ、文政十二年以降はこれのみ通用したが、天保十三年に至り通用を停止し、所謂「南鐐」はこゝに跡を絶つた。次いで安政六年また二朱銀(安政二朱・新二朱・大形二朱)が鑄造されたが、これは極めて大形(縱九分・横五分五厘)でありながら、量目は二・四匁に過ぎず、品位も銀八四七・六で上銀とはいひ難く、且時勢の關係もあつて、實際には殆と使用せられずに終つた。その正式に廢せられたのは明治七年である。尚、本文當時の南鐐一片は、一般の物價などから考へて、おほよそ今の三圓乃至二圓位に通用したものではないかと想像される。「南鐐」の「鐐」は爾雅に「白金謂二之銀一、其美者謂二之鐐一」とあつて、支那で銀の最上なるものをいひ、和訓では「しろがね」といつた。又「南」は詩經の「大路二南金一」などから出たものらしく、支那の南方に金銀の產地があつたのに由來するといふ。尙「南鐐」の名は古くから我が國に傳はつたものの如く、源平盛衰記・平家物語等にもその名が見え、「南挺」「軟挺」などとも書かれてゐるが、貨幣名となつたのは江戸時代である。

【山伏】ヤマブシ　修驗道の修行者。「修驗者」ともいふ。教義上・實際上の必要から來た一種獨得の威儀・衣體を具へ、野に伏し山に伏して苦行を積み、以て神驗を修得するもの。有髮・摘髮で、服裝・法具の主なるものは頭巾・篠懸・袈裟・數珠・法螺・錫杖・金剛杖・檜扇・八目鞋・笈・帶劒・斧等である。「修驗道」は役の小角(役の行者と呼ばれる。奈良朝時代の人。呪術をよくしたといふ)を開祖とする我が國に於ける密教の一派。我が國民の民族的信仰(禁忌の觀念に基づく拂淨の祭儀の如き)が道教的支那思想や、特に佛教の山林抖擻の風と結合し、修驗といふ一種の宗教的生活の形式を發展せしめ、遂にそれを神佛習合的な一流の宗教的形體に結成せしめたもので、天台宗と眞言宗とに分屬する。

【本所一つ目】ホンジョヒトツメ　現東京市本所區千歲町附近。古く本所竪川に架せられた五つの橋を、隅田川寄りから順次に一之橋・二之橋と數へ、俗に一つ目・二つ目と稱し、その附近一帶をもその名で呼んだ。

【弟】四男助右衞門をさす。

【洗足】センソク　汚れた足を湯水で洗ふこと。又その湯水。

【芝】シバ　江戸府內、新橋以南、品川までの稱。ほゞ現東京市芝區の地に當り、東方一帶は東京灣に面し海岸から急に丘陵が起伏する。古くは主にその海濱の一部(後の本芝町の邊)をさし、柴・柴浦・柴濱などと稱したが、江戸開府後次第に境域を廣め、背後の金杉・三田・飯倉方面、南西の白金・高輪方面、及び北の愛宕山方面までも含めて芝と稱するに至り、專ら寺社地・武家地として知られた。現在でも社寺が極めて多い。愛宕山・增上寺・德川家廟・泉岳寺・東漸寺・高輪大木戸址その他名所史蹟に富んでゐる。

【白芝山】ハクシサン　白川芝山。畫家・醫家。名は景皓、玉蕉庵と號した。京都の人。安政中歿、享年九十二。

【附け屆け】ツけトドけ　交際上、又は義理上から贈物をすること。又時を定めて贈る謝禮などの金錢。

【師家】シカ　師匠の家。先生の家。

【金陵】キンリョウ　金子金陵。畫家。名は允圭、字は君璋、日南亭と號した。谷文晁に師事して花鳥を能くした。文化十四年(二四七七)二月歿。

【初午燈籠】　ハツウマドウロウ　初午に奉納する地口行燈のことであらう。これは、横方形の枠に紙又は絹地を張り、地口（一つの成語を同音又は類似音の語でいひかへて他の意味を表す一種の洒落）やこれに因む簡略な戲畫をかいた行燈で、祭禮や緣日などに路傍又は軒にかける。嬉遊笑覽に「今は年々古し其故は畫かきども手すきの内に多く書同じ物をいくらも書て賣故一ヶ所にも同じ物有り」、三養雜記に「さて江戸にて稲荷祭には、地口行燈をつらねともすならはしなり〔中略〕その行燈にかけるを、繪地口とて繪を專にして、まうづる人のあゆみながらよみて、わかるをむねとするなり」等とある。

初午に地口行燈を奉納することは德川時代中頃から行はれて來たものと思はれ、加藤玄智の「我衣」には、寶曆六年子の二月初午いなり燈籠のはやつたことがみえてゐる。

〔初午〕　毎年二月初の午の日に行はれる稲荷神社の祭事。全國稲荷神奉齋の社で執行されるが、京都市伏見官幣大社稲荷神社を最とする。その起源は稲荷神がはじめて京都伏見の地に鎭りたまうたのを記念するもので、諸國の稲荷神社がこれに倣つたものといふ。稲荷神は我が國衣食住の祖神として、農商業の守護に坐し、篤く崇敬せられ、祭は各社ともに盛大に行はれる。

【壹貫の錢】　イックヮンのゼニ　壹貫文の錢貨。

德川時代に實際日用の買物や勞銀に使はれた通貨は、概ね錢貨（銅貨又は真鍮貨）で、主として四文錢と一文錢とであつた。最初は金一兩が錢四貫文、即ち四千文といふのが法定相場であつたが、後次第に亂れ、寛政・文化頃には一兩が錢六七貫（即ち六千文乃至七千文）位になつてゐたらしい。（本文の年代は文化六七年頃。）假りに兩六貫相場とすれば一貫の錢は一兩の六分の一で、今の諸物價から考へれば大體三四圓位にも當るであらうか。

〔貫〕　（一）尺貫法で衡の單位。（二）銀竝に錢の稱呼。重量の名目から金錢を數へるのに用ゐる。文の千倍。千文の錢を一條の緡に貫ぬいて結ぶことから來たものであらう。（但し、實際には九百六十文を以て千文に數へるのが慣例であつた。）尙、錢一貫文を「百疋」ともいふ。

【七つ時】　ナナつドキ　こゝでは、曉七つ即ち今の午前四時頃。時を表す「七つ」には、「曉七つ」と「夕七つ」（今の午後四時頃）とがあつた。（一一一頁「未の時を下らず」參照）

【文晁】　ブンテウ　谷文晁。畫家。名は正安、通稱文五郎。（別に、畫號・雅號・山樵・椿園・一如居士・無二庵主等の號がある。）詩人麓谷の子として江戸に生まれた。狩野派の加藤文麗、長崎派の渡邊玄對、漢畫派の鈴木芙蓉等に學び、又北山寒巖（馬孟熙）の北畫風の影響を受け、圓山派の渡邊南岳の風をも折衷して獨自の畫格（これを南北合派といふ）を成した。かくて文化・文政・天保に亙つて江戸畫壇に覇をとなへ、その門に集るもの頗る多く、高久靄厓・渡邊崋山・立原杏所等はいづれもその教を受けた。夙に畫を以て田安家に仕へ、又松平樂翁に從つて「集古十種」の編纂に當り、諸國を巡遊して「日本名山圖繪」を著した。天保十二年十二月十四日歿、享年七十八。著書には、上記の外、「本朝畫纂」「畫學大全」「書畫觀甲」「歷代名畫譜」「寫山樓畫本」「松島眞圖」等がある。

【取立て】

〔取立つ〕　トリタつ　こゝでは、愛護して引立てる、の意。

【內職】　ナイショク　本職の餘暇にする賃仕事。

【二十六歲】　文政二年（二四七九）。

【鈴木孫助】　スズキマゴスケ　傳未詳。

【打寄り】　ウチヨリ　こゝでは、會合、集會、の意。

【上かくの如き御困難なれば】　藩政もかやうにお苦しいところでありますから。當時藩の財政が苦しく、家中の風儀も亂れ、政道の衰へたのをさす。

原文中本文省略の部分に「其頃は家中風儀不レ宜、心得不レ宜もの、若もの頭と相成。（柳原伊右衛門など申候）勤番ものを勸め、游所通ひ致させ、又は御役相勤候ものは威光を借、上下を恣に仕り、（戰國院樣御代也）又は奥向不取締り、又は古道具など世話を致、又は他の婚禮慶庵樓の事を內食に志し、又元締共奢侈に相成、又は御家中之もの申合、强情の願事仕、又歌三味せん之稽古仕、（私共も此度に入られ候事も有之候）果は出奔御暇人など出來、必竟御政事漫弛致、御困窮之あまり、御家中之者如何樣にも勤さへすれば宜敷との事より、上役衆おどしたりすかしたり致、下を取あつかひ被申候より、かくは相成候に而、誠に淺ましき御事にて御座候ひき。右之通之間、かれこれ八九年十年計にても有レ之や」とある。

〔上〕　カミ　こゝでは、藩の政廳をさす。

【依つて學問仕り度く候へども云々】

原文には「依レ之一齋へも申談、學問仕度候得共、何分寸暇無レ之、夜中にても參可レ申、御門制之義は、一齋より其趣を書取、親父へ可レ遣申候間、則親父より村松六郎左衞門殿へ、夜御門限之義願候處、六郎左衞門殿申聞られ候。儒者には無レ之、御門制之事仰出され難きむね御沙汰に而、終折角之志相くじけ云々」とある。

【門限】　モンゲン　夜、門を閉ぢる刻限。門を閉ぢる時間。

【沙汰】　サタ　こゝでは、官府の指令、命令、仰、の意。

【つら〳〵】　つく〴〵。よく〳〵。念入りに。ねんごろに。

【安堵】　アンド　こゝでは、「安心」に同じ。（一一六頁參照）

挿圖「于公高門圖」（渡邊崋山筆）　新潟、中埜忠太郎氏藏。治獄に公平で陰德篤き于公が、其の閭門改修に當り駟馬高蓋車を容るる高さに營造した所、果して子孫が丞相や御史大夫に立身したといふ前漢書（卷七十一）の故事に則り、崋山が入獄の際公明廉直の吟味をなした與力中島嘉右衞門の恩誼に酬ゆるため幽居中（自刃前略二箇月）揮毫して贈つたもので、崋山獨得の鳥瞰的圖法と內面的氣魄とを示す代表的傑作の一である。

二　解釋

1　主題

渡邊崋山が艱難の中に於ける發憤と覺悟。

2　構想

(1)　少年時代に於ける發憤と艱苦。（初―一七二ノ九）

(2)　畫工入門後の苦心と一大覺悟。（一七二ノ一〇―終）

3　敍述

〔わすれも仕らず、備前侯の御先供に當り、打擲を受け候時、子供ながらも大息仕り候は、〕――一語一句痛憤の迸りならぬはない。

「わすれも仕らず」と前書し、「子供ながらも」と回想してゐる所、まだ骨に浸みた悲憤の餘燼がそのまゝ消えずにある調子である。

〔天分とは申しながら、同じ人間にてと發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來申すべくと存じ、〕――「同じ人間にて」の一句、天賦をも、境遇をも、時世をも乘り越えずには措かないやうな悲痛な決心が示されてゐる。

〔私父二十年來の持病にて、一日も看病・按摩仕らざることはこれなく、朝夕これを奉公同樣に心得、母の手だすけ仕り候。〕――發憤はしたものの、思ふに任かせなかつたのは當時の境遇である。

〔其の上、兄弟皆幼少にて七人もこれあり、唯母の手一つにて其の日を送り候こと故、何分右樣の餘裕これなく、貧窮は筆紙の盡くし候處にはこれなく、〕――父は病氣、兄弟は幼少、貧窮は筆紙の盡くし能はざるところ。かういふ境遇が、彼の發憤を生かしたか殺したか。何れにしても、これによつて彼の決心が鐵石の如くなつた事實は認めざるを得ないであらう。

〔其の艱苦のうち、私十四歳ばかりの時、幼少の弟を板橋まで生き別れに送り參り候時、雪はらはらと降り來り、弟は八九歳にて、見も知らぬあら男に連れられ、後を振向き〳〵別れ候事、今に目前に見え候如くに御座候。〕――一語一句、血涙の文字ならざるはない。その悲しみ、その恨みは恐らく彼が一生涯に亙つて消えなかつたであらう。

〔私母は近來まで、夜中寢ね候に、蒲團と申すもの、夜著と申すもの引きかけ候を見及び申さず、やぶれ疊の上にごろ寢仕り、多は炬燵に臥せり申し候。〕――これ亦深い悲しみの種でなくて何であらう。

〔私父は大病故、高料の藥種、日食の麵類等に事缺き、疊・建具の外、大抵質物に置き盡くし、尙借財親類共にも借り盡くし、〕――貧しい人の常とはいへ、悲慘を極めた境界に陷つてゐたものである。かういふ間にゐて、「同じ人間にて」といふ發憤を失はなかつたといふことは、驚くべき精神力である。

〔僅か南鐐一片の儀にて、……母は弟を背負ひ、雪を冒して罷り越し、夜に入り候て歸宅仕り候。其の節、私洗足の湯をわかし候とて、衣服を焦し、大いに叱られ候儀、今に覺え罷り在り候。〕――洗足の湯をわかしてくれた孝心を喜ぶよりも、衣服を焦した粗忽を咎めなくてはならなかつた母の心中も思ひやられる。わけても少年崋山にとつては、いひやうのない悲しみであつたにちがひない。

〔學問などと申し、儒者に相成り候とて、金のとれ候儀はこれなく、それよりも貧を救ふ道第一なりと申すにより、〕――「同じ人間にて」といふ發憤に立つた少年の心を奪つたものは、當時に於てはなるほど儒者であつたらう。けれどもそれは今の身の上には許されないことである。何よりも自家の救貧が第一である。そこで次善につけとすゝめられたものと思はれる。

〔然る處、貧人にて附け屆け行屆かずとて、僅か二年にて師家より斷りを受け申し候。〕――師家としてあまりに卑しい處置であるが、さういふ貴人も無くはなかつたであらう。不如意の間に學んだ少年崋山としては、人一倍さういふ點に無頓著ではあり得なかつたらうにといた〳〵しく思はれる。

〔初午燈籠の畫を作り、百枚にて壹貫の錢を取り、多分に相成り候へば、右を以て紙筆を調へ申し候。〕――師を得て紙を得ず、その間に處した工夫であるが、それでもかうなれば既に光明はある。

〔學問は仕り度く候へども、何分閑暇これなく、多に相成り候へば、朝七つ時起き出でて飯を焚き、其の焚火にて讀書仕り候。〕――唯の金取畫家になるのは崋山の所志ではない。隨つて學問を廢するわけには行かぬ。そこでかういふ方法を案出するに至つたのである。

〔右畫事少々づつ內職と相成り、稽古出來候も、前爽鳩先生の恩澤に御座候。〕――光明が少しづつ見え來るにつけ、それを師恩に

歸するところ、既に、後日の大を成すに至つた爲人を示してゐる。

〔私申し候は、何分、上かくの如き御困難なれば、各〻方も拙者も今より心がけ候はば、御政道を佐くべき道もこれあるべくと契約致し候。〕――一家の艱苦を背負つた崋山は、やがて一藩の困難を擔はうとする崋山になつてゐたのである。

〔愈〻以て繪事を專らとし、急にしては貧を助けて親を安堵させ、緩にしては天下第一の畫工と相成り申すべき一事に思ひ定め申し候。〕――學問したくも學問は出來なかつた。藩侯の爲に盡くすには學問が無くては叶はない。崋山としては畫工として物をいふより外はなかつた。そこに天下第一といふことを目標にした畫道精進が決定して來たのである。

三　備考

一　指導の問題

(一) 稍、晦澁な文體である。しかも候文である。讀みに於て親しみを感じにくいであらう。この抵抗を克服しなければ、この文について彼是いふ資格はない。終始、よく讀みこなすといふことを註解の、又學習の目標とすべきであらう。

(二) 解釋に於ては、敍述の理解が先である。讀みに於ける註解指導に伴なつて、敍述指導も展開させなくてはならない性質の文と思はれる。構想は見出しにくい文である。強ひてこれを見出させるには及ばないであらう。唯、容易ならぬ困窮の間に育ちながら、發憤・努力、常に光明を望んで精進をやめなかつた人間力に觸れさせることを學習に於ける解釋の眼目とすべきであらう。

(三) 感想として何を握るかは、生徒の個性により、學習の深度に

より、又生徒の心裡に映つてゐる時代の客觀的情勢によつて種々に規定せられるであらうけれども、讀解の延長としては、生ひ立ちの回想記とはいつても、回想の事實が深刻な生活苦であつただけに、今尚現實感情として存立するものの表現であるといふ表現性の把握を逸してはならないと思ふ。それを更に崋山の個性又は時世に歸して說明する如きは、この學年の生徒の學習としては要が薄いであらう。方法課程の適切といふことも忘れてはならない條件である。

二　參考資料

(一)「退役願書稿」中、本文に直ぐ續く自傳の部分を抄錄する。

かくては御奉公仕候而は出來がたくと存、內々親共へ愬領のぞきの事內願致候處、以之外之義と被二申諭一。かくても止がたく、とても此有さまにて、一助可二相成一藝は出來がたく、ましてや天下第一人と相成候事出來不レ申、何も眼前小孝を盡し候よりは、古人游學の例にならひ、後々孝養を盡し可レ申、大道に於てさほどの間違ひも有レ之間敷と、ひそかに長崎表へ出奔之志を起し申候。其節書證之ためと存つまらぬ詩を作り、日記有レ之間、左に書し入二御覽一候。御笑可レ被レ下候。

莫レ嗤鷦鷯試二鵬雲一、　決起槍榆初見レ分
游子固知風木歎、　花朝月夕何忘レ君

二三　天下第一人

小鳥の大鳥を學び候は、分限を不レ知ごとくなれ共、又志は滿べからずともいひ。つれ〳〵草に、物に思ひ立んには、事傷るゝをも顧るべからずとも存、行く所迄は行ても見たく、乍レ去家語に子養んと欲れども親とゞまらず、木定らんと欲すれども風止まずと申事もあれば、一旦學び得たらんには、早歸府致、孝養仕度と申を、詩に致今や出んと存候。親父早く此樣子をさとり心痛仕、太白堂、萊石、堀備後などへ相頼、私之心を解き候ふし、其頃私夜中遲く歸り候處、親父病を抱へ途中迄迎ひに出候を、私早く相察し候得共、私に不レ知樣に歸宅致、しらぬ顏にて私へ挨拶致候時、私も胸塞竊に兩袖を濕し申候。此一時に感じ、又々志もくだけはて、其後親父御年寄役被二仰付一間もなく大病に及、隱居仕候後は、引續大病に罷成、二ケ年程は晝夜看病、萬事打捨申候。死後借財等之爲に、千辛萬苦申計も無レ之、家督後は又々世事逆境のみ相踵。終今年四十六歲之夢路をたどり、世に生れ出てより、前書之通心勞多慮之艱難を經、終に難治之病身ものと相成候。乍レ去老母義、右之通苦節を凌ぎ候故、他人之母とは拔群之勞、私ありて老後をも相養ひ候事、申迄にも無之、于レ然私一昨年より益疲勞仕、何分にも不慮の病にても生じ可レ申樣に存、昨年弟死後は猶更之儀に御座候。萬一母より先に一大事にても出來候而は、死而も游魂天に歸し不レ申、せめて

御役義にても相願候て一年にても保養仕度候。必竟萬一を存泣涕歎願仕候にて御座候。其上右之仕合故、何ひとつ御政事の御稗益に可二相勤一道筋心得不レ申。重き御役に尸位罷在、恐怖至極に御座候。乍レ去其義は御勘辨をも賜り候而も、御大政扶持可レ仕學文出來不レ申、是迄心得候義は、畫事内食計に御座候。たとえ憤發仕候とも、日暮道遠く、其上病身相成致方無レ之候。

（二）崔山三十一歳の頃の自省をその息立の筆に成つた渡邊家年譜（崔山全集第二卷所收）から左に採錄する。

一兩親を慎しからず可致樣心得之事。

一學問をして遠く慮り、畫をかきて急を救ふ事、書物は經書畫書此外不レ可レ見候事。

一交り候人一齋佐藤思齋木多この二人は心事の相談致し萬事不レ隱候事。

一屋代鵬池青蘆北馬琴瀧澤此三人は問見を廣め書籍等借用致し益友なり、清水俊藏沼田棠太夫この二人は武道に達し心得になり候事共申談し候へば益友なり、折々往來いたすべし。棠太夫近頃知る人になりたれば、未だ深くは不レ知、祐助安藤順助菊地文事を談すべし、文晁谷米菴市河坦齋檜山杏所立原書畫の道に深き人なれば常に益あり交りて樂むべし。

一常に交る人いと多し、家近き人はさらなり、同藩のものは格別なることなり、されど交りて己に益なく、彼も益なし、彼來らば拒むべからず、我より迎ふることなかれ、さりとて義理あしき事は爲ことなかれ、信を忘るべからず、他人は格別なり。

一行義作法隨分簡にして常に違はず日に返思可レ致事。

飲食相節、出入動靜相心得、前後寸陰を惜み思ふべし、遠慮第一之事、言語不レ多一々詳密に相辨へ樣可二心得一事、一寸書付候物も書正敷、況て文理相通じ候樣に。

○右條々相守浮躁佞辯惰弱邪肆のものゝ、心易う向ふより不向樣に、隨分心得可レ申事、萬一身多雜にならぬ樣可レ致、多擾なると遠慮致問もなく、自然と徒に日を送る事出て來る也。

兩親御出被成候中は、事を曲ても内職等出精いたし、困乏を救ひ候手段第一に心得御兩親之御安心を鬼神に誓ひても可レ奉レ祈事。

392
S
41